

動物を扱う部民を中心とした渡来文化の考古学的研究-文献と埴輪・壁画資料による比較分析の視点から-

著者	基峰 修
著者別表示	Kimine Osamu
雑誌名	博士論文本文Full
学位授与番号	13301甲第5107号
学位名	博士（文学）
学位授与年月日	2020-03-22
URL	http://hdl.handle.net/2297/00058770



動物を扱う部民を中心とした 渡来文化の考古学的研究

－文献と埴輪・壁画資料による比較分析の視点から－

基峰 修

令和2年3月

博士學位論文

動物を扱う部民を中心とした 渡来文化の考古学的研究

－文献と埴輪・壁画資料による比較分析の視点から－

金沢大学大学院人間社会環境研究科

人間社会環境学専攻

学籍番号 1 3 2 1 0 7 2 0 0 5

氏名 基 峰 修

主任指導教員名 古 畑 徹

目 次

序章 本論の目的と研究方法	1
第1節 本論の目的	1
第2節 本論の研究方法	1
第3節 研究抄史	2
第1章 鷹甘（飼）の特性—鷹鈴と鷹狩りの組織化—	7
第1節 本章の目的	7
第2節 文献史料の紹介	8
第3節 形象埴輪と壁画資料の検討	10
（1）鷹形埴輪	10
（2）鷹匠埴輪	12
（3）高句麗壁画古墳の鷹狩り図	17
第4節 比較分析による共通点と相違点	21
第5節 結論	23
第2章 馬甘（飼）の特性—その身分と軍馬生産の成立—	29
第1節 本章の目的	29
第2節 文献史料の紹介	30
第3節 形象埴輪と壁画資料の検討	33
（1）馬甘（飼）人物埴輪	33
（2）装飾古墳の馬牽き人物図	43
（3）高句麗壁画古墳の馬牽き人物図	45
第4節 比較分析による共通点と相違点	47
第5節 結論	47
第3章 牛甘（飼）の特性（1）—粟生産とその性格—	55
第1節 本章の目的	55
第2節 文献史料の紹介	55
第3節 形象埴輪と壁画資料等の検討	57
（1）牛形埴輪とウシ遺存体	57
（2）装飾古墳の牛と想定できる図文	66

(3) 高句麗壁画古墳の牛図	67
第4節 比較分析による共通点と相違点	71
第5節 結論	75
第4章 牛甘(飼)の特性(2) —牽牛織女説話の伝来—	81
第1節 本章の目的	81
第2節 文献史料の紹介	81
第3節 形象埴輪と壁画資料の検討	83
(1) 機織形埴輪	83
(2) 高句麗壁画古墳の牽牛織女図	83
第4節 壁画資料と説話との共通点	85
第5節 結論	86
第5章 猪甘(飼)の特性 —角笛の伝来を含めて—	89
第1節 本章の目的	89
第2節 文献史料の紹介	90
第3節 形象埴輪と壁画資料の検討	92
(1) 猪狩猟を表す人物埴輪	92
(2) 角笛をもつ人物埴輪	94
(3) 装飾古墳で描かれた狩猟図文	96
(4) 高句麗壁画古墳の狩猟図と角笛図	97
第4節 比較分析による共通点と相違点	103
第5節 結論	105
第6章 力士の特性 —扁平鬘の系譜—	113
第1節 本章の目的	113
第2節 文献史料の紹介	114
第3節 形象埴輪と壁画資料の検討	116
(1) 扁平鬘の力士埴輪	116
(2) 力士埴輪の性格分析	121
(3) 高句麗壁画古墳の力士図	125
第4節 比較分析による共通点と相違点	128
第5節 結論	129

第7章 四神図の特性—竹原古墳壁画の解釈と系譜—	137
第1節 本章の目的	137
第2節 文献史料の紹介	138
第3節 竹原古墳の概要	139
第4節 壁画資料の検討と比較分析による共通点と相違点	142
(1) 朱雀図及び三足鳥(日像)図	142
(2) 玄武図	148
(3) 青龍図	153
(4) 描画方法と彩色顔料	158
第5節 結論	160
終章 研究成果の総括	169
第1節 歴史的・文化的特性と渡来初期の実態	169
第2節 研究のまとめ	173
第3節 渡来文化研究の意義と展望	175
挿図・表の出典一覧	181

序章 本論の目的と研究方法

第1節 本論の目的

本論の目的は、倭王権⁽¹⁾下の古墳時代中期から後期（5・6世紀）の日本へと、朝鮮諸国から伝わった渡来文化について、渡来系動物（家畜）を扱う部民⁽²⁾などを分析対象の中心に据えて、その歴史的・文化的特性の抽出と渡来初期の実態を明確にし、その歴史的意義を追究することである。

5・6世紀の日本では、渡来文化によって須恵器・鉄器・武器・武具・馬具などの生産技術から、土地・水利・灌漑などの開発技術、炊飯文化などの生活様式に至るまで様々な変革が起こり⁽³⁾、新たな技術や学問・思想・芸術・生活様式が定着・普及したと見られている。つまり、5・6世紀というのは、渡来文化が古代日本の技術や文化に大きな影響を与えて、その発達を促した時期なのである。また、この時期は同時に倭国内政においても、部民制や屯倉制、国造制などの整備がなされた重要な時期とも見られている。したがって、渡来文化受容とそれに伴う技術・文化の新展開がこうした諸制度の整備とどのような関係にあるかが、日本古代国家の形成・展開を考えるうえで一つの重要な検討課題となることは間違いない。とりわけ、技術者集団を含む部民制の整備という問題とどのような関係にあるかが、まずは問われなければならないであろう。

こうした問題意識のもと、倭王権が国際的な文化受容にあたって、渡来文化をどのように受け入れて、部民の組織化をなしえていったのかを考えるというのが本論の中心となる課題である。

第2節 本論の研究方法

本論の研究方法は、人物埴輪や動物埴輪などの形象埴輪や石室（墓室）壁画資料などの考古資料を対象とした比較分析を通じて、5・6世紀渡来文化の歴史的・文化的な特性と実態を導き出そうとする比較研究である。比較分析に当たっては、必ず対象となる渡来文化に関係する古代日本の文献史料を紹介して、そうした文献だけによって導かれた従来の見解や、あるいはそうした文献を無視して導かれた従来の見解の問題を認識したうえで、個々の課題に取り組んでいくこととした。

したがって、本論は、考古学が中心であるが、文献史学の成果を取り入れたアプローチ方法による古墳時代社会構造の復元論でもある。古代の日本をとりまく渡来人の問題や渡来文化の究明にあたって、人・物・文化の移動を中心に今後の研究方向を示した田中史生（田中史生 2017）は、「文献史学の成果を知る考古学が、このことを自らの方法論で具体的に提起するとき、考古学は文献史学に、そして「日本史」や「朝鮮史」などで区切られた一国史に、今以上の緊張感を与える歴史像を提起するだろう」という期待を述べている⁽⁴⁾が、本論がこの期待に応えられる実践例となれればと思っている。

具体的には研究を進めるうえで、潜在する渡来文化の要素を導き出すために、家畜としての動物の渡来と一緒に伝わった飼養・飼育の技術に注目した。家畜とその飼養・飼育技術はそれだけで移動するのではなく、そうした技術を持った人の移動を伴うのが普通である。したがって、技術に注目する

ということは、その技術を持つ部民に注目するということであり、そこから部民の組織化という本論の中心課題にも近づくことができると思うのである。

渡来系動物（家畜）やその飼養・飼育を扱う部民はいくつもあるが、その中から、鷹甘（飼）、馬甘（飼）、牛甘（飼）、猪甘（飼）を選んで分析の対象とした。本論では、畜産・狩猟・供養といった人が動物と関わる行為ではなく、個々の動物に関わる渡来文化の特性を抽出するために、対象とした個々の視点から分析を試みた。鷹甘（飼）は「鷹鈴と鷹狩りの組織化」、馬甘（飼）は「その身分と軍馬生産の成立」、牛甘（飼）は「粟生産とその性格」・「牽牛織女説話の伝来」、猪甘（飼）は「角笛の伝来を含めて」という各章の副題が記すように、それらの問題を分析の中心とした。

また、渡来初期の実態を明確にするために、渡来系動物（家畜）やその飼養・飼育を扱う部民に加えて、力士、四神図を分析の対象とした。この分析についても、渡来文化としての特性抽出を優先して、力士は「扁平髷の系譜」、四神図は「竹原古墳壁画の解釈と系譜」という各章副題に示した問題を分析の中心とした。

本論で検討・分析の対象とした鷹甘（飼）、馬甘（飼）、牛甘（飼）、猪甘（飼）、力士、四神図については、基本的に各章ごとに、次のような分析手順を経て、結論としてその歴史的・文化的な特性と実態の追究を行った。

- （１）本章の目的
- （２）文献史料の紹介
- （３）対象に関する考古資料の比較検討
- （４）比較分析による文化としての共通点と相違点の抽出
- （５）結論

以上のような手順を経て行った個々の比較分析作業によって、渡来系動物（家畜）やその飼養・飼育を扱う部民などが有する歴史的・文化的特性を明らかにすることで、渡来初期の受容と定着の実態を明確にする。さらに、検討対象とした個々の分析結果を総合してまとめ、古墳時代中期から後期（５・６世紀）の日本において、渡来文化が果たした歴史的意義についての考察と見解を示して、本論の総括とする。

第３節 研究抄史

古墳時代日本の渡来文化に関する考古学的研究において、高句麗（序一図１）の壁画古墳の壁画資料⁽⁵⁾の比較分析が、非常に有効な研究方法であることは、先人の研究によって実証されてきた。

森浩一（森浩一 1972）は、全長 88m の前方後円墳である井辺八幡山古墳（和歌山県和歌山市）の発掘調査を通して、墳丘裾部造り出しから出土した力士埴輪の理解方法として相撲に注目し⁽⁶⁾、力士を表した相撲図が集安の角抵塚・舞踊塚（中国吉林省集安市）、平壤周辺の安岳 3 号墳（北朝鮮黄海南道安岳郡）といった高句麗壁画古墳の壁画題材のなかにあることから、「日本の相撲の源流は東アジアの

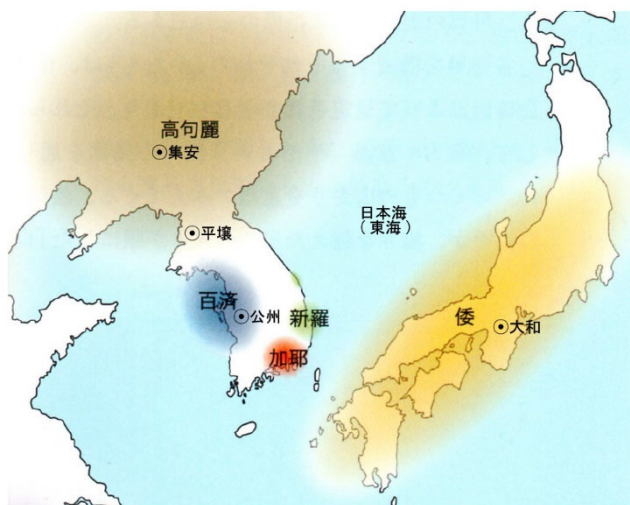
北方諸族の文化、とりわけ高句麗文化との関連がありそう」⁽⁷⁾であることを指摘した。これは人物埴輪を対象とした形象埴輪と高句麗壁画古墳の壁画資料に基づく比較分析による考古学的研究の先駆けといえる。

同様の分析方法は、海外の研究者にも見られる。韓国の研究者を中心とした『[比較] 古代日本と韓国文化(下)』(千寛宇・金東旭編 1980)⁽⁸⁾所収の金東旭「六 古代韓日両国の服飾文化」⁽⁹⁾は、衣服表現を中心に日本の人物埴輪と高句麗壁画古墳の壁画人物図との比較を行い、「六、七世紀の日本の衣服は、その大部分が韓半島系である」⁽¹⁰⁾という結論を得ている。

また、斎藤忠は『装飾古墳・図文からみた日本と大陸文化』(斎藤忠 1983)⁽¹¹⁾において、中国大陸と朝鮮半島の古墳壁画に注目し、日本の装飾古墳の特性を理解するうえでそれらとの比較研究が必要だとし、「第3章 大陸の図文と日本の図文との比較」⁽¹²⁾にて、古代中国の古墳壁画や高句麗壁画古墳の壁画を中心とした比較を行い、日本の装飾古墳の壁画には、それらの壁画の影響を受けたものがあることは明らかであるという指摘をした。斎藤忠のこの指摘と見解は、『高句麗壁画古墳』(早乙女雅博編 2005)⁽¹³⁾の中の斎藤忠「私の見た高句麗古墳壁画」⁽¹⁴⁾でも変わらず、日本の北九州や中国・近畿地方に「高句麗の古墳壁画文化の痕跡」⁽¹⁵⁾を見ることができ、日本の装飾古墳の壁画題材や図文のみならず、少数ではあるが、石棺や陶棺の装飾を含めた日本の古墳に、高句麗壁画古墳の壁画の影響があったことが繰り返し述べられている。

このように 1970～80 年代に提起された、古墳時代日本の渡来文化を、高句麗壁画古墳の壁画資料と比較分析するという研究方法是、その後も多くの研究成果を生んだ。2000 年以降の代表的研究を挙げると、塚田良道は『人物埴輪の文化史的研究』(塚田良道 2007)⁽¹⁶⁾で、日本の人物埴輪を検討してその特性を理解するうえで、古代中国の古墳壁画や俑資料、高句麗壁画古墳の壁画資料などとの比較分析を多用して考察を進め、「人物埴輪は何を表しているのか」という自問に対して「古墳の被葬者に服属しておこなう近侍的奉仕行為に集約される」⁽¹⁷⁾という回答を導き出した。

門田誠一は『高句麗壁画古墳と東アジア』(門田誠一 2011)⁽¹⁸⁾の「第2章第5節 高句麗壁画古墳の角抵図について—日本古代の力士表現との比較をかねて—」⁽¹⁹⁾で、高句麗壁画古墳の角抵図と日本の力士埴輪との比較を通して、その歴史的背景の相違を指摘する。また、「第3章第1節 装飾古墳における大陸系人物像の出現—五郎山古墳壁画を中心として—」⁽²⁰⁾では、高句麗壁画古墳の人物衣服図



序一図1 5世紀の倭国と朝鮮諸国

と、径約 35m の円墳である五郎山古墳（福岡県筑紫野市）の埋葬施設である横穴式石室の奥壁で描かれた女子人物図との比較から、五郎山古墳に「朝鮮半島系の衣服を着用した「渡来系」の人物」が描かれている⁽²¹⁾ことを指摘する。さらに、同じく奥壁に描かれた馬の尾部に蛇行状鉄器の表現が見られることから、北九州所在の装飾古墳の壁画題材や図文として、中国大陸・朝鮮半島の系譜を引くものが見られるとの指摘もしている。

以上みてきたように、高句麗壁画古墳の壁画図については、日本の形象埴輪や装飾古墳で描かれた図文などとの比較研究の対象として、非常に有効性が認められる。

さらに近年、塚田良道は日本の人物埴輪と高句麗壁画古墳の壁画資料との比較を通して、5 世紀前半の高句麗での墓室壁画の影響を受けて、日本の人物埴輪が成立したという新説を発表した。それを示したのが「墓中の宴飲と出遊—人物埴輪・俑・壁画の主題比較—」（塚田良道 2013）⁽²²⁾や「高句麗古墳壁画から人物埴輪へ」（塚田良道 2015）⁽²³⁾という二つの論考で、人物埴輪の成立を「東アジア世界での国際的地位の向上を目指そうとする意図のもと、倭王権によって対立する高句麗の古墳壁画を凌駕しようとして実施された墓制改革」⁽²⁴⁾に求め、「平壤周辺における中国風俗の壁画の世界が、集安において高句麗風俗に変換され、それが日本列島にいたり、三次元の造形、さらに倭の風俗に変換された結果成立したのが人物埴輪である」⁽²⁵⁾という結論を導いたのである。これは人物埴輪の成立を、須恵器生産や騎馬文化の導入といった渡来した技術・文化のひとつとして意義付けた、注目すべき考え方といえる。

以上のように、日本の人物埴輪などの形象埴輪及び装飾古墳の壁画資料と、高句麗壁画古墳の壁画資料との比較検討を基軸とした考古学的研究は、当初、相撲を媒介とした力士埴輪の系譜と特性を理解するために、高句麗壁画古墳の角抵図との比較が行われたことから始まり、その後も装飾古墳で描かれた壁画の内容を理解することを目的に、高句麗壁画古墳の壁画資料との比較が行われてきた。そして多くの研究成果を挙げており、この研究方法の有効性は既にお墨付きといってよい。また近年には、この研究方法から、日本の人物埴輪の成立についても提起されており、ますます注目すべき研究方法となっている。本研究がこの研究方法を採用するのは、こうした研究の状況があるからである。

以上述べてきたような研究史を踏まえて、本論では、渡来系動物（家畜）やその飼養・飼育を扱う部民の中から、鷹甘（飼）、馬甘（飼）、牛甘（飼）、猪甘（飼）を選択し、さらに力士、四神図という分析対象を加えて、個々の対象に応じた文献と埴輪・壁画資料を中心とした比較分析を行い、その共通点と相違点を明らかにすることで得た個々の歴史的・文化的特性の考察に基づき、新たな見解を示していきたいと思う。

註

- (1) 古墳時代（4～7世紀）の日本で、畿内を本拠に倭国王を擁し、倭国全体を主導した中央権力を、「大和朝廷」「大和政権」「大和（ヤマト）王権」「倭王権」の名称で呼んでいるが、本論では、『宋書』夷蛮伝の東夷の条に属する倭国伝で、倭の五王が倭国王と自称しているように、日本と称する以前の呼び名である倭を優先して「倭王権」と記した。倭王権の名称については、岸本直文「倭王権と倭国史をめぐる論点」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集，国立歴史民俗博物館，2018，pp. 15～50. を参考にした。
- (2) 本論でいう部民とは、古墳時代社会での部民制を基本に、王権ないしは首長に服属する職能集団の呼び名として使用した。部民制については、武光誠『研究史 部民制』吉川弘文館，1981. を参考にした。
- (3) 坂靖ほか『古墳時代の渡来系集団の出自と役割に関する考古学的研究』平成24年度～27年度科学研究費助成事業・基礎研究（C）（課題番号24520880）研究成果報告書，奈良県立橿原考古学研究所，2016.
- (4) 田中史生「ヒト・モノ・文化の移動をどう捉えるかー移動史の主体と空間」『日本古代交流史入門』勉誠出版，2017，pp. 3～18.
- (5) 高句麗壁画古墳は、高句麗王を中心とした高句麗の支配者層の墓で、高句麗が二番目に都を置いた集安（中国吉林省集安市）と、三番目に都を置いた平壤周辺（北朝鮮黄海南道安岳郡・平安南道南浦市）で多く築かれている。初期の壁画には、生活風俗図及び狩猟図などが描かれる場合が多いが、4世紀以降になると、生活風俗図に加えて、仏教図（蓮華文）・四神図が盛んに描かれるようになる。6世紀に入ると、四神図のみが描かれるようになるのが壁画内容の変遷の特徴である。壁画古墳は基本的に封土墳で、埋葬施設である横穴式石室（墓室）の壁面をキャンバスとして壁画が描かれるが、禹山下41号墳（中国吉林省集安市）などのように、積石塚の埋葬施設の壁面に絵が描かれている例もある。全虎兌「古墳壁画と高句麗文化」『高句麗の文化と思想』明石書店，2013，pp. 307～324.
- (6) 森浩一「第6章 主要な遺物の考察」『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部文化学科内考古学研究室，1972，pp. 299～343.
- (7) 註6文献，p. 322.
- (8) 千寛宇・金東旭編『[比較] 古代日本と韓国文化（下）』学生社，1980.
- (9) 金東旭「六 古代韓日両国の服飾文化」『[比較] 古代日本と韓国文化（下）』学生社，1980，pp. 227～269.
- (10) 註9文献，p. 268.
- (11) 斎藤忠『装飾古墳・図文からみた日本と大陸文化』日本書籍，1983.
- (12) 註11文献，pp. 169～184.
- (13) 早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社，2005.
- (14) 斎藤忠「私の見た高句麗古墳壁画」『高句麗壁画古墳』共同通信社，2005，pp. 29～43.
- (15) 註14文献，p. 43.
- (16) 塚田良道『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣，2007.
- (17) 註16文献，p. 224.

- (18) 門田誠一『高句麗壁画古墳と東アジア』思文閣出版, 2011.
- (19) 註 18 文献, pp. 230～256.
- (20) 註 18 文献, pp. 259～270.
- (21) 註 18 文献, p. 268.
- (22) 塚田良道「墓中の宴飲と出遊—人物埴輪・俑・壁画の主題比較—」『川勝守・賢亮博士古稀記念 東方学論集』汲古書院, 2013, pp. 179～213.
- (23) 塚田良道「高句麗古墳壁画から人物埴輪へ」『同志社大学考古学シリーズⅫ 実証の考古学 松藤和人先生退職記念論文集』同志社大学考古学研究室, 2015, pp. 829～840.
- (24) 註 22 文献, p. 207.
- (25) 註 23 文献, p. 839.

第1章 鷹甘（飼）の特性 —鷹鈴と鷹狩りの組織化—

第1節 本章の目的

本章は、古墳時代における鷹を扱う鷹甘（飼）について、渡来文化としての歴史的・文化的特性を明らかにすることを目的とする。

鷹甘は、『日本書紀』巻第11・仁徳天皇43年9月に記載された用語で、鷹飼とも書かれる。『日本書紀』では、鷹狩りで用いる鷹の飼育と調教・管理を行った職能集団である鷹甘部が、仁徳天皇の時代に組織化されたことが記載されている。鷹狩りは、飼い慣らした鷹を用いて、野生の鳥や獣を捕獲する狩猟である。鷹狩りについては、律令時代に入ると朝廷の職制のひとつとして主鷹司が置かれ、戦国時代には各武将に好まれ盛んとなり、江戸時代に入ると鷹の飼育と調教を行い、將軍の鷹狩りに随行する職制として、鷹匠といった名称が使用された。現在では、鷹狩り及び鷹の飼育と調教・管理といった鷹狩りに関する技能全般を含めて、放鷹と呼んでいる。

鷹狩りに関する史的研究は、宮内省式部職編『放鷹』（宮内省式部職編 1931）⁽¹⁾に始まる。『放鷹』（宮内省式部職編 1931）では、日本の鷹狩りの始まりを『日本書紀』の記載に求め、日本の鷹狩りのみならず、朝鮮放鷹史に比重を置いている点が注目される。戦後の日本放鷹史研究は、加藤秀幸によって進められ（加藤秀幸 1969・1975・1976）⁽²⁾、特別展も開催された（大田区立郷土博物館 1988）⁽³⁾。平成に入ってから、橋口尚武によって進められ（橋口尚武 1993・1998）⁽⁴⁾、律令時代の主鷹司及び官制養鷹に関しては、秋吉正博による総合的な研究がある（秋吉正博 2004）⁽⁵⁾。さらに、荻島大河によって、鷹匠技術面からの検討を中心に、『日本書紀』記載に関する検討も試みられている（荻島大河 2011）⁽⁶⁾。

考古資料の分析による鷹狩りに関する研究は、相川龍雄による鷹匠埴輪に装着された鷹の埴輪の紹介に始まる（相川龍雄 1931）⁽⁷⁾。戦後の考古学では実証的研究の確立が進み、末永雅雄によって大和文華館所蔵の鷹匠埴輪が紹介された（末永雅雄 1962）⁽⁸⁾。末永雅雄は、鷹匠の腕にのる鷹に装着された鈴に注目して人によって訓練された鷹であることを指摘し、鷹狩りが、中国・朝鮮・日本へと一貫して変化のない狩猟法であることを述べる。末永雅雄の見解以降、考古資料を対象とした鷹狩りの研究は、鷹匠埴輪の性格論を中心に展開する。水野正好は、鷹匠埴輪の服飾表現に注目し、職業的集団内における階級差を指摘する（水野正好 1971）⁽⁹⁾が、平成に入り、塚田良道は、鷹匠埴輪が盛装男子全身立像の一つで（塚田良道 1992）⁽¹⁰⁾、「鷹を腕にのせる支配者層の人物」⁽¹¹⁾の姿であることを提言する。この提言は、榎村寛之（榎村寛之 1995）⁽¹²⁾、賀来孝代（賀来孝代 2004）⁽¹³⁾、若狭徹（若狭徹 2009）⁽¹⁴⁾らによって支持されてきた。また、榎村寛之は、鷹狩りを騎馬民族による狩猟スタイルとし、日本では鷹狩りと騎馬が同じ頃に渡来したという考えを示し、「馬と鷹は、畿内王権の超越的な権力の象徴」⁽¹⁵⁾として東国進出に使われたとの見解を述べる。賀来孝代は、古くは鷹狩りを生業とするよりも、有力者のために鷹を飼育して、訓練を施すのが鷹匠であったことを述べ、「鷹狩りを行う人物は、鷹の世話をする鷹匠ではなく、鷹匠の主人にあたる人物であり、主人が腕にタカをとめ、自ら獲物に向かって放ったに違い

ない」即ち「鷹狩りに臨む人物は、その姿にふさわしい有力者であった」⁽¹⁶⁾と述べる。一方で塚田良道（塚田良道 1992）⁽¹⁷⁾の提言を支持する姿勢をとりながらも、亀井正道（亀井正道 1995）⁽¹⁸⁾は、鷹匠埴輪は、「狩猟儀礼の一環として、鷹を据え、葬祭に参列した姿」⁽¹⁹⁾であるとの意見を述べている。また、鷹についての考古資料の詳細な検討を行った大塚美恵子（大塚美恵子 1996）によって、それまでの考古資料を中心とした鷹に関する研究史のとりまとめもなされている⁽²⁰⁾。

従前の研究では、鷹甘（飼）は、放鷹史の一角として『日本書紀』の記載に基づき、鷹狩りが渡来文化であることが認識されてきたに過ぎず、渡来文化としての検証も曖昧のままに、文化史的側面から鷹甘（飼）に関する具体的な資料の分析と追究がほとんど行われてこなかった。特に考古資料を中心とした分析では、専ら鷹匠埴輪の性格論に固執してきたと言っても過言ではない。この点が、研究史上の問題点として指摘できる。

本章では、考古資料を中心とした比較分析の一助とするために、渡来文化としての通説の根拠となった古代日本の文献史料を紹介したうえで、（1）鷹形埴輪、（2）と鷹匠埴輪、（3）高句麗壁画古墳の鷹狩り図といった考古資料の比較検討に基づき、朝鮮半島の鷹狩りとの関係を考察し、古墳時代鷹甘（飼）の歴史的・文化的な特性とその実態を見極めたい。

第2節 文献史料の紹介

〔史料1〕『日本書紀』巻第11・仁徳天皇43年9月

四十三年秋九月庚子朔，依網屯倉阿弭古捕異鳥獻於天皇曰，臣每張網捕鳥，未曾得是鳥之類。故奇而獻之。天皇召酒君示鳥曰，是何鳥矣。酒君對言，此鳥類多在百濟。得馴而能從人，亦捷飛之掠諸鳥。百濟俗号此鳥曰俱知。是今時鷹也。乃授酒君令養馴。未幾時而得馴。酒君則以韋縉著其足，以小鈴著其尾，居腕上，獻于天皇。是日，幸百舌鳥野而遊獵。時雌雉多起。乃放鷹令捕。忽獲數十雉。是月，甫定鷹甘部。故時人号其養鷹之处曰鷹甘邑也。

（四十三年の秋九月の庚子の朔に、依網屯倉の阿弭古、異鳥を捕へて天皇に献りて曰さく、「臣、毎に網を張りて鳥を捕ふるに、未だ曾て是の鳥の類を得ず。故、奇しびて献る」とまをす。天皇、酒君を召し鳥を示せて曰はく、「是、何鳥ぞ」とのたまふ。酒君、対へて言さく、「此の鳥の類、多在百濟に在り。馴れ得てば能く人に從ひ、亦捷く飛びて諸鳥を掠む。百濟の俗、此の鳥を号けて俱知と曰ふ」とまをす。是、今時の鷹なり。乃ち酒君に授けて、養ひ馴れしめたまふ。幾時もあらずして馴くこと得たり。酒君、則ち韋の縉を以ちて其の足につけ、小鈴を以ちて其の尾に著け、腕の上に居ゑて、天皇に献る。是の日に、百舌鳥野に幸して遊獵したまふ。時に雌雉、多に起つ。乃ち鷹を放ちて捕らしむ。忽に数十の雉を獲つ。是の月に、甫めて鷹甘部を定む。故、時人、是の鷹を養ふ处を号けて鷹甘邑と曰ふ。）

史料1は、仁徳天皇によって鷹甘部が新設された記述である。仁徳天皇41年3月条によれば、酒君は百済王の親族である。百済に遣わされた紀角宿禰に礼を失したことで、百済王は酒君を鉄の鎖で縛つ

て、襲津彦に託して進上したとある。『日本書紀』巻第10の応神天皇3年歳時条に、百済の辰斯王が天皇に礼を失したので、紀角宿禰ほか三名を遣わして無礼を責め、百済は辰斯王を殺して謝罪したとある。

酒君は、倭国に来た後は、百済系の氏族とみられる石川錦織首許呂斯の元に逃げ隠れていたが、仁徳天皇による許しが出てからは、鷹甘部の新設に関わって厚遇されたものと考えられる。酒君をかくまった石川錦織首許呂斯は、百済系の渡来人⁽²¹⁾が多いた河内国の石川郡（現在の大阪府南河内郡付近）にいたといわれている。

また、俱知は百済語の鷹である。酒君の言葉から、既に百済では鷹を飼い馴らし、鷹狩りの技術が定着していたことが読み取れる。百舌鳥野（現在の大阪府堺市付近）での鷹狩りに伴って、酒君を中心に、鷹を飼い馴らして、鷹狩りに従事する特殊な技能者の集団として、鷹飼部が組織化されたことが読み取れる。

〔史料2〕『播磨国風土記』揖保郡・鈴嚙岡

所以号鈴嚙者、品太天皇之世、田杵此岡、鷹鈴墮落、求而不得、故号鈴嚙岡。

（鈴嚙と号ける所以は、品太天皇の世に、此の岡に田したまひしに、鷹の鈴墮落ち、求むれど得ず、故に鈴嚙岡と号ける）

史料2では、鷹狩りの訓練を受けた鷹の象徴である尾羽の鈴について、鷹狩りで鷹の鈴を落として紛失したことが記載される。地名伝承の記述ではあるが、仁徳天皇より前の応神天皇の時代に鷹狩りが行われていたことを伝える史料として認識されてきた。『播磨国風土記』⁽²²⁾では、応神天皇の巡行及び狩猟記述が多く記載されている⁽²³⁾。

日本では鷹狩りの訓練を受けた鷹は、足に紐、尾羽に鈴板とその上に鈴が付けられるのが、基本的なスタイルである（1-図1）。尾羽の鈴（以下、鷹鈴と呼ぶ。）は、鷹狩りの訓練を受けた鷹の象徴といえる。

史料2は、日本における鷹狩りに関する記述の初出であるが、放鷹史では史料1が重視されてきた。史料1によれば、仁徳天皇の時代に鷹を飼い馴らすことが始まり、仁徳天皇によって、鷹狩りに従事する特殊な技能者集団である鷹甘部が組織化されたとされており、これに基づき、鷹狩りの技術とその系譜は、朝鮮半島の百済に求められるといった認識が通説となっている。



1-図1 鷹の尾羽に付けられた鈴（筆者撮影）

第3節 形象埴輪と壁画資料の検討

次に本章の中心となる鷹及び鷹狩りに関する形象埴輪や壁画資料といった考古資料を整理し、比較分析の基礎資料としたい。

(1) 鷹形埴輪

まず初めに、鷹形埴輪について見ていきたい。鷹形埴輪は、形象埴輪のうち動物埴輪の鳥形埴輪に属する。水鳥や鶏に比べて、鷹と認識できる埴輪は極めて少ない。概ね鷹として認識できる主な鳥形埴輪は、1―表1及び1―図2に示したとおりである。

鷹狩りの訓練を受けた鷹の象徴である尾羽に鷹鈴が付いた鷹形埴輪は、伝大室出土資料（伝群馬県前橋市）のみであるが、原山1号墳（福島県泉崎村）出土の鷹形埴輪では尾羽の根元に環（輪）が付けられており、鷹鈴が付いていた可能性が考えられる。古墳出土資料としては、須恵器の両翼を広げた鳥形平瓶の尾付近に鷹鈴が付いたものが、赤堀村32号墳（群馬県伊勢崎市）から出土している。鷹鈴が付くことが認識できる資料に関しては、鷹狩りの訓練を受けた鷹を表現したものと考えられる。富士山古墳（神奈川県横浜市）及び大日山35号墳（和歌山県和歌山市）出土の資料は、嘴などの形状から鷹らしき鳥（猛禽類に属する鳥）として認識できるものである。大日山35号墳出土の二羽の鳥形埴輪は、両翼を広げて飛行する姿勢で、実に躍動感に溢れている。

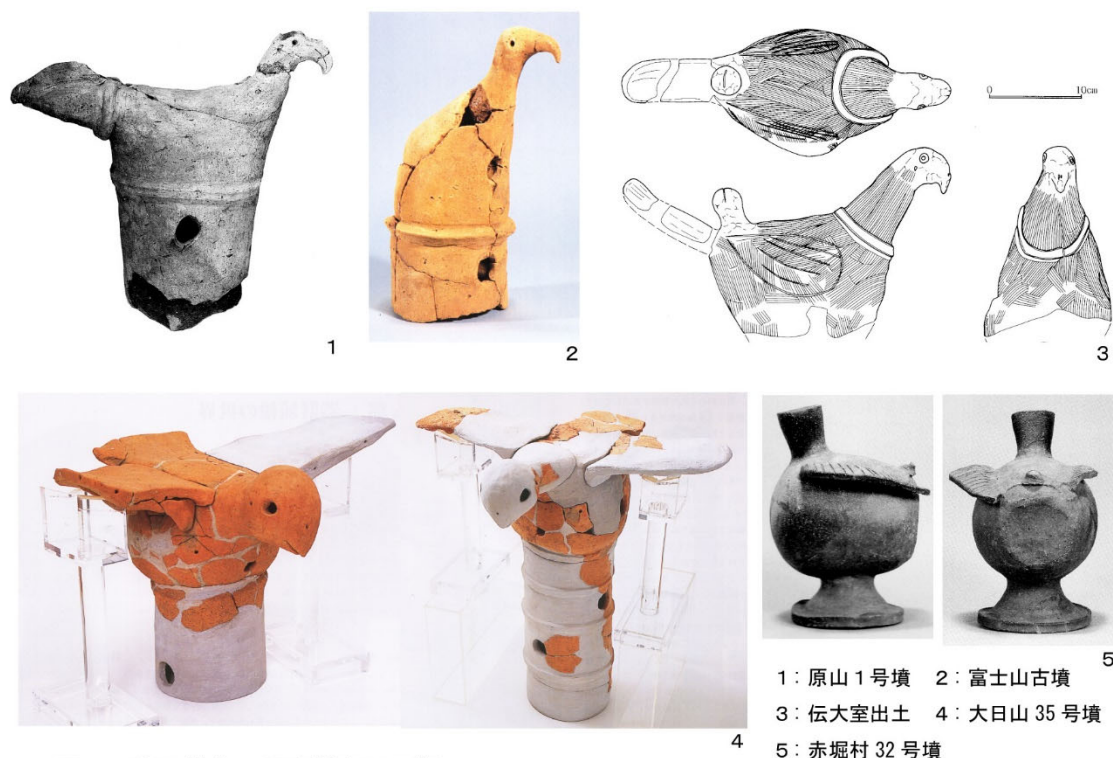
以下、鷹形埴輪の特徴を整理し、出土状況を検証することで特性分析の基礎資料とする。

原山1号墳（福島県泉崎村）は、規模不明の前方後円墳で、5世紀末の築造と考えられている。鷹形埴輪は、墳丘くびれ部西側の周溝内から、人物埴輪（男子・女子・盾持・琴弾き・力士）と円筒埴輪とともに崩落した状態で出土している。出土状況では、人物埴輪が後円部側の位置に配列され、鷹形埴輪は前方部側の位置に配列されていたことが推定できる（1―図3）。鷹形埴輪は、嘴が鋭く下に曲がる。目は盲孔でその後方に耳の表現らしき孔がある。胴部はなだらかで丸みをおび、両翼は刷毛目で表現されている。尾羽は水平に伸び、根元に環（輪）がはめられ、環（輪）の上に鷹鈴が装着されていた可能性がある。基部は円筒である。嘴の形状と尾羽の根元にある環によって、鷹形埴輪と考えられている⁽²⁴⁾。

一方、富士山古墳（神奈川県横浜市）は、長径29mの円墳で、6世紀中頃の築造とされる。鷹形埴輪は、西南側の周溝内から、人物埴輪と円筒埴輪とともに出土した。鷹形埴輪は、嘴が鉤形で鋭く屈曲し

1-表1 鷹を表現した埴輪及び須恵器一覧表

No.	種別	出土地	古墳名（出土地名）	埴形／規模	時期	全長cm	高さcm	目の表現	嘴の形状	羽の表現	尾羽の鈴	特記	主要文献
1	埴輪	福島県泉崎村	原山1号墳	前方後円／全長1m	5c末	(37.0)	(36.5)	竹管刺突	湾曲	刷毛目	不明	尾羽根元に環（輪）	辻秀人ほか1982
2	埴輪	神奈川県横浜市	富士山古墳	円／全径29m	6c中	(22.0)	(26.5)	竹管刺突	湾曲	—	×	—	榎村寛之1995
3	埴輪	群馬県前橋市	（伝大室）	—	6c後	(26.3)	(20.3)	竹管刺突	湾曲	線刻	○	首に紐	大塚美恵子1996
4	埴輪	和歌山県和歌山市	大日山35号墳	前方後円／全長105m	6c前	—	—	穿孔	尖る	翼状	×	両翼を広げる	荻野谷正宏ほか2011
5	埴輪					(74.0)	(73.0)	穿孔	尖る	翼状	×	両翼を広げる	荻野谷正宏ほか2011
6	須恵器	群馬県伊勢崎市	赤堀村32号墳	円／全径42m	7c	(16.0)	22.2	—	—	翼状（線刻）	○	両翼を広げる	川道亨ほか2005

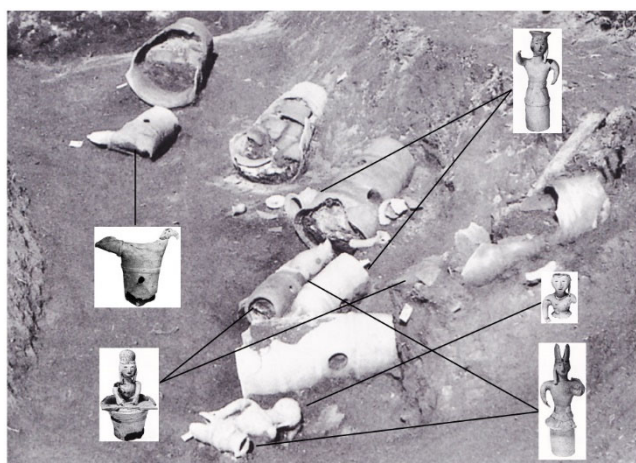


1－図2 鷹形埴輪・須恵器鷹形平瓶

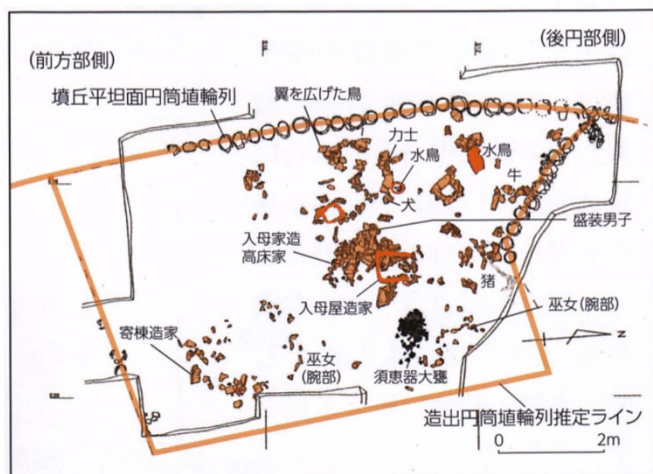
て、目は竹管で施され、両翼の表現はなく、尾は欠損する。基部は円筒である。嘴の形状から、鷹形埴輪と考えられている⁽²⁵⁾。

伝大室出土の鷹形埴輪（伝群馬県前橋市）⁽²⁶⁾は、出土古墳及び出土状況は不明である。中之条町歴史民俗資料館の所蔵資料である。鷹形埴輪は、頭部は丸みをおび、嘴が鉤形で下に曲がる。目は竹管で押捺され、鼻孔が篋切りで表現されている。首部に幅1cmの紐が巻かれている。扁平な尾羽の根元に直径3.2cmの球形を呈する鈴が上に向かって付けられている。両翼は、胴部に線刻で表現される。円筒の基部に接合しているが、別個体の朝顔形埴輪であることが理解されている。鷹鈴が見られることから、訓練された鷹甘（飼）の鷹を表現したものと考えられるが、首部にある紐の表現が気にかかる点として指摘できる⁽²⁷⁾。

また、大日山 35 号墳（和歌山県和歌山市）は、岩橋千塚古墳群を形成する古墳のひとつで、全長約 105m の前方後円墳である。6 世紀前半の築造と考えられている。



1－図3 原山 1 号墳の埴輪出土状況



1-図4 大日山35号墳東側造り出しの埴輪出土状況

図4)。鷹と考えられる埴輪は、2個体ともに同様の器形である。球状の丸い頭部に、嘴は尖端が尖る。目は穿孔で、鼻孔も表現されている。球体に近い体部に水平の尾羽と広げた両翼が取り付けられており、全体的に小孔があげられている。尾羽の根元に鷹鈴の装着は見られない。基部は円筒である⁽²⁸⁾。

最後に、赤堀村32号墳（群馬県伊勢崎市）は、全径42mの円墳で、7世紀初頭の築造と考えられている。埋葬施設である横穴式石室の前庭から、須恵器の鷹形平瓶が出土している。鷹形平瓶は、口縁部～頸部が頭部に見立てられたもので、球体状を呈する体部の上面に広げた両翼と尾羽の根元の位置に鈴が付けられている。翼には篋描き線によって羽根が表現されている。体部の下には台部が付けられる。鷹鈴が見られることから、訓練された鷹甘（飼）の鷹を表現したものである⁽²⁹⁾。

訓練された鷹甘（飼）の鷹を表現したと考えられるのは、伝大室出土の鷹形埴輪及び赤堀村32号墳の須恵器鷹形平瓶2点である。赤堀村32号墳では、前庭の造り直しが行われており、7世紀初頭以降の追葬時における墓前での供献儀礼で使用された可能性が高い。5世紀末の原山1号墳及び6世紀前半の大日山35号墳の出土状況からは、鷹形埴輪は単独での配置形態を取るものではなく、墳丘裾部に設置された埴輪祭祀場にて、人物埴輪などと一緒に儀礼空間を構成する一部であったことが理解できる。

（2）鷹匠埴輪

次に、鷹匠埴輪を見ていきたい。鷹匠埴輪は、形象埴輪のうち人物埴輪に属する。他の人物埴輪に比べて出土資料の点数が僅かではあるが、近畿地方の畿内とその周辺地域及び関東地方の群馬県地域を中心とした東国の古墳で樹立される（1-表2）。男子全身立像を基本とする（1-図5）。

以下、鷹匠埴輪の特徴を整理し、出土状況を検証することで性格分析の基礎資料とする。

今城塚古墳（大阪府高槻市）は、全長350mの二重周溝を有する大型前方後円墳で、墳長は190mである。6世紀前半築造で、埋葬施設は横穴式石室であったと推定できる。継体天皇の陵墓と考えられている。鷹匠埴輪は、内堤北側の張出区画に設置された埴輪祭祀場の200点以上におよぶ形象埴輪群のう

両翼を広げた鷹と考えられる埴輪は、墳丘裾部に位置する東側造り出しから、家形埴輪を中心に動物埴輪（水鳥・牛・猪）・人物埴輪（男子・力士）とともに出土している。出土状況によれば、中央部に入母屋造の高床の家と別の入母屋造と推定される平屋の家形埴輪が並び、その西側に盛装男子人物、両翼を広げた鷹と考えられる埴輪（2個体）、力士、水鳥（3個体）・犬・牛・猪といった動物の一群が配列されていたことが理解できる（1-

1－表2 鷹匠埴輪の一覧表

No.	出土地	古墳名（出土地名）	埴形／規模	時期	形状／規模	腕手	鷹留	鷹向	頭髪／被り物／衣服／装飾／付帯	所蔵先	主要文献
1	大阪府高槻市	今城塚古墳	前方後円／全長350m	6c前	男子全身立像A／－	○	左腕	内側	美豆良結／無／革甲状・帯（垂飾）・袴／無／無	今城塚古代歴史館	森田克行2011
					男子全身立像B／－	○	左腕	内側	－		
2	群馬県太田市	オクマン山古墳	円／全径29m	6c後	男子全身立像／1.47m	○	左腕	内側	美豆良結／帽子／左衽結び紐・帯・袴／首飾り／（大刀）・（靱）・靱帯	東毛歴史資料館	佐藤春樹ほか1999
3	群馬県伊勢崎市	（境淵名）	－	6c後	男子全身立像／（76）cm	○	左腕	外側	美豆良結／帽子／左衽結び紐・帯・袴／首飾り／大刀・靱	大和文華館	末永雅雄1962
4	不明（関東力）	不明	－	6c後	男子全身立像／（57）cm	○	左腕	内側	美豆良結／帽子／左衽結び紐・帯・袴／首飾り／刀	四天王寺宝物館	永峯光一・水野正好編1977



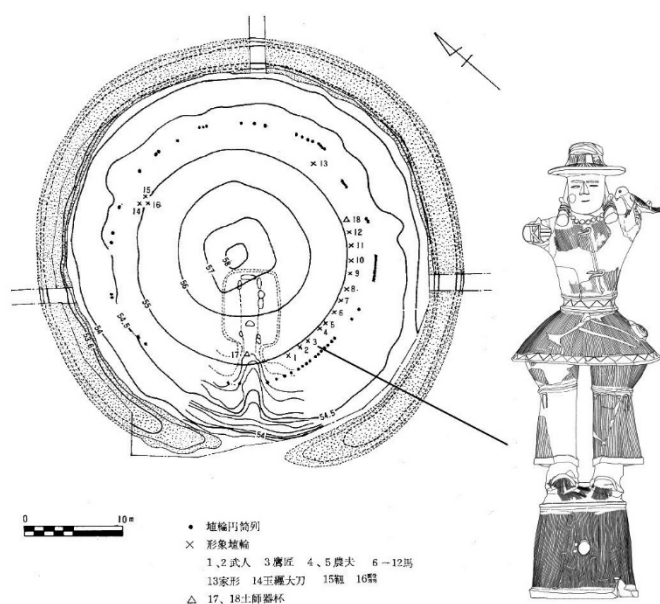
1：今城塚古墳 2：オクマン山古墳 3：境淵名出土（大和文華館蔵） 4：出土地不明（四天王寺宝物館蔵）

1－図5 鷹匠埴輪

ち、最も南側の区画に配列する。白鳥や馬などの動物埴輪の列の北側に、武人埴輪と並列して列状（2体の鷹匠埴輪が推定復元）に配置される（1－図6）。鷹匠埴輪は、男子全身立像である。頭髪は水豆良結いで、被り物はない。革甲状の衣服に身を包み、正面に垂飾のある腰帯を巻き、袴は脚結で絞る。腕



1-図6 今城塚古墳の埴輪祭祀場と鷹匠埴輪の配列
(写真は筆者撮影)



1-図7 オクマン山古墳の鷹匠埴輪の配列

には籠手を付け、右腕を下げ、左腕を前方に挙げた姿勢をとり、前方に挙げた左腕に鷹が留まる。鷹は足のみが残り、内側を向く⁽³⁰⁾。

オクマン山古墳(群馬県太田市)は、墳丘直径22mの円墳で、幅3.5mの周溝が巡る。6世紀後半築造で、埋葬施設は全長8mの横穴式石室である。石室の入口東側に、武人・鷹匠・農夫といった順序で人物埴輪群が配列される(1-図7)。鷹匠埴輪は、男子全身立像で、器台を含めて高さ約1.47mを測る(足首より上と足及び器台が別個体)。頭に鰐の廻る帽子を被り、頭髮は水豆良結いである。丸玉で首元を飾り、上衣は左衽の服で、正面に二カ所の結び紐がみられ、袴は脚結で絞られている。腰に鋸歯文の施された広帯を廻し、大刀と鞘を下げた痕跡と左側に餌^{えふご}を^え入れる腰付籠^ごを下げる。籠手を付けた両腕を前方に挙げた姿勢をとり、左腕に鷹が留まる。鷹は内側を向き、目と嘴、翼及び尾羽と鷹鈴が表現される⁽³¹⁾。

一方、大和文華館(奈良県奈良市)所蔵の鷹匠埴輪は、境淵名(群馬県伊勢崎市)出土の鷹匠埴輪で、国指定重要文化財である。6世紀後半の男子全身立像と考えられるが、膝から下を欠損する。残存高は約76cmである。頭には赤色塗彩

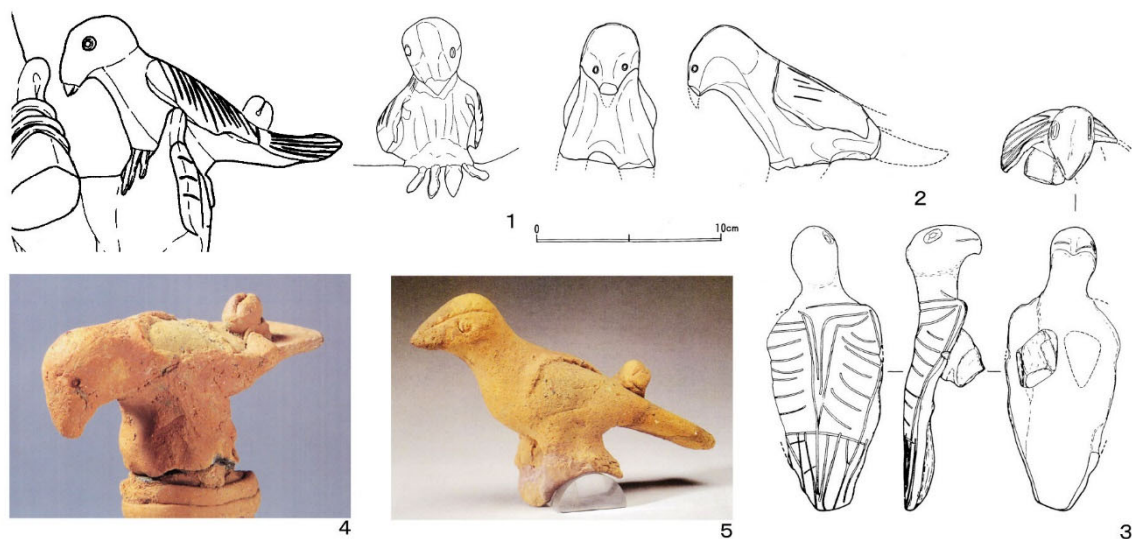
の施された帽子を被り、頭髮は水豆良結いである。オクマン山古墳の鷹匠埴輪同様に、丸玉で首元を飾り、上衣は左衽の服で、正面に二カ所の結び紐がみられる。腰帯の正面に大刀、左側に鞆を下げる。両腕に籠手を付け、右腕を下げ、左腕を前方に挙げた姿勢をとり、左腕に鷹が留まる。鷹は外側を向き、目と嘴、翼及び尾羽と鷹鈴が表現される⁽³²⁾。

さらに、四天王寺宝物館所蔵の鷹匠埴輪（出土地不明）は、6世紀後半の男子全身立像と考えられるが、脚部から下を欠損する。残存高は約57cmである。頭には鍔が廻り尖端が尖った円錐状の帽子を被り、頭髮は水豆良結いである。オクマン山古墳及び大和文華館所蔵の鷹匠埴輪同様に、丸玉で首元を飾り、上衣は左衽の服で、正面に二カ所の結び紐がみられる。腰帯の正面に曲がった刀を下げる。籠手を付けた右腕を前方に下げ、革状のものを巻き付けた左腕を前方に挙げた姿勢をとり、左腕に鷹が留まる。鷹は正面に近い内側を向き、目と嘴、翼及び尾羽と鷹鈴が表現される⁽³³⁾。

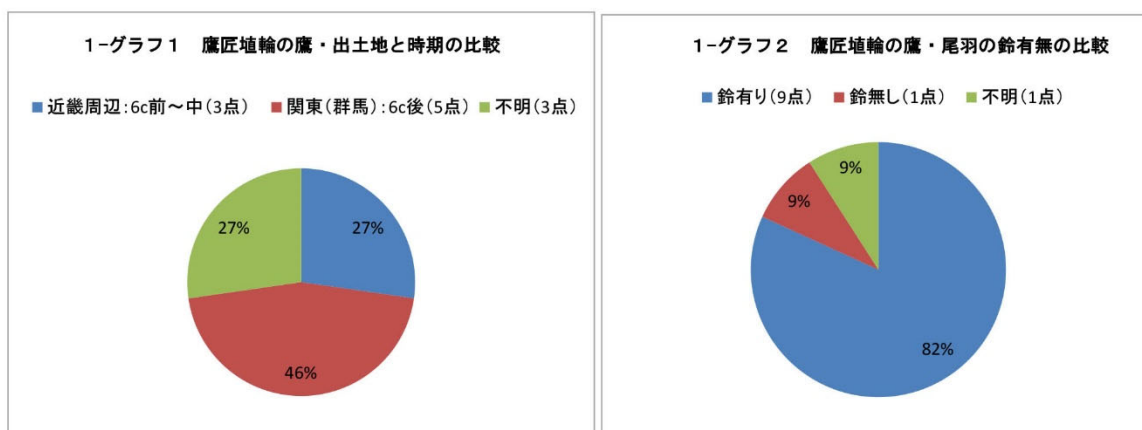
以上の鷹匠埴輪は、全体像の把握が可能な資料であるが、鷹匠埴輪の腕に留まっていたと考えられる鷹は、近畿周辺では全長88mの前方後円墳である井辺八幡山古墳（和歌山県和歌山市）⁽³⁴⁾、全長41mの前方後円墳である星塚2号墳（奈良県天理市）⁽³⁵⁾、大阪府立近つ飛鳥博物館所蔵⁽³⁶⁾などの資料が知られる（1－表3、1－図8）。井辺八幡山古墳の鷹は、目と嘴、翼及び尾羽が表現されるが、鷹鈴の表現がない。星塚2号墳の鷹は、尾羽を欠損しており鷹鈴があったかどうかはわからない。大阪府立近つ飛鳥博物館所蔵資料では、尾羽に鷹鈴が付いている。井辺八幡山古墳は6世紀前半、星塚2号墳は6世紀中頃の築造である。ほかに、成塚（群馬県太田市）及び本郷（群馬県藤岡市）出土⁽³⁷⁾、国学院大学考古学資料館所蔵（群馬県伊勢崎市出土）⁽³⁸⁾、『THE ART OF JAPAN』（1991）掲載のもの（出土地不明）⁽³⁹⁾

1－表3 鷹匠埴輪の鷹一覧表

No.	出土地	古墳名 (出土地名)	墳形／規模	時期	全長cm	幅cm	目の表現	嘴の形状	羽の表現	尾羽の鈴	所蔵館など	主要文献
1	大阪府高槻市	今城塚古墳	前方後円／全長350m	6c前	-	-	(竹管刺突)	(湾曲)	(線刻)	(○)	今城塚古代歴史館	森田克行2011
2	和歌山県和歌山市	井辺八幡山古墳	前方後円／全長88m	6c前	15.4	6.5	竹管刺突	湾曲	線刻	×	-	森浩一ほか1972
3	奈良県天理市	星塚2号墳	前方後円／全長41m	6c中	(11.5)	(5.2)	竹管刺突	湾曲	線刻	不明	-	泉武ほか1990
4	不明（近畿か）	不明	-	6c	13.1	-	竹管刺突	直	-	○	近つ飛鳥博物館	近つ飛鳥博物館1996
5	群馬県太田市	オクマン山古墳	円／全径29m	6c後	15.0	-	竹管刺突	湾曲	線刻	○	東毛歴史資料館	佐藤春樹ほか1999
6	群馬県伊勢崎市	(境淵名)	-	6c後	13.3	-	竹管刺突	湾曲	線刻	○	大和文華館	末永雅雄1962
7	群馬県伊勢崎市	(波志江町)	-	6c後	-	-	-	-	-	○	国学院大学考古学資料館	賀来孝代2004
8	群馬県太田市	(成塚)	-	6c後	17.0	5.4	竹管刺突	-	-	○	-	相川龍雄1931 群馬県編1936
9	群馬県藤岡市	(本郷)	-	6c後	-	-	竹管刺突	湾曲	線刻	○	-	相川龍雄1931 群馬県編1936
10	不明（関東か）	不明	-	6c後	14.4	4.6	竹管刺突	湾曲	線刻	○	四天王寺宝物館	永峯光一・水野正好編1977
11	不明	不明	-	6c後	17.8	-	竹管刺突	-	-	○	『THE ART OF JAPAN』掲載	Yoshiko Kakudo1991



1: オクマン山古墳 2: 星塚2号墳 3: 井辺八幡山古墳 4: 近つ飛鳥博物館蔵 5: 『THE ART OF JAPAN』掲載
1-図8 鷹匠埴輪の鷹



などが知られ、いずれも尾羽の根元に鷹鈴が付けられている。鷹匠埴輪は、6世紀前半～中頃にかけての近畿周辺、6世紀後半では群馬県地域を中心とした北関東の地域で専ら造立されたことが理解できる(1-グラフ1)。

鷹匠埴輪の共通点は、いずれも6世紀代の資料で、(1)男子全身像(頭髪は水豆良結い)、(2)両腕に籠手を付け、左腕を前方に挙げる、(3)左腕に鷹が留まる、といった点である。相違点は、(1)帽子の有無、(2)衣服形状と装飾品の有無、(3)右腕の位置、といったところである。腕と留まる鷹の向きに関しては、内側を向くのが基本姿勢であることが従前より指摘されている⁽⁴⁰⁾。帽子の有無と衣服形状と装飾品の有無に関しては、今城塚古墳の鷹匠埴輪を除くと、むしろ共通点ともいえる。鷹に関しては、尾羽に鷹鈴が付くといった共通点があげられる(1-グラフ2)。

鷹匠埴輪は、現状では6世紀前半の近畿地方の畿内大王墓(今城塚古墳)を初現として、6世紀中頃

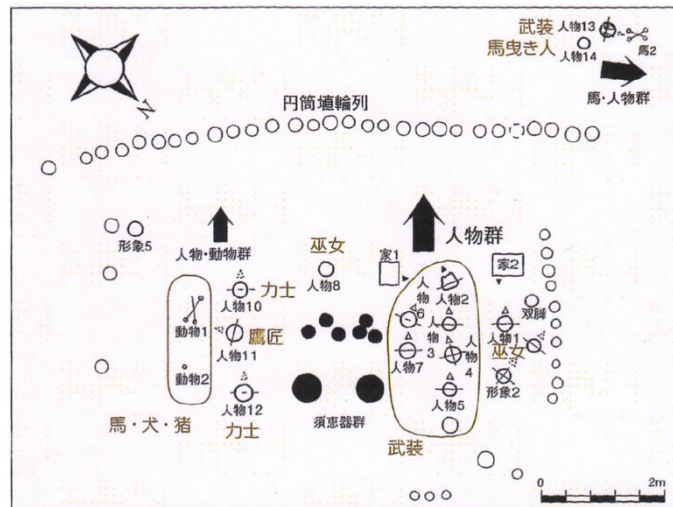
までに畿内とその周辺地域といった近畿地方の地域首長墓（井辺八幡山古墳・星塚2号墳）へと拡がり、6世紀後半には関東地方の群馬県地域を中心とした東国の地域首長墓（円墳級）において積極的に取り入れられていたことが理解できる。6世紀前半～後半にかけて、天皇陵、そして後の国造級、後の郡長や郷長級の墳墓へと速やかに受容されている。言い換えれば、鷹甘（飼）の組織化は、首長の象徴ともいえよう。

鷹匠埴輪の今城塚古墳での堤上の埴輪儀礼空間（埴輪祭祀場・1-図6）や井辺八幡山古墳での墳丘裾部の造り出し儀礼空間での配列（1-図9）は、武人や力士と並列及び順列することから、被葬者が掌握した職能集団での鷹甘（飼）の地位の安定度が窺える。畿内周辺での鷹匠埴輪の実態及び儀礼空間での配列を見る限り、鷹匠埴輪が被葬者（支配者層）の姿であるとの提言は肯定できない。鷹匠埴輪は、現代の日光東照宮（栃木県日光市）の神事行事での姿（1-図10）のように⁽⁴¹⁾、鷹甘（飼）の正装した姿を表していると考えられる。

鷹匠埴輪の検討によれば、鷹甘（飼）の組織化は6世紀に急速に進んだことは確実である。形象埴輪は、4世紀代の家・盾などの器財埴輪や鶏・水鳥などの鳥形埴輪が出現し、5世紀後半には巫女・武人などの各種の人物埴輪及び馬形埴輪などの動物埴輪が出現する⁽⁴²⁾。今後、今城塚古墳以前に築造された天皇陵級の古墳での、鷹匠埴輪の出土を期待したい。

（3）高句麗壁画古墳の鷹狩り図

次に朝鮮半島の鷹狩りについて、高句麗壁画古墳に描かれた鷹狩り図を基本に検証を行いたい。高句麗が二番目に都を置いた集安は、鴨緑江の右岸に広がる東西に細長い盆地で、北に禹山、東に竜山、西



1-図9 井辺八幡山古墳東側造り出しの埴輪配列



1-図10 日光東照宮の鷹匠行列



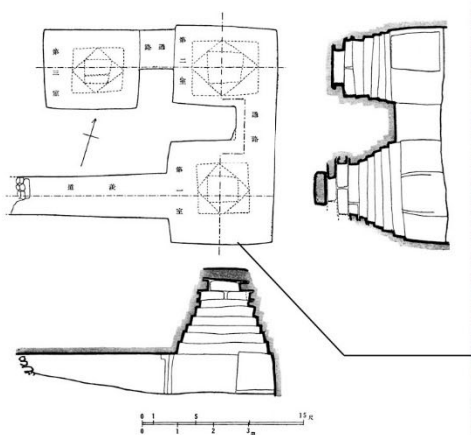
1-図11 三室塚近景（筆者撮影）

に通溝河が流れる。鴨緑江中流域には、一万二千余基の古墳が分布するが、その中の壁画古墳で鷹狩り図が描かれているものがある。特質できるのは、国内城の北側に位置する三室塚（中国吉林省集安市）の鷹狩り図である。

三室塚は、直径約18m程度の円形墳と考えられる（1-図11）。石室構造は、名称のとおり石室が三室あり、羨道と通路で繋がっている。全体の平面形は、鉤形を呈する。第一室は、東西2.9m×南北2.7mの平

面方形で、高さ3.3m、天井は六段の平行持ち送りで、さらに上段の二段が三角持ち送り構造となる。第二室と第三室の平面形は、東西に長い矩形である。第二室は、東西2.8m×南北2.1m、高さ3.1mで、天井は四段の平行持ち送りで、さらに上段の二段が三角持ち送り構造となる。第三室は、東西2.5m×南北2.0m、高さ3.1mで、天井は五段の平行持ち送りで、さらに上段の二段が三角持ち送り構造となる。第一室に比べて、第二室と第三室の規模が小さい。

第一室の南壁下段に鷹狩り図が描かれている。騎馬人物と鷹、追われる雉で、騎馬人物は着衣（着物）のみで、頭に帽子などの被り物はなく、左腕に鷹と思われる鳥を留める。鷹鈴の装着はわからない（1-図12）。南壁上段には、奥（東）壁に向かって出行する群像図が描かれ、北壁には、鎧馬に騎馬した甲冑武人の戦闘図、天井には流雲文・四神・菩提樹・鳳凰などが描かれる。また、第二室と第三室の四つの壁には、梁を支える力士が描かれる⁽⁴³⁾。高句麗壁画古墳では、多室構造の石室を埋葬施設とするものに、生活風俗を主題とする壁画が多い。単室構造の石室の場合には、四神図や装飾文を主題とするのが一般的である。生活風俗図は、被葬者の日常生活の描写と考えられ、記念となった行事や豊かな生活



1-図12 三室塚の石室と鷹狩り図

の様子が墓室内に描かれる⁽⁴⁴⁾。三室塚の壁画構成には、高句麗壁画古墳の第一期（3世紀後半～5世紀初め）に比定できる要素が多々認められることから、築造時期は、5世紀初頭と考えられている。

高句麗壁画古墳では、第一期に比定される古墳で、生活風俗図及び狩猟図が描かれたものが多い⁽⁴⁵⁾。狩猟図が見られる代表的な壁画古墳は、集安の4世紀末～5世紀初頭に築造された一辺17mの方台形墳である舞踊塚（中国吉林省集安市）、5世紀中頃に築造された規模不明の方台形墳である長川1号墳（中国吉林省集安市）、平壤周辺の4世紀末に築造された南北17m×東西13mの方台形墳である安岳1号墳（北朝鮮黄海南道安岳郡）、永樂18（408）年墓誌銘のある規模不明の方台形墳である徳興里古墳（北朝鮮平安南道南浦市）、4世紀末～5世紀初頭に築造された規模不明の円形墳である薬水里古墳（北朝鮮平安南道南浦市）などである。

舞踊塚と長川1号墳（1－図13）では、鹿と虎を馬上から弓射する冠状の被り物を被った人物による狩猟図、徳興里古墳では、鹿と虎を馬上から弓射する頭巾状の被り物を被った人物による狩猟図、薬水里古墳でも、馬上から弓射する頭巾状の被り物を被った人物による狩猟図、安岳1号墳では、鹿を馬上から弓射する狩猟図が描かれる（1－図14）。高句麗壁画古墳の狩猟図では、鹿や虎といった大型獣を馬上から弓射する描写が一般的といえる。三室塚の鷹狩り図は、騎馬という共通点以外は、一般的な狩猟図の描写や構図とは相違する。

また、長川1号墳の前室の左側壁に描かれた図の中にも、鷹狩りを表したと指摘される図がある（1－図15－1）。長川1号墳の石室は、羨道、前室、通路、奥室（玄室）から構成され、壁面には漆喰が塗られている。また、前室の天井構造は三段の平行持ち送りが基本であるが、前室内から見上げると八角形に見える複雑な構造で、壁画は前室と奥室（玄室）の全面と通路の壁面に描かれている。鷹狩り図と指摘される図は、前室左側壁のほぼ中央に、他の題材とともに描かれている。長川1号墳の鷹狩り図は、僅かに両脚を開いた姿勢で向かって左側の方向を向いた着衣（着物）姿の女性らしき人物（立像）が、両腕を右腕の方向に向けた腕先に鷹らしき鳥が留まり、人物の向いた先方には、飛び立つ一羽の雉を追いかけるように、飛び立つ一羽の鷹らしき鳥が描かれている。飛び立つ鷹らしき鳥と人物の間には、止まり木とも思える小振りな樹木が描かれている。まさに鷹狩りを行っている場面と判断できるが、人物の右腕の方向に鷹らしき鳥が留まってはいるものの、左腕に留まっているようにも見え、人物のどちらの腕に留まっているのかは判断がつかない。鷹鈴の装着についてもわからない。さらに、飛び立つ二羽の鳥の上方に、飛び立つ鳥とは反対の方向（向かって右側）に顔を向けて、伏せの姿勢で座り込む一頭（匹）の犬が描かれているが、描かれた位置や大きさ・姿勢・方向などから考えて、鷹狩りの場面として描かれたかものではないと判断できる⁽⁴⁶⁾。

さらに、集安の5世紀に築造された一辺12.5mの方台形墳である麻線溝1号墳（中国吉林省集安市）で、鷹狩りを表したと考えられる図が見られる（1－図15－2）。麻線溝1号墳の石室は、羨道、前室、通路、奥室（玄室）によって構成されるが、前室が南側室と北側室に分かれ、鷹狩りを表したと考えられる図は前室北側室の東壁面で、鹿を馬上から弓射する狩猟図の下に描かれている。長川1号墳の鷹狩



1



2

1: 舞踊塚 2: 長川1号墳

1-図13 舞踊塚・長川1号墳近景(筆者撮影)



1



2



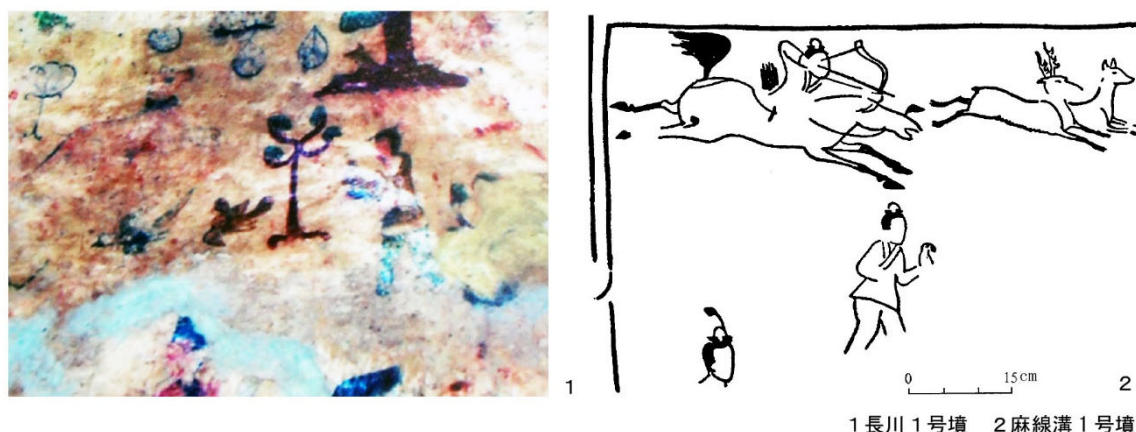
3



4

1: 舞踊塚 2: 長川1号墳 3: 徳興里古墳 4: 薬水里古墳

1-図14 高句麗壁画古墳の狩猟図



1 図 15 長川 1 号墳・麻線溝 1 号墳の鷹狩り図（1は禹山貴族墓展示図を筆者撮影）

り図と同様に僅かに両脚を開いた姿勢で、向かって右側の方向を向いた着衣（着物）姿の結髪の人物（立像）の左腕に鷹らしき鳥が留まっている。残念ながら、人物の先に獲物となる雉などが描かれていたのかは不明である。鷹鈴の装着についてもわからない⁽⁴⁷⁾。

長川 1 号墳と麻線溝 1 号墳の鷹狩りと指摘される図では、描かれた方向や男女の違いはあるが、構図に共通する点が窺える。同じ鷹狩りの描写でも、三室塚の鷹狩り図とは、異なる場面であることは確かである。しかしながら、三室塚の鷹狩り図と麻線溝 1 号墳の鷹狩りと指摘される図では、人物の腕に留まる鷹はいずれも左腕という共通点がある。

さらに、朝鮮半島の鷹狩りに関しては、『三国史記』巻第 15・高句麗本紀第 3 太祖大王に、「六十九年冬十月、…、肅愼使来、献紫狐裘及白鷹白馬、王宴勞以遣之」とあり、高句麗の鷹狩りの系譜は、北方の肅愼^{しゅくしん}などから伝わったと考えられている⁽⁴⁸⁾。

第 4 節 比較分析による共通点と相違点

次に、形象埴輪と壁画資料による考古資料の比較分析を通じて、その共通点と相違点を整理して、鷹甘（飼）の特性を追究したい。

鷹形埴輪の初現は、現状では 5 世紀末の前方後円墳である原山 1 号墳と考えられる。さらに 6 世紀前半の前方後円墳である大日山 35 号墳の出土状況と合わせると、鷹形埴輪は埴輪部設置された埴輪祭祀場にて、人物埴輪などの他の形象埴輪と一体となって、儀礼空間を構成していたことが理解できる。5 世紀末～6 世紀代にかけて、水鳥埴輪などに比べると極僅かではあるが、地域首長墓の儀礼空間を構成する要素のひとつとして、鷹形埴輪の存在を窺うことができる。さらに、7 世紀代に入ってから、須恵器でその造形が表現され、葬礼での供献儀礼容器としての使用が窺える。地域首長墓を中心に 5 世紀末頃～7 世紀にかけて、鷹形埴輪の造立及び須恵器の使用が窺えることから、鷹及び鷹狩りの存在が推定できる。地域首長墓での造立及び次に述べる鷹匠埴輪の造立と合わせて考えると、この時期に鷹甘（飼）の定着化がなされていたと考えられる。

また、鷹匠埴輪の腕に留まる鷹の尾羽の根元に相当する箇所には鷹鈴の装着が見られることから、飼育・訓練された鷹を表現したものと考えられる。鷹形埴輪及び須恵器鷹形平瓶でも、同様であることが理解できる。鷹鈴の装着の見られないものに関しては、飼育・訓練の施される以前の自然の状態のままを表現したものと考えたい。日本での鷹の存在は、縄文時代前期（約6千年前）まで確認されている⁽⁴⁹⁾。鷹狩りで用いられる鷹の種類は、大鷹、^{はいとか}鵠、隼が知られるが（1—図16）、百済で俱知と呼ばれた鷹がどの種類であったのかは解らないが、大鷹であった可能性が指摘されている⁽⁵⁰⁾。

鷹匠埴輪は、頭髪を水豆良結いした男子全身像で、籠手を付けた左腕に鷹が留まる姿が基本となる。6世紀前半の今城塚古墳の鷹匠埴輪を除き、6世紀後半の群馬県地域で造立された鷹匠埴輪では、帽子や服飾に共通性が窺える。鷹匠埴輪は、現状では近畿地方の大型前方後円墳（大王墓）である今城塚古墳を初現とする。6世紀中頃までには、畿内とその周辺地域の前方

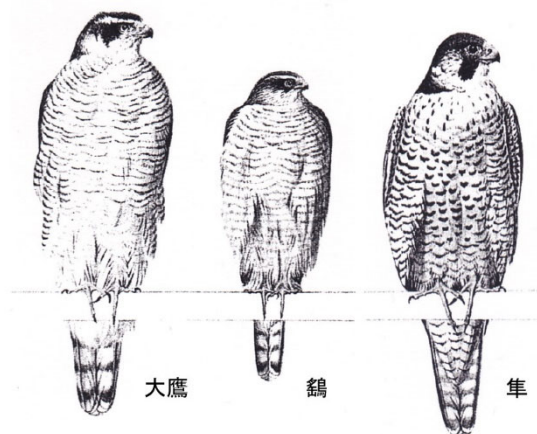
後円墳（地域首長墓）でも造立され、6世紀後半には関東地方の群馬県地域の円墳（後の郷長及び里長級の墓）で積極的に造立されている。鷹匠埴輪の造立状況によれば、鷹狩りが6世紀代において首長層を中心に急速に広がったことは確実であり、鷹甘（飼）の組織化を「首長の象徴」と述べた要因でもある。また、鷹形埴輪の造立と呼応する現象としても理解できる。

5世紀初頭に築造された高句麗の支配者層の墳墓である三室塚の鷹狩り図では、騎馬に乗って雉を追いかける人物の左腕に鷹と思われる鳥が留まる。前述のとおり、騎馬人物は着衣（着物）のみで、帽子などの被り物は見られない。左腕に留まる鷹は、鷹匠埴輪との共通点である。帽子などの被り物が見られない点は、今城塚古墳の鷹匠埴輪との共通点ともいえる。鷹匠埴輪との大きな相違点は、騎馬である。

さらに、唐代の加彩騎馬隼匠俑⁽⁵¹⁾に見られるように、中央アジアの騎馬民族では、右腕に鷹（隼）を留めて左腕は馬の手綱をさばくことが基本とされ、鷹を留める腕の相違点に関しては、その原因が騎馬にあることが以前から指摘されている⁽⁵²⁾。高句麗の鷹狩りは、三室塚の鷹狩り図が示すように騎馬が一般的であったと推定できる。また、三室塚と麻線溝1号墳の鷹狩り図では、鷹が左腕に留まってい



訓練された大鷹



1—図16 鷹狩りに使用される主な鷹
(写真筆者撮影)

る点に注意され、日本の鷹狩りの狩猟姿勢との共通性が窺える。前述の加彩騎馬埴匠俑などからも、騎馬での鷹狩りは、中央アジアでの基本スタイルであったことが理解できるが、日本の古墳時代の鷹狩りでは、騎馬の想定はできない。考古資料の分析からは、鷹廿（飼）での騎馬の想定は、困難である。また、馬飼の特性として指摘できる軍事的性格⁽⁵³⁾を、鷹廿（飼）に見いだすことはできない。榎村寛之（榎村寛之 1995）が提言した馬と鷹の一体となったような渡来の実態や、畿内王権の東国進出の象徴としての馬と鷹の一体となった姿⁽⁵⁴⁾というものは想定できない。日本での騎馬と鷹狩りの受容にあたっては、その性格に差異が認められ、単純に同一視することはできないといえよう。

第5節 結論

現状の考古遺物による検討では、鷹廿（飼）の組織化は6世紀に拡充および定着化を成したことが理解でき、その初現は遡っても5世紀後半頃と考えられる。『日本書紀』の記載に関しては、仁徳天皇の在位期間を4世紀末頃までと考えるか、仁徳天皇陵として比定される大仙古墳（仁徳陵古墳・大阪府堺市）の築造年代である5世紀前半と考えるかによっても相違が窺える。

鷹廿（飼）によって飼育・訓練された鷹の特徴としては、尾羽に付けられた鷹鈴の存在が指摘できる。鈴は、形状は丸くて中空で、内部には玉や小石が入れられ、細かい切れ目が施されることで、反響して音が鳴り響く道具である。鷹鈴は、鷹狩りで、鷹の居場所を知るために欠かすことの出来ない道具で、現在でもその用途・機能は変わっていない。

古代の朝鮮及び日本では、5世紀代に三環鈴などの馬具として鈴の存在が認識できる⁽⁵⁵⁾。日本での鈴付き考古遺物としては、鈴釧や鈴鏡などがよく知られている。5世紀後半の全長120mの前方後円墳である埼玉稲荷山古墳（埼玉県行田市）では、副葬品として三環鈴が知られ⁽⁵⁶⁾、5世紀では直径18mの円墳である和田山2号墳（石川県能美市）から鈴付銅釧、5世紀末頃の直径19mの円墳である諏訪山1号墳（埼玉県東松山市）から鈴付腕輪の出土などが知られる⁽⁵⁷⁾。全長23.6mの帆立貝式古墳である塚廻り3号墳（群馬県太田市）の巫女埴輪では、腰帯下に鈴鏡を下げるものが知られており⁽⁵⁸⁾、規模不明の円墳である西岡28号墳（東京都大田区）や直径22.5mの円墳である鍛屋地2号墳（群馬県昭和村）などのように東国の多くの古墳では、鈴鏡が副葬されている⁽⁵⁹⁾。

朝鮮の鷹狩りに目を向けると、『三国史記』巻第3・新羅本紀第3・訥祗麻立干に「十八年春二月，百濟王送良馬二匹，秋九月，又送白鷹」、『三国史記』巻第25・百濟本紀第3・毗有王に「八年春二月，遣使新羅，送良馬二匹，秋九月，又送白鷹」といった記載があることから、百濟では、飼育した鷹を貢物として新羅に送っており、百濟で鷹の飼育が盛んであったことが指摘されている。また、『三国史記』巻第25・百濟本紀第3・阿莘王に「及壯志氣豪邁，好鷹馬」とあることから、百濟では馬に乗って鷹狩りが行われていたことも指摘されている。鷹鈴に関しては、『三国史記』巻第8・新羅本紀第8・聖徳王に「二十二年夏四月，…，鏤鷹鈴」とあり、新羅より唐への貢物の中に「鏤鷹鈴」があったことがわかる。また、『三国史記』巻第11・新羅本紀第11・景文王では「九年秋七月，…，金花鷹鈴子二百顆，金

花鶴子鈴子二百顆」のように、鷹狩りに使用する道具の名前が記されている。北方の渤海でも、鷹を飼育して貢ぎ物として唐に送っていたことが指摘されている⁽⁶⁰⁾。現代韓国の鷹狩り（2010年に韓国を含めた11カ国の鷹狩りが、ユネスコの世界無形文化遺産に登録）でも、尾羽に鷹の飼主の名前を書いた名札である「シチミ」と、鷹鈴が付けられる。鷹鈴は、獲物を捕獲した鷹の位置を知らせる役割を担っている。ベルギーやチェコ・フランスなどの西洋の鷹狩りでは、鷹の足に鈴を付けることが知られている。

鷹の尾羽に鷹鈴を装着する行為は、古代の朝鮮と日本での鷹狩りの共通点として認識でき、古墳時代、鷹甘(飼)によって飼育・訓練された鷹に装着された尾羽の鷹鈴は、古代の朝鮮で盛んであった鷹狩りが、日本へ渡来した根拠として指摘できる。鷹鈴の鑄造技術も、古代の朝鮮をルーツとした技術であったと理解できる。

註

- (1) 宮内省式部職編『放鷹』吉川弘文館、1931.
- (2) a. 加藤秀幸「鷹狩りの歴史」『太陽』No.72, 平凡社, 1969, pp. 137~138.
b. 加藤秀幸「鷹狩り文化史」『季刊アニマ』2, 平凡社, 1975, pp. 89~96.
c. 加藤秀幸「鷹・鷹匠, 鵜・鵜匠埴輪試論」『日本歴史』第336号(1976年5月号), 吉川弘文館, 1976, pp. 60~74.
- (3) 大田区立郷土博物館編・発行『特別展 鷹狩り—歴史と美術—』1988.
- (4) a. 橋口尚武『けやきブックレット9 東京の鷹匠—鷹狩りの歴史とともに—』けやき出版, 1993.
b. 橋口尚武「鷹狩—その技術と歴史—」『考古学による日本歴史』12, 雄山閣, 1998, pp. 179~188.
- (5) 秋吉正博『日本古代養鷹の研究』思文閣出版, 2004.
- (6) 荻島大河「宮内省の隼」『和光大学学生研究助成金論文集』19, 和光大学, 2011, pp. 3~16.
- (7) 相川龍雄「埴輪を凝視めて(二) —鳥埴輪に対する考察—」『上毛及上毛人』第166号, 上毛郷土史研究会, 1931, pp. 1~7.
- (8) 末永雅雄「鷹匠埴輪」『大和文華』第37号, 大和文華館, 1962, pp. 49~54.
- (9) a. 水野正好「埴輪芸能論」『古代の日本2 風土と生活』角川書店, 1971, pp. 255~278.
b. 水野正好「埴輪の世界」『日本原始美術大系3 土偶・埴輪』講談社, 1977, pp. 172~187.
- (10) 塚田良道「鷹匠と馬飼」『同志社大学考古学シリーズV 考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会, 1992, pp. 301~312. (塚田良道『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣, 2007に再録)
- (11) 註10再録文献, p. 158.
- (12) 榎村寛之『狩りと王権』斎宮歴史博物館, 1995.
- (13) 賀来孝代「鵜飼・鷹狩を表す埴輪」『古代』第117号, 早稲田大学考古学会, 2004, pp. 83~105.
- (14) 若狭徹『もっと知りたいはにわの世界—古代社会からのメッセージ—』東京美術, 2009.

- (15) 註 12 文献, p. 28.
- (16) 註 13 文献, pp. 96～97.
- (17) 註 10 文献に同じ。
- (18) 亀井正道『人物・動物はにわ（日本の美術第 346 号）』至文堂, 1995.
- (19) 註 18 文献, p. 50.
- (20) 大塚美恵子「鷹の埴輪について—伝大室出土の鷹形埴輪に関連して—」『群馬考古学手帳』vol. 6, 群馬土器観会, 1996, pp. 89～106.
- (21) 渡来人は、かつて帰化人とも呼ばれた。海をわたり倭国へ移入した東アジアの人々で、主に中国大陆や朝鮮半島から倭国へと移入した職能技術者やその集団などを指している。本論では、朝鮮半島から倭国へと移入した職能技術者やその集団などを指す。以降、「渡来人」についての註は割愛する。参考文献として、土生田純之・亀田修一「特集 古墳時代・渡来人の考古学」『季刊考古学』第 137 号, 雄山閣, 2016.
- (22) 『風土記』は、和銅 6（713）年に元明天皇により編纂の命が下り、それを受けて各国で編纂されたが、現存するのは 5 国しかない。諸国の地誌が調査されて記述された。『播磨国風土記』はそのひとつで、霊亀元（715）年までに編纂されたといわれている。本論では、古典保存会編『播磨国風土記』古典保存会事務所, 1926. を参考にした。以降、『播磨国風土記』についての註は割愛する。
- (23) 八木毅「播磨国風土記における品太天皇」『語文』第 22 輯, 文進堂（大阪大学国文学研究室編集）, 1959, pp. 12～16.
- (24) 辻秀人ほか『原山 1 号墳発掘調査概報』福島県教育委員会, 1982.
- (25) 註 12 文献に同じ。
- (26) 註 20 文献に同じ。
- (27) 鵜を表現した鳥形埴輪にみられる。
註 13 文献では、首紐は鵜飼の鵜の表現として指摘する。
- (28) a. 丹野拓『平成 20 年度特別展 岩橋千塚』和歌山県立紀伊風土記の丘, 2008.
b. 和歌山県立紀伊風土記の丘編・発行『公開討論会 大日山 35 号墳の埴輪を考える』2010.
c. 荻野谷正宏ほか『大王の埴輪・紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』和歌山県立紀伊風土記の丘, 2011.
d. 和歌山県立紀伊風土記の丘編・発行『特別展記念シンポジウム資料集 大王の埴輪・紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』2011.
- (29) 川道亨ほか『五目牛新田遺跡・五目牛南組Ⅱ遺跡・五目牛清水田Ⅱ遺跡・柳田Ⅱ遺跡』伊勢崎市教育委員会, 2005.
鳥形須恵器は、北陸地方の小杉流通業務団地No.16 遺跡（富山県射水市）から出土した 8 世紀前半の資料などが知られる（富山県埋蔵文化財センター編・発行『平成 6 年度特別企画展 古代の須恵器—新技術の伝来—』1994, 巻頭図版。）が、鷹を表す鷹鈴が付くものは、現状では本資料のみといえる。
- (30) a. 高槻市教育委員会編・発行『史跡・今城塚古墳—平成 13 年度・第 5 次規模確認調査—』2002.

- b. 高槻市教育委員会編・発行『史跡・今城塚古墳—平成14年度・第6次規模確認調査—』2004
- c. 鐘ヶ江一朗ほか『発掘された埴輪群と今城塚古墳』高槻市教育委員会・高槻市立しろあ歴史館, 2004.
- d. 荻野谷正宏ほか『大王の埴輪・紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』和歌山県立紀伊風土記の丘, 2011.
- e. 森田克行『よみがえる大王墓 今城塚古墳』新泉社, 2011.
- f. 高槻市教育委員会編・発行『今城塚古代歴史館常設展示図録(改訂版)』2012
- (31) a. 木暮仁一「オクマン山古墳」『群馬県史資料編3 原始古代3・古墳』群馬県, 1981, pp. 941~948.
- b. 佐藤春樹ほか『太田市指定重要文化財鷹匠埴輪修復報告書』太田市教育委員会, 1999.
- (32) 註8文献に同じ。
- (33) 永峯光一・水野正好編『日本原始美術大系3 土偶・埴輪』講談社, 1977, p. 94.
- (34) 森浩一ほか『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部文化学科内考古学研究室, 1972.
- (35) 泉武ほか『星塚・小路遺跡の調査』天理市教育委員会, 1990.
- (36) 大阪府立近つ飛鳥博物館編・発行『古代の群像—俑と埴輪—』1996.
- (37) a. 註7文献に同じ。
- b. 群馬県編・発行『群馬県古墳概観』1936.
- (38) 註13文献に同じ。
- (39) Yoshiko Kakudo “*The Art of Japan*” Asian Art Museum, San Francisco, 1991, p. 45.
- (40) 註2c文献に同じ。
- (41) 註2b文献に同じ。
- (42) a. 国立歴史民俗博物館編『はにわ—形と心—図録』朝日新聞社, 2003.
- b. 註14文献に同じ。
- (43) a. 池内宏・梅原末治『通溝 卷下』日満文化協会, 1940.
- b. 朝鮮画報社出版部編『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社, 1985.
- (44) a. 金基雄『朝鮮半島の壁画古墳』六興出版, 1980.
- b. 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院・朝鮮画報社『徳興里高句麗壁画古墳』講談社, 1986.
- c. 読売テレビ放送編『好太王碑と集安の壁画古墳』木耳社, 1988.
- d. 早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005.
- (45) 全虎兌「古墳壁画と高句麗文化」『高句麗の文化と思想』明石書店, 2013, pp. 307~324.
- (46) a. 吳广孝『集安高句麗壁画』山東画報出版社, 2006.
- b. 耿鉄華『高句麗古墓壁画研究』吉林大学出版部, 2008.
- c. 陳相偉・方起東「集安長川一号壁画墓」『吉林集安高句麗墓葬報告集(吉林省文物考古研究所編著)』科学出版社, 2009, pp. 65~85.
- (47) a. 註46a文献, p. 34.
- b. 方起東「吉林集安麻線溝一号壁画墓」『吉林集安高句麗墓葬報告集(吉林省文物考古研究所編著)』科学出

版社, 2009, pp. 27～36.

(48) 註 1 文献, pp. 220～221.

(49) 若狭三方縄文博物館（福井県三方町）展示。

参考資料として,

a. 西田正規「動物遺体」『鳥浜貝塚』福井県教育委員会, 1979, pp. 164～166.

b. 若狭町歴史文化課編・発行『若狭三方縄文博物館・若狭町歴史文化館常設展示図録』2014.

(50) 註 6 文献, p. 7.

(51) 註 3 文献, 図版 34.

(52) 註 4b 文献, p. 188.

(53) 本論第 2 章参照。

(54) 註 12 文献, p. 28.

(55) 早乙女雅博「朝鮮半島出土の環鈴」『MUSEUM 東京国立博物館美術誌』No.402, 東京国立博物館, 1984, pp. 24～34.

(56) 大塚初重「埼玉県稲荷山古墳の重要性」『武蔵埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会, 2007, pp. 233～328.

(57) a. 京都国立博物館（京都府京都市）展示。

b. 金井塚良一ほか『諏訪山古墳群』考古学資料刊行会, 1970.

(58) 石坂久則ほか『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会, 1980.

(59) a. 註 14 文献, p. 36.

b. 小村正之ほか『川額軍原 I 遺跡』昭和村教育委員会, 1996.

(60) 註 1 文献, pp. 222～225.

第2章 馬甘（飼）の特性 —その身分と軍馬生産の成立—

第1節 本章の目的

本章は、古墳時代における馬を扱う馬甘（飼）について、渡来文化としての歴史的・文化的特性を明らかにすることを目的とする。

馬甘（飼）は、古代において馬の飼育方法を知り得た馬の飼育者の呼称である。律令国家成立以前は、馬飼部として、馬飼首を首長とした馬飼造に従っていた馬の飼育者らである。律令国家成立後は、律令制の左右馬寮に属し、馬の調教・飼育・飼料の貢納などに従事し、調・雑徭が免除された。「職員令」左馬寮の条では、「頭一人、左ノ閑ノ馬ノ調習・養飼・供御ノ乗具、穀草ヲ配テ給ヒ、及飼部ノ戸口名籍ノ事ヲ掌ル。…馬部六十人。…飼丁。」といった記載がある。大化改新後は、左右馬寮にて、^{ざっこ}雑戸という呼称で呼ばれるようになった。

考古学的手法による研究では、古墳の外部施設として、馬形埴輪（飾り馬）の傍らに配列される人物埴輪を、従来「馬丁」・「馬子」・「駁者」・「馬飼」・「馬曳き」などの名称で呼んできた。本論では、文献史料の記述に従って「馬甘（飼）」と記す。戦前、相川達雄（相川達雄 1933）は、群馬県を中心とした関東地方北部から出土した人物埴輪の腰部付近に鎌の装着が認められることに着目し、その集成と特徴の整理を試みている⁽¹⁾。馬甘（飼）の人物埴輪に着目した初論考といえるが、その認識は農夫であって、馬甘（飼）ではなかった。戦前に比べて戦後の日本考古学では、数多くの遺跡発掘が行われ、その調査成果に基づいた実証主義的研究が発展し、自然科学などの分野からのアプローチも含めた遺構・遺物の分析についてもその多様化が進んだ。そのような過程で、5世紀後半～末頃に築造された3基の大型前方後円墳を主体とした関東地方の保渡田古墳群（群馬県高崎市）を構成する墳長96mの前方後円墳である保渡田八幡塚古墳の人物埴輪群の分析と解釈などを含めた水野正好「埴輪芸能論」（水野正好 1971）が発表された⁽²⁾。水野正好（水野正好 1971）は、人物埴輪群を豪族の政治機構・構造の集約と考えて、馬形埴輪（飾り馬）の傍らに置かれた人物埴輪を馬甘（飼）とし、豪族による職業集団である馬飼部の存在を指摘した⁽³⁾。続き、橋本博文（橋本博文 1980）は、関東地方の塚廻り古墳群（群馬県太田市）を中心とした埴輪配列の検討から、職業集団としての馬飼部の存在を述べている⁽⁴⁾。馬甘（飼）を対象とした考古学的アプローチは、藤川智之（藤川智之 1988）⁽⁵⁾、宮崎由利江（宮崎由利江 1990）⁽⁶⁾、大澤伸啓（大澤伸啓 1991）⁽⁷⁾、塚田良道（塚田良道 1992）⁽⁸⁾らによって進められてきた。藤川智之（藤川智之 1988）と宮崎由利江（宮崎由利江 1990）はともに、関東地方の5世紀末頃～7世紀にかけて造営された群集墳である酒巻古墳群（埼玉県行田市）を構成する6世紀末頃に築造された直径42mの円墳である酒巻14号墳出土の人物埴輪を中心に、検討を行っている。藤川智之（藤川智之 1988）は、職業集団を意味する「馬飼」よりも「馬曳き」という名称が適していることを提言する⁽⁹⁾。一方、宮崎由利江（宮崎由利江 1990）は、本来は別の機能を持って製作された人物埴輪が、馬甘（飼）の代役として配列されていることを述べ、人物埴輪配列の

中で馬甘(飼)が「代役に代わられても仕方のない程度」⁽¹⁰⁾という身分の低さであったことを提言する。また、大澤伸啓(大澤伸啓 1991)は、関東地方の6世紀代を中心に造営された群集墳である明神山古墳群(栃木県足利市)を構成する規模不明の円墳である明神山5号墳出土の人物埴輪の検討から、馬甘(飼)の人物埴輪の特徴として鎌の装着に注意し、馬の飼育道具に鎌が必需品であったことを指摘し、多数の鉄鎌が副葬されていた近畿地方の5世紀～6世紀にかけて造営された群集墳である石光山古墳群(奈良県御所市)を、倭王権の馬匹生産を担った「渡来系氏族の墓」であった可能性を指摘した⁽¹¹⁾。塚田良道(塚田良道 1992)は、馬甘(飼)は馬の「飼育係」だけではなく、貴人の従者として近侍・奉仕する性格があったことを述べている⁽¹²⁾。水野正好(水野正好 1971)や橋本博文(橋本博文 1980)の指摘した職業集団としての馬飼部、さらに大澤伸啓(大澤伸啓 1991)の大胆な指摘こそが、馬甘(飼)のもつ歴史的・文化的な特性と実態を追求するうえで、必要不可欠であるように思う。

さらに、古墳時代中期(5世紀)における馬匹生産の拠点である牧(放牧地)については、出土馬骨や馬の犠牲土壌などの検討から、集落を含めた実態の追究が行われてきた⁽¹³⁾。また、牧を媒介とした古墳時代の日本(以下、倭国と記す。)での騎馬文化受容の背景としては、高句麗の領土拡大(南下)といった軍事的圧力に対し、百済・加耶の援助による倭国の軍勢力強化の結果であるとの指摘がなされてきた⁽¹⁴⁾。朝鮮半島に所在する高句麗・百済・新羅の海東三国⁽¹⁵⁾の抗争に、倭国が深くかかわった結果、倭国での騎馬文化の発達に結びついたといえる。諫早直人(諫早直人 2012)は、東北アジア規模での馬具の詳細な検討を行い、倭国の軍備増強と直結する騎馬文化導入のメカニズムについて、倭王権の強い意志と朝鮮半島南部諸国の思惑が交錯する中で、日本にもたらされたことを指摘する⁽¹⁶⁾。最近では、近畿地方や北関東地方を中心とした馬(ウマ)に関連した集落などの調査例に基づいた馬の渡来や、馬と人間との関わりについての研究成果のとりまとめがなされている⁽¹⁷⁾。

本章では、考古資料を中心とした比較分析の一助とするために、馬甘(飼)及び馬飼部に関連した通説の根拠となっている代表的な古代日本の四つの文献史料を紹介したうえで、(1)馬甘(飼)人物埴輪、(2)装飾古墳に描かれた馬牽き人物図、(3)高句麗壁画古墳の馬牽き人物図、といった考古資料の比較検討を通じて、馬甘(飼)の歴史的・文化的な特性とその実態の検証を行いたい。

第2節 文献史料の紹介

[史料1] 『日本書紀』巻第9・仲哀天皇9年10月

因以叩頭之曰、從今以後、長与乾坤伏為飼部。其不乾船柁而春秋獻馬梳及馬鞭。

(因りて叩頭みて曰さく、今より以後、長く乾坤と与に伏ひて飼部と為らむ。其れ船柁を乾さずして、春秋に馬梳と馬鞭を献らむ。)

史料1は、神功皇后の新羅「征伐」を受けた際に、新羅王が降伏の証に述べた言葉である。新羅王は、降伏の意を倭国の馬飼部になるといった誓約で表している。具体的には馬の毛をくしけずる櫛や

馬を走らせるのに使う鞭を、春秋の年2回献上することを約束している。部民となることは服従を意味するが、部民の中からあえて馬飼部を選んだことは、特に注目できる。馬甘（飼）が主人に従属する代表的な存在だからこそ、この言葉に意味があると解釈できる。献上する品が、馬の櫛や鞭であることも注目すべき点で、新羅の方がその製造技術が進んでいたことが認識されていたからこそ、この約束に意味があったと理解できる。このことは、馬の飼育技術が朝鮮半島からの渡来であることを示唆するが、新羅からはあくまで道具しか送られてないので、その技術者集団は新羅からの渡来ではないと考えられる。

〔史料2〕『日本書紀』巻第10・応神天皇15年8月

十五年秋八月壬戌朔丁卯、百済王遣阿直岐，貢良馬二匹。即養於輕坂上厩。因以阿直岐令掌飼。故号其養馬之处曰厩坂也。

(十五年の秋八月の壬戌の朔にして丁卯に、百済王、阿直岐を遣して、良馬二匹を貢る。即ち輕の坂の上の厩に養はしむ。因りて、阿直岐を以ちて掌り飼はしむ。故、其の馬養ひし処を号けて厩坂と曰ふ。)

史料2は、百済王が倭国に阿直岐を派遣するとともに、馬二頭を献上したという記述である。二頭は雄雌と考えられ、倭国内で馬の繁殖が試みられたことが理解できる。この馬の飼育・繁殖は阿直岐に任されたことになっているが、阿直岐の「岐」が首長を意味するとの指摘がされているように、彼個人が担当したというより、彼とともに渡来した集団が担当したと考えるべきである。したがって、この記述は、馬の飼育・繁殖という一連の馬匹生産技術を持った集団が、朝鮮半島の百済から渡来したことを示唆する。

〔史料3〕『日本書紀』巻第12・履中天皇5年9月条

秋九月乙酉朔壬寅，天皇狩于淡路嶋。是日河内飼部等從駕執轡。先是飼部之黥皆未差。時居嶋伊奘諾神，託祝曰，不堪血臭矣。因以卜之。兆云，惡飼部等黥之氣。故自是後，頓絕以不黥飼部而止之。

(秋九月の乙酉の朔にして壬寅に、天皇、淡路島に狩したまふ。この日に、河内の飼部等、從駕につかへまつり、轡を執れり。是より先に、飼部の黥、皆未だ差えず。時に島に居します伊奘諾神、祝に託りて曰はく、「血の臭きに堪へず」とのたまふ。因りて卜ふ。兆に云はく、「飼部等が黥の氣を惡む」といふ。故、是より後、頓絶に飼部を黥せずして止む。)

史料3は、履中天皇の狩猟に河内（現在の大阪府東南部）の馬飼部がお供したときに、馬甘（飼）の目の入れ墨が完治していなかったため、血の臭気が漂ったと記述されている。この臭気は、狩猟の場所であった淡路島の伊奘諾神によって「血の臭気が耐えられない」と神託が下され、卜兆でも「馬飼部の入れ墨の臭気を嫌う」と出ていることから考えて、動物を狩る狩猟の大きな妨げとなったと思われる。そこで、馬飼部の入れ墨自体が廃止されたというのである。このことは、馬飼部はもともと入れ墨をしていたこと、そしてそれが後に止められたことを意味しており、この点が注目すべきであ

る。

〔史料4〕『日本書紀』卷第17・継体天皇元年正月

丙寅，遣臣・連等，持節以備法駕，奉迎三国。夾衛兵仗，肅整容儀，警蹕前駟，庵然而至。於是男大迹天皇晏然自若，踞坐胡床。齊列陪臣，既如帝坐。持節使等由是敬憚，傾心委命，冀尽忠誠。然天皇意裏尚疑，久而不就。適知河内馬飼首荒籠，密奉遣使，具述大臣・大連等所以奉迎本意。留二日三夜遂發，乃喟然而歎曰，懿哉，馬飼首。汝若無遣使來告，殆取蚩於天下。世云，勿論貴賤。但重其心，蓋荒籠之謂乎。及至踐祚，厚加荒籠寵待。甲申，天皇行至樟葉宮。

(丙寅に、臣・連等を遣して、節を持ちて法駕を備へ、三国に奉迎る。兵仗を夾衛し、容儀を肅整して、前駟を警蹕し、奄然にして至る。是に男大迹天皇、晏然自若にして、胡床に踞坐す。陪臣を齊列ね、既に帝のごとく坐します。節を持つ使等、是によりて敬憚り、心を傾け命を委せて、忠誠を尽さむことを冀ふ。然るを天皇、意裏に尚し疑はして、久しく就きたまはず。適知れる河内馬飼首荒籠、密に使を奉遣り、具に大臣・大連等が奉迎る所以の本意を述べまをさしむ。留ること二日か三夜にして遂に發たし、乃ち喟然而歎きて曰はく、「懿きかも、馬飼首。汝若し使を遣して来り告ぐる事無からましかば、殆に天下に取蚩なまし。世の云へらく、『貴と賤とを論ふこと勿れ。但し、其の心のみ重みすべし』といへるは、蓋し荒籠が謂か」とのたまふ。踐祚すに及至りて、厚く荒籠に寵待を加へたまふ。甲申、天皇、樟葉宮に行至りたまふ。)

史料4は、継体天皇即位に際しての記述で、これによれば、継体天皇は即位以前より河内馬飼首荒籠と旧知の關係にあり、その情報を得て継体天皇は即位を決意したことになる。荒籠は首姓をもつから馬飼部集団の統率者であり、中下級豪族であったとみられる。継体天皇の言によれば「賤」として扱われており、従来朝廷では低い身分のものとして扱われたことがわかる。継体天皇は踐祚後に彼を特別に待遇したというのが、継体天皇が即位したのが河内の「樟葉宮」（伝承地は現在の大阪府

牧方市）であったことは、河内の馬飼部が継体天皇を支える有力勢力だったことを示している。その後「馬飼首」は、史書にしばしば現れるようになる。さらに、卷第29・天武12(683)年9月条に「川内馬飼造」、10月条に「^{かふちのうまかひのみやつこ}娑羅々馬飼造・^{うのうまかひのみやつこ}菟野馬飼造」、朱鳥元(686)年9月条に「^{かふちのうまかひのみやつこ}河内の馬飼部造」といった記述もあって、河内に馬飼部集団が多く存在していたことがわかる。



2—図1 部屋北遺跡S K 940 出土馬骨

以上の記述から通説となるが、朝鮮半島から馬と馬具・馬の飼育方法、飼育者として馬甘（飼）の渡来があったことが推定できる。律令国家成立以前の日本では、倭王権への服従と奉仕及び職能に応じた制度である部が組織化され、身分制度の機能も果たしていた。史料3の記述からは、入れ墨を施していた身分層⁽¹⁸⁾であったことも想像でき、史料4からはその統率者も首姓で、朝廷ではもともと「賤」とみられる低い身分の存在であったと理解できるが、継体天皇の即位後は地位が上昇したとみられる。

さらに、馬飼部が多くいた河内には淀川や大和川の氾濫原があり、馬の飼養・飼育に適した土地があったことが想像できる。近畿地方の大阪府四條畷市では、葺屋北遺跡からは5世紀代のウマ全身骨格を伴う土壙（SK940・2-図1）⁽¹⁹⁾、中野遺跡からはウマの骨とともに5世紀中頃の土器が出土しており⁽²⁰⁾、これらの裏付け資料となっている。

第3節 形象埴輪と壁画資料の検討

（1）馬甘（飼）人物埴輪

古墳時代後期（6世紀）に入ると、近畿地方よりも関東地方を中心に古墳の外部施設として人物・動物埴輪を含めた形象埴輪群の樹立が最盛期を迎える。関東地方では、前方後円墳に限らず群集墳を構成する円墳を含めた数多くの古墳で埴輪が樹立され、6世紀後半になると横穴式石室の開口部を起点に人物・動物埴輪が墳丘を巡って列状に配列されるようになる。正装した貴人や巫女・武人に続いて、馬甘（飼）が飾り馬を牽いて首長の葬儀に参列する姿は、古代日本の葬送儀礼であるモガリを表現しているという考え方もある。

馬甘（飼）人物埴輪は、他の人物埴輪と同様にその大半は上半身や下半身などを欠損しており、全体像の把握できる資料は予想よりも意外と少なかった。本論では、全体像が把握でき、実見することが可能であった資料（2-図2～4）を中心に検討を試みた。古墳の築造時期及び埴輪形を考慮して分類した上で、その特徴を整理すると次のようになる（2-表1）。

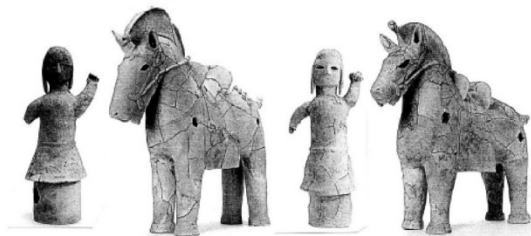
I期（6世紀初頭～中頃）

【前方後円墳】

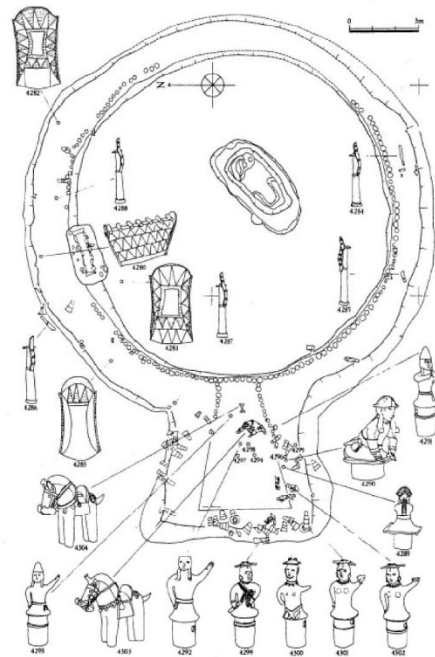
北陸地方の推定全長30mの前方後円墳である矢田野エジリ古墳（石川県小松市）では、前方部周溝に崩落した状態で見つかった馬形埴輪（飾り馬）に騎乗する貴人2体のほかに、馬甘（飼）人物埴輪と馬形埴輪（飾り馬）2組がある。馬甘（飼）人物埴輪は、いずれも男子半身立像で、右手を挙げて左手を下げ、手の指が表現される。髪は左右に振り分けあるいは剃っている。双方ともに口（顔面）に特色が見られる。1体（人物8：以下、馬甘（飼）人物埴輪の説明の際の（ ）内には報告書等の掲載文献での名称を記す。）は上唇中央部に縦の切り込みによる兎唇で、もう1体（人物9）には、唇から放射状に口髭状の線刻（入れ墨・2-図5）と胸にヘラ描き「〇〇」、頭部側面には中央部に穴をあけたボタン状の貼り付け（耳）が見られる⁽²¹⁾。



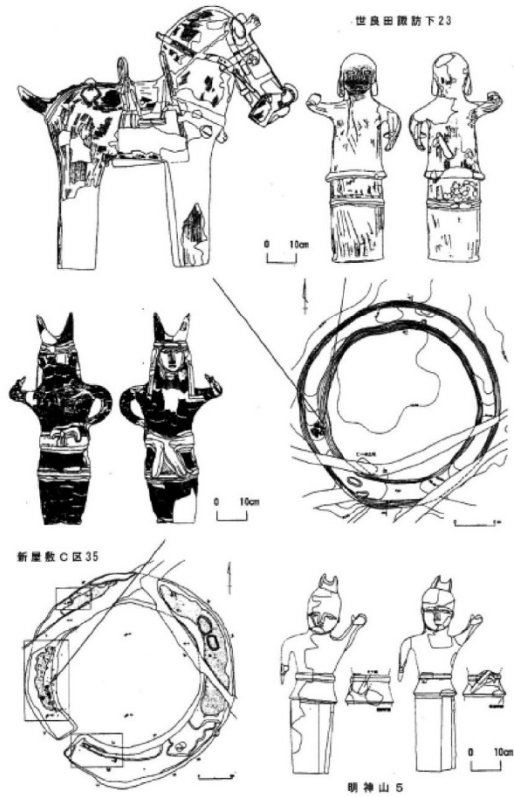
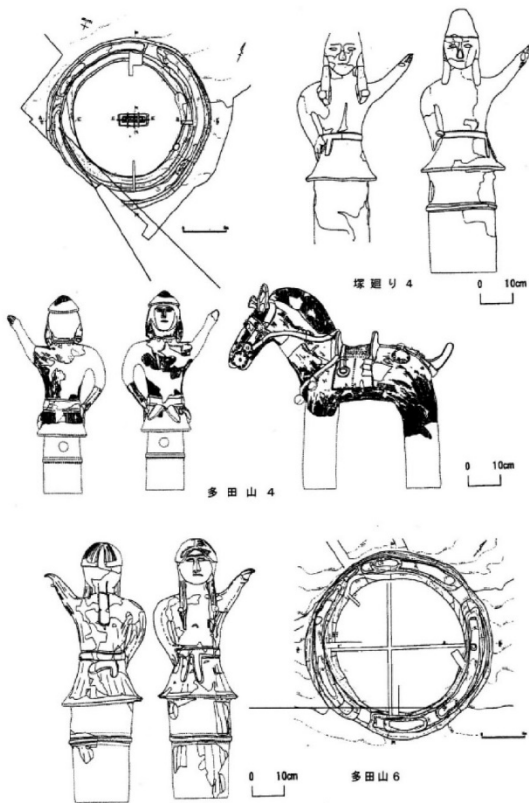
矢田野エジリ・右の馬飼人物埴輪高さ62cm



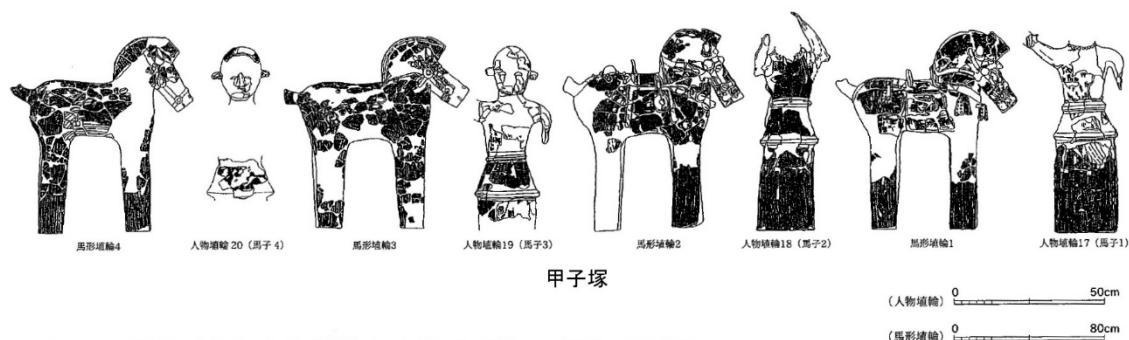
笹鉾山2・右の馬飼人物埴輪高さ58.8cm



塚廻り4・形象埴輪群の配列



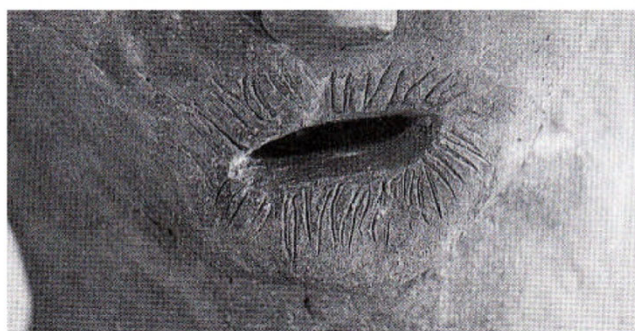
2-図2 馬甘(飼)人物埴輪と古墳配列状況(1) [I~II期]



2-図4 馬甘(飼)人物埴輪と古墳配列状況(3) [Ⅱ期]

【帆立貝式古墳】

関東地方の塚廻り古墳群(群馬県太田市)を構成する全長29.5mの帆立貝式古墳である塚廻り4号墳では、前方部(造り出し部)にて、直列する馬甘(飼)人物埴輪と馬形埴輪(飾り馬)2組がある。



1-図5 矢田野エジリ古墳馬甘(飼)人物埴輪の口髭状線刻

馬甘(飼)人物埴輪は、いずれも男子半身立像で、左手を挙げて右手を腰にあてる姿勢で、手の指まで丁寧に表現されている。1体(人物5)は、美豆良を結って、帽子を被り、腰帯を巻いている。顔面の頬付近に赤彩色の化粧が施されている。1体(人物4)は、美豆良の飾紐も赤彩によって表現されている⁽²²⁾。

【円墳】

近畿地方の笹鉾山古墳群(奈良県田原本町)を構成する直径22mの円墳である笹鉾山2号墳では、周溝に崩落した状態で出土した馬甘(飼)人物埴輪と馬形埴輪(飾り馬)2組がある。馬甘(飼)人物埴輪は、いずれも男子半身立像で、左手を挙げて右手を下げ、手の指が表現され、美豆良を結び、髪の毛が表現され、被り物はない。1体(1号人物)はその顔面に特徴が見られる。鼻が高く鼻穴も表現され、鼻上



2-図6 笹鉾山2号墳馬甘(飼)人物埴輪の髭状線刻

2－表1 馬甘(飼)人物埴輪の特徴集成

時期	埴形	古墳名(報告No.)	特徴							主要文献
			左手	右手	頭髪	被りもの	装身具	腰帯装着	顔面	
I	前方後円	矢田野エジリ古墳(人物8)	下げる	挙げる					兎唇	樫田誠1992
		矢田野エジリ古墳(人物9)	下げる	挙げる					髭状入墨	
	帆立貝	塚廻り4号墳(人物4)	挙げる	腰	美豆良				赤彩化粧	石塚久則ほか1980
		塚廻り4号墳(人物5)	挙げる	腰	美豆良	帽子			赤彩化粧	
	円	笹鉢山2号墳(1号人物)	挙げる	下げる	美豆良				髭状入墨	藤田三郎ほか2005
		笹鉢山2号墳(2号人物)	挙げる	下げる	美豆良			鎌		
		新屋敷C区35号墳	挙げる	腰	美豆良	双又帽		鎌		金子直行ほか1996
		多田山4号墳	挙げる	腰	美豆良	菅笠		鎌		深澤敦仁ほか2004
		多田山6号墳	挙げる	腰	美豆良			鎌		
		世良田諏訪下23号墳	下げる	挙げる	美豆良			鎌	赤彩化粧	三浦京子ほか1998
		杉崎コロニー88号墳	挙げる	下げる					赤彩化粧	井博幸ほか1980
		下桑島西原2号墳	挙げる	下げる		鉢巻き	(乳房)			梁木誠・今平利幸1992
II	前方後円	綿貫観音山古墳	挙げる	胸	美豆良	帽子	首飾り・耳環	鎌	赤彩化粧	徳江秀夫ほか1998
		小泉大塚越3号墳	挙げる	胸	美豆良	帽子	首飾り	鎌		宮塚義人ほか1993
		姫塚古墳	挙げる	下げる		菅笠	首飾り	鎌		亀井正道1995
		野原古墳	下げる	挙げる	美豆良			鎌		東京国立博物館1986
	帆立貝	甲子塚古墳(人物17)	下げる	挙げる			首飾り	鎌		木村友則ほか2014
		甲子塚古墳(人物18)	挙げる	挙げる			首飾り	鎌		
		甲子塚古墳(人物19)	下げる	挙げる	美豆良			鎌	赤彩化粧	
		甲子塚古墳(人物20)			美豆良					
	円	諏訪ノ木古墳(人物113)	下げる	挙げる	美豆良	鉢巻き	首飾り			田村誠ほか1994
		諏訪ノ木古墳(人物114)	下げる	挙げる	美豆良		首飾り			
		明神山5号墳(人物A)	挙げる	下げる		双又帽		鎌		大澤伸啓1991
		明神山5号墳(人物B)	挙げる	下げる		双又帽		鎌		
		中原Ⅱ遺跡1号墳(人物115)	下げる	下げる	美豆良	菅笠		鎌		入澤雪江2004
		中原Ⅱ遺跡1号墳(人物116)	腰	腰	美豆良	帽子	首飾り		赤彩化粧	
III	円	酒巻14号墳(人物No.1)			美豆良			鎌		中島洋一ほか1988
		酒巻14号墳(人物No.2)	下げる	挙げる		双又帽		鎌		
		酒巻14号墳(人物No.3)	下げる	挙げる						
		酒巻14号墳(人物No.4)	下げる	下げる						

に翼状、目尻から頬と顎にかけて髭状の入れ墨と思われる線刻が施される(2-図6)。もう1体(2号人物)には入れ墨の表現はないが、頭部がやや角張り、頭頂部に穴があき、背面下部に鎌が装着されている⁽²³⁾。

関東地方の新屋敷古墳群(埼玉県鴻巣市)を構成する直径18.8mの円墳である新屋敷C区35号墳では、周溝に崩落した状態で出土した馬甘(飼)人物埴輪1体がある。馬甘(飼)人物埴輪は、男子半身立像で、左手を挙げて右手を腰に当てる姿勢をとり、手の指も表現される。美豆良を結び、二又の被り物を被り、正面左よりに結んだ腰帯の背面上部に鎌を装着する。美豆良には赤彩色の飾紐の表現が見られる⁽²⁴⁾。

関東地方の多田山古墳群(群馬県伊勢崎市)を構成する直径15.5mの円墳である多田山4号墳では、周溝に崩落した状態で出土した馬甘(飼)人物埴輪と馬形埴輪(飾り馬)1組がある。馬甘(飼)人物埴輪は、男子半身立像で、左手を挙げて右手を腰に当てる姿勢をとり、手の指も表現されている。菅笠を被り、美豆良を結び、首飾りも巻いている。正面で結んだ腰帯の左下に鞘に収めた刀を持っており、背面の腰紐に剥落痕があることから、鎌の装着が想像できる⁽²⁵⁾。

さらに、同じく多田山古墳群を構成する直径16mの円墳である多田山6号墳でも、周溝出土の馬甘(飼)人物埴輪と馬形埴輪(飾り馬)1組がある。馬甘(飼)人物埴輪は、男子半身立像で、振り分け髪で美豆良を結び、左手を挙げて右手を腰に当てる姿勢をとり、手の指も表現されている。正面左よりに結んだ腰帯の背面下部には鎌が装着されている⁽²⁶⁾。

I期(6世紀初頭～前半)に提示する最後の資料として、関東地方の世良田諏訪下古墳群(群馬県太田市)を構成する直径15.5mの円墳である世良田諏訪下23号墳を見ておきたい。世良田諏訪下23号墳では、周溝に崩落した状態で出土した馬甘(飼)人物埴輪1体と馬形埴輪(飾り馬)2体がある。馬甘(飼)人物埴輪は、男子半身立像で、右手を挙げて、挙げた手に丸い棒状のものを握っており、左腕は軽く曲げて下に下げる姿勢をとる。美豆良を結び、顔面のほぼ全体に赤彩色の化粧が施されている。背面の左よりに鎌が装着されている⁽²⁷⁾。

II期(6世紀後半)

【前方後円墳】

関東地方の墳長97mの前方後円墳である綿貫観音山古墳(群馬県高崎市)では、前方部前面の中段面にて、馬甘(飼)人物埴輪と馬形埴輪(飾り馬)1組が確認されている。馬甘(飼)人物埴輪は、男子半身立像で、左手を挙げて右手を胸に当てる姿勢をとり、美豆良を結び、背面から側面にかけての頭部中位にある帯状赤彩から被り物を被り、美豆良の下には欠損しているが耳環が付けられていたと想像できる。首飾りと胴部には腰帯を巻き、背面腰帯には鎌が装着されている。頭部中位の帯状赤彩のほか、美豆良の飾紐が赤彩によって表現されている。目元から首にかけて赤彩色の化粧が施されている⁽²⁸⁾。

同じく関東地方の墳長45mの前方後円墳である小泉大塚越3号墳(群馬県玉村町)では、前方部前

面の中段面にて、馬甘（飼）人物埴輪と馬形埴輪（飾り馬）1組が確認されている。馬甘（飼）人物埴輪は、男子半身立像で、左手を挙げて右手を胸に当てる姿勢をとり、美豆良を結って、帽子を被り、首飾りを巻いている。左側の側面下方には鎌の装着が認められる⁽²⁹⁾。

【帆立貝式古墳】

関東地方の推定全長91mの帆立貝式古墳である甲塚古墳（栃木県下野市）では、基壇上のテラス面において直列する馬甘（飼）人物埴輪と馬形埴輪（飾り馬）4組がある。馬甘（飼）人物埴輪は、推定も含めていずれも男子半身立像である。先頭（人物17・馬子1）と3体目（人物19・馬子3）は、右手を挙げて左手を下げる姿勢、2体目（人物18・馬子2）は、肘を折って両手を挙げるが左手をより高く上げる姿勢をとる。4体目（人物20・馬子4）は、頭部と腰付近の破片で、美豆良を結うが、姿勢などの詳細は不明である。先頭と2体目は頭部を欠損するが、首に首飾りを付けている。2体目のみ全ての指が表現されるが、先頭と3体目は親指のみの表現である。3体目は美豆良を結び、顔面の眉と右頬付近に赤彩が見られる。先頭と2体目・3体目の背面腰には、鎌の装着が認められる⁽³⁰⁾。

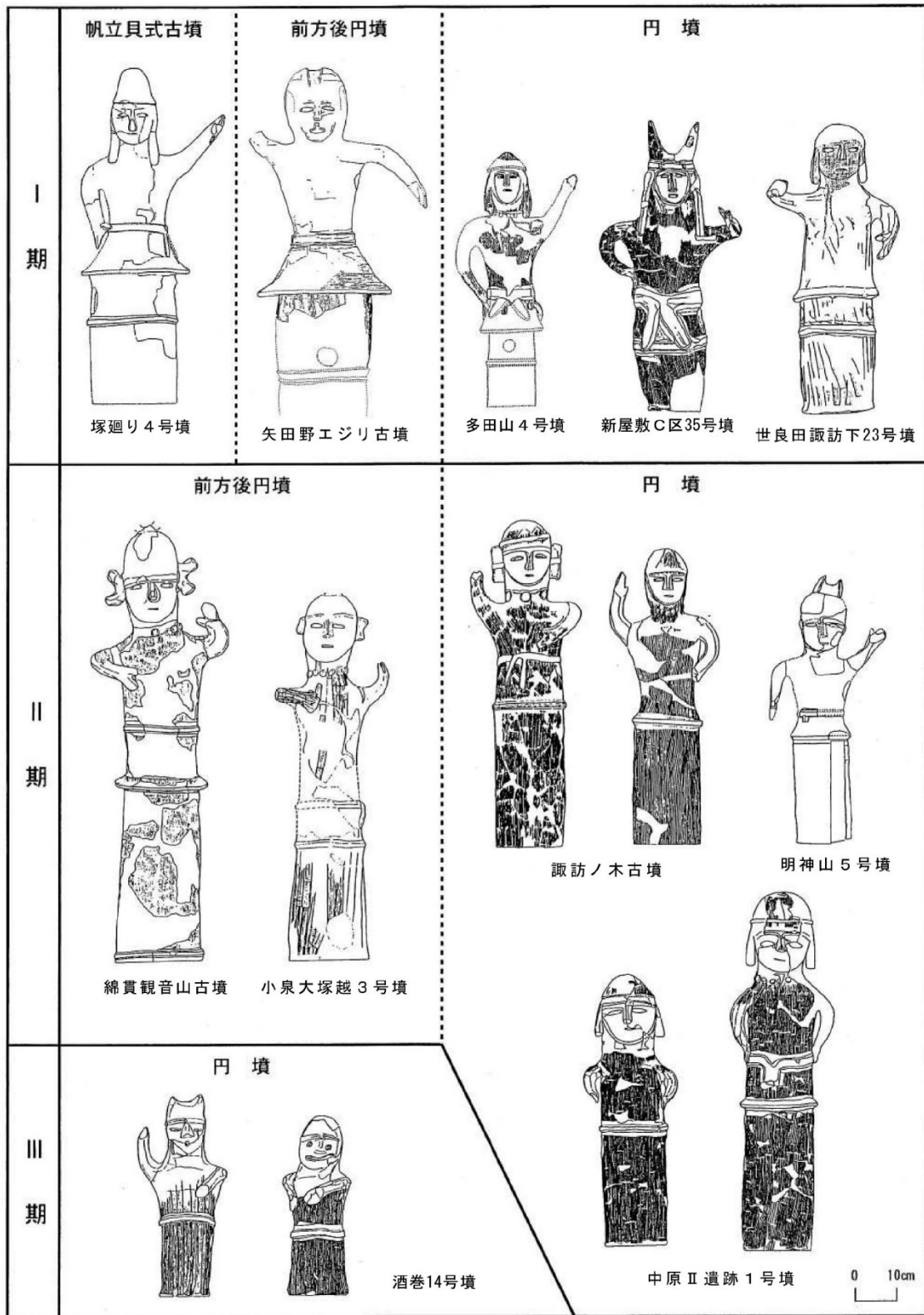
【円墳】

関東地方の青柳古墳群元阿保支群（埼玉県神川町）を構成する直径14mの円墳である諏訪ノ木古墳では、横穴式石室の開口部左側を起点に配列する埴輪列の後列にて直列する馬甘（飼）人物埴輪と馬形埴輪（飾り馬）2組がある。馬甘（飼）人物埴輪は、男子半身立像で、いずれも右手を挙げて、左手を下げる。先頭の馬甘（飼）人物埴輪（人物113・男子馬飼人）は、美豆良を結って、頭部に鉢巻状の紐を巡らせて後頭部で結び、正面の左よりに結んだ腰帯と首飾りを巻いている。腰帯下の正面から側面にかけて、着物の模様と想像される鋸歯文が施される。後方の馬甘（飼）人物埴輪（人物114・男子馬飼人）は、本来は美豆良を結っていたものが剥落しており、首飾りのみを巻く非常に簡素な作りである⁽³¹⁾。

関東地方の明神山古墳群（栃木県足利市）を構成する規模不明の円墳である明神山5号墳では、横穴式石室の開口部右側の位置から、馬甘（飼）人物埴輪と馬形埴輪（飾り馬）2組が見つかった。馬甘（飼）人物埴輪は、男子半身立像で、いずれも（人物A・B）二又の被り物を被り、左手を挙げて右手を下げる姿勢をとり、腰帯の背面に鎌を装着する⁽³²⁾。

関東地方の直径22mの円墳である中原Ⅱ遺跡1号墳（群馬県高崎市）では、横穴式石室の開口部左側を起点として配列する埴輪列の後列にて、直列する馬甘（飼）人物埴輪と馬形埴輪（飾り馬）2組がある。馬甘（飼）人物埴輪は、男子半身立像で、先頭の馬甘（飼）人物埴輪（人物115・馬子）は、両手を下げた姿勢をとり、美豆良を結って、菅笠状の被り物を被り、背面に大きな鎌を装着する。後方の馬甘（飼）人物埴輪（人物116・馬子）は、両手を下げて腰に当てる姿勢をとり、美豆良を結び、頭部には帽子の表現と想像される鉢巻状の紐が巡り、正面の左よりに結んだ腰帯と首飾りを巻いている。顔面眉から鼻尻、目尻にかけて赤彩色の化粧が施されている⁽³³⁾。

Ⅲ期（6世紀末頃）



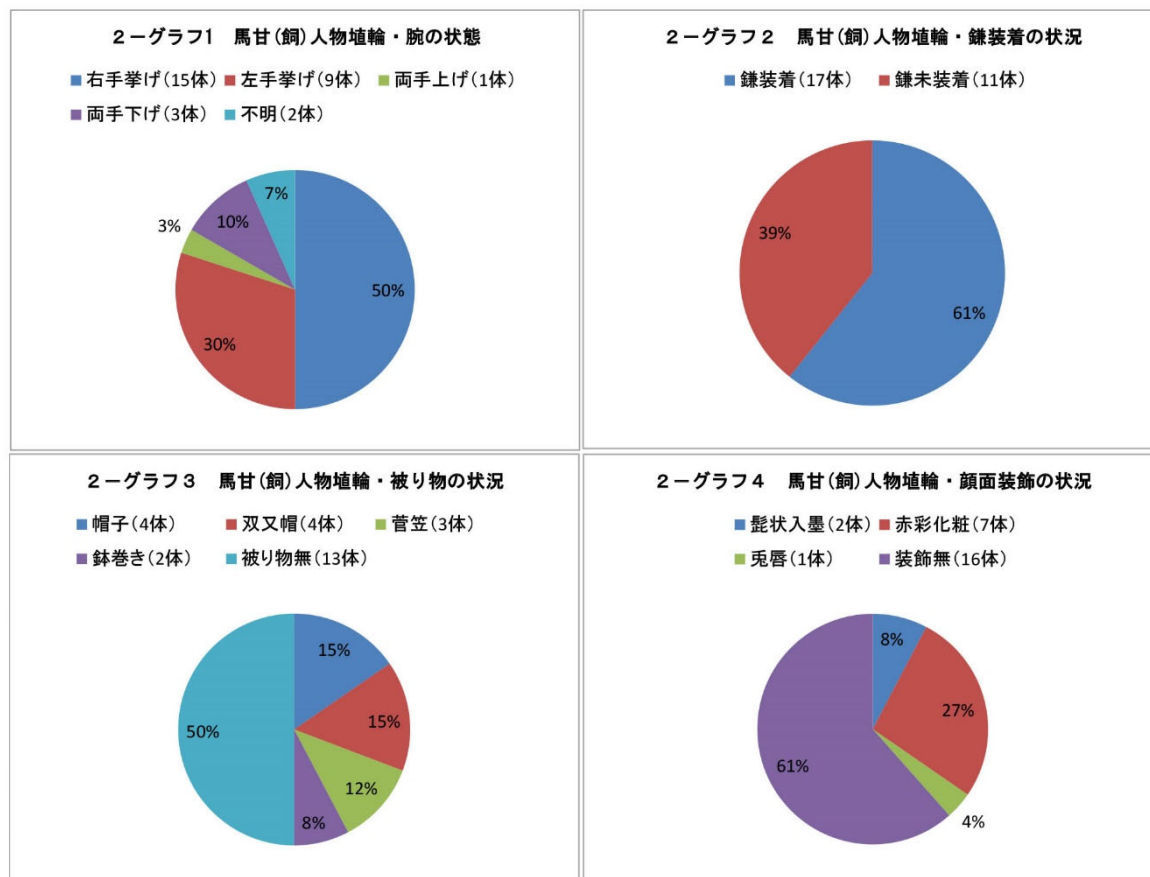
2-図7 馬甘(飼)人物埴輪の変遷〔時期区分〕と特徴

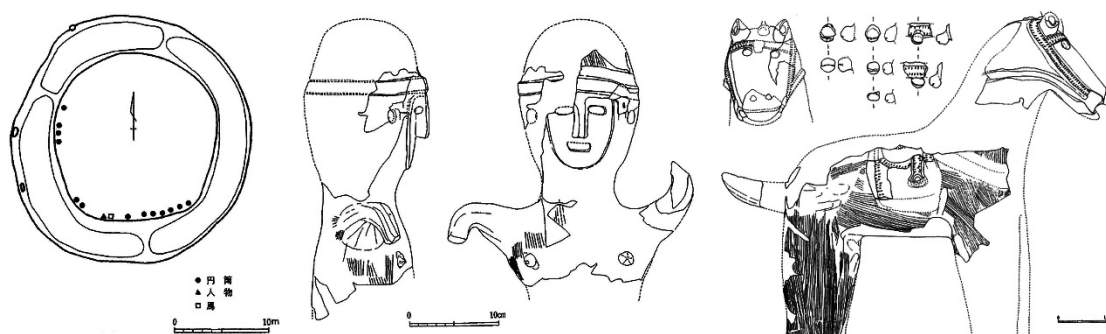
【円墳】

関東地方の酒巻古墳群（埼玉県行田市）を構成する直径 42mの円墳である酒巻 14 号墳では、馬甘（飼）人物埴輪と馬形埴輪（飾り馬）4 組がある。先頭の馬甘（飼）人物埴輪（人物No.1）は、胴部を欠損するが振り分け髪で、腰帯下に大きな鎌を装着する。2 体目の馬甘（飼）人物埴輪（人物No.2）は、右手を挙げて左手を下げる姿勢をとり、二又の被り物を被っている。3 体目の馬甘（飼）人物埴輪（人物No.3）は、全体的に剥落と欠損箇所が多いが、右手を挙げて左手を下げる。最も東寄りの位置から見つかった 4 体目の馬甘（飼）人物埴輪（人物No.4）は、両手を右下に下げる姿勢をとる。後方 2 体の馬甘（飼）人物埴輪（人物No.3・4）は、いずれも非常に簡素で簡略化されている⁽³⁴⁾。

以上に基づき、次のとおり馬甘（飼）人物埴輪の特徴を整理する（2－図 7）。

- (1) I 期～Ⅲ期（出現から終焉）に至る各時期を通じて、馬甘（飼）飼は男子半身立像である。
- (2) I 期～Ⅲ期（出現から終焉）に至る各時期を通じて、右手又は左手の一方を挙げた姿勢をとり、被り物（菅笠帽子など）を被る場合が多い。
- (3) I 期～Ⅱ期（出現から 6 世紀後半）まで、背面（側面の場合もある。）の腰帯付近に鎌を装着し、顔面に線刻による入れ墨又は赤彩化粧を施す場合がある。
- (4) Ⅱ期（6 世紀後半）以降、両手を下げる姿勢のものが出現する。





2-図8 下桑島西原2号墳馬甘(飼)人物埴輪と古墳配列

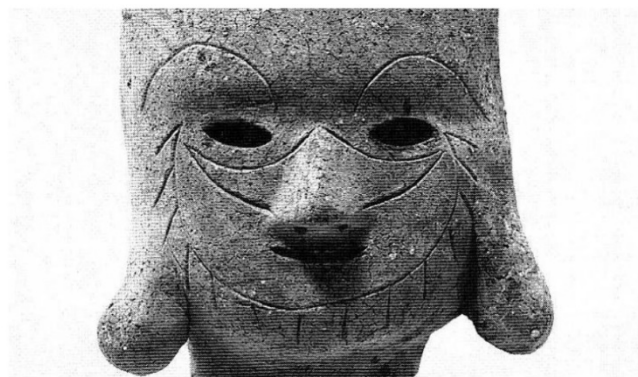
馬甘(飼)人物埴輪はあくまで傾向ではあるが、ここで検討した資料では後述する1点を除き全てが男子半身立像で、約83%が右手又は左手を挙げる姿勢をとり、約61%が鎌を装着する。また、約5割(約50%)が帽子などの被り物を被っており、顔面装飾は約39%に認められた(2-グラフ1~4)。この特徴からは、馬甘(飼)が専ら男性の職業であること、屋外での作業が中心で、飼育・調教した馬を牽く姿が最もその特色を表したものであること、馬の飼育道具として鎌が必需品であったことが推定できる。

馬甘(飼)が男性であることに疑いの余地はないと思うが、関東地方の下桑島西原古墳群(栃木県宇都宮市)を構成する6世紀中頃に築造された直径20.5mの円墳である下桑島西原2号墳から出土した馬甘(飼)人物埴輪に、乳房の表現が見られることから、男装の女子像⁽³⁵⁾あるいは被葬者を表した女子像⁽³⁶⁾であるとの見方が示されている。この馬甘(飼)人物埴輪は、頭部上半及び胴部下半から下を欠損しており、全体像は不明であるが、左手を挙げて右手を下げる姿勢をとり、頭部には鉢巻状に突帯が巡っている⁽³⁷⁾。美豆良があったかどうかは不明で、頭頂部は欠落しており、女性特有の島田髷があったかどうかはわからないが、稀有な存在であることは確かである(2-図8)。

一方、化粧については、葬送儀礼行為の一貫としても考えられるため、馬甘(飼)がもつ特色としては除外しておいてもよいとも思われるが、顔面に入れ墨などの見目で判断できる特色を有していたことも十分に考えられる。鎌(馬鎌)は、現在でも馬の蹄の管理のため、飼育の必需品となっている。

また、実見できていないため、本章での検討対象の資料とはしなかったが、馬甘(飼)人物埴輪としては、関東地方の芝山古墳群(千葉県横芝光町)を構成する6世紀後半に築造された全長58.5mの前方後円墳である姫塚古墳に、左手を挙げて菅笠を被り、背面腰部に鎌を装着する男子半身立像がある⁽³⁸⁾。関東地方の杉崎コロニー古墳群(茨城県水戸市)を構成する6世紀前半~中頃に築造された直径19.5mの円墳である杉崎88号墳にも、同様のポーズ(姿勢)で顔面に赤彩化粧が施された男子半身立像があり、馬甘(飼)と想定される⁽³⁹⁾。さらに、関東地方の野原古墳群(埼玉県熊谷市)を

構成する6世紀後半に築造された全長40mの前方後円墳である野原古墳から出土した有名な「踊る埴輪」も、左手を挙げて右手を下げる姿勢で、美豆良を結う1体の背面腰部には鎌が装着されている⁽⁴⁰⁾。同じく埼玉県熊谷市南河原出土の人物埴輪も、同ポーズ（姿勢）で背面に鎌を装着され⁽⁴¹⁾、群馬県伊勢崎市下舐町出土の人物埴輪では、右手を挙げて左手を正面帯にあてる姿勢で、背面に鎌が装着されている⁽⁴²⁾。



2－図9 石見遺跡第2次調査人物埴輪の
髭状線刻

笹鉾山2号墳に見られる顔面入れ墨の表現については、近畿地方の石見遺跡（奈良県三宅町）や半堂遺跡（大阪府東大阪市）の人物埴輪に共通性を見つけ出すことができる（2－図9）⁽⁴³⁾。

馬甘（飼）人物埴輪の特徴・特色については、古墳時代における倭王権の本拠地であった近畿地方と、遠方の北陸地方や関東地方などの地域を問わずして、各地においてほぼ同様な存在（地位などの位置付け）であったことが推定でき、倭王権による列島規模での部を媒介とした身分社会の徹底と秩序の維持が成されていたことが理解できる⁽⁴⁴⁾。

（2）装飾古墳の馬牽き人物図

九州地方の6世紀前半に築造された全長約86mの前方後円墳である王塚古墳（福岡県桂川町）、6世紀後半に築造された直径18mの円墳である竹原古墳（福岡県宮若市）などの石室を彩る装飾図の一部に、馬と馬を牽く人物図を見ることができる⁽⁴⁵⁾。また、装飾古墳における馬図及び騎馬図については、九州地方の6世紀後半に築造された直径約15mの円墳である弁慶ケ穴古墳（熊本県山鹿市）、土器田横穴墓群（宮崎県宮崎市）を構成する6世紀末頃～7世紀初頭に造営された土器田東1号横穴墓や、近畿地方の高井田横穴墓群第2支群（大阪府柏原市）を構成する6世紀後半に造営された高井田2－3号横穴墓などの壁画資料が知られている（2－図10）⁽⁴⁶⁾が、馬の手綱を牽く人物が描かれたものは少ない。

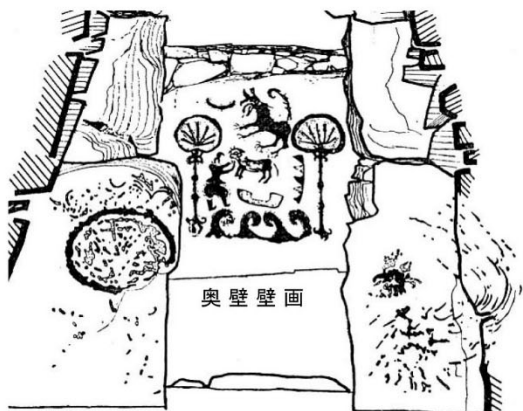
日本の装飾古墳の代表ともいえるべき王塚古墳では、全長6.75mの複室構造の横穴式石室のほぼ全面に赤彩が施され、同心円文・連続三角文・蕨手文・双脚輪状文のほか、武器・武具（靱・盾）などが五色（赤・黒・黄・緑・白）の色彩によって色鮮やかに描かれている。前室の後壁を兼ねた左右の壁面には、黒と赤の騎馬が上下にわたって描かれ、周囲を蕨手文・双脚輪状文で埋め尽くしている。一番上の騎馬だけに手綱を牽く人物が描かれるが、馬に比べて人物図が簡略的で小さく描かれているのが特徴であるため、手綱を牽く人物の特色を把握することができない（2－図11）。



2-図10 高井田2-3号横穴墓の騎馬人物図



2-図11 王塚古墳の騎馬人物と手綱を牽く人物図



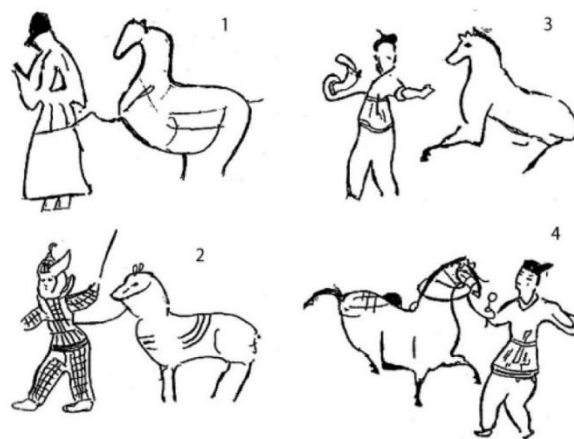
前室後壁：玄武

前室後壁：朱雀

2-図12 竹原古墳の壁面構成と馬を牽く人物図



2-図13 清戸迫76号横穴墓の騎馬図と人物図



1 梅山里古墳 2 通溝12号墳 3・4 徳興里古墳

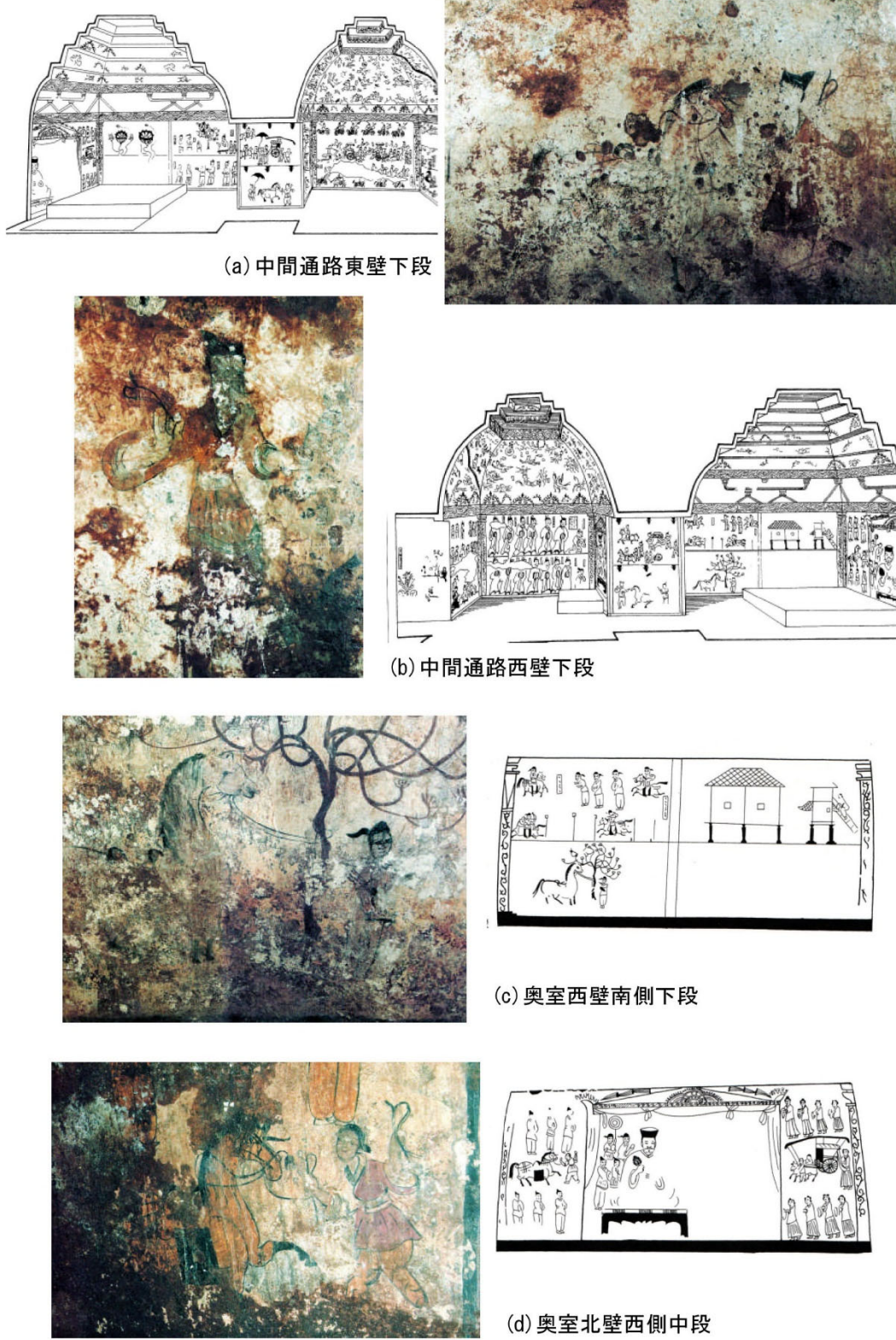
2-図14 高句麗壁画古墳の馬手綱を牽く人物図

一方、竹原古墳では、後室の奥壁と前室の後壁を兼ねた左右の石に赤と黒の二色で壁画が描かれる。後室の奥壁をキャンバスとして描かれた壁画は、左右両端に翳、下端に波形文を配置し、馬に似た怪獣、その下に馬を牽く人物、その下に船、怪獣の左横に小舟、右下に旗らしきものが描かれている。玄室を別ける左右の石には朱雀と玄武らしき図が描かれていることから、奥壁に描かれた怪獣を青龍と考えると、四神図が描かれていることが理解でき、築造時期と考え併せて、高句麗壁画古墳の影響とも考えられている（2-図12）⁽⁴⁷⁾。竹原古墳で奥壁のほぼ中心に描かれた馬の手綱を牽く人物の容姿は、冠帽に美豆良、胴を絞った衣と膝の下を絞った袴、履先は細くはね上がっている。類似する人物図については、東北地方の清戸迫横穴墓群（福島県双葉町）を構成する7世紀前半に造営された清戸迫76号横穴墓の壁画資料で見ることができる（2-図13）。清戸迫76号横穴墓では、小さく描かれた騎馬を従えるようにその横に、冠帽又は兜に美豆良、膝の下を絞った袴、履をはく人物図が描かれている⁽⁴⁸⁾。その容姿については、竹原古墳の奥壁で描かれた人物図と、共通性があるといえよう。

（3）高句麗壁画古墳の馬牽き人物図

高句麗壁画古墳では、集安の4世紀後半に築造された規模墳形不明の通溝12号墳（中国吉林省集安市）、平壤周辺の永楽18（408）年墓誌銘のある規模不明の方台形墳である徳興里古墳（北朝鮮平安南道南浦市）、5世紀末頃～6世紀初頭に築造された規模不明の円形墳である梅山里四神塚（別称：狩獵塚・北朝鮮平安南道龍岡郡）で、馬を牽く人物図が描かれている（2-図14）。通溝12号墳では、戦場において甲冑を身につけた兵士が右手で剣を振りかざしながら、甲冑を身に着けたまま前方に倒れ込んだ兵士を斬首する際に、剣を振りかざす兵士の腰の付近から背後にいる馬を牽くための手綱が描かれている⁽⁴⁹⁾。

次に、徳興里古墳の内容を見ていきたい。徳興里古墳は、6世紀末頃～7世紀初頭に築造された一辺51mの方台形墳である江西大墓（北朝鮮平安南道南浦市）の東2km、大同江の右岸地域（南浦市江西区域）に位置する。墳形は方台形で、石室は前室と奥室（玄室）の二室構造で、奥室長3.28m、幅3.28m、高さ2.9mを測る。前室北側天井下部に、永楽18（408）年墓誌銘が記されている。墓誌銘によれば、被葬者は「信都縣」出身の「鎮」という人物で、「釈迦文佛弟子」であるとともに「国小大兄」という高句麗の官位を受けており、永楽18（408）年12月25日に柩が石室内に移されて、羨道西壁の墨書銘によって、翌（409）年2月2日に墓が閉塞されたことがわかっている。また、奥室（玄室）東壁の上部と下部には、仏教に関連した七宝行事図がみられることから、『無量寿経』における阿弥陀仏国の描写とも考えられている⁽⁵⁰⁾。徳興里古墳の墓誌銘や壁画については、5世紀の高句麗の社会において、仏教への信仰が深く浸透していたことを裏付ける資料でもある。さらに、前室東壁に鎧馬騎馬隊の行列図、前室東側天井に馬上狩獵図、奥室（玄室）南壁西側に厩図など、馬との関わりのある図が多く描かれているのも特徴である。



2-図 15 徳興里古墳の馬手綱を牽く人物図

徳興里古墳の馬牽き人物図については、（a）中間通路東壁下段、（b）中間通路西壁下段、（c）奥壁西壁南側下段、（d）奥壁北壁西側中段の四カ所で描かれている（2－図15）。（a）と（b）では頭巾状の帽子を被った従者が馬の手綱を牽き、（d）でも従者が馬の手綱を牽く姿が描かれている。（c）では従者が樹木に馬を繋ぐ姿が描かれている⁽⁵¹⁾。馬牽き人物図については、壁画の中心ではなくむしろ脇役であって、従者はいずれも男子と推定される。

第4節 比較分析による共通点と相違点

馬甘（飼）人物埴輪の検討によって導き出された特徴と、装飾古墳や高句麗壁画古墳で描かれた馬牽き人物図については、男子であることや手を挙げて馬の手綱を握っている姿など、馬を牽くその姿に共通点が窺える。

一方、相違点としては、高句麗壁画古墳での馬牽き人物図の描写については、和やかな画風ながらも写実的に描かれており、装飾古墳でみられる馬牽き人物図とは、絵画としての描写表現に大きな差異が認められる。また、装飾古墳においては壁画の象徴として描かれている要素が窺えるのに対して、高句麗壁画古墳では主役となる図（主題）の脇役として描かれた要素が強いと考えられ、従者として近侍・奉仕する馬甘（飼）の身分の低さが窺える。

馬の飼育者たち＝馬甘（飼）は、動物を扱うという側面からか、けっして高い身分の存在として扱われてはいなかった。東北アジアの中で制度化された身分社会とその秩序維持の体系そのものが、倭国社会の中においても色濃く影響していたと考えられる。

第5節 結論

古墳の副葬品として出土する初期馬具（4世紀末頃～5世紀後半）については、鉄製轡・木心鉄板張輪鐙・鉄製鞍金具といった装飾要素が乏しい乗馬用馬具（2－図16）で、九州地方や近畿地方といった出土地域にも偏りがみられる。その多くは渡来品と考えられ、馬装したままの状態でも渡来したものもあるといえよう。倭国での初期の轡に見られる各要素の特徴は、同時期の金官加耶の轡との共通性が指摘されている。倭国では5世紀後半まで金官加耶から、5世紀後半以降は大加耶や百済にその系譜が求められ、5・6世紀を通じて加耶の動向と連動していることや、一方で、朝鮮諸国との多様な関係があったことも指摘されてきた⁽⁵²⁾。

5世紀以降、中部地方の下伊那地域（長野県飯田市周辺）では、馬具を伴う馬の犠牲土壌（埋葬土坑）が30例以上見つかっている⁽⁵³⁾。同じ中部地方の



行者塚古墳〔兵庫県加古川市〕

2－図16 古代日本の初期馬具・鑣轡〔復元品〕

大室古墳群（長野県長野市）では、5世紀代から合掌形石室を埋葬施設とする積石塚の造営が開始されている⁽⁵⁴⁾。大室古墳群が築造された地域は、「延喜式」の大室牧に比定でき、その前身となる牧（放牧地）が営まれ、馬匹生産の定着化がなされていたことが指摘されてきた⁽⁵⁵⁾。長野県域では、朝鮮半島を系譜とする馬匹生産や合掌形石室を埋葬施設とする積石塚の造営が、5世紀代に定着化していることは確かである。このことは、積石塚の造営が認められる中部地方の横根・桜井積石塚古墳群（山梨県甲府市）や、関東地方の剣崎長瀬西遺跡（群馬県高崎市）においても同様な様相を示すことが指摘でき⁽⁵⁶⁾、5世紀以降、甲信から北関東の地域（長野県・山梨県・群馬県）にかけて、古墳時代の牧（放牧地）の運営と積石塚の造営が一致することを示している。

5世紀後半の倭国での馬匹生産の急速な受容の背景には、朝鮮諸国の領土情勢と密接に連動したもので、高句麗の領土拡大（南下）による武力制圧の危機にさらされた百済・加耶が、関係が親密で支援が期待できる倭国の武力強化のために馬匹生産技術などの支援を行った結果であるとの強い指摘がなされており⁽⁵⁷⁾、5世紀後半以降、倭国では倭王権の主導によって迅速に軍馬生産の体制が成立したことは確かである。4世紀末頃の馬具の渡来と同じくして、野生馬ではなく家畜化された馬とともに、その飼育方法を知り得た出自を朝鮮半島に求められる馬甘（飼）集団が渡来し、実務的には馬の種付け・調教技術・病気管理・馬具生産といった馬に関する一連の業務（騎馬文化）がもたらされたと考えられる。倭国への騎馬文化の渡来は、アジアにおける騎馬文化の終着点とも考えられている⁽⁵⁸⁾。今後、馬歯や馬骨といったウマ遺存体の産地推定などの分析と研究が進む⁽⁵⁹⁾ことで、渡来初期の馬の渡来経路の推定がなされると考えられる。また、馬の渡来方法については、船に乗せるほかに、船の上から手綱を伸ばし泳がせる、または海に浮かべた筏^{いかだ}に身体をくくりつけて輸送するといった方法が考えられている⁽⁶⁰⁾が、泳がせて渡来したという意見にはあまり賛同できないように思う。

さらに、初期の牧（放牧地）運営については、当然ながら渡来人の馬甘（飼）集団によると考えられ、馬匹生産に従事することを目的に数次にわたって倭国の各地に移住させられ、倭王権に従属した職能集団として部の機能の一角を担ったと考えられる。馬が倭国に渡来した当初は、馬の生産・飼育の知識・技術を持った渡来人＝馬甘（飼）といった特質があったことが指摘できる。

6世紀以降になると、近畿地方から遠く離れた関東地方などの各地で、馬の飼養・飼育が本格的に定着化し、多くの馬が飼育・管理され、生産体制の確立化がなされていた⁽⁶¹⁾ことが推定できる。関東地方の6世紀中頃の火山噴火による軽石（榛名伊香保テフラ・Hr-F P）によって埋没した黒井峯遺跡（群馬県渋川市）では、集落内に捕獲した馬を飼育・管理する施設（厩）が出現しており⁽⁶²⁾、馬の飼養・飼育が6世紀の地方村落の生活の中に定着化していたことが想像できる。このことについては近年、6世紀初頭の火山噴火による火山灰（榛名渋川テフラ・Hr-F A）によって埋没した金井東裏遺跡（群馬県渋川市）での多数の馬蹄跡や幼齢馬の遺存体が確認された⁽⁶³⁾ことや、前述の剣崎長瀬西遺跡⁽⁶⁴⁾や西大山遺跡1号墳（群馬県甘楽町）から馬の犠牲土壙（埋葬土坑）が見つかったことで、5世紀中頃に遡上する可能性が指摘されている⁽⁶⁵⁾。また、倭王権への馬の貢進についても、生産

主体となった牧（放牧地）を管理していた地域首長下の馬甘（飼）集団が関わっていたことが想像でき⁽⁶⁶⁾、5・6世紀の村落では、極端に言えば江戸時代の牧士に相当するような役割や、直接的に馬の捕獲や飼育に携わった馬甘（飼）の人びとの姿があったことも想像できよう。

さらに、馬甘（飼）人物埴輪については、前方後円墳や円墳といった身分社会を表した墳形にこだわらず、その全てが半身立像で表現されており、馬甘（飼）が男性の職業であること、屋外での作業が専らで飼育・調教した馬を牽く姿が最もよくその特色を表したものであること、馬の飼育道具として鎌が必需品であったことを検証した。古墳に配列された位置や順番、他の人物埴輪と比べると、馬甘（飼）人物埴輪はとても簡素に表現されていることから、被葬者である首長の配下としては、決して高い身分の存在でなかったことが理解でき、倭王権とその支配下におかれた地方豪族が掌握した倭国の社会構造における馬甘（飼）の身分体系をよく表しているといえよう。

しかしながら、史料2の検証からは、馬とともに百済から渡来した阿直岐は、馬の生産技術を持った集団の長であったと考えられる。彼らは大和の厩坂（現在の奈良県橿原市）に安置されたことになっているが、史料3・4やその後の史料から馬飼部の本拠地は、河内（現在の大阪府東南部）であったと考えられる。一方、馬甘（飼）は部民であるが、当初は入れ墨があったこともわかっており、低い身分層であったことも窺い知ることができる。しかしながら、継体元年正月条にみえる河内馬飼首荒籠は、継体天皇と旧知の間柄であるとともに河内の馬甘（飼）の長で、継体天皇の即位に関わりを持った人物で、継体天皇の即位後、彼は厚遇され、馬飼首はその後地位が上昇したと推定できる。

6世紀以降になると、倭国での馬匹生産は列島の各地で確実に定着化を果たすことになる。倭国における馬匹生産の定着化及び職能集団である馬飼部の組織化については、朝鮮半島における高句麗の領土拡大政策の影響のもと、対高句麗・新羅を中核に据えた倭王権の軍事力強化政策として、直接的には支配する地域首長層を含めた有力豪族の指揮下のもとに実施されたと理解でき、朝鮮諸国に対して倭国が権威と権力誇示を務めた結果といえよう。

註

- (1) 相川龍雄「農夫埴輪土偶考」『日本原始農業』東京考古学会、1933、pp. 101～112.
- (2) 水野正好「埴輪芸能論」『古代の日本第2巻 風土と生活』角川書店、1971、pp. 255～278.
- (3) 註2文献、p. 272.
- (4) 橋本博文「埴輪祭式論」『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会、1980、pp. 337～368.
- (5) 藤川智之「酒巻14号墳の「馬曳き」人物埴輪の検討」『酒巻古墳群』行田市教育委員会、1988、pp. 80～84.
- (6) 宮崎由利江「馬形埴輪に伴出する人物埴輪について」『古代』第90号、早稲田大学考古学会、1990、pp. 188～205.
- (7) 大澤伸啓「馬飼の人物埴輪について」『栃木県考古学会誌』第13集、栃木県考古学会、1991、pp. 175～198.

- (8) 塚田良道「鷹匠と馬飼」『同志社大学考古学シリーズV 考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会, 1992, pp. 301~312. (塚田良道『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣, 2007 に再録)
- (9) 註5 文献, p. 81.
- (10) 註6 文献, p. 203.
- (11) 註7 文献, p. 182.
- (12) 註8 再録文献, p. 159.
- (13) a. 松井章「家畜と牧—馬の生産—」『古墳時代の研究4 生産と流通 I』雄山閣出版, 1991, pp. 105~119.
b. 岩瀬透「葦屋北遺跡の渡来人と河内の牧」『シンポジウム 古墳時代に生きた渡来人の軌跡—長原遺跡・葦屋北遺跡・上私部遺跡を中心に—』大阪府文化財センター, 2006, pp. 13~20.
c. 千賀久「古墳時代の牧と馬飼集団」『季刊考古学』第76号, 雄山閣, 2001, pp. 57~60.
d. 藤田道子「葦屋北遺跡の渡来人と牧」『ヒストリア』第229号, 大阪歴史学会, 2011, pp. 1~27.
e. 桃崎祐輔「牧の考古学—古墳時代牧と牛馬飼育集団の集落・墓—」『日韓集落の研究—弥生・古墳時代および無文土器—三国時代— (最終報告書)』日韓集落研究会, 2012, pp. 535~558.
f. 諫早直人「馬匹・馬具生産」『季刊考古学』第137号, 雄山閣, 2016, pp. 22~26.
- (14) a. 千賀久「加耶と倭の馬文化」『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』国立歴史民俗博物館, 2002, pp. 171~178.
b. 白石太郎『考古学からみた倭国』青木書店, 2009.
- (15) 朝鮮三国とも呼んでいるが, 高句麗・百済・新羅をまとめて表す適切な呼び名として, 古畑徹『歴史文化ライブラリー458 渤海国とは何か』吉川弘文館, 2018, pp. 149~150. に準じて「海東三国」と記した。
- (16) 諫早直人『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣, 2012.
- (17) 右島和夫ほか『馬の考古学』雄山閣, 2019.
- (18) 市毛勲『日本古代朱の研究』2010 (早稲田大学博士 (文学) 学位論文) .
入れ墨については, 鳥飼部や海人部にも見られたもので, 生物に関わる職能集団との関係も指摘されているが, 黥面の施された人物埴輪の検討では, 「低い階層に属する人々であった」と結論付けされている。
- (19) a. 山上弘・小林義孝ほか『葦屋北遺跡発掘調査概要・I』大阪府教育委員会, 2004.
b. 小林義孝・辻本武ほか『葦屋北遺跡発掘調査概要・IV』大阪府教育委員会, 2006.
- (20) 千賀久『古墳時代の馬との出会い』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館, 2003.
- (21) 榎田誠『矢田野エジリ古墳発掘調査報告書』小松市教育委員会, 1992.
- (22) 石塚久則ほか『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会, 1980.
- (23) a. 藤田三郎ほか『笹鉾山古墳群』田原本町教育委員会, 2005.
b. 田原本町教育委員会編・発行『田原本の遺跡5 田原本の埴輪』2007.
- (24) 金子直行ほか『新屋敷遺跡C区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 1996.
- (25) 深澤敦仁ほか『多田山古墳群』群馬県埋蔵文化財調査事業団, 2004.

- (26) 註 25 文献に同じ。
- (27) 三浦京子ほか『世良田諏訪下遺跡』尾島町教育委員会, 1998.
- (28) 徳江秀夫ほか『綿貫観音山古墳 I』群馬県埋蔵文化財調査事業団, 1998.
- (29) 宮塚義人ほか『小泉大塚越遺跡』玉村町教育委員会, 1993.
- (30) 木村友則ほか『甲塚古墳発掘調査報告書』下野市教育委員会, 2014.
- (31) 田村誠ほか『庚申塚遺跡・愛染遺跡・安保氏館跡・諏訪ノ木古墳』神川町教育委員会, 1994.
- (32) a. 橋本勇ほか『明神山古墳群』毛野古文化研究所・山辺東部土地区画整理事務所・足利市教育委員会, 1985.
b. 註 7 文献に同じ。
- (33) 入澤雪江『中原Ⅱ遺跡』吉井町教育委員会, 2004.
- (34) 中島洋一ほか『酒巻古墳群』行田市教育委員会, 1988.
- (35) 杉山晋作「埴輪が語ること」『王の墓と奉仕する人びと』山川出版社, 2004, pp. 162~179.
- (36) 日高慎「埴輪に表現された被葬者」『同志社大学考古学シリーズXI 森浩一先生に学ぶ 森浩一先生追悼論集』同志社大学考古学シリーズ刊行会, 2015, pp. 445~454.
- (37) 梁木誠・今平利幸『下桑西島古墳群』宇都宮市教育委員会, 1992.
- (38) a. 竹内理三編『古代の日本 2 風土と生活』角川書店, 1971, 巻頭図版.
b. 永峯光一・水野正好編『日本原始美術大系 3 土偶・埴輪』講談社, 1977, p. 93 (図版 174) .
c. 亀井正道『人物・動物はこわ (日本の美術第 346 号)』至文堂, 1995, p. 49.
- (39) 井博幸ほか『杉崎コロニー古墳群』日本窯業史研究所, 1980.
- (40) 東京国立博物館編・発行『東京国立博物館図版目録 古墳遺物篇 (関東Ⅲ)』1986.
- (41) 註 40 文献に同じ。
- (42) 註 1 文献, 巻頭第 15 図版.
- (43) a. 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編・発行『大和考古資料目録 第 15 集』1988.
b. 大阪府立泉北考古資料館編・発行『大阪府の埴輪』1982.
- (44) 最近刊行された註 17 文献にて, 辻川哲朗 (辻川哲朗 2019) は馬甘 (飼) 人物埴輪の共通性について「馬匹生産集団の社会的位置づけや編成のあり方等, 存在形態の変化があった」(p. 329.) との見解を述べている。表現の相違はあるが, 大筋では本論での指摘と相違ないものといえよう。
辻川哲朗「馬形埴輪と馬飼形人物埴輪」『馬の考古学』雄山閣, 2019, pp. 327~329.
- (45) a. 森貞次郎ほか『特別史跡王塚古墳の保存』福岡県文化財調査会, 1975.
b. 柳沢一男『描かれた黄泉の世界 王塚古墳』新泉社, 2004.
c. 森貞次郎『竹原古墳』中央公論美術出版, 1968.
d. 森貞次郎ほか『竹原古墳』若宮町教育委員会, 1982.
- (46) a. 斎藤忠『古墳の絵画 (日本の美術第 110 号)』至文堂, 1975.
b. 和光大学古墳壁画研究会編・発行『高井田横穴群線刻画』1978.

- c. 斎藤忠「装飾古墳図文の意義」『斎藤忠著作選集3 古墳文化と壁画』雄山閣, 1997, pp. 145～247.
- d. 安村俊史『高井田横穴群』柏原市立歴史資料館, 2012.
- e. 岩永哲夫ほか『土器田東横穴墓(2)』佐土原町教育委員会, 1983.
- (47) a. 斎藤忠「高句麗と日本との関係」『古代の高句麗と日本』学生社, 1988, pp. 9～47.
- b. 斎藤忠「私の見た高句麗古墳壁画」『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, pp. 29～43.
- (48) a. 註46a 文献・註46b 文献に同じ。
- b. 榊晃弘『装飾古墳』泰流社, 1977.
- c. 国立歴史民俗博物館編『装飾古墳の世界』朝日新聞社, 1993.
- (49) 朝鮮画報社出版部編『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社, 1985.
- (50) a. 門田誠一『古代東アジア地域相の考古学的研究』学生社, 2006.
- b. 門田誠一『高句麗壁画古墳と東アジア』思文閣出版, 2011.
- (51) 早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005.
- (52) a. 註20 文献, p. 74.
- b. 註16 文献, pp. 241～258.
- a 文献では金官加耶及び大加耶・百済からの系譜を指摘する。b 文献では、日本の初期轡の多くが朝鮮半島南部に系譜をもつことが述べられているが、朝鮮半島南部に類例のない馬具が日本に存在することから、三燕や高句麗といった朝鮮半島南部以外の地域からの系譜である可能性があることも述べられており、その系譜が多様であることが指摘されている。
- (53) 渋谷恵美子『飯田における古墳の出現と展開』飯田市教育委員会, 2007.
- (54) a. 大塚初重・小林三郎・石川日出志『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅰ』東京堂出版, 1993.
- b. 土生田純之「積石塚古墳と合掌形石室の再検討」『福岡大学総合研究所報』第240号, 2000, pp. 131～154.
- c. 大塚初重・小林三郎『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅱ』東京堂出版, 2006.
- d. 時信武史ほか『国史跡大室古墳群』長野市・長野市教育委員会, 2007.
- e. 小林三郎・大塚初重・石川日出志・佐々木憲一・草野潤平『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅲ』六一書房, 2008.
- f. 風間栄一「大室古墳群の実態」『積石塚大全』雄山閣, 2017, pp. 29～46.
- a 文献での大室古墳群の合掌形石室の系譜を百済(公州)の合掌形石室に求める見解は、b 文献にて、構築の時期差を含めて否定的な見解が示されている。
- (55) 大塚初重「東国の積石塚古墳とその被葬者」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集, 国立歴史民俗博物館, 1992, pp. 3～19.
- (56) a. 宮澤公雄ほか『横根・桜井積石塚古墳群調査報告書』甲府市教育委員会, 1991.
- b. 平塚洋一『横根・桜井積石塚古墳群調査報告書Ⅱ』甲府市教育委員会, 2001.

- c. 黒田晃ほか『剣崎長瀬西遺跡1』高崎市教育委員会, 2001.
- (57) 註14a 文献, p. 171. 註14b 文献, p. 266.
- (58) 桃崎祐輔「草原を超え、海を渡った騎馬文化—東アジアの視点からみた三燕・朝鮮三国・倭国の馬具—」
『馬 アジアを駆けた二千年』九州国立博物館, 2010, pp. 1440~153.
- 桃崎祐輔(桃崎祐輔 2010)は、「シルクロードや仏教伝来の終着点である極東の日本」では、騎馬文化の終着点でもある(p. 152.)と述べる。
- (59) a. 青柳泰介・覚張隆史・丸山真史「南郷大東遺跡から出土した馬歯の化学分析—安定同位体分析による食性および生育環境の復元の試み—」『奈良県立橿原考古学研究所彙報 青陵』第146号, 奈良県立橿原考古学研究所, 2016, pp. 1~3.
- b. 丸山真史「古墳時代の馬の普及と飼育・管理—近畿地方のウマ遺存体を中心に—」『古代学研究』第208号, 古代学研究会, 2016, pp. 12~19.
- (60) 末崎真澄「日本の馬文化—人と馬の歴史から—」『馬 アジアを駆けた二千年』九州国立博物館, 2010, pp. 130~138.
- 末崎真澄(末崎真澄 2010)は、「西アジアで帝国を築いた前9世紀のアッシリアのレリーフには、馬の下顎を縛り、船の上から手綱を伸ばし泳がせるシーンが表されている(アッシュールナシルバン二世のユーフラティス渡河 大英博物館)」ことなどを含めて、「水に慣らされていれば内臓の全ての長さが20メートル程(成馬)もある馬は浮きやすく、ほとんどが泳ぐことができる」(p. 134.)と述べるが、九州地方北西部の玄海灘に位置する対馬(長崎県対馬市)と朝鮮半島南東端に位置する釜山(韓国釜山市)の間でさえ、約50kmの距離があることから、馬でも泳ぎきることは難しいと思われる。
- (61) 菱田哲郎『諸文明の起源 14 古代日本 国家形成の考古学』京都大学学術出版会, 2007.
- (62) a. 石井克己ほか『黒井峯遺跡発掘調査報告書』子持村教育委員会, 1990.
- b. 石井克己・梅沢重昭『日本の古代遺跡を掘る 4 黒井峯遺跡—日本のポンペイ—』読売新聞社, 1994.
- (63) a. 杉山秀宏・桜岡正信・友広哲也・徳江秀夫「群馬県渋川市金井東裏遺跡の発掘調査概要」『日本考古学』第38号, 日本考古学協会, 2014, pp. 79~90.
- b. 杉山秀宏ほか『金井東裏遺跡(古墳時代編)』群馬県埋蔵文化財調査事業団, 2019.
- (64) 桃崎祐輔「殺馬儀礼」『積石塚大全』雄山閣, 2017, pp. 297~309.
- 剣崎長瀬西遺跡の積石塚群は、「信濃北部の高句麗系や百済・馬韓系を含む雑多な渡来系集団に出自」が求められ、渡来色を強く帯びたものであったことが指摘されている(p. 307.)。
- (65) 若狭徹「東国における古墳時代地域経営の諸段階—上毛野地域を中心として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集, 国立歴史民俗博物館, 2018, pp. 307~350.
- (66) 馬の貢進については、群馬県域の積石塚を媒介とした考察において、若狭徹(若狭徹 2017)は「国家的な財である馬の貢進に関しては…、各地の渡来系馬匹生産集団を膝下に置く首長連合が、連携してこれを保障し…、まさに王権が設定した「馬の道」であったと想定したい」(p. 182.)と実に想像力豊かな実態の復

元像を述べている。若狭徹「上毛野（西毛）」『積石塚大全』雄山閣，2017，pp. 173～182.

第3章 牛甘（飼）の特性（1）—菓生産とその性格—

第1節 本章の目的

本章は、古墳時代における牛を扱う牛甘（飼）について、渡来文化としての歴史的・文化的特性を明らかにすることを目的とする。

牛甘は、「牛飼」とも書かれる。『日本書紀』巻第29・天武天皇紀下には、「都努臣牛甘」と「都努臣牛飼」が登場し、これは同一人物である。「牛甘」と「牛飼」は通用し、古代において同じ意味で使用されていたことが理解できる。また、『古事記』下巻・安康天皇では、「馬甘牛甘」とひとつの言葉のように併記されている。馬甘（飼）と同じように牛甘（飼）は、その名称及び字のとおり、古代において牛の飼養・飼育及び管理を行っていた者及びその集団の名称であると考えられる。

さらに、10世紀初頭に編纂された『延喜式』巻28・兵部省式には、兵部省が管理する馬牧・牛牧・馬牛牧の国名及び牧名が記述されている条文がある（以下、『延喜式』諸国馬牛牧と記す）。平安時代には、律令国家が管理する軍馬生産のための牧が全国各地に置かれ、軍馬の飼養・飼育及び管理が行われていたが、その一部は牛牧・馬牛牧と呼ばれ、牛の飼養・飼育及び管理を行っていたことを窺い知ることができる⁽¹⁾。

4～6世紀（古墳時代）、律令国家成立以前の牛は、軍馬としての需要・供給の対象となった馬（動物遺存体としての馬骨及び馬装としての馬具や馬形埴輪、牧などを含めて）に比べると、研究の対象として取り扱われることが少なかった⁽²⁾。牛形埴輪についても、出土数が極めて少ないことが影響して、動物埴輪全体の研究の中で、その一種として紹介される程度の取り扱いであった⁽³⁾。近年、中村潤子によって牽引使役という視点から牛形埴輪の検討がなされ（中村潤子2015）⁽⁴⁾、牛形埴輪には「牽引使役を示す意図がうかがえない」という点などから、その性格は「雌が出す乳の恵みを示す」⁽⁵⁾ものという考え方が示した。

また、動物遺存体⁽⁶⁾としてのウシの骨については、6世紀以降になると西日本を中心に出土するようになるが、それ以前のものは、近畿地方の南郷大東遺跡（奈良県御所市）から、5世紀に相当する臼歯の出土がよく知られている⁽⁷⁾程度で、ウマの骨と比べると極めて出土例が少ない⁽⁸⁾。

本章では、考古資料を中心とした比較分析の一助とするために、牛甘（飼）に関連した特に重要な古代日本の文献史料を紹介したうえで、（1）牛形埴輪とウシ遺存体、（2）装飾古墳の牛と想定できる図文、（3）高句麗壁画古墳の牛図、という考古資料を対象とした比較分析を通じて、文献史料による解釈と併せて、牛の渡来と古墳時代牛甘（飼）の歴史的・文化的な特性とその実態について考察を行いたい。

第2節 文献史料の紹介

〔史料1〕『日本書紀』巻第29・天武天皇13（684）年4月

辛未、小錦下高向臣麻呂為大使，小山下都努臣牛甘為小使，遣新羅。

(^{しん}辛^び未、^{せう}小^{きん}錦^げ下^{たかむく}高^の向^の臣^の麻呂^をを大使とし、^{せう}小^{せん}山下^げ都^の努^の臣^の牛甘^をを小使として、^{しん}新羅^に遣^すはす。)

史料1は、天武天皇13(684)年に、高向臣麻呂とともに都努臣牛甘が、朝鮮半島統一後の新羅に、国使として遣わされた記述である。ここでいう「牛甘」は、人名を表している。

[史料2]『日本書紀』巻第29・天武天皇14(685)年5月

辛未、高向朝臣麻呂・都努朝臣牛飼等至自新羅。乃学問僧觀常・靈觀從至之。新羅王献物，馬二匹・犬三頭・鸚鵡二隻・鵲二隻及種種寶物。

(^{しん}辛^び未、^{たかむく}高^の向^の朝臣^の麻呂[・]都^の努^の朝臣^の牛飼^等、^{しん}新羅^{より}至^る。乃^ち学問僧[・]觀^常・靈^觀、^{すなは}從^ひて至^{れり}。新羅王^の献^物、馬^{二匹}・犬^{三頭}・鸚鵡^{二隻}・鵲^{二隻}、及^種種^の寶^物あり。)

史料2は、史料1の続きに当たる遣新羅使の高向臣麻呂らの帰国の記述である。史料1の都努臣牛甘と、史料2の都努朝臣牛飼は同一人物で、「牛甘」と「牛飼」が通用していたことが確認できる。「都努臣」は「角臣」とも書き、角臣は、牛甘の新羅派遣中の天武天皇13(684)年10月の「八色の姓」制定で「朝臣」になったため、史料2は「都努朝臣」となっている。

なお、都努臣牛甘(飼)らの遣新羅使としての派遣から帰国までの期間は、13カ月という長期間にわたっている⁽⁹⁾。この間の朝鮮半島での出来事として、『三国史記』新羅本紀・神文王4(684)年11月条に、金馬渚の報德国(小高句麗国)の滅亡が記録されており、それに絡んで、都努臣牛甘(飼)らが新羅に勾留されていた可能性が指摘されている⁽¹⁰⁾。

次に、牛甘(飼)の考察にあたり、特に重要となる『古事記』の記述を紹介したい。

[史料3]『古事記』下巻・安康天皇

於是、市辺王之王子等、意祁王・袁祁王二柱聞此乱而逃去。故到山代苅羽井，食御粮之時，面黥老人来，奪其粮。爾其二王言「不惜粮。然汝者誰人。」答曰「我者山代之猪甘也。」故逃渡玖須婆之河，至針間国，入其国人・名志自牟之家，隱身，役於馬甘牛甘也。

(ここに、市^み辺^{こたち}の王^のの王子^を等、意^お祁^け王^を・袁^を祁^け王^を二柱、この乱れを聞きて逃げ去りましき。かれ、山^{やまし}代^{かり}の苅^は羽井^あに到りまして、御^み粮^{かれ}食^ひす時^をに、面^{おも}黥^てける老^お人^{きな}来^て、その粮^をを奪^かひ^き。しかして、その二はしらの王の言らししく、「粮^はは惜^れし^ず。しかれども、な^は誰^たれ^ぞ」答^{こた}へ^い曰^ひひしく、「あ^は、山^あ代^かの猪^か甘^れぞ」かれ、玖^く須^す婆^ばの河^をを逃^はげ^り渡^りて、針^{はり}間^まの国^にに至^りまし、その国^に人^し、名^じは志^む自^む牟^むが家^にに入りまして、身^をを隠^ひしたまひて、馬^う甘^ま牛^か甘^ひに役^にはえましき。)

史料3は、雄略天皇(大長谷王)によって父(忍齒王)が殺され、その追っ手の追求を逃れた、後の仁賢天皇(意祁王)・顕宗天皇(袁祁王)が、逃げる途中で「山城の猪甘」と遭遇して食べ物(乾飯)を奪われながらも、播磨国の志自牟の元まで逃げのびて、馬甘(飼)・牛甘(飼)として身を隠した記述である。

この史料では「馬甘牛甘」と併記されており、志自牟は牛馬の両方を飼っていて、二王はその両方の世話をする仕事をしたと考えられる。ということは、馬甘(飼)と牛甘(飼)は専業ではなく、未分化

であったということにほかならない⁽¹¹⁾。また、馬甘（飼）は「賤」の身分であったことがわかっているため、牛甘（飼）も同様であったと考えてよい。平安時代に馬牛の両方を飼育管理する馬牛牧があったが、馬甘（飼）・牛甘（飼）が当初未分化であったことの名残といえる。

第3節 形象埴輪と壁画資料等の検討

（1）牛形埴輪とウシ遺存体

全国的に見て牛形埴輪の出土例が極めて少ないため、検討対象の幅を広げて、遺跡出土のウシ遺存体を加えて、検討を行いたい。

牛形埴輪は、全国で15例程度の存在が知られており、近畿地方及び関東地方から出土している（3-表1, 3-図1・2）。近畿地方の規模不明の円墳又は前方後円墳である四条7号墳（奈良県橿原市）と全長91mの前方後円墳である船宮古墳（兵庫県朝来市）出土の牛形埴輪は、5世紀後半のものとして認識でき、同じく近畿地方の墳径16.5mの造り出し付円墳である寺口忍海D-27号墳（奈良県葛城市）出土の牛形埴輪（脚部のみ）が5世紀末頃～6世紀初頭であるが、他は6世紀代のものである。出土地別に見ると、近畿地方に8割以上が集中する（3-グラフ1）。牛形埴輪は、近畿地方以外では、唯一、関東地方の千葉県からの出土が確認され、その千葉県でも、牛形埴輪の出土が確認できる地域は、旧国名では下総国に該当する。『延喜式』諸国馬牛牧には11の牛牧と3の馬牛牧が記載されているが（3-表2）、下総国にはそのひとつである「浮嶋牛牧」の存在が知られる。下総国では、のちの牛牧に発展するような牛の飼育管理が、すでに5世紀後半～6世紀に行われていた可能性が示唆される。

次に、各出土古墳及び時期別に、牛形埴輪の出土状況とその特徴を確認し、牛形埴輪の有する特性を抽出していきたい。

5世紀後半の四条7号墳では、外周溝（SD08）・河道（SD147）他から、牛形埴輪1点の出土が確認されている。牛形埴輪には、馬形・鹿形・猪形の動物埴輪や力士などの人物埴輪、家形埴輪、盾などの器財埴輪が共伴して出土している。四条7号墳の形象埴輪の多くが、藤原宮期に相当する整地土から出土していることから、墳丘での配列状態の復原は困難である。牛形埴輪は、頭部上半～頸部のみが残存する破片であるが、頭部上半には角と耳が立体的に表現され、頸部から背に向かって背骨を現した稜線がみられる⁽¹²⁾。

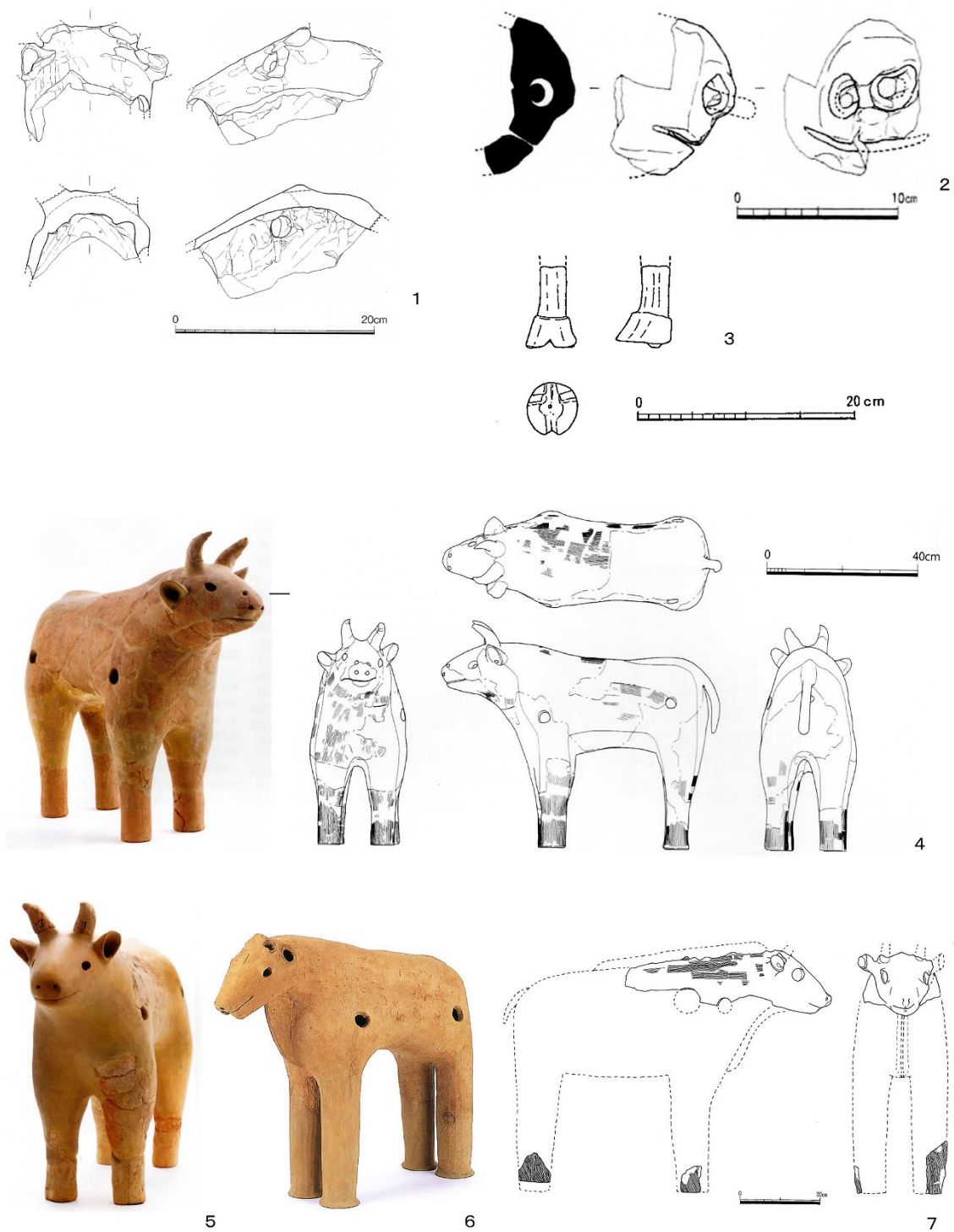
船宮古墳からは、牛形埴輪の鼻と口の部分と推定される破片が出土している。鼻には、鼻環の表現が見られる⁽¹³⁾。

5世紀末頃～6世紀初頭の寺口忍海D-27号墳では、造り出し部に配列された円筒埴輪の中から、牛形埴輪の脚部の足先が見つかり⁽¹⁴⁾、造り出しに配列されていた可能性が高いといえよう。

6世紀前半の資料としては、近畿地方の大日山35号墳（和歌山県和歌山市）及び鳴神埴輪窯跡（和歌山県和歌山市）、今城塚古墳（大阪府高槻市）、梶2号墳（大阪府守口市）、羽子田1号墳（奈良県田原本町）、音乗谷古墳（京都府木津川市）からの出土が確認されている。

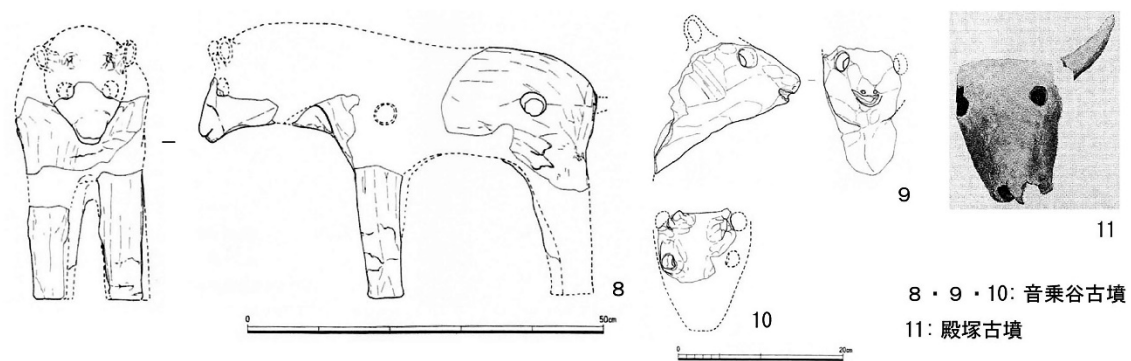
3－表1 牛形埴輪出土古墳一覧

No.	出土地	古墳・遺跡名	墳形／規模	時期	牛形埴輪（残存部など）の特徴	共伴する形象埴輪	主要文献
1	兵庫県朝来市	船宮古墳	前方後円墳／全長91m	5c後	鼻（鼻環付）と口の破片	形象（不明）	高橋克壽ほか2005
2	奈良県橿原市	四条7号墳	円墳又は前方後円墳／－m	5c後	頭部上半～頸部（角・耳・背骨の表現）	動物（馬・鹿・猪）・人物（力士など）・器財（家など）	鈴木裕明ほか2010
3	奈良県葛城市	寺口忍海D-27号墳	造り出し付円墳／墳径16.5m	5c末～6c初	脚部（足先）	動物（馬）・人物	吉村幾温1988
4	和歌山県和歌山市	大日山35号墳	前方後円墳／全長105m	6c前	頭部～体部（脚部欠損）	動物（犬・猪・鷹・水鳥）・人物（力士など）・器財（家など）	萩野谷正宏ほか2011
5		鳴神埴輪窯跡	埴輪窯	6c前	角のみ		萩野谷正宏ほか2011
6	大阪府高槻市	今城塚古墳	前方後円墳／全長350m	6c前	頭部（角・耳の表現）～体部・脚部	埴輪祭祀場4区 動物（馬・鳥）・人物（力士など）・器財（家・盾）	今西康宏・渡井彩乃2015
7				6c前	頭部（角・耳の表現）～体部・脚部		今西康宏・渡井彩乃2015
8		昼神車塚古墳	前方後円墳／全長56m	6c中	角・体部・脚部破片	動物（犬・猪）・人物（力士など）	今西康宏・渡井彩乃2015
9	大阪府守口市	梶2号墳	帆立貝式古墳／全長29.7m	6c前	頭部と体部	動物（犬・猪・鳥）・人物・器財（家・大刀など）	笠原勝彦1991
10	奈良県田原本町	羽子田1号墳	前方後円墳／全長30m	6c前	頭部～体部（角と3本の脚欠損）	人物（盾持）	千賀久1991
11	京都府木津川市	音乗谷古墳	前方後円墳／全長22m	6c前	頭部～体部・脚部	動物（馬・犬・鳥）・人物・器財（玉杖・蓋など）	高橋克壽ほか2005
12				6c前	頭部		高橋克壽ほか2005
13				6c前	頭部（角の表現）		高橋克壽ほか2005
14	千葉県印西市	小林1号墳	円墳／墳径18m	6c中	頭部	動物（馬・猪）・人物	亀井正道1995
15	千葉県横芝光町	殿塚古墳	前方後円墳／全長88m	6c中～後	顔面（角の表現）	動物（馬・犬）・人物	千葉県立房総風土記の丘1982



1：四条7号墳 2：船宮古墳 3：寺口忍海D-27号墳
 4・5：今城塚古墳 6：羽子田1号墳 7：梶2号墳

3-図1 牛形埴輪（1）



3－図2 牛形埴輪（2）

大日山 35 号墳は全長 105m の前方後円墳で、墳丘括れ部の東と西に造り出し施設が配置され、東造り出しから牛形埴輪 1 点の出土が確認されている。東造り出しからは、馬形・猪形・犬形の動物埴輪や翼を広げた鷹と推定される鳥や水鳥といった鳥形埴輪、力士などの人物埴輪、家形埴輪、大刀などの器財埴輪、須恵器大甕などが出土している。円筒埴輪で囲まれた東造り出しの形象埴輪群の配列復原では、墳丘側から二羽の水鳥に続き、牛・犬・猪の順列で配列され、牛形埴輪は、動物埴輪群による配列構成の一角に位置付けられる（3－図3）。大日山 35 号墳の牛形埴輪は、顔面部と脚部を欠損した破片であるが、顔面には目、頭部には耳と角に相当する部分が表現されている⁽¹⁵⁾。

また、鳴神埴輪窯跡では、牛形埴輪の角の可能性のある破片 1 点の出土が確認されている⁽¹⁶⁾。

今城塚古墳は、二重周溝を有する全長 350m の大型前方後円墳で、継体天皇の陵墓と考えられている。内堤北側の張出区画に設置された埴輪祭祀場では、200 点以上におよぶ形象埴輪群が配列される。その最も南側の区画である 4 区から牛形埴輪 2 点の出土が確認されている。墳丘側に設置された円筒埴輪列

3－表2 『延喜式』巻28・兵部省式の牛牧・馬牛牧

国名	牛牧名
武蔵国	神埼牛牧
上総国	負野牛牧
下総国	浮嶋牛牧
周防国	垣嶋牛牧
長門国	角嶋牛牧
筑前国	能臣嶋牛牧
肥前国	柏嶋牛牧
	早埼牛牧
日向国	野波野牛牧
	長野牛牧
	三野原牛牧

国名	馬牛牧名
相模国	高野馬牛牧
備前国	長嶋馬牛牧
伊予国	忽那嶋馬牛牧

に並行する水鳥埴輪列に並行して、2 列に配列された馬形埴輪の外側列の最後尾に牛形埴輪が配列される。同じ 4 区内には、力士や鷹匠の人物埴輪、鶏形埴輪、盾形埴輪及び家形埴輪が配置されている（3－図4）。牛形埴輪 2 点は、その全体像が理解できるように復元

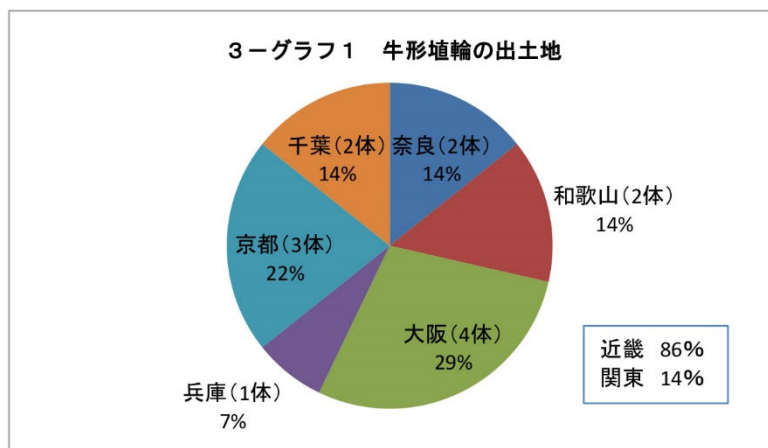
がなされている。1点目は長さ74cm・幅26cm・高さ59cmで、2点目は長さ69cm・幅27cm・高さ65cmを測る。体部から伸びる太くて短い頸によって頭部へと続き、頭部には耳と角が立体的に表現されている。角は、短い角であるが、やや前向きに曲がっている。

顔面には目と鼻孔が孔によって表現されるが、口はへら状工具による深い横長の沈線で表現されている。鼻孔の上には、紐などを通したような二つの孔があり、鼻環を表した可能性が考えられる。体部は丸みをおびてやや太く、脚部は大腿部が大きく膨らむが、下端は真っ直ぐな筒状に表現されている。蹄の表現は見られない⁽¹⁷⁾。

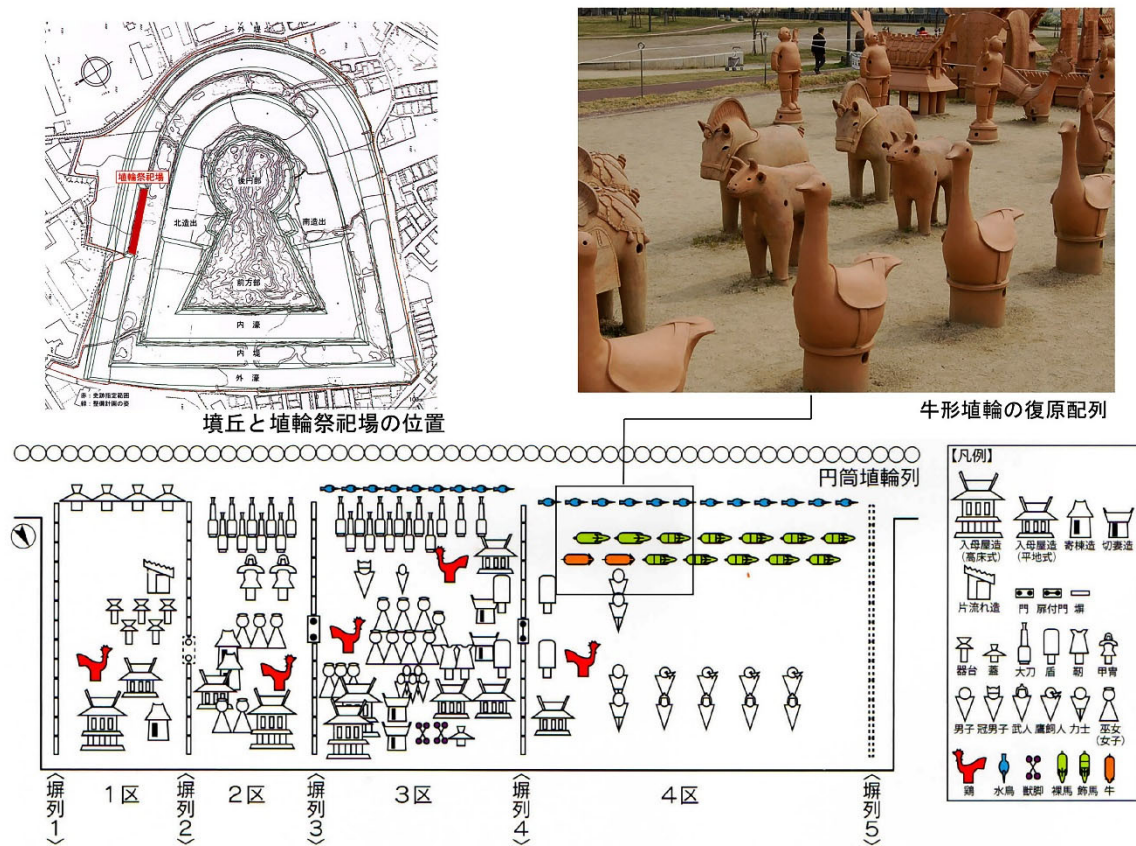
梶2号墳は全長29.7mの帆立貝式古墳で、犬形埴輪や猪形埴輪のほか、鳥形埴輪、人物埴輪、大刀形埴輪などの器財埴輪や家形埴輪とともに、牛形埴輪が確認されている。牛形埴輪は、角が欠けているが、頭部～体部までが残っており、全身像として復元がなされている⁽¹⁸⁾。

羽子田1号墳は全長30mの前方後円墳で、明治30(1887)年の病院建設工事の時に、盾持人物埴輪と牛形埴輪が出土している。近年の調査によって、前方後円墳である可能性が指摘されている⁽¹⁹⁾。牛形埴輪は、角と脚部の一部を欠くが、ほぼ全体像を見ることができる。今城塚古墳の牛形埴輪と同様に、欠けてはいるものの、耳と角が立体的に表現されていたことがわかる。顔面は目が孔によって表現され、口はへら状工具による横長の沈線で表現されている。体部は丸みをおび、力強く表現されている⁽²⁰⁾。

音乗谷古墳は全長22mの前方後円墳で、南掘割から牛形埴輪3点が出土している。そのなかで、首の皮のたるみが表現された牛形埴輪1点の復元がなされている。長さ56.8cm・高さ39cmで、今城塚古墳の牛形埴輪に比べて、小型である。ほかに2点の牛形埴輪の頭部が認められ、うち1点には角の表現が



3-図3 大日山35号墳・牛形埴輪の復元配列
(猪形埴輪・犬形埴輪に続き牛形埴輪が配列・写真は筆者撮影)



3-図4 今城塚古墳の埴輪祭祀場の構成と牛形埴輪の配列 (写真は筆者撮影)

見られる⁽²¹⁾。成獣2体と幼獣1体の組み合わせによって、「雄と雌、仔牛」を表したものと考えられている⁽²²⁾。

6世紀中頃の資料としては、近畿地方の昼神車塚古墳(大阪府高槻市)、関東地方の小林1号墳(千葉県印西市)からの出土が知られている。

昼神車塚古墳は全長56mの前方後円墳で、今城塚古墳の牛形埴輪に似た脚部1点のほか、角とみられる破片の出土が知られている⁽²³⁾。昼神車塚古墳では、力士や角笛を吹く人物(猪甘)などの人物埴輪のほか、犬形埴輪及び猪形埴輪が列状に配列されていたことがわかっている⁽²⁴⁾。

小林1号墳は墳径18mの円墳で、馬形埴輪や猪形埴輪のほか、人物埴輪の出土が知られている。小林1号墳の牛形埴輪は、頭部のみの破片である⁽²⁵⁾。

6世紀中頃～後半の資料としては、関東地方の殿塚古墳(千葉県横芝光町)からの出土が知られている。

殿塚古墳は全長88mの前方後円墳で、墳丘中段面に配列された馬形埴輪・犬形埴輪・鹿形埴輪・猪形埴輪といった動物埴輪群の中のひとつとして牛形埴輪が確認されている。男女の人物埴輪の配列も確認されている。殿塚古墳の牛形埴輪は、顔面と角だけの破片である。顔面は目が孔によって表現され、角

3-表3 古墳時代（5～6世紀）及び飛鳥時代（7世紀）の遺跡から出土した代表的なウシ遺存体

No.	出土地	遺跡・古墳名	遺構名／性格	時期	ウシ遺存体（残存部位）の特徴	特記	主要文献
1	奈良県御所市	南郷大東遺跡	SX01・SX02／貯水池	5c	上下臼歯4点		松井章2003
2	熊本県宇土市	宇土城三ノ丸跡	5 T／-	5c	臼歯6点・下顎骨2点・肋骨1点・前肢骨（椎骨2点・尺骨1点・中手骨1点・指骨3点）・後肢骨（寛骨1点・大腿骨3点・足根骨1点・中足骨1点・趾骨2点）	ウシ2個体と推定	西中川駿1982
3	大分県中津市	幣旗邸古墳1号墳	集石遺構／円墳（径20m）	5c末	上顎臼歯6点・頭蓋骨片少量	7才前後、ウシの供犠痕跡	桃崎祐輔1995
4	大阪府大阪市	瓜破遺跡	北-1区8ci下／-	6c前	踵骨1点	刃物傷のあるウマ骨と共伴	藤田正勝・宮路教子・松井章2002
5			SD407／溝	7c～	下顎骨1点・肩甲骨1点・橈骨1点・中手骨1点・脛骨1点・中足骨2点・踵骨1点・距骨1点	ウシ1個体と推定	丸山真史2013
6	大阪府八尾市	池島・福万寺遺跡	第9a層／-	6c前～中	上顎臼歯1点・臼歯破片1点	ウマ臼歯と共伴	畑暢子・井上智博2002
7			第10b面・溝17／溝	6c前～中	下顎臼歯破片1点		畑暢子・井上智博2002
8	兵庫県神戸市	郡家遺跡	1A区SK05／土坑	6c	下顎骨1点	須恵器甕片と共伴	村尾政人ほか2004
9	大阪府四条綴市	四条綴町D古墳	横穴式石室内／円墳か	6c後か	下顎臼歯4点	ウマ下顎臼歯と共伴	柴田清吾1969、桃崎祐輔1993
10	大阪府大阪市	長原遺跡	SP6001／柱穴	6c後～7c前	前肢骨（肩甲骨・上腕骨・橈骨・尺骨・手根骨）後肢骨（大腿骨・脛骨・足根骨）左1点ずつ	ウシ1個体の四肢骨、柱の抜き取りに伴う埋納	久保和士ほか1999
11	鳥取県湯梨浜町	長瀬高浜24号墳	周溝上面／円墳（径14m）	6c後～7c前	臼歯3点・骨	1～1才5カ月	井上貴央1983
12			周溝上面（土塁状遺構下層）／円墳（径14m）	6c後～7c前	臼歯3点	壮齢	井上貴央1983
13	神奈川県横須賀市	鉦切遺跡	C区SK01／土坑	7c前	頭蓋骨1点・臼歯3点以上	仰向け状態で埋納	金子浩昌1986
14		蓼原古墳	6号址／帆立貝式古墳（全長28m）周溝内	7c後	脛骨・大腿骨	ウマ骨と共伴・刀子出土、上層に須恵器大甕・甕破片を敷き詰める	鋳持輝久1987
15	千葉県千葉市	上ノ台遺跡	2F-38／住居	7c	左側脛骨の切断品	幅4cmの長さで輪切り	金子裕昌1982
16			2F-58／住居	7c	歯9～10点（現存6点）	床面出土	金子浩昌1982
17	群馬県前橋市	上野国分僧寺・尼寺中間地域	A区137号／住居	7c後	上顎臼歯1点・下顎臼歯9点・下顎骨1点・前肢骨2点	国分寺中間牛A（壮齢）	大江正直ほか1990
18					上顎臼歯10点・頭蓋骨2点	国分寺中間牛B（壮齢）	大江正直ほか1990
19	長野県佐久市	長峯1号墳	横穴式石室内／円墳（径9.1m）	7c後	臼歯破片（7破片以上）	幼齢（1才数カ月）のウマ下顎臼歯と共伴	宮崎重雄1988

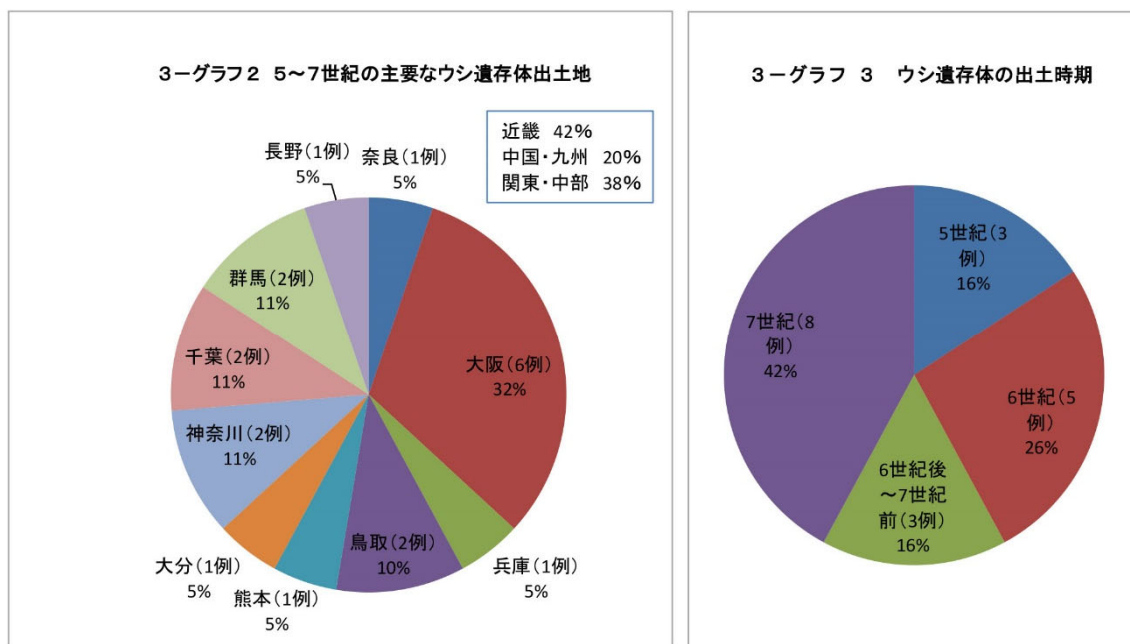
は短いが曲がっている⁽²⁶⁾。

牛形埴輪の埴丘での配列状況は、馬形埴輪や犬形埴輪・猪形埴輪などの動物埴輪群の中のひとつとして配列される傾向が指摘でき、同一空間に配置される形象埴輪は、鳥形埴輪・力士などの人物埴輪・大刀形埴輪や盾形埴輪などの器財埴輪・家形埴輪である傾向が指摘できる。牛形埴輪は、動物・鳥・人物・器財・家などが一連（1セット）となった形象埴輪群を有する古墳においてのみ樹立されていたものといえる。この点が、全国的に見て出土数が極端に少ない要因のひとつとしても考えられる。牛形埴輪の最も大きな特徴は、頭部に短い曲がった角が表現されている点であるといえ、他には力強く丸みをおびた体部と大腿部が膨らんだ脚部や、足先となる端部に馬形埴輪に見られる蹄の表現がないことも特徴のひとつといえる。

馬形埴輪に伴う馬甘（飼）に相当する人物埴輪の配置は見られず、牛甘（飼）を表現した人物埴輪の存在を窺い知ることはできない。

次に、遺跡出土のウシ遺存体から、検討を加えたい。5～7世紀の遺跡や古墳から出土した代表的なウシ遺存体は、近畿地方を中心に、九州地方から関東地方にかけて見つかった（3-表3、3-グラフ2）。時期別にその内容を見ていきたい（3-グラフ3）。

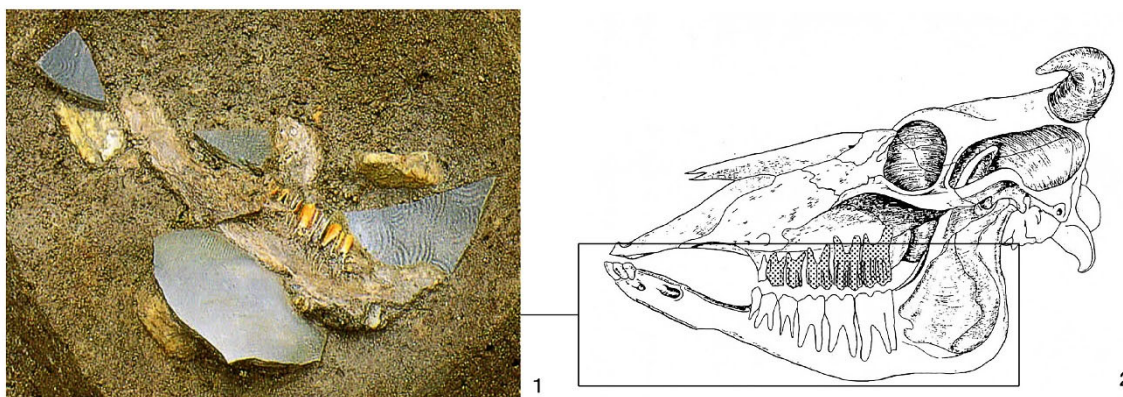
5世紀のウシ遺存体は、近畿地方の南郷大東遺跡（奈良県御所市）のほか、九州地方の宇土城三ノ丸跡（熊本県宇土市）と弊旗邸古墳1号墳（大分県中津市）から見つかった。南郷大東遺跡では貯水池（SX01・SX02）からウシ上下臼歯4点⁽²⁷⁾、宇土城三ノ丸跡の5号トレンチではウシ臼歯6点や下顎骨2点のほかには肋骨・前肢骨・後肢骨といったウシ2個体分と推定される骨が見つかった⁽²⁸⁾。直径20mの円墳である弊旗邸古墳1号墳からは、7才前後と推定されるウシ上顎臼歯6点と頭蓋骨片が見つかり、出土した集石遺構の性格と併せてウシの供儀痕跡と考えられている⁽²⁹⁾。



6世紀に入ると、ウシとウマの骨が共存して出土するようになり、ウシ遺存体の出土数は増加するが、地域的には近畿地方に集中する傾向が見られる。6世紀前半～中頃では、瓜破遺跡（大阪府大阪市）や池島・福万寺遺跡（大阪府八尾市）、6世紀後半には四条綴町D古墳（大阪府四条綴市）からの出土が知られている。瓜破遺跡の北-1区8ci下からは、刃物傷のあるウマの骨とともにウシの踵骨1点が見つかった⁽³⁰⁾。池島・福万寺遺跡では、第9a層からウシの上顎臼歯1点と臼歯破片、第10b面の溝17からウシの下顎臼歯破片が、いずれもウマの臼歯とともに見つかった⁽³¹⁾。規模不明の円墳である四条綴町D古墳からは、埋葬施設である横穴式石室内から、ウマの下顎臼歯とともにウシの下顎臼歯4点が出土している⁽³²⁾。また、6世紀のウシ遺存体としては、郡家遺跡（兵庫県神戸市）の土坑（1A区SK05）から、須恵器甕片とともにウシの下顎骨1点の出土が知られている（3-図5）⁽³³⁾。

6世紀後半～7世紀前半のウシ遺存体は、近畿地方の長原遺跡（大阪府大阪市）のほかに、山陰地方の長瀬高浜24号墳（鳥取県湯梨浜町）からの出土がある。長原遺跡では、柱穴（SP6001）の中からウシの前肢骨と後肢骨が左右1点ずつ出土しており、柱の抜き取りに伴ってウシ1個体分の四肢骨が埋納されたものと考えられている⁽³⁴⁾。直径14mの円墳である長瀬高浜24号墳からは、周溝上面から1～1才5カ月程度のウシの臼歯3点と骨、さらに周溝上面の土塁状遺構下層から壮齢のウシの臼歯3点が見つかった⁽³⁵⁾。

7世紀以降になると、出土数はさらに増加し、関東地方や中部山岳地方といった東日本地域にまで認められるようになり、出土地域のさらなる広がりや古墳のみならず、住居からの出土も認められるようになる。近畿地方では、先に述べた瓜破遺跡において、溝（SD407）からウシの下顎骨1点・肩甲骨1点・橈骨1点・中手骨1点・脛骨1点・中足骨1点・踵骨1点・距骨1点が見つかり、ウシ1個体と推定されている⁽³⁶⁾。関東地方の鉞切遺跡（神奈川県横須賀市）や蓼原古墳（神奈川県横須賀市）、上ノ台遺跡（千葉県千葉市）、上野国分僧寺・尼寺中間地域（群馬県前橋市）のほか、関東地方に近い中部山岳地方の長峯1号墳（長野県佐久市）からもウシ遺存体の出土が確認されている。鉞切遺跡の土坑（C区SK01）からは、ウシの頭蓋骨1点・臼歯3点以上が見つかり、仰向け状態で埋納されて



1：郡家遺跡1A区SK05 2：ウシ下顎骨

3-図5 ウシ遺存体・下顎骨の出土状況

いたことがわかっている⁽³⁷⁾。全長 28mの帆立貝式古墳である蓼原古墳では、周溝内に須恵器大甕や埴の破片を敷き詰めた 6 号址の下層から、鉄製の刀子やウマの骨とともにウシの脛骨と大腿骨が見つかった⁽³⁸⁾。上ノ台遺跡では住居（2 F-38）から、幅 4 cmの長さで輪切りとなったウシの左側脛骨の切断品と、もう一軒の住居（2 F-58）の床面からウシの臼歯 9～10 点（現存は 6 点）の出土が確認されている⁽³⁹⁾。上野国分僧寺・尼寺中間地域においても住居（A 区 137 号）から、壮齢のウシ（国分寺中間牛 A）の 1 個体分の上顎臼歯 1 点・下顎臼歯 9 点・下顎骨 1 点・前肢骨 2 点、さらにもう 1 個体分の壮齢のウシ（国分寺中間牛 B）の上顎臼歯 10 点・頭蓋骨 2 点が見つかった⁽⁴⁰⁾。直径 9.1mの円墳である長峯 1 号墳では、埋葬施設である横穴式石室内から、1 才数カ月程度の幼齢のウマの下顎臼歯とともに、ウシの臼歯破片（7 破片以上）が確認されている⁽⁴¹⁾。

ウシ遺存体は、5 世紀には少ないながら、近畿地方のほか九州地方で見つかっており、6 世紀になると、近畿地方を中心とした西日本地域からの出土が顕著に認められるようになる。さらに 7 世紀に入ると、関東地方を中心とした東日本地域からも出土するようになり、ウシの存在及び飼養・飼育の拡がりを窺うことができる。7 世紀以降になると、集落を構成する住居内からの出土が認められるようになる点も注意できる。

また、6 世紀に入るとウマの骨と共伴する例が認められるようになり、馬牛の存在についてその一体感を窺い知ることができるとともに、ウシ及びその骨を儀礼に用いて埋納したものと推定される例も認められるようになることも注意できる。

いわゆる殺牛殺馬の儀礼については、『日本書紀』巻 24 皇極天皇元年 7 月条の「戊寅，群臣相語之曰，随村々祝部所教，或殺牛馬祭諸社神，或頻移市，或禱河伯，既無所効。」（戊寅に、群臣相語りて曰く、「村々の祝部の所教の随に、或いは牛馬を殺して諸社の神を祭ひ、或いは頻に市を移し、或いは河伯に禱るも、既に所効無し」といふ。）という記述がよく知られている。6 月の旱魃のために群臣が集まって相談したさいに、村々では牛馬を殺して神に供えたが効果がなかったという記事である。9 世紀の事例ではあるが、北陸地方の寺家遺跡（石川県羽咋市）では、大型建設群の周辺からウマの歯や種不明の骨片の出土が報告されており、建物建設の際にも殺牛殺馬の儀礼が行われた可能性が示唆されている⁽⁴²⁾。さらに寺家遺跡では 8 世紀中頃から 10 世紀初頭の出土した動物遺存体 62 点のうち 24%がウマ歯、11%がウシ歯（若齢）であったと報告されており⁽⁴³⁾、馬牛が一体となって出土している。

以上の代表的なウシ遺存体の出土例の検討によって、5～7 世紀の日本におけるウシの存在と出土地の傾向及び出土遺構の性格など、大まかではあるがその傾向は把握できたものといえよう。

（2）装飾古墳の牛と想定できる図文

次に、装飾古墳で描かれた図文について検討を行いたい。装飾古墳で描かれた図文は、写実性に欠けた抽象的な描写のものが多く、その中に馬や鹿・猪などを表した動物図文を見ることができる。動物図文については、九州地方の 6 世紀後半に築造された直径約 15mの円墳である弁慶穴古墳（熊本県山



3-図6 五郎山古墳の復原壁画図



3-図7 兎沢9号墳の壁画図

鹿市)⁽⁴⁴⁾などで描かれている舟に乗るものも含めて、馬を表したものがその大半を占める⁽⁴⁵⁾。明確に牛と指摘できる図文は見当たらないが、牛を表した可能性を指摘できるものがある。

牛の最大の特徴は、角と体型である。牛の角は、前頭骨が著しく伸び出した角突起を角鞘（角表皮）で被ったものである⁽⁴⁶⁾。また、その体型は馬と比べて丸みをおびてずんぐりとしている。

九州地方の6世紀後半に築造された直径35mの円墳である五郎山古墳（福岡県筑紫野市）の横穴式石室の奥壁下段西寄りに描かれた動物2点⁽⁴⁷⁾は、同じ壁面に描かれた騎馬人物の馬2点の描写と比べると、頭部にある短い角（耳を表したものかもしれない）と丸みをおびてずんぐりとした体型の描写には、明らかに相違点を見いだすことができ（3-図6）⁽⁴⁸⁾，馬を描写した可能性が低いと考えられる。本資料は、斎藤忠による装飾古墳の図文集成では、「馬など」に分類され、示された図の顔面に角状の突起が描かれている⁽⁴⁹⁾。五郎山古墳の奥壁下段西寄りに描かれた動物2点は、狩猟の対象である鹿や猪、そして猟犬を描いた可能性が考えられるが、牛が描かれた可能性も考えられる。

また、東海地方の7世紀に築造された直径6～7.5mの円墳である兎沢9号墳（静岡県焼津市）の奥壁下段に、線刻によって描かれた猪（豚）と想定されている図も、角や体型の描写からは、牛を描いた可能性を指摘することができる（3-図7）⁽⁵⁰⁾。

以上が、数少ないながらも、装飾古墳で描かれた動物図文の中で、牛を表した可能性が指摘できる。

五郎山古墳の築造された地域は、旧国名では筑後国に相当する。『延喜式』諸国馬牛牧の牛牧・馬牛牧と比較すると、筑後国に兵部省が管理する牛牧は認められないが、隣接する筑前国に「能臣嶋牛牧」、肥前国に「柏嶋牛牧・早埼牛牧」の存在が認められる。九州北部の地域に、3カ所の牛牧の存在が認められることから、すでに6世紀以前に、この地域で牛の飼養・飼育及び管理が行われていたことが十分に考えられる。

（3）高句麗壁画古墳の牛図

高句麗壁画古墳で描かれた牛図については、牛舎や牛轎車のほかに、牽牛織女図が見られる⁽⁵¹⁾。本

節では、集安及び平壤周辺の古墳で描かれた牛に関連した代表的な図を紹介し、その内容について検討を図っていきたい。

永和 13 (357) 年銘墓誌のある安岳 3 号墳（北朝鮮黄海南道安岳郡）は、南北 33m×東西 30mの方台形墳である。安岳 3 号墳の埋葬施設は、羨道・羨室・両側（西側と東側）に側室の付いた前室・奥室・回廊によって構成される横穴式石室（各室の天井は隅三角持ち送り構造）で、高句麗で築造された古墳の中では最も複雑な構造をしている。西側室への入口となる前室の壁面に、墓誌が墨書で書かれている。墓誌銘から、墓主（被葬者）は、中国遼寧省蓋平県出身の「冬壽」という人物であったことがわかっている⁽⁵²⁾。墓主（被葬者）像は、前室西側室の奥壁（西壁）に描かれ、前室東側室では、厨房・井戸・車庫といった生活風俗図が描かれているが、その中に厩や牛舎の図を見ることができる。前室東側室の南壁面に描かれた牛舎内には、三頭（匹）の牛が描かれている（3－図 8－1）。いずれも赤色で塗られた短い角を有する牛で、黄牛であったことが予測できる。

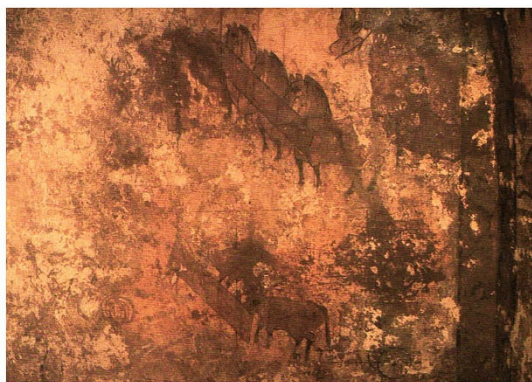
同じく牛舎が描かれた古墳としては、4 世紀末頃～5 世紀初頭の規模墳形不明である薬水里古墳（北朝鮮平安南道南浦市）がある。薬水里古墳の埋葬施設は、前室と奥室から構成される二室構造の横穴式石室で、天井は穹窿形でその上に隅三角持ち送り天井と頂石が積まれている。壁画は、厚く漆喰を塗った上に描かれている。牛舎図は、前室下段部に厩の図などとともに描かれる。瓦葺きと推定される牛舎



1



2



3

1：安岳 3 号墳 2：薬水里古墳 3：徳興里古墳

3－図 8 高句麗壁画古墳の牛舎図

内には、二頭（匹）の牛が描かれ、その傍らに人物図が描かれているが、とても小さく描かれていることから詳細はわからないが、牛を世話する人物を描いた可能性も考えられる（3－図8－2）⁽⁵³⁾。描かれた牛は、安岳3号墳と同様に短い角を有する牛で、黄牛と想定できる。

4世紀末頃～5世紀初頭の一辺17mの方台形墳である舞踊塚（中国吉林省集安市）では、前室と奥室から構成される二室構造の横穴式石室の奥室（天井は三段の平行持ち送りの上に平行と隅三角を組み合わせた八角形の五段持ち送り構造）の左側壁に、牛轎車図が描かれている。牛は、内湾した短い角や乳房などが表現されており、愛らしい印象的な風貌で、黄牛が描かれたものと推定される。また、轎車を引く牛の傍らには、牛を牽く黒い頭巾を被った人物の図（御者）が描かれている（3－図9－1）⁽⁵⁴⁾。御者は、牛甘（飼）である可能性が考えられる。

永樂18（408）年墓誌銘のある規模不明の方台形墳である徳興里古墳（北朝鮮平安南道南浦市）は、薬水里古墳と同様に、前室と奥室から構成される二室構造の横穴式石室が、埋葬施設として採用されている。壁画は、白い漆喰で塗られた壁面及び天井全面に描かれている。前室の北壁西側の中央部に墓主（被葬者）像が描かれ、天井は穹窿形でその上に平行持ち送りと頂石が積まれている。前室天井には、狩猟図・神仙及び神獣図・北斗七星などの日月星辰図が描かれ、墓誌銘が記されている。天井北側に書かれた墓誌銘から、墓主（被葬者）は「釋加文佛弟子」（仏教徒）である信都県（中国河北省衡水市冀



1



2



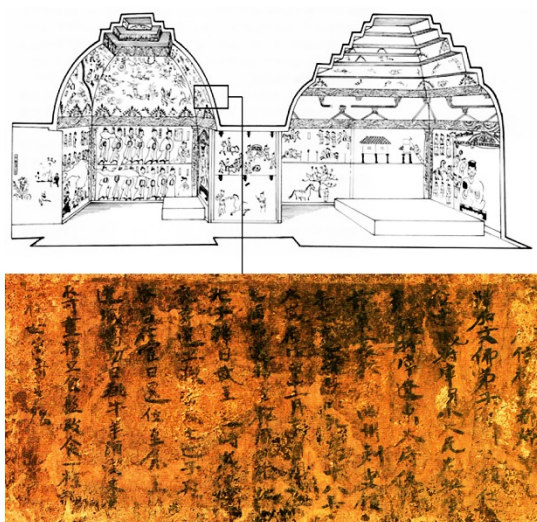
3



4

1：舞踊塚 2・3：徳興里古墳 4：双楹塚

3－図9 高句麗壁画古墳の牛轎車図



3-図10 徳興里古墳の石室と墓誌銘

州区) 出身の「鎮」という人物であることがわかっている。「鎮」の柩は、永樂18(408)年12月25日に石室内に移されて、羨道の西壁の墨書銘によれば、翌(409)年2月2日に墓が閉塞されたことがわかっている(3-図10)⁽⁵⁵⁾。

徳興里古墳で描かれた牛図については、牛舎や牛轎車図のほか、牽牛織女図がある。牛舎図は、奥室の南壁下段部で見ることができ、牛舎内には、二頭の牛とその後方に牛轎車が描かれている(3-図8-3)。牛舎図の上段部には、厩の図が描かれており、馬を世話する人物も描かれている。更に、前室と奥室を繋ぐ通路東壁上段部及び奥室北壁東側

で、女主人公の牛轎車図が見られ、轎車を引く牛の傍らに、牛を牽く人物(御者)の図が描かれている(3-図9-2・3)。この牛を牽く人物(御者)は、「輪のように髪を編んで横につけた」⁽⁵⁶⁾ 髪が特徴的で、牛甘(飼)の可能性が高いと考えられる。

次に、少しだけ牽牛織女図に触れておきたい⁽⁵⁷⁾。牽牛織女図の牽牛が牽く牛については、奥室で描かれた牛舎内の牛とは明らかに描き方が異なっている。牛の頭部の輪郭と耳・角、足先を強調した愛嬌のある描き方は、前述した牛轎車の牛の描き方と同様である。牛轎車の牛と牽牛織女の牛は、同一人物によって描かれた可能性が指摘できる。

最後に、5世紀末頃の規模墳形不明である双楹塚(北朝鮮平安南道南浦市)の牛轎車図を見ておきたい。双楹塚では、前室と奥室から構成される二室構造の横穴式石室が採用されている。壁面は自然石で構築されているが、表面は天井まで厚く漆喰が塗られ、壁画が描かれている。牛轎車図は、羨道東壁に描かれ、風鈴をずらりと付けた豪華な牛轎車で、牛も品格あるように豪華に描かれている(3-図9-4)⁽⁵⁸⁾。また、牛に伴う人物(御者)と轎車の後方にも人物(従者)が描かれている。御者は、牛甘(飼)である可能性が考えられる。

また、5世紀前半の南北17m×東西13mの方台形墳である安岳1号墳(北朝鮮黄海南道安岳郡)では、玄室天井部の壁画に、怪奇な姿を持った人頭牛の図が描かれている⁽⁵⁹⁾。安岳1号墳の天井部で描かれた怪奇な獣類の図は、仏教的色彩が強い高句麗の宗教的観念の表れと言われている⁽⁶⁰⁾。

以上、高句麗壁画古墳の中で、牛図が描かれた代表例となる古墳について紹介した。高句麗壁画古墳での牛図では、厩と牛舎が一連となって描かれる点が特徴として指摘できる。更に、角の長さから判断して、家畜として飼われていた牛は、黄牛と推定できる。また、牛轎車図で、髪(黒頭巾及び輪髪など)に特徴を持った人物が、牛甘(飼)と推定できよう。

第4節 比較分析による共通点と相違点

以上の検討結果から、牛形埴輪は、馬形埴輪などの動物埴輪群のひとつとして配列されていることが理解できた。また、牛形埴輪と同一空間に配列された形象埴輪群としては、鳥形埴輪や力士などの人物埴輪、器財埴輪や家形埴輪であったことが理解できた。牛形埴輪は、前述のとおり、動物・鳥・人物・器財・家などが一連（1セット）となった形象埴輪群を有する古墳において樹立されていたものといえる。古墳の配列状況からは、残念ながら、牛甘（飼）を表現した人物埴輪の存在を窺い知ることはできなかった。

牛形埴輪については、現状では近畿地方の四条7号墳が最も古い資料で、5世紀後半～6世紀代にかけて、近畿地方と関東地方の一部の古墳でのみ確認できる。牛形埴輪は、5世紀後半には、日本で牛の飼養・飼育及び管理が行われていたことを証明する資料である。牛形埴輪の検討結果を肯定する動物遺存体としては、前節で検討したとおり、近畿地方の南郷大東遺跡及び九州地方の宇土城三ノ丸跡や弊旗邸古墳1号墳から5世紀のウシ遺存体の出土が確認されている。

また、5世紀以前のウシ遺存体については、九州地方や沖縄地方の離島や菜畑遺跡（佐賀県唐津市）などで散見する弥生時代の報告例について、近年、見逃すべき問題ではないことが指摘されている⁽⁶¹⁾。弥生時代のウシ遺存体の報告例について、中村潤子（中村潤子 2018）は「年代の問題は残ろうが、本格的な牛飼育の日本での定着に先んじた試みの現れ」⁽⁶²⁾であるという考えを示している。九州地方や沖縄地方以外では、関東地方の伊皿子貝塚遺跡（東京都港区）の2号方形周溝墓から、弥生時代の出土例が報告されている⁽⁶³⁾が、古墳時代以降のものである可能性が指摘されている⁽⁶⁴⁾。

ウシ遺存体は、5・6世紀にかけて近畿地方を中心とした西日本地域での出土が中心であるが、7世紀以降になると、関東地方や中部山岳地方などの東日本地域からの出土も確認でき、出土例が増加することがわかっている。さらに、6世紀以降のウシ遺存体については、近畿地方の郡家遺跡のウシ下顎骨や長原遺跡のウシ四肢骨、関東地方の鉞切遺跡のウシ頭蓋骨など、儀礼にウシの一部を用いた例が知られるようになる。

さらに、『日本書紀』巻第18・安閑天皇2年9月条に「丙辰，別勅大連云，宣放牛於難波大隅嶋与媛嶋松原。冀垂名於後。」^{へいしん おおむらじ みことのり なにわ おおすみのしま ひめしまのまつばら}（丙辰，別に大連に勅して，「牛を難波の大隅島と媛島松原とに放牧せよ。望むらくは，名を後世に伝えたい。」と仰せられた。）と記されている⁽⁶⁵⁾。牛形埴輪やウシ遺存体の出土例と併せて，5・6世紀にかけて，近畿地方で牛の放牧がなされていたことがわかる。そのなかでも難波（大阪府大阪市）の地が，新たに渡来した動物の飼養・飼育の地としての役割を担っていたとの指摘もある⁽⁶⁶⁾。

装飾古墳の図文では，明確に牛を表したものは見られないが，数は少ないながらも，6世紀以降に描かれた動物図文の中に，牛を表した可能性が指摘できるものがある。この図文のある古墳があった地域には，『延喜式』諸国馬牛牧にみえる牛牧があり，6世紀以前から牛の飼育・管理が行われていた可能性があることも，この指摘を説得力あるものにする。高句麗壁画古墳の牛図では，4世紀後半～5世紀



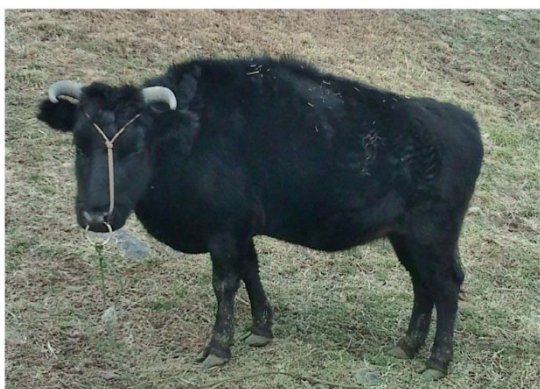
3-図11 魏墓室壁画の牛図

初頭の図の中に、牛舎と牛轎車、牽牛織女図を見ることができた。高句麗壁画古墳の牛舎図は、前述のとおり、厩と牛舎が一連となって描かれる点が指摘でき、高句麗では、馬と牛が一連となって飼養・飼育及び管理がなされていたことが理解できる。高句麗壁画古墳以前に築造された中国大陸の墓室壁画に目を向けると、3世紀前半～後半に築造された魏の新城1号墳（中国甘肅省嘉峪関市）では、牛と馬の一連となった飼養・飼育の状況や、同5号墳では畠を耕す牛と放牧された馬の姿などを見ることができる（3-図11）⁽⁶⁷⁾。馬と牛の一連となった飼養・飼育の形態は、高句麗だけに限らず、中国大陸や朝鮮半島で普遍的な姿であったことが理解できる。

高句麗壁画古墳の牛轎車図からは、牛甘（飼）と推定できる人物像を認識することができた。

日本の牛形埴輪及びウシ遺存体を中心とした考古資料と高句麗壁画古墳の牛図との共通点は、馬と牛の一連となった飼養・飼育及び管理である。高句麗での馬と牛の一連となった飼養・飼育及び管理の形態は、5世紀後半以降の日本においても同様であったことが予測できる。榛名山の噴火による軽石で埋没した6世紀中頃の黒井峯遺跡（群馬県渋川市）では、集落内で家畜小屋が見つかった。家畜小屋で飼われていた家畜の種類としては、馬及び牛の存在が指摘されており⁽⁶⁸⁾、馬と牛の一連となった飼養・飼育及び管理の形態に合致する。

また、牛形埴輪の形状からは、日本へ渡来した牛は、黄牛の一種と予想されるが、日本の在来牛とし

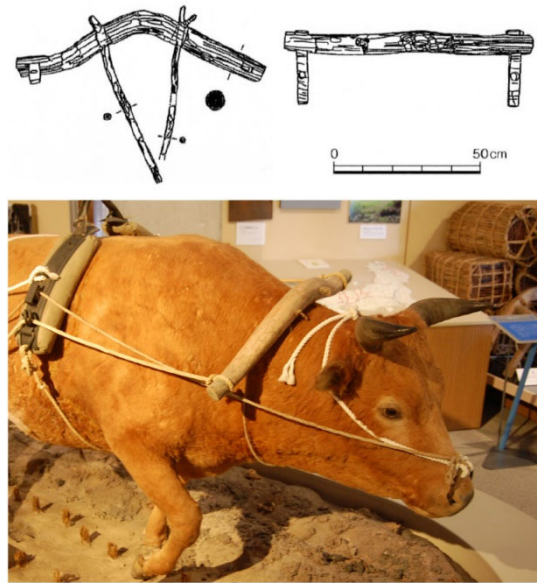


3-図12 在来牛の見島牛（筆者撮影）

ては、見島牛（国指定天然記念物・山口県萩市）や口之島牛（鹿児島県十島村）が知られている（3-図12）。在来牛は、体高1.2m前後の牛としては小柄牛であるが、DNA分析では、ホルスタイン種に近い北方系の牛が起源とされている⁽⁶⁹⁾。高句麗壁画古墳で描かれた牛の一種が、日本に渡来した牛である可能性が高いと考えられる。

相違点については、高句麗壁画古墳では牛甘（飼）

を伴う牛轎車が描かれているが、日本の牛形埴輪の配列状態や装飾古墳の図文からは、牛甘（飼）や牛轎車の存在を認識することはできない。日本では、都城である藤原京（奈良県橿原市・明日香村）や平城京（奈良県奈良市）から、物資運搬用の牛車^{うしぐるま}に用いられた軛^{くびき}などが出土しており（3－図13）、奈良時代（8世紀）以前に、牛車^{うしぐるま}が使用されていたことの指摘がなされている。しかしながら、乗用の牛車^{ぎっしや}の出現は、平安時代に入ってからと考えられおり⁽⁷⁰⁾、5・6世紀にかけての、牛甘（飼）や牛轎車の存在を示す資料は見当たらない。



3－図13 藤原京出土の軛と軛の使用例
（写真は牛の博物館にて筆者撮影）

第5節 結論

ここまでの資料検討及び比較分析を踏まえて、牛の渡来と牛甘（飼）の特性について考察し、結論としたい。

まずは、牛の渡来について考えたい。南郷大東遺跡及び宇土城三ノ丸跡・弊旗邸古墳1号墳から出土した5世紀代のウシ遺存体や、5世紀後半の四条7号墳での牛形埴輪の存在によって、牛が5世紀後半以前に日本へと渡来し、すでに定着していたものであったことが理解できる。一方、日本での初期馬具の出土は、4世紀末頃～5世紀後半の時期に該当し、馬の飼養・飼育及び管理に伴う知識と技術は、朝鮮半島からの渡来人（集団）によって、5世紀後半以前に持ち込まれたことは確実といえる⁽⁷¹⁾。馬と牛の渡来は、時間的に見て大差がないものと考えられる。先述したように、高句麗でも日本でも馬と牛の一連となった飼養・飼育及び管理が認められるので、この時間的な近さは、馬と牛の飼養・飼育及び管理の知識と技術が、一連のものとして朝鮮半島から日本に伝えられたことを意味していると考えべきである。次に、牛甘（飼）の特性を考えるにあたって、牛の利用について考えておきたい。牛の利用としては、まず、牛耕や牛車が考えられるが、牛耕については、水稻での極小区画水田から条里型方格地割の大区画水田への変化の理由として、牛馬耕の導入・普及が考えられている⁽⁷²⁾。小区画水田に伴う小畦畔の消滅は、近畿地方で7世紀代、東海・関東・中部地方で8～9世紀代といわれている⁽⁷³⁾。牛車については、前述のとおり、7世紀以降の都城を中心に、物資運搬用として牛車^{うしぐるま}が使用されていたようであるが、乗用の牛車^{ぎっしや}は、平安時代に入ってからと考えられている⁽⁷⁴⁾。牛耕や牛車として、牛の利用が普及するのは、奈良時代（8世紀）以降と考えられる。

牛耕や牛車の他に、牛の利用法としては、搾乳や乳製品、牛肉としての利用が考えられる。

搾乳については、近畿地方の長屋王邸跡（奈良県奈良市）から出土した長屋王家木簡（8世紀）の中

に「牛乳持参人米七合五タ 受丙万呂九月十五日」と記されたものがある(3-図14-1)⁽⁷⁵⁾。牛乳を持参した丙万呂に、米が支給されたことがわかる。また、弘仁6(815)年に編纂された『新撰姓氏録』左京諸蕃下に、「和薬使主、出自呉国主照淵孫智聡也、……(略)……持内外典薬書、明堂図等百六十四卷、……(略)……男善那使主、……(略)……依献牛乳賜姓和薬使主」という記述が見られる。呉国の照淵の孫である智聡の子の善那が、孝徳天皇に牛乳を献じて、和薬使主の姓を賜ったことがわかっている⁽⁷⁶⁾。

一方、乳製品については、平城京(奈良県奈良市)出土の二条大路木簡の中に、「参河国貢蘇」・「武蔵国進上蘇」・「上総国精蘇」・「美濃国蘇」と記された荷札木簡が見つかった⁽⁷⁷⁾。「蘇」は、現在でいうバターやチーズ・ヨーグルト・練乳・粉乳などの乳製品と考えられてきたが、近年の研究によって、牛乳を煮詰めて作るというその製法が判明し、バターや濃縮乳、あるいは全粉乳のようなものであったといわれている⁽⁷⁸⁾。「蘇」の生産は、中部地方の奈良～平安時代の集落跡である吉田川西遺跡(長野県塩尻市)から出土した高台付き皿の底部外面に「蘇」と墨書された9世紀中頃の土師器が見つかったことで(3-図14-2)、諸国の牧で行われていたと考えられるようになった。吉田川西遺跡は、「埴原牧」を管理した集落と考えられている⁽⁷⁹⁾。

また、奈良時代には、典薬寮所属の乳長上・乳戸が、中央での搾乳や乳製品の加工を行っていたことがわかっており⁽⁸⁰⁾、このことと善那への和薬使主姓の授与から、牛乳・乳製品は薬として使用されてい

たことが考えられる。このことは、牛形埴輪の性格として、中村潤子(中村潤子2015)が示唆した「雌が出す乳の恵みを示す」⁽⁸¹⁾ものとして樹立されたという意見にも合致する。そして、薬としての牛乳・乳製品の需要・供給は、中央の皇族や貴族層が中心で、軍馬生産としての馬の需要・供給とは違い、牛の頭数が少なかったことが推測できる。言い換えれば、牛乳や乳製品が、食品としての位置付けのなかった古代日本では、数多くの牛の生産の必要性がなかったといえる。牛形埴輪が、動物・鳥・人物・器財・家などが一連(1セット)となった形象埴輪群を有する古墳においてのみ樹立されていることから、継体天皇の陵墓である今城塚古墳を筆頭に、天皇や有力な首長のみが、牛の生産・保有に関係していたことがわかる。

さらに、牛乳・乳製品が仏教と深く関係している点も注意される。釈迦が乳粥で体力を回復した逸話があるように、牛乳・乳製品は僧侶に許された貴重な動物性の蛋白源であったし、『涅槃経』(3世紀末頃～4世紀初頭頃)には、



1: 長屋王邸跡
(8世紀)
2: 吉田川西遺跡
(9世紀)

3-図14 「牛乳」木簡と「蘇」墨書土器

修行過程の譬えとして、乳の五味といわれる乳・酪・生酥・熟酥・醍醐が前者から後者が生まれるという形で登場する。このような事情からか、仏教儀礼の施物・供物として乳製品が用いられたが、古代日本には醍醐が実在しなかったため、これには多く酥＝蘇が使われた⁽⁸²⁾。仏教伝来以後はこうした乳製品需要があったものの、さほど多いとは言えず、大量の牛を必要とする状況だったとはいえない。仏教伝来以前ならなおさらであろう。

一方、牛肉については、『日本書紀』巻第3・神武天皇即位前戊午年秋8月条に「已而弟猾大設牛酒以勞饗皇師焉」(已にして弟猾、大きに牛酒を設けて皇師を勞ぎ饗す。)という記述が見られる。天皇に反逆を企んだ菟田県(奈良県宇陀市付近)の首領であった兄猾が死に、弟猾が「牛酒」で、天皇の軍をねぎらう宴をひらいたことがわかる。牛酒とは、牛肉と酒という意味として解釈されている⁽⁸³⁾。この記述からも、少なかったとは思われるが、牛肉が食されていたことがわかる。

5・6世紀の古墳時代の日本(倭国)では、ここまで見てきたように牛の利用は限定的で、そのため牛そのものが極めて少なかったと想定され、それゆえに、馬甘(飼)に比べて、牛を専門的に取り扱った牛甘(飼)も極めて少なかったと考えられる。したがって、牛が渡来した当初は、馬甘(飼)が馬の飼育と一緒に、牛の飼養・飼育及び管理を行っていた可能性を指摘したい。このことは、本章第2節で先に紹介した史料3の記述から推定される、馬甘(飼)と牛甘(飼)が明確に分化された存在でなかったことに相応し、牛甘(飼)の特性でもあったことを指摘したい。

註

(1) a. 白石太郎「古代東国の牧と馬の文化」『東国の古墳と古代史』学生社, 2007, pp. 191~239.

b. 白石太郎『考古学からみた倭国』青木書店, 2009.

(2) a. 佐伯有清『牛と古代人の生活—近代につながる牛殺しの習俗—』至文堂, 1967.

b. 柴田清吾『日本古代家畜史の研究』学術書出版会, 1969.

以上のa・b文献のように古代の牛についての代表的な研究があるが、縄文時代や弥生時代の遺跡から出土したウシ骨を検討の中心としている。現在、縄文時代や弥生時代の遺跡から出土したウシ骨の大半が、古墳時代以降のものが混入して出土したと考えられている。

(3) a. 亀井正道『人物・動物はにわ(日本の美術第346号)』至文堂, 1995

b. 若松良一「人物・動物埴輪」『古墳時代の研究9 古墳Ⅲ・埴輪』雄山閣, 1998, pp. 108~150.

c. 若狭徹『もっと知りたいはにわの世界—古代社会からのメッセージ—』東京美術, 2009.

(4) 中村潤子「埴輪にみる古代日本の大型家畜の牽引使役について—考古資料と民具の間V—」『同志社大学考古学シリーズXI 森浩一先生に学ぶ 森浩一先生追悼論集』, 同志社大学考古学シリーズ刊行会, 2015, pp. 881~891.

(5) 註4文献, p. 890.

(6) 遺跡から出土する動物質遺物についての考古学での総称である。

参考文献として、松井章『動物考古学』京都大学学術出版会、2008.

- (7) a. 松井章「南郷大東遺跡出土の動物遺存体」『南郷遺跡群Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所、2003, pp. 303～308.
b. 松井章「人間と家畜―動物考古学の立場から―」『野生から家畜へ』ドメス出版、2015, pp. 195～220.
- (8) 西本豊弘・新美倫子編『事典 人と動物の考古学』吉川弘文館、2010.
- (9) 天武朝(672～685年)の遣新羅使の出国から帰国までの期間は、『日本書紀』巻第29・天武天皇下によれば、
(A) 4(675)年7月～5(676)年2月(大使:大伴連国麻呂, 副使:三宅吉士入石)の7カ月, (B) 5(676)年10月～6(677)年2月(大使:物部連麻呂, 小使:山背直百足)の4カ月, (C) 10(681)年7月～同年9月(大使:采女臣竹羅, 小使:当摩公楯)の2カ月である。(D) 13(684)年4月～14(685)年5月(大使:高向臣麻呂, 小使:都努臣牛甘)の13カ月が実に長期間であったことがわかる。
- (10) 古畑徹「七世紀末から八世紀初にかけての新羅・唐関係―新羅外交史の一試論―」『朝鮮学報』第107号, 朝鮮学会, 1983, pp. 1～73.
- (11) 『日本書紀』巻第15・顕宗天皇即位前紀でも、「天皇曰、吾是去来穗別天皇之孫。而困事於人飼牧牛馬。」(天皇曰はく、「^{のたま}吾^{われ}は^{これい}是^ざ去^ほ来^{わけ}穗^{のすめ}別^{らみこと}天^{みまご}皇^{しか}の^{ひと}孫^{たしな}なり。而^{つか}る^{うしうま}を^か人^かに^か困^み事^{へて}、牛^{うしうま}馬^かを飼^か牧^かふ。」)と記される。「飼牧牛馬」の記述は、未分化であったことの裏付けといえる。
- (12) 鈴木裕明ほか『四条遺跡Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所、2010.
- (13) a. 菱田淳子ほか『特別展 茶すり山古墳―巨大円墳に眠る但馬の王―』兵庫県立考古博物館、2010.
b. 渡辺大直「地域の宝・但馬牛物語5 埴輪になった牛 朝鮮半島から渡来」『日本海新聞(2015年11月1日・但馬版)』新日本海新聞社、2015, p. 4.
- (14) 吉村幾温「6 D-27号墳」『寺口忍海古墳群』新庄町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所、1988, pp. 34～52.
- (15) a. 丹野拓『平成20年度特別展 岩橋千塚』和歌山県立紀伊風土記の丘、2008.
b. 萩野谷正宏ほか『大王の埴輪・紀氏の埴輪―今城塚と岩橋千塚―』和歌山県立紀伊風土記の丘、2011.
c. 和歌山県立紀伊風土記の丘編・発行『大日山35号墳東造出復元埴輪設置の軌跡』2015.
- (16) 註15a文献に同じ。
- (17) 今西康宏・渡井彩乃『大王墓にみる動物埴輪』高槻市立今城塚古代歴史館、2015.
- (18) a. 笠原勝彦『市営住宅梶第一団地建替に伴う埋蔵文化財発掘調査 梶遺跡』守口市教育委員会、1991.
b. 千賀久『特別展はにわの動物園Ⅱ―近畿の動物埴輪の世界―』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、1991.
c. 註3a文献に同じ。
d. 内田真雄編『三島と古代淀川水運Ⅱ―今城塚古墳の時代―』高槻市立今城塚古代歴史館、2011.
- (19) 唐古・鍵考古学ミュージアム編・発行『羽子田1号墳の新知見 平成22年度速報展解説シート』2010.
- (20) a. 田原本町教育委員会編・発行『田原本の遺跡5 田原本の埴輪』2007.
b. 註19文献に同じ。
- (21) 高橋克壽ほか『奈良山発掘調査報告Ⅰ―石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査―』奈良文化財研究所、2005.

- (22) 註4文献, p. 890.
- (23) a. 昼神車塚古墳調査会編・発行『昼神車塚古墳発掘調査概要(現地説明会資料)』1978.
 b. 富成哲也「大阪府昼神車塚古墳」『日本考古学年報(1976年版)』29, 日本考古学協会, 1978, pp. 64~67
 (図版17~18) .
- (24) 註3a文献・註18b文献に同じ。
- (25) 註3a文献に同じ。
- (26) a. 滝口宏「千葉縣芝山古墳群調査速報」『古代』第19・20号, 早稲田大学考古学会, 1956, pp. 49~64.
 b. 千葉県立房総風土記の丘編・発行『企画展 房総のはにわ』1982.
- (27) 註7a文献に同じ。
- (28) 西中川駿「宇土城三ノ丸跡出土の動物骨について」『宇土城三ノ丸跡』宇土市教育委員会, 1982, pp. 71~79.
- (29) 桃崎祐輔「幣旗邸古墳1号墳出土の家牛(*Bos taurus*) 歯・家犬(*Canis familiaris* LINNAEUS) 骨」『幣旗邸古墳1号墳』中津市教育委員会, 1995, pp. 20~23.
- (30) 藤田正勝・宮路淳子・松井章「瓜破遺跡(U R 00-8次)発掘調査出土の動物遺存体」『瓜破遺跡発掘調査報告Ⅱ』大阪市文化財協会, 2002, pp. 128~133.
- (31) 畑暢子・井上智博ほか『池島・福万寺遺跡2(福万寺I期地区)―遺構・遺物編―』大阪府文化財センター, 2002.
- (32) a. 註2a文献に同じ。
 b. 桃崎祐輔「古墳に伴う牛馬供犠の検討―日本列島・朝鮮半島・中国東北地方の事例を比較して―」『古文化談叢』第31集, 九州古文化研究会, 1993, pp. 1~141.
 c. 註31文献に同じ。
- (33) 村尾政人ほか『郡家遺跡第75次発掘調査報告書』郡家遺跡調査団, 2004.
- (34) 久保和士「動物遺体の調査結果と検討」『大阪市平野区長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅱ』(財)大阪市文化財協会, 1999, pp. 107~120.
- (35) a. 井上貴央「長瀬高浜遺跡より出土した人骨と動物遺体について」『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅵ(本文編)』鳥取県教育文化財団, 1983, pp. 285~312.
 b. 註29文献に同じ。
- (36) 丸山真史「瓜破遺跡(U R 11-1次調査)出土のウシについて」『瓜破・住道矢田・矢田遺跡発掘調査報告』大阪市博物館協会大阪文化財研究所, 2013, pp. 533~535.
- (37) 小出義治ほか『鉞切遺跡―C・D地点の調査―』鉞切遺跡調査団・東アジア古代学会, 1986.
- (38) a. 鈿持輝久「蓼原遺跡出土の自然遺物について」『蓼原―神明地区埋蔵文化財調査報告(1)―』横須賀市教育委員会, 1987, pp. 176~184.
 b. 註29文献に同じ。
- (39) 金子浩昌「上ノ台遺跡出土の獣類遺体」『千葉・上ノ台遺跡(付篇)』, 千葉市教育委員会, 1981, pp. 13~18.

- (40) 大江正直ほか「上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体」『上野国分僧寺・尼寺中間地域4―本文編2―』群馬県教育委員会, 1990, pp. 707～935.
- (41) 宮崎重雄「長野県佐久市長峯古墳群出土の馬歯・馬骨」『長峯古墳群』佐久市教育委員会, 1988, pp. 付編V～VI.
- (41) a. 小嶋芳孝「XXX 寺家遺跡出土の動物遺体について」『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター, 1988, pp. 230～232.
- b. 松井章『東アジアにおける家畜の起源と伝播に関する動物考古学的研究―特に豚, 馬, 牛について―』平成15年度～18年度科学研究費補助金・基礎研究(A)(課題番号15202023)研究成果報告書, 奈良文化財研究所, 2007.
- (42) 註41a 文献, p. 231.
- (44) 原口長之「弁慶ガ穴古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』, 熊本県教育委員会, 1984, pp. 52～55.
- (45) 斎藤忠「装飾古墳とその図文」『斎藤忠著作選集第3巻 古墳文化と壁画』, 雄山閣出版, 1997, pp. 129～247.
- (46) a. 遠藤秀紀『アニマルサイエンス2 ウシの動物学』東京大学出版会, 2001.
- b. 註8 文献に同じ。
- c. 奥州市牛の博物館編・発行『角―進化の造形―』, 2014.
- (47) 報告書(小田富士雄1998)では, 2点ともに同じ動物で, 馬か犬と想定されている。
小田富士雄『国史跡 五郎山古墳―保存整備事業に伴う発掘調査―』筑紫野市教育委員会, 1998.
- (48) 国立歴史民俗博物館編『装飾古墳の世界』朝日新聞社, 1993.
- (49) 註45 文献, p. 235.
- (50) 斎藤忠「兎沢古墳群9号墳の壁画の発見について」『笛吹段・兎沢古墳群』駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所, 1984, pp. 66～68.
- (51) 耿鉄華『高句麗古墓壁画研究』吉林大学出版部, 2008.
- (52) 早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005.
- (53) a. 金基雄『朝鮮半島の壁画古墳』六興出版, 1980.
- b. 朝鮮画報社出版部編『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社, 1985.
- c. 註52 文献に同じ。
- (54) 註52 文献・註53a 文献に同じ。
- (55) a. 註52 文献・註53a 文献・註53b 文献に同じ。
- b. 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院・朝鮮画報社編『徳興里高句麗壁画古墳』講談社, 1986.
- c. 南秀雄(大阪市文化財協会文化財研究部)編・発行『図像構成からみた高句麗前期の壁画古墳の特性と被葬者の出自の研究(平成17年度～平成19年度科学研究費補助金基礎研究(C)研究成果報告書)』, 2007.
- (56) 註53b 文献, p. 89.

- (57) 本論第4章参照。
- (58) a. 金元龍『韓国美術全集4 壁画』同和出版公社, 1974.
b. 註53a 文献に同じ。
- (59) 高句麗文化展実行委員会編・発行『高句麗文化展図録』1985.
- (60) 註53a 文献に同じ。
- (61) 中村潤子「大型家畜の牽引使役と古代日本の馬鋤について—考古資料と民具の間VI—」『同志社大学考古学シリーズⅪ 実証の考古学 松崎和人先生退職記念論文集』同志社大学考古学研究室, 2018, pp. 379～394.
- (62) 註61 文献, p. 390.
- (63) a. 西中川駿ほか「第2号方形周溝墓西溝出土の家牛 (*Bos taurus*) 頭骨」『伊皿子貝塚遺跡』港区教育委員会・伊皿子貝塚遺跡調査会, 1981, pp. 476～486.
b. 西中川駿(鹿児島大学農学部獣医学科) 編・発行『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛, 馬の渡来時期とその経路に関する研究(平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書)』1991.
- (64) 北條朝彦「丑」『十二支になった動物たちの考古学』新泉社, 2015, pp. 21～34.
- (65) 註9a 文献に同じ。
- (66) 積山洋「牛馬観の変遷と日本古代都城」『古代文化』第59巻第1号, 古代学協会, 2007, pp. 40～55.
- (67) 中国墓室壁画全集編集委員会編『中国墓室壁画全集1 漢魏晋南北朝』河北教育出版社, 2011.
- (68) a. 石井克己ほか『黒井峯遺跡発掘調査報告書』子持村教育委員会, 1990.
b. 石井克己・梅沢重昭『日本の古代遺跡を掘る4 黒井峯遺跡—日本のポンペイ—』読売新聞社, 1994.
牛の存在は, 脂肪酸分析結果によるものであるが, その手法と結果に問題が生じて, 科学的方法による証明はなされていないが, 集落内に馬とともに牛が存在していた可能性は十分に考えられる。
- (69) 馬の博物館・牛の博物館編『馬と牛』馬事文化財団・牛の博物館, 2006.
- (70) 註64 文献, p. 33.
- (71) 本論第2章参照。
- (72) 斎藤英敏「水田跡研究の新視点—群馬県における水田跡理解の現状—」『考古学研究』第50巻第2号, 考古学研究会, 2003, pp. 43～58.
- (73) 註72 文献, p. 52.
- (74) 註70 に同じ。
- (75) 註64 文献, p. 24.
- (76) 佐藤健太郎「古代日本の牛乳・乳製品の利用と貢進体制について」『関西大学東西学術研究所紀要』第45号, 関西大学東西学術研究所, 2012, pp. 47～65. (佐藤健太郎『日本古代の牧と馬政官司』塙書房, 2016 に再録)
- (77) 註64 文献, p. 23. 註76 文献, p. 55.
- (78) 註76 文献, p. 51～52.
- (79) a. 原明芳・金原正ほか『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3—塩尻市内その2—吉田川西遺跡』

日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター，1989.

b. 原明芳『奈良時代からつづく信濃の村 吉田川西遺跡』新泉社，2010.

c. 註76文献，p. 54.

(80) 註76文献，p. 53.

(81) 註5に同じ。

(82) 註78に同じ。

(83) 註9aに同じ。

第4章 牛甘（飼）の特性（2）—牽牛織女説話の伝来—

第1節 本章の目的

本章では、前章で検討対象とした古墳時代における牛を扱う牛甘（飼）について、牽牛織女説話の伝来年代の考察を中心に、渡来文化としての歴史的・文化的特性の補足を行うことを目的とする。

牽牛織女説話⁽¹⁾のあらすじは、天帝の娘である織女と牽牛（牛飼の青年）が結婚した後、互いに夢中になってしまい、仕事を放棄してしまったことから、天帝の怒りをかってしまい、天の川を境に引き裂かれてしまうが、天帝は、泣き暮らす二人の姿に同情して、一年に一度だけ七夕の夜にだけ逢うことを許したという、教訓を含めたものである。さらに、夜空に輝く天の川の西に位置する鷲座のアルタイル（Altair）を主星とする三星を牽牛（彦星）、東に位置する琴座のベガ（Vega）を主星とする三星を織女（織姫）と呼び、天の川の中に位置する白鳥座の五星からなる北十字星の天鵝（鵲星）を加えて、牽牛織女説話が、広大な夜空に星座として描かれることでもよく知られている。

その研究は、民俗学と文学及び天文学などの諸分野を中心に進められ、日本では牽牛織女説話を基本とした七夕説話の起源を、中国古典の『詩経』などに求める研究⁽²⁾や、日本の七夕説話と中国などの古典や説話との比較検討が行われてきた⁽³⁾。また、日本国内の伝承や史料・説話などを分析対象とした研究⁽⁴⁾も進められてきた。民俗学や文学の分野を中心とした牽牛織女説話の伝来年代についての研究では、天平宝字3（759）年以降に成立した『万葉集』に収められた七夕説話を詠んだ歌の考察に基づいて、「遣唐使によってもたらされた漢籍によって、日本に七夕伝説や乞巧奠^{きっこうでん}が伝わった」⁽⁵⁾ことが通説となっている。

一方、牽牛織女説話を考古学的手法によって検討した阪口有美子（阪口有美子 2007）は、4～5世紀にかけての東アジア全体の人口移動に際して、日本に機織の技術とともに牽牛織女説話が伝来したであろうという考え方を示している。阪口有美子の論考は、高句麗で築造された規模不明の方台形墳である徳興里古墳（北朝鮮平安南道南浦市）の永楽 18（408）年墓誌銘に記された墓主（被葬者）である「鎮」の系譜（出自）を、徳興里古墳の牽牛織女図で描かれた一頭（匹）の黒犬を媒介として、墓容鮮卑に由来したものとする考察が中心である⁽⁶⁾が、牽牛織女説話の伝来年代についても有力な見解を提示している。

本章では、日本への牛の渡来や牛甘（飼）の問題とも関わりの深い牽牛織女説話の伝来年代について、基本となる古代日本の文献史料の紹介と、徳興里古墳の牽牛織女図を含めた考古資料と説話資料の比較分析を通じて考察し、古墳時代牛甘（飼）の歴史的・文化的な特性とその実態について考察し、補足としたい。

第2節 文献史料の紹介

〔史料1〕『日本書紀』巻第2・神代下天孫降臨章第一ノ一書

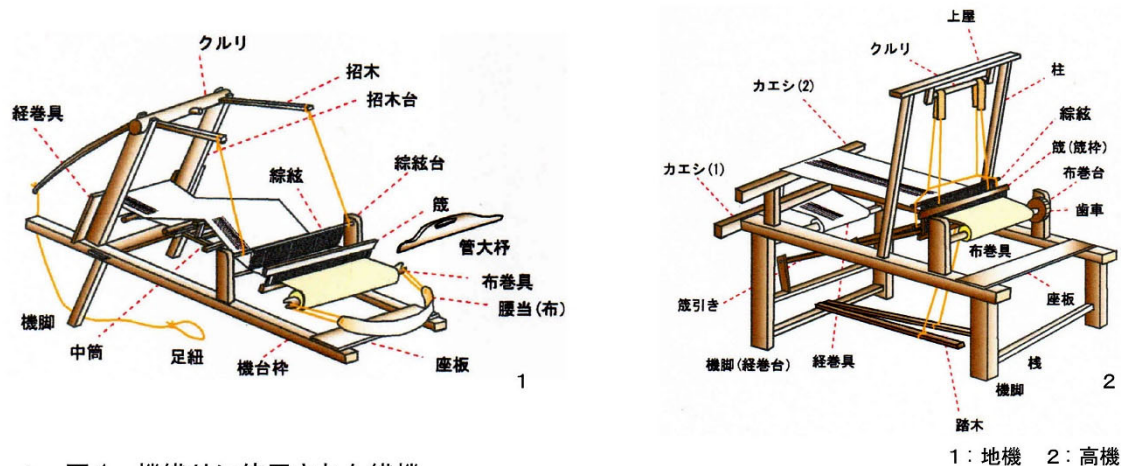
「阿妹奈屢夜 乙登多奈婆多廼 汗奈餓勢屢 多磨廼弥素磨屢廼 阿奈陀磨波夜 弥多爾 輔柁
和柁羅須 阿泥素佗多伽避顧禰」

あめ おとたなばた うな たま みすまる たに ふたわた あちすきたかひこ ね
(天なるや 弟織女の 頸がせる 玉の御統の あな玉はや み谷 二渡らす 味相高彦根)

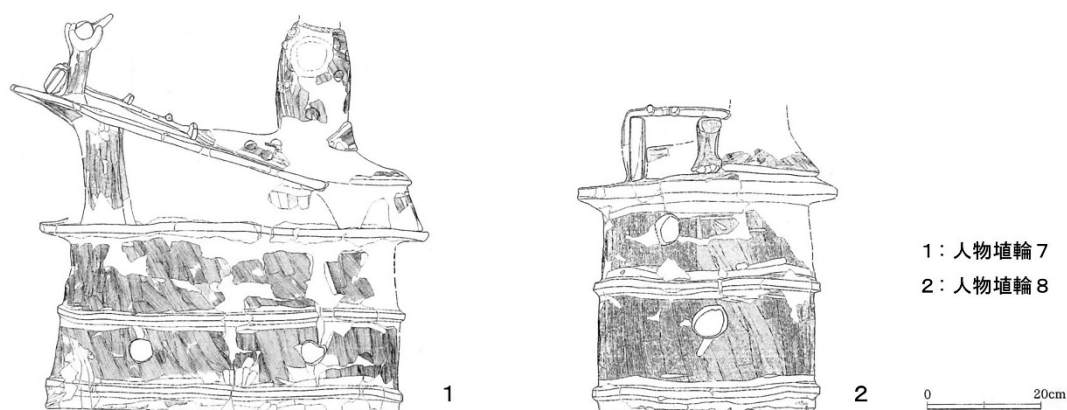
史料 1 は、『日本書紀』の神代神話の中で、容姿端麗である味耜高彥根神のことを詠んだ歌がある。

天上にいる^{たなばたつめ}棚織女（布を織る少女）の首に掛けている連珠の穴玉の美しさに、谷二つにわたって輝く味耜高彦根神のことを比喻して詠んだ2首の歌のひとつである。

天上にいる棚織女（布を織る少女）という表現は、関東地方の6世紀後半に築造された推定墳長80mの帆立貝式古墳である甲塚古墳（栃木県下野市）⁽⁷⁾から出土した機織形埴輪の女子人物座像や、牽牛織女説話の織女を連想させる。『日本書紀』の神代神話の中に、牽牛織女説話との繋がりが想像できる記述が認められることは、8世紀前半の『日本書紀』の完成段階には、既に牽牛織女説話が定着していた可能性を想起させる。



4-図1 機織りに使用された織機



4-図2 甲塚古墳出土の機織形埴輪

第3節 形象埴輪と壁画資料の検討

(1) 機織形埴輪

古代日本の考古資料の中に、具体的に牽牛織女説話を示すものは見当たらない。

しかしながら、機織りに用いられた地機（柱と板を組んで作った機台に経巻具・中筒・綜紵を固定・4-図1-1）や高機（経巻具・中筒・綜紵・布巻具などを機台に固定・4-図1-2）は、5世紀頃までに渡来人によってもたらされたと考えられている⁽⁸⁾。



4-図3 機織形埴輪復原（甲塚古墳人物埴輪7）

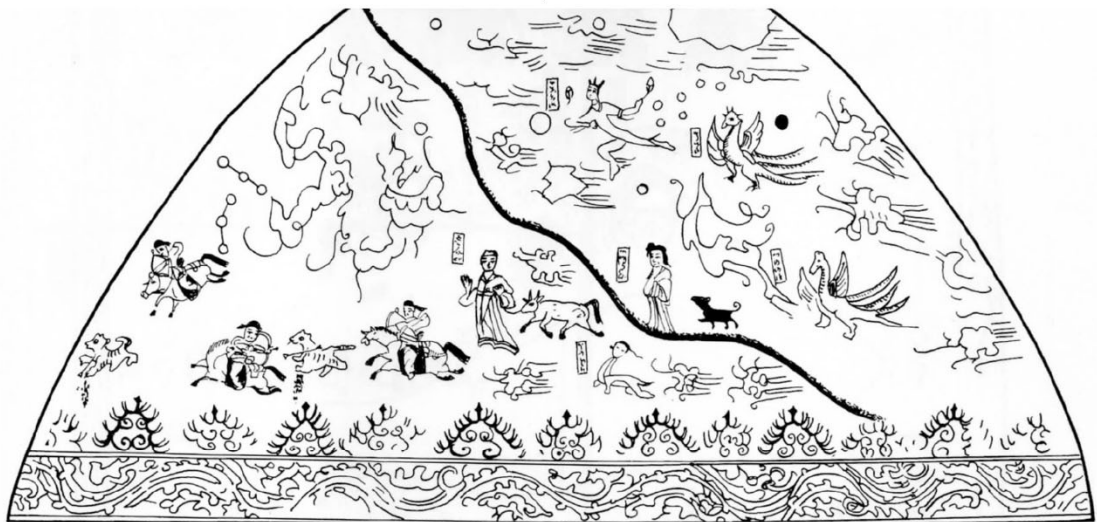
6世紀後半の資料ではあるが、先に述べた甲塚古墳からは、地機を表した機織形埴輪が出土している。機織形埴輪は、人物埴輪7と人物埴輪8の2個体が確認されている。いずれも石室に背を向けて樹立しており、その前後には飾り馬を牽く馬飼や多くの人物像（男女）が配列されている。人物埴輪7は、長円形の基台部（基底部：長軸 61.9 cm×短軸 29.5 cm，復元高 32.7 cm）の上に、機織りをする女性像が表現されている。女性像の首回りには、粘土玉による首飾りの痕跡が残っている。一方、人物埴輪8は、隅丸長方形の基台部（基底部：長軸 38.2 cm×短軸 29.7 cm，高 40.6 cm）の上に、機織りをする人物像が表されているが、欠損のため詳細は不明である（4-図2-1・2）⁽⁹⁾。

推定復原された人物埴輪7には、鮮やかな彩色が施されており（4-図3），地機を操る女子人物座像の首には粘土玉によって首飾りが施されていたことが解っており、まさに前節で紹介した史料1の棚織女（布を織る少女）を想起させる。甲塚古墳の機織形埴輪に表された織機を操って布を織る女性の姿は、織女の姿を想起させるといっても過言ではない。

(2) 高句麗壁画古墳の牽牛織女図

高句麗壁画古墳では、徳興里古墳の壁画に牽牛織女図が描かれている。徳興里古墳は、前室と奥室から構成される二室構造の横穴式石室を埋葬施設とする。白い漆喰で塗られた壁面及び天井全面に、壁画が描かれている。天井は穹窿形でその上に平行持ち送りと頂石が積まれ、前室の北壁西側の中央部に墓主（被葬者）像が描かれている。前室天井には、狩猟図や神仙及び神獣図、北斗七星などの日月星辰図が描かれるが、墓誌銘も記されている⁽¹⁰⁾。天井北側に書かれた墓誌銘からは、墓主（被葬者）が「釋加文佛弟子」（仏教徒）で、信都県（中国河北省衡水市冀州区）出身の「鎮」であったことがわかっている。「鎮」の名は、南壁西側上段中央と東壁にも見られ、「国小大兄」という高句麗の官位を授かっている人物である⁽¹¹⁾。

徳興里古墳の壁画には、牛舎や牛轎車図などで牛が描かれている⁽¹²⁾が、前室天井南側の中央部に牽牛織女図が描かれている（4-図4）⁽¹³⁾。曲線状に描かれた一条の天の川を境にして、向かって



4-図4 徳興里古墳の前室天井南側壁画



4-図5 徳興里古墳の牽牛織女図



1



2

4－図6 徳興里古墳の牛轎車図

1：通路東壁上段 2：玄室北壁東側

左側に描かれた牽牛は、白色の高冠に黄色の長外衣をまとい、淡緑色の牛を牽いている。天の川を隔てて向かって右側の位置に描かれた織女は、淡黄色のチョゴリに緑と白の彩りのチマの姿で、牽牛をながめて佇むように描かれている。織女の後方には、織女に従うように一頭（匹）の黒犬が描かれている（4－図5）⁽¹⁴⁾。

徳興里古墳の牽牛織女図は、高句麗がより広い世界との交流があったことを物語る事象であるとの指摘がなされており⁽¹⁵⁾、5紀初頭の高句麗国内において、牽牛織女説話が定着していたことを示す資料としても知られている⁽¹⁶⁾。また、牽牛が牽く牛については、奥室で描かれた牛舎内の牛とは明らかに描き方が異なっているが、牛の頭部の輪郭と耳・角、足先を強調した愛嬌のある描き方は、牛轎車の牛の描き方と同様である（4－図6）。牛轎車の牛と牽牛織女の牛は、同一人物によって描かれた可能性が指摘できる。

第4節 壁画資料と説話との共通点

次に、徳興里古墳の牽牛織女図と、七夕説話と結び付いた日本の天人女房説話などの表現に、共通要素があることを指摘しておきたい。

黒田智（黒田智 2014）によれば、『近江国風土記』逸文の「伊香小江」で、近江国伊香郡与胡郷に住む伊香刀美が、白い犬に天女のもっていた天羽衣を盗み取らせてしまうことや、中世後期ではあるが、御伽草子『毘沙門の本地』で犬を二・三匹腰に付けた僧の正体が彦星であったことなど、犬飼星の名を持つ彦星と犬との関係が深いことが指摘されている⁽¹⁷⁾。

さらに、柳田国男（柳田国男 1969）が紹介した九州長崎県天草地方の犬飼七夕説話のあらすじは、一匹の犬を飼っていた犬飼が、天から降りて水浴びしている七夕の羽衣を隠してしまい、七夕はしかたなく犬飼と結婚するが、その後、七夕は天に帰ってしまい、飼犬の助けを得て天まで七夕を追いかけた犬飼は、天の川を境に七夕と離ればなれになってしまうという話である⁽¹⁸⁾。説話の内容にバリエーションが多いことでも知られている。犬飼七夕説話では、犬飼が七夕を追いかけて天に上がった

際に、飼っていた犬（一説では黒犬）の活躍によって天まで上がったというストーリーになっており、説話の中で、犬が大切な役割を担っている。

徳興里古墳の牽牛織女図では、前述のとおり、織女の傍らに黒犬が描かれている。日本では彦星は古代から犬飼星という別称をもっていたことが知られており⁽¹⁹⁾、天人女房説話（犬飼七夕説話）と徳興里古墳の牽牛織女図では、犬という共通要素をうかがうことができる。

さらに中国大陆及び朝鮮半島の一部でも、牽牛（彦星）星を犬飼星と呼び、犬飼七夕説話と因縁関係があることについては、既に指摘がなされている⁽²⁰⁾。徳興里古墳の牽牛織女図では、黒犬が織女の傍らに描かれて、牽牛側に描かれてはいないという問題点はあるものの、徳興里古墳で描かれた牽牛織女図の黒犬と、天人女房説話（犬飼七夕説話）で活躍する犬といった共通点については、牽牛織女説話が、朝鮮半島から渡来したことを、示唆していると言えよう。

第5節 結論

文献史料の紹介と考古資料の検討、そして徳興里古墳の牽牛織女図と日本の犬飼七夕説話との共通要素を踏まえて、牽牛織女説話の伝来年代について考察し、結論としたい。

まず、日本への牛の渡来については、馬の渡来と合わせて5世紀後半以前であったことは間違いなかろう。牛及び馬の渡来の考察については、第2章と第3章で詳細に検討を行ったので、ここでは割愛する。

また、前述のとおり日本への織機の渡来も5世紀頃と考えられている⁽²¹⁾。さらに、史料1の記述は、まさに甲塚古墳の機織形埴輪に見られる地機を操る女子人物像を想起させるもので、6世紀後半以降になると織女という観念が日本で定着していたことが想定できよう。

次に、徳興里古墳の牽牛織女図の黒犬と、天人女房説話（犬飼七夕説話）で活躍する犬といった共通要素について考えたい。

犬は、高句麗壁画古墳の壁画のモチーフとして幾つか描かれている。高句麗壁画古墳の犬図については、集安では、4世紀末頃の一辺15mの方台形墳である角坨塚（中国吉林省集安市）の前室と玄室の間の通路左壁に、口を開けて歯を見せる首輪を付けた犬が描かれている⁽²²⁾。さらに、5世紀中頃の墳形規模不明である長川1号墳（中国吉林省集安市）の前室北壁においても犬が描かれている。長川1号墳の犬図は、野遊図に伴って走る犬と座る犬が描かれているが、双方ともに首輪を付けている⁽²³⁾。平壤周辺では、4世紀後半の南北33m×東西30mの方台形墳である安岳3号墳（北朝鮮黄海南道安岳郡）の前室東側室の東壁で描かれている⁽²⁴⁾。

徳興里古墳に限らず、高句麗壁画古墳では犬が描かれているものが存在する。牽牛織女図に黒犬が描かれていることを主な理由として、その墓主（被葬者）の系譜（出自）を安易に慕容鮮卑に結び付ける考え方には疑問が生ずるが、前述のとおり、阪口有美子（阪口有美子2007）の提示した牽牛織女説話の伝来年代（4～5世紀）⁽²⁵⁾については積極的に肯定できるものといえよう。

牽牛織女説話は、日本への牛や織機の渡来、徳興里古墳の牽牛織女図と日本の天人女房説話（犬飼七夕説話）との共通要素などを含めて考えると、7世紀以降の遣唐使によって中国からもたらされたと考えより、5世紀後半以前の牛馬の渡来や、その飼育・飼養の技術を習得した牛甘（飼）あるいは馬甘（飼）とともに、朝鮮半島から一連の文化複合として渡来したと考える方が妥当といえよう。言い換えれば、牽牛織女説話の渡来と定着にあたっては、渡来当初から牛甘（飼）あるいは馬甘（飼）を媒介としたものであるといえる。

註

- (1) 本論では、季琳「牛郎織女のごとと七夕伝説」『城西国際大学大学院人文科学研究科紀要 文明の科学』第2号、城西国際大学、2003、p. 21（図1）に準じて、神話と民話を総称して「説話」と呼ぶ。説話には、伝説（伝承）や昔話なども含まれる。
- (2) a. 出名誠彦「牽牛織女説話の考察」『支那神話傳説の研究』中央公論社、1973、pp. 111～138.
b. 大久保喜一郎「七夕説話伝承考」『明治大学教養論集』通巻75号、明治大学、1972、pp. 1～22.
c. 家井眞「牽牛織女相會傳説起源攷」『二松学舎大学論集（昭和54年度）』二松学舎大学、1980、pp. 55～78.
d. 大崎正次「織女と牽牛をめぐる疑問と解明」『中国の星座と歴史』雄山閣、1987、pp. 219～230.
- (3) a. 季琳「牛郎織女のごとと七夕伝説」『城西国際大学大学院人文科学研究科紀要 文明の科学』第2号、城西国際大学、2003、pp. 21～43.
b. 杉本妙子「七夕伝説の比較文化—中国、日本、韓国朝鮮、ベトナムの比較—」『茨城大学人文学部紀要 コミュニケーション学科論集』第19号、茨城大学人文学部、2006、pp. 101～118.
- (4) a. 柳田國男「犬飼七夕譚」『定本 柳田國男集』第13巻、筑摩書房、1969、pp. 95～106.
b. 茶園麻由「天人女房譚と七夕起源伝説」『日本文学論集』第23号、大東文化大学大学院、1999、pp. 1～12.
c. 金谷信之「七夕伝承考」『関西外国語大学研究論集』第71号、関西外国語大学、2000、pp. 247～260.
- (5) 註3b文献、p. 107.
- (6) 阪口有美子「牽牛織女のお話に関する一考察—徳興里古墳の牽牛織女図を中心に—」『郵政考古紀要』第42号、大阪郵政考古学会、2007、pp. 36～53.
- (7) 木村友則ほか『甲塚古墳発掘調査報告書』下野市教育委員会、2014.
- (8) 大阪府文化財センター・日本民家集落博物館編・発行『はたおりの歴史展—古代の織物生産を考える—』2006.
- (9) 註7文献に同じ。
- (10) 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院・朝鮮画報社編『徳興里高句麗壁画古墳』講談社、1986.
- (11) 徳興里古墳の墓主（被葬者）「鎮」の出自については、高句麗人説や亡命中国人説が発表されている。a・c

文献は高句麗人説、b 文献は亡命中国人説をとる。

a. 註 10 文献, pp. 94～96.

b. 武田幸男「徳興里壁画古墳被葬者の出自と経歴」『朝鮮学報』第 130 輯, 朝鮮学会, 1989, pp. 1～36.

c. 孫永鍾「徳興里壁画古墳被葬者亡命人説について」『高句麗・渤海と古代日本』雄山閣出版, 1993, pp. 49～73.

(12) 本論第 3 章参照。

(13) a. 註 10 文献に同じ。

b. 耿鉄華『高句麗古墓壁画研究』吉林大学出版部, 2008, pp. 190～192.

(14) 註 10 文献に同じ。

(15) 百橋明徳「東アジアの壁画芸術」『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, pp. 54～59.

(16) 註 10 文献, p. 74.

(17) 黒田智「水をめぐる感性／心性―大津波のあとに環境史を学ぶ意義―水の神の言説, 天の河の表象」『人民の歴史学』第 199 号, 東京歴史科学研究会, 2014, pp. 17～26.

(18) 註 4a 文献に同じ。

(19) 註 17 文献, p. 22.

(20) 註 4a 文献, pp. 105～106.

(21) 註 8 文献, p. 4.

(22) 池内宏・梅原末治『通溝 卷下』日満文化協会, 1940, 図版 37 (2) .

(23) a. 朝鮮画報社出版部編『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社, 1985, 図版 205.

b. 註 13b 文献, p. 153～155.

c. 陳相偉・方起東「集安長川一号壁画墓」『吉林集安高句麗墓葬報告集 (吉林省文物考古研究所編著)』科学出版社, 2009, pp. 65～85.

(24) 註 23a 文献, 図版 15.

(25) 註 6 文献, p. 37.

第5章 猪甘（飼）の特性 —角笛の伝来を含めて—

第1章 本章の目的

本章は、古墳時代における猪を扱う猪甘（飼）について、角笛の伝来を含めた渡来文化としての歴史的・文化的特性を明らかにすることを目的とする。

猪は、アジアからヨーロッパにかけて生息し、早くから狩猟の対象として扱われてきた。日本では、縄文時代から捕獲され、その身は食料、牙などは装身具として利用されてきた。縄文時代には、猪の装飾が施された土器や猪を表した土製品などがある⁽¹⁾。

猪甘は、「猪飼」とも書かれるように、4～6世紀の倭王権を中心とした古墳時代社会において、猪（豚）の捕獲や飼育を専ら行っていたものの呼称と考えられる。その用語は、『日本書紀』や『古事記』などの文献史料に由来する。本章では、「猪甘（飼）」と記す。古墳時代の猪及び豚についても、野生である猪と家畜化された豚との区別が難しいため、明確な区別を行わずに「猪（豚）」と包括して論を進めることにする。

猪甘（飼）の研究は、朝鮮半島からの渡来人と考えられてきた猪甘（飼）を、瀧川政次郎（瀧川政次郎 1971a・b）が、その出自を肥人や隼人（九州地方の居住民）に求め、華南地方（中国南部）伝来の家畜化された豚の飼育を行っていたことを指摘したことが先駆けといえる⁽²⁾。考古資料を対象とした研究では、近畿地方の6世紀前半に築造された全長88mの前方後円墳である井辺八幡山古墳（和歌山県和歌山市）の発掘調査を実施した森浩一（森浩一 1972）が、出土した猪形埴輪や、猪小像が付いた須恵器装飾付器台の考察にあたって、中国大陸の北方系民族との関係などを考慮して、猪甘（飼）は東アジア全体の中で考究すべき課題であることを示した⁽³⁾。

近年の考古資料を対象とした古墳時代の猪（豚）に関する研究は、出土獣骨の形態分析や、DNAなどの科学分析⁽⁴⁾のほか、猪形埴輪がその対象として扱われてきた⁽⁵⁾。猪形埴輪は、馬・犬・鹿・猿などの動物を表した動物埴輪の一種である⁽⁶⁾。猪（豚）や鹿を表した動物埴輪は、狩猟の場面を再現した獲物として考えられ、狩猟に関する研究の一環としても扱われてきた⁽⁷⁾。

猪形埴輪に伴う人物埴輪の出土が確認されている近畿地方の6世紀中頃に築造された墳長56mの前方後円墳である昼神車塚古墳（大阪府高槻市）⁽⁸⁾では、人物埴輪の手に角笛が握られている。角笛は、その名称のとおり、牛や羊などの動物の角を利用した笛で、角を意味する「Horn」と呼ばれる楽器の一種でもある⁽⁹⁾。角笛は、音楽史では、「気鳴型管楽器」として取り扱われ、早くからヨーロッパなどで親しまれ、狩猟や戦闘の笛としての性格を有するものと認識されてきたが、日本への伝播はないものとして扱われてきた⁽¹⁰⁾。

考古資料を対象とした角笛の検討は、昼神車塚古墳出土の角笛埴輪について、岡崎晋明（岡崎晋明 1992）が、狩猟に用いられた道具を表したものであると指摘する⁽¹¹⁾。一方、塚田良道（塚田良道 1994）は、考古資料を対象とした角笛及び太鼓の分析を行い、高句麗壁画古墳を中心とした中国大陸や朝鮮

半島の資料との比較から、角笛を吹く人物埴輪と太鼓を演奏する人物埴輪について「武装軍団に関係する軍楽隊の一員」であるとの見解を示した⁽¹²⁾。

以上のような研究過程をふまえると、考古資料を対象とした猪甘(飼)の研究は、森浩一(森浩一1972)による指摘⁽¹³⁾以降、ほとんど取り扱われることが無かったと言っても過言ではなく、研究の進展がなされてこなかった。角笛の研究も、検討資料に限りがあるため、ほぼ同様の状況といえる。よって、ここで角笛を含めた猪甘(飼)の検討を行うことに価値を見いだすことができる。

本章では、考古資料を中心とした比較分析の一助とするために、猪甘(飼)に関連する特に重要な古代日本の文献史料を紹介したうえで、(1)猪狩猟を表す人物埴輪、(2)角笛をもつ人物埴輪、(3)装飾古墳で描かれた狩猟図文、(4)高句麗壁画古墳の狩猟図と角笛図、という考古資料を対象にした比較分析を通じて、角笛の系譜についての考察を含めて、古墳時代猪甘(飼)の歴史的・文化的な特性とその実態について考えていきたい。

第2節 文献史料の紹介

[史料1]『日本書紀』巻第4・安寧天皇11年正月

立大日本彦耜友尊為皇太子也。弟磯城津彦命是猪使連之始祖也。

(おほやまとひこすきとものみこと ひつぎのみこと おとしきつひこのみこと これあつかひのむらじ はじめのおや
(大日本彦耜友尊を立てて皇太子としたまふ。弟磯城津彦命は、是猪使連が始祖なり。)

史料1では、大日本彦耜友尊が皇太子となり、その弟の磯城津彦命が、猪甘部を管掌する伴造であったことが記されている。この記述からは、猪甘(飼)が、天皇の配下に直属する部でありえたことが十分理解できる。

[史料2]『日本書紀』巻第11・仁徳天皇14年11月

為橋於猪甘津。即号其処曰小橋也。

(あかひのつ はしわた すなは ところ なづ をばし い
(猪甘津に橋為す。即ち其の処を号けて小橋と曰ふなり。)

史料2の猪甘津は、地名と判断でき、猪甘(飼)が住んでいた地域であった可能性が高いといえよう。猪甘津は、現在の大阪市生野区の平野川の東岸付近と考えられている。

[史料3]『日本書紀』巻第29・天武天皇13(684)年12月

己卯、大伴連・…(略)…猪使連・…(略)…布留連五十氏、賜姓曰宿禰。

(きぼう おおともむらじ あつかひのむらじ ふるむらじ うち かばね たま すくね
(己卯に、大伴連・…(略)…猪使連・…(略)…布留連、五十氏に、姓を賜ひて宿禰と曰ふ。)

癸未、大唐学生、土師宿禰甥・白猪史宝然、及百濟役時没大唐者猪使連子首・筑紫三宅連得許、伝新羅至。則新羅遣大奈末金物儒、送甥等於筑紫。

(きび もろこし がくしやう はじのすくねをい しらのふびとほうねん またくだら えだち とき をさ ひと
(癸未に、大唐の学生、土師宿禰甥・白猪史宝然、及百濟の役の時に大唐に没められし者、猪使連子首・筑紫三宅連得許、新羅に伝ひて至り。則ち新羅、大奈末金物儒を遣して、
甥等を筑紫に送る。)

史料3前半の己卯条には、全部で50におよぶ連に宿禰姓が与えられた内のひとつに「猪使連」の名が見える。次いで癸未条には、斉明天皇6（660）年～天智天皇2（663）年にかけて、百済救援の戦役によって、唐に捕虜となった猪使連子首や筑紫三宅連得許らが、新羅の使者に送られて新羅經由で帰国したことが記されており、具体的に「猪使連」の存在を窺い知ることができる。

〔史料4〕『古事記』下巻・安康天皇

於是、市辺王之王子等、意祁王・袁祁王二柱聞此乱而逃去。故到山代苅羽井、食御粮之時、面黥老人来、奪其粮。爾其二王言「不惜粮。然汝者誰人。」答曰「我者山代之猪甘也。」故逃渡玖須婆之河、至針間国、入其国人・名志自牟之家、隱身、役於馬甘牛甘也。

（ここに、市辺の王の王子等、意祁王・袁祁の王（二柱）、この乱れを聞きて逃げ去りました。かれ、山代の苅羽井に到りまして、御粮食す時に、面黥ける老人来て、その粮を奪ひき。しかして、その二はしらの王の言らししく、「粮は惜しまず。しかれども、なは誰人ぞ」答へ曰ひしく、「あは、山代の猪甘ぞ」かれ、玖須婆の河を逃げ渡りて、針間の国に至りまし、その国人、名は志自牟が家に入りまして、身を隠したまひて、馬甘牛甘に役はえましき。）

史料4は、雄略天皇（大長谷王）によって父（忍齒王）が殺され、その追っ手の追求を逃れた、後の仁賢天皇・顕宗天皇が、播磨国の志自牟の元まで逃げる途中で、「山代（城）の猪甘」と遭遇して食べ物（乾飯）を奪われた記述である。「山代の猪甘」は老人で、顔面に入れ墨が施されていたことが記されている。史料4では、命を守るために逃げ隠れする者から、食べ物を強奪するといった、「山代の猪甘」の浅ましい行動が読み取れる。後の仁賢天皇・顕宗天皇が、「山代の猪甘」と遭遇した「山代の苅羽井」は、現在の京都府の木津川市山城町綺田あるいは城陽市水主と言われており、いずれも京都府南部の木津川沿いの地と考えられている。

〔史料5〕『古事記』下巻・顕宗天皇

初天皇、逢難逃時、求奪其御粮猪甘老人。是得求、喚上而、斬於飛鳥河之河原、皆断其族之膝筋。是以、至今其子孫、上於倭之日、必自跛也。故能見志米岐其老所在、故其地謂志米須也。

（初め、天皇、難ひに逢ひて逃げましし時に、その御粮を奪ひし猪甘の老人を求めたまひき。ここに、求め得て、喚上げて、飛鳥河の河原に斬りて、みなその族の膝の筋を断ちたまひき。ここをもちて、今に至るまでに、その子孫、倭に上る日は、必自ず跛ぐぞ。かれ、能くその老の在るところを見しめき。かれ、そこを志米須といふ。）

史料5は、史料4をうけて、顕宗天皇が、「山代の猪甘」に仕返しをする記述である。顕宗天皇は、食べ物を強奪した老人である「山代の猪甘」を見つけ出して、飛鳥川の河原で斬り、「山代の猪甘」の一族すべての膝の筋を断ち切って、跛者にする体刑に処したことがわかる。その子孫が、上京する際に跛者のまねをする由縁も述べられている。この記述からは、「山代の猪甘」の浅ましい行動に対して、顕宗天皇の容赦のない怒りを読み取ることができる。報復場所となった「飛鳥河の河原」は、河内国

の安宿（現在の大阪府羽曳野市飛鳥）を流れる川と考えられているが、「志米須」の現在地は特定されていない。

〔史料6〕『播磨国風土記』賀毛郡・山田里

猪養野。右、号猪飼者、難波高津宮御宇天皇之世、日向肥人、朝戸君、天照大神坐舟於、猪持参来進之、可飼所求申作仰。仍所賜此処、而放飼猪。故日猪飼野。

（猪養野。右、猪飼と号くるは、難波の高津の宮に御宇しめしし天皇のみ世に、日向の肥人、朝戸の君、天照す大神の坐せる舟に、猪を持ち参来て進りて、飼ふべき所を求ぎ申し仰ぎき。仍りて此処を賜りて、猪を放ち飼ひき。故れ、猪飼野と曰ふ。）

史料6は、猪養野の地名の由来に関する記述であるが、仁徳天皇の時代に、日向国（現在の宮崎県）に住む球磨地方（現在の熊本県南東部）の人である朝戸の君が、舟で猪（豚）を持参し献上したので、猪（豚）を飼養できる場所として、猪養野を賜ったことが記される。播磨国（現在の兵庫県南西部）の猪養野の地は、猪甘（飼）である朝戸の君が、九州地方の日向国（現在の宮崎県）から、猪（豚）とともに舟で移り住んだ飼養地（居住地）と考えられる。また、その飼養地（居住地）は、朝廷から下賜された土地であることから、猪甘（飼）が天皇の配下に属する部民でありえたことが十分に考えられる。さらに、猪甘（飼）の出自が、九州地方に求められることも理解できる。

以上、猪甘（飼）に関する主な記述を抜粋して紹介したが、次にこれら史料からわかることを列挙したい。

史料1・6からは、猪甘（飼）が、朝廷の猪（豚）を飼う部民であったと理解でき、史料2・4・6からは、猪甘（飼）の居住地（あるいは飼養地）が、現在の大阪市内や京都府南部、兵庫県南西部といった畿内とその周辺に存在していたことを窺い知ることができる。

また、史料4からは、猪甘（飼）が、容姿の特徴として顔面に入れ墨を施していたことが想像できる。史料5では、「山代の猪甘」が「跛者」の姿で朝廷に服従しなければならなくなったことが記されていることから、顔面に入れ墨と合わせて、彼らの身分的な問題が示唆でき、重要な記述といえる。

さらに、史料3によれば、天武天皇の時代になって、猪甘（飼）に「猪使連」という宿禰姓が与えられ、「猪使連子首」といった百済救援の戦役に労した「猪使連」の存在を窺い知ることができ、地位・身分の安定を得たことが想像できる。

第3節 形象埴輪と壁画資料の検討

（1）猪狩猟を表す人物埴輪

獲物とした猪（豚）を腰に吊す人物埴輪がある。出土事例が極めて少なく、人物埴輪全体から見れば希有な存在ともいえるが、狩猟者（狩人）として理解されてきた⁽¹⁴⁾。

5世紀後半～末頃に築造された3基の大型前方後円墳を中心に構成される関東地方の保渡田古墳群（群馬県高崎市）のうち、墳長108.5mの前方後円墳である井出二子山古墳⁽¹⁵⁾とその西側に隣接す

保渡田Ⅶ遺跡⁽¹⁶⁾、墳長 96m の前方後円墳である保渡田八幡塚古墳⁽¹⁷⁾ から、小型の猪形資料（土製品状埴輪）を腰に吊す人物埴輪の存在が知られている。保渡田Ⅶ遺跡は、西側に隣接する井出二子山古墳に関連した溝で区画された突出遺構であるが、帆立貝式古墳とも考えられている。

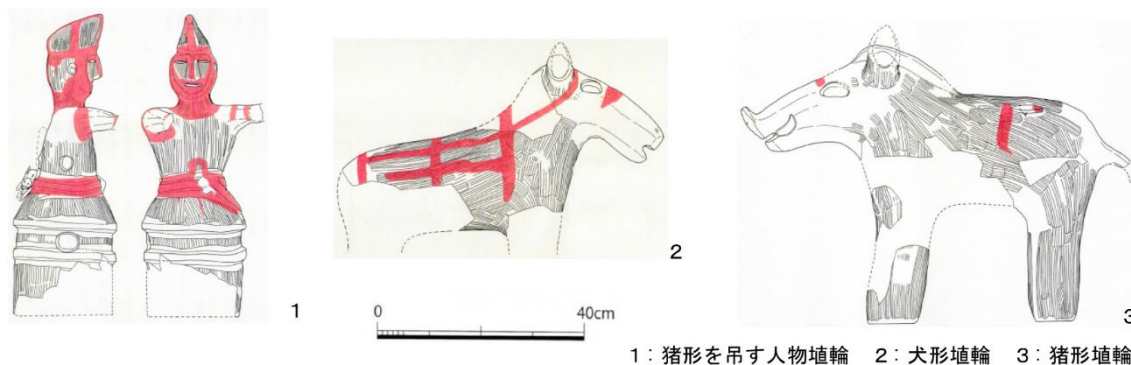
井出二子山古墳及び保渡田八幡塚古墳からは、小型の猪形資料（土製品状埴輪）の部分のみが出土しているため、その全体像の把握は困難である（5－図1）。しかしながら、保渡田Ⅶ遺跡では、猪を腰に吊す人物埴輪の全体像を知り得ることができる。

保渡田Ⅶ遺跡から出土した猪を腰に吊す人物埴輪は、総高 54.5 cm の男子全身無脚立像で、頭部には鳥帽子状の被り物を被り、右腕を前方に、左腕を左斜め上方向に挙げた姿勢をとる。背中に剥落痕があり、鞆を背負っていた可能性が高いものと判断でき、両腕の姿勢からは、弓矢を引いていた姿（弓射の姿勢）が想像できる。腰紐の左前方に刀子を差し、背面に小型の猪形資料（土製品状埴輪・長さ 12 cm）を吊している。頭部と顔面、首、腕、腰紐を中心に赤色と黒色の彩色が施されている。

保渡田Ⅶ遺跡からは、豊富な種類の形象埴輪群（器財・人物・動物）が出土しているが、猪を腰に吊す人物埴輪と一連配列の可能性が高い資料としては、猪形埴輪 1 点の存在が窺える。保渡田Ⅶ遺跡から出土した猪形埴輪は、全長 70.5 cm、高さ 49.5 cm で、左側の背部に線刻による鉄鏃（木の葉状）、赤彩による血液（ただれ落ちる血）の表現が施されており、狩人によって手負いとなった猪（豚）を表したと考えられる。また、保渡田Ⅶ遺跡からは、犬形埴輪 2 点が存在しており、猪を腰に吊す人物埴輪と手負いの猪形埴輪とともに、猪狩猟の場면을演出していたと考えられよう（5－図2）。



5－図1 人物埴輪が吊す猪形



5－図2 保渡田Ⅶ遺跡の猪狩猟埴輪

保渡田Ⅶ遺跡のように、狩りの獲物である猪形埴輪を、狩猟者(狩人)の勢子である犬形埴輪が追い詰めた場面を表したと考えられる猪形埴輪と犬形埴輪による一連配列は、6世紀の古墳においても継続する。近畿地方の6世紀中頃に築造された昼神車塚古墳や、関東地方の6世紀後半に築造された墳長108.5mの前方後円墳

である剛志天神山古墳(群馬県伊勢崎市)⁽¹⁸⁾などで確認でき、古墳時代の猪狩猟の場面を表した典型的なスタイルといえよう。

なお、狩猟者(狩人)を表した人物埴輪が確認できていない古墳においても、猪狩猟の場面を表したと考えられる猪形埴輪と犬形埴輪による一連配列が認められる場合が多く、同時に出現したといわれている⁽¹⁹⁾。近畿地方の6世紀前半に築造された墳長30mの帆立貝式古墳である荒蒔古墳(奈良県天理市)⁽²⁰⁾などはその典型事例といえ、本来は狩猟者(狩人)を表した人物埴輪が存在していた可能性も考えられる。

埴輪以外で、猪(豚)と犬の組み合わせが認められる考古資料としては、近畿地方の6世紀初頭に築造された墳長37mの帆立貝式古墳である梶2号墳(大阪府守口市)出土の須恵器装飾付壺(台付壺)が知られている⁽²¹⁾。壺の肩部分を取り囲むように、首輪を付けた犬と猪(豚)、鳥の小像が付けられているが、猪(豚)と犬が一連となって配置されている状況は、猪狩猟の場面を表したものであることが想像できる(5-図3)。



梶2号墳

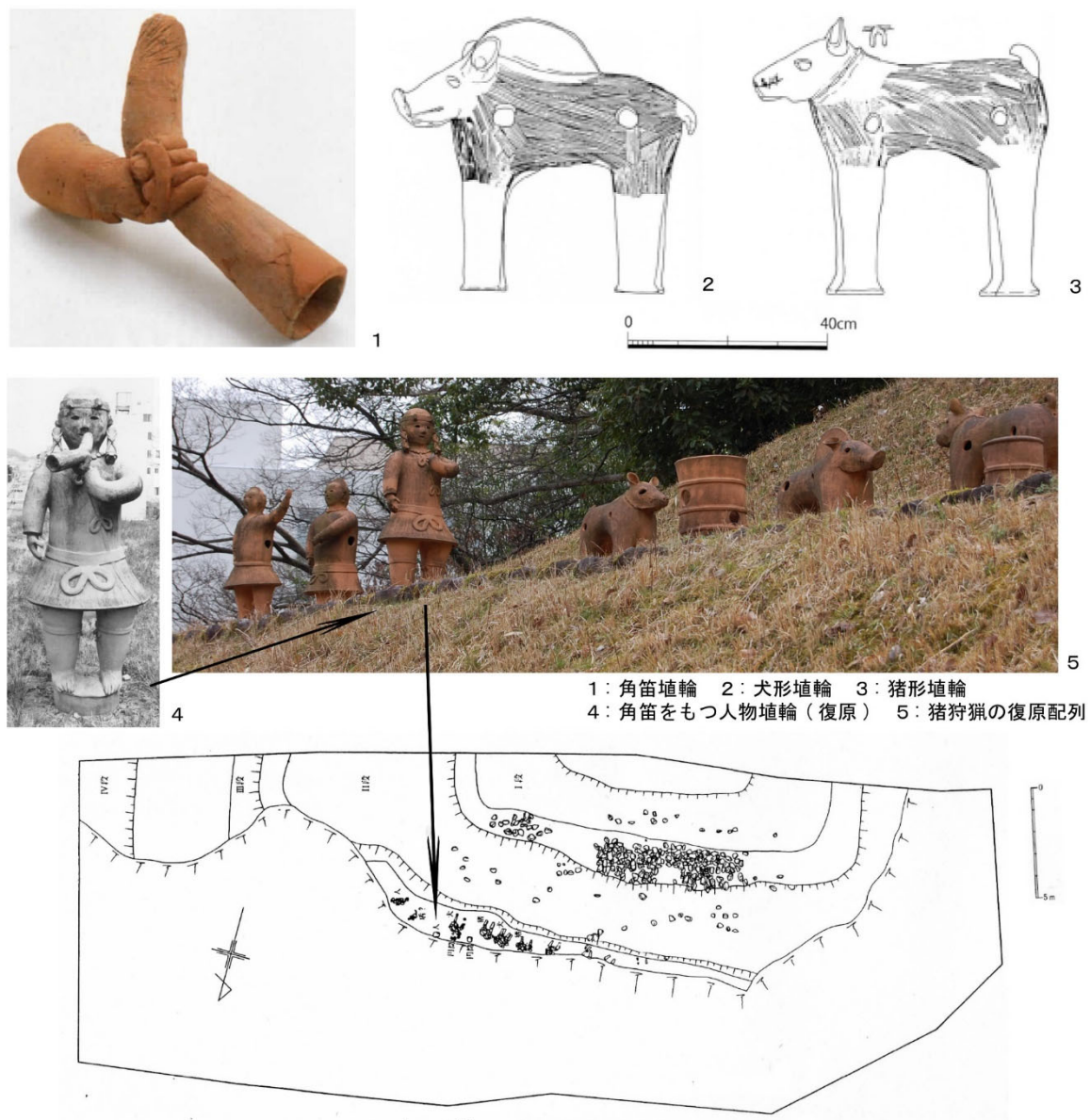
5-図3 猪(豚)・犬の小像付須恵器

(2) 角笛をもつ人物埴輪

角笛を表した埴輪は、非常に希有な存在で、前述した塚田良道の研究(塚田良道 1994)によれば、昼神車塚古墳のほか、関東地方の小幡北山埴輪製作遺跡E地区第2工房址(茨城県茨城町)からの出土事例が紹介されている⁽²²⁾。古墳に樹立された埴輪としては、昼神車塚古墳のみということになる。笛を吹く人物埴輪は、近畿地方の6世紀末頃に築造された一辺28~29mの造り出し付方墳である四条1号墳(奈良県橿原市)でも報告されている⁽²³⁾。人物埴輪の口に、笛がはずれたような痕跡が残っている⁽²⁴⁾が、角笛かどうかは不明である。また、井辺八幡山古墳出土の角杯を背負う人物埴輪の角杯についても、角笛である可能性が指摘されている⁽²⁵⁾が、吹き口の孔が表現されていないことから、否定的な意見もある⁽²⁶⁾。

ここでは、古墳での樹立とその配列状況の検証が可能である昼神車塚古墳出土の角笛をもつ人物埴輪を中心に、検討を進めたい。

昼神車塚古墳は、三段築造の前方後円墳であるが、前方部の二段テラス面(17m×1.2m)に、多くの動物埴輪を含む形象埴輪が、列状に配置されていた状況が明らかになっている。その配列の東側



5-図4 屋神車塚古墳の角笛をもつ人物埴輪と猪形・犬形埴輪（5の写真は筆者撮影）

5-表1 猪形埴輪に関連する狩人埴輪一覧

No.	出土地	古墳・遺跡名（所在名）	墳形／規模	時期	人物埴輪／特徴	猪形埴輪	犬形埴輪	鹿形埴輪	特記	主要文献
1		保渡田Ⅶ遺跡	突出遺構6号溝／－	5c後	男子無脚立像／猪を腰に吊す狩人	○	○	－		若狭徹1990
2	群馬県高崎市	井出二子山古墳	前方後円墳／墳長108.5m	5c後	／（猪を吊す狩人）	（○）	（○）	－	内堤北部O区・昭和5（1930）年出土，四脚を縛った猪形	若狭徹ほか2009
3		保渡田八幡塚古墳	前方後円墳／墳長96m	5c末	／（猪を吊す狩人）	○	（○）	○	昭和4（1929）年出土	若狭徹・田辺芳昭ほか2000
4	大阪府高槻市	屋神車塚古墳	前方後円墳／墳長56m	6c中	推定男子双脚立像／角笛をもつ狩人	○	○	－		富成哲也1978

の位置に、東側から西側に向かって、北（外）側を向いて樹立された力士埴輪などに続いて、角笛をもつ人物埴輪が、列状配置された動物埴輪列の方（西側）を向いて樹立されていた。角笛をもつ人物埴輪の西側（内側）の手前には、二頭（匹）の犬形埴輪によって、獲物である一頭（匹）の猪形埴輪が、挟み撃ちとなるような状態で配置されていたことが明らかになっており⁽²⁷⁾、さらにその西側に向かって動物埴輪（残存は脚部のみ）による配列が続いていたことが解っている⁽²⁸⁾。

角笛をもつ人物埴輪は、角笛とそれを握る手のみが残存するもので、湾曲した中空の角笛を、籠手らしきものを付けた左手で、親指を外側に向けて下方から握っている。円筒基部の台座上に直立した足のみが西側方向を向いて残っていたことが確認されており⁽²⁹⁾、推定男子全身立像であった可能性が高いと判断されている⁽³⁰⁾。角笛をもつ人物埴輪の樹立された向きと位置、猪形埴輪及び犬形埴輪の配列された樹立状況（向きと位置）からは、猪狩猟の場面を表している可能性が高いと考えられてきた⁽³¹⁾。角笛をもつ人物埴輪の性格としては、勢子との指摘もなされている⁽³²⁾が、猪狩猟という性格を考えると、猪甘（飼）である可能性が十分に考えられよう（5－図4）。昼神車塚古墳の人物埴輪がもつ角笛は、「猪甘（飼）の角笛」である可能性が指摘でき、角笛が猪狩猟用として用いられていたことが想定できる。角笛が、古墳時代の日本（以下、倭国と記す。）で狩猟用として用いられていたことについては、既に岡崎晋明（岡崎晋明 1992）が指摘していることである⁽³³⁾が、昼神車塚古墳の角笛をもつ人物埴輪は、塚田良道（塚田良道 1994）が提示した「武装軍団に關係する軍樂隊の一員」⁽³⁴⁾ではないものと判断できよう。

また、保渡田古墳群における猪狩猟者（狩人）の人物埴輪に関しても、猪甘（飼）である可能性が十分に考えられ、猪甘（飼）が狩猟にあたって、弓矢を使用していたことも想定される。この推論は、保渡田八幡塚古墳から出土した小型の猪形（土製品状埴輪）の考察にあたって、動物埴輪の多くが家畜を表しているものであることを根拠に、大場磐雄（大場磐雄 1971）によって早い段階から指摘されてきたことでもある⁽³⁵⁾。

古墳時代の出土遺物として、現段階では角笛そのものの出土は確認されていない。しかしながら、本章での検討からは、猪甘（飼）が行う猪狩猟には、弓矢や角笛のほか、猟犬が用いられていたことが想定できた（5－表1）。

（3）装飾古墳で描かれた狩猟図文

ここまでの検討の結果を補強する資料として、次ぎに装飾古墳で描かれた狩猟図文を紹介したい。

九州地方の6世紀後半に築造された直径35mの円墳である五郎山古墳（福岡県筑紫野市）の横穴式石室の奥壁上段には、小型獣に向かって馬上から弓射する騎馬人物図が、同心円文や人物図とともに描かれている。獲物の小型獣は、黒色のみの単色で表されるが、騎馬人物図は、黒色を主に輪郭を赤色で表している。馬の尻部には竿が付けられ、その上部に緑色で旗も表現されている（5－図5）。また、奥壁下段の東寄り中段には、黒色で描かれた体に、赤色の矢か槍が突き刺さった猪（豚）と想像



5-図5 装飾古墳の狩猟図（一部削除）

できる動物が描かれている⁽³⁶⁾。この描写は、保渡田Ⅶ遺跡の猪形埴輪と共通する要素として指摘できる。

一方、東北地方の7世紀前半に築造された清戸迫76号横穴墓（福島県双葉町）の奥壁では、大きな渦巻文を中心にした人物図や動物図が、赤色顔料だけで描かれている。渦巻文の下部に、狩猟図がある。清戸迫76号横穴墓の狩猟図では、獲物の猪（豚）や鹿、小型獣を目がけて弓矢を放った人物と小型の獣の間には、猟犬と想定される犬が描かれている。まさに、猪狩猟を表す人物埴輪や角笛をもつ人物埴輪の検討で想定した猪狩猟のスタイルと、同様の表現といえよう（5-図5）⁽³⁷⁾。

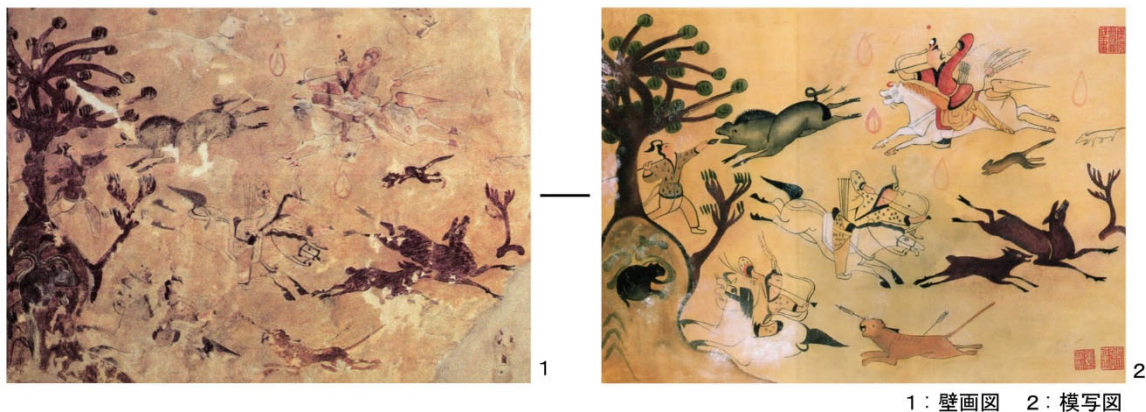
さらに、同じ東北地方の7世紀前半に築造された泉崎4号横穴墓（福島県泉崎村）の奥壁や側壁でも赤色顔料によって渦巻文と人物図や動物図が描かれているが、奥壁で描かれた人物図と動物図の中に、耳の長い獣に向かって、弓矢を引く騎馬人物が認められ、狩猟図と考えられている⁽³⁸⁾。

日本の装飾古墳で描かれた図では、写実性を欠いた抽象的な図文が多い。東海地方の7世紀に築造された直径6～7.5mの円墳である兎沢9号墳（静岡県焼津市）の奥壁下段に、線刻によって描かれた猪（豚）と想定される図などは、その代表例といえよう⁽³⁹⁾。しかしながら、ここで紹介した狩猟図は、明確に狩猟の場面を表現したものといえる。清戸迫76号横穴墓の狩猟図は、まさに本章での検討で想定できた、猪狩猟に必要な弓矢と猟犬を備えたものである。

次に、猪甘（飼）の系譜をめぐる問題の検討を進めるため、比較分析の対象とする高句麗壁画古墳で描かれた狩猟図と角笛図などの検討を行いたい。

（4）高句麗壁画古墳の狩猟図と角笛図

狩猟図が描かれた代表的な壁画古墳は、集安の4世紀末頃～5世紀初頭に築造された一辺17mの方台形墳である舞踊塚（中国吉林省集安市）、5世紀中頃に築造された規模不明の方台形墳である長川1号墳（中国吉林省集安市）のほかに、平壤周辺の4世紀末頃に築造された南北17m×東西13mの方台形墳である安岳1号墳（北朝鮮黄海南道安岳郡）、4世紀末頃～5世紀初頭に築造された規模不明の円形墳である薬水里古墳（北朝鮮平安南道南浦市）、永楽18（408）年銘墓誌のある規模不明の



5-図6 長川1号墳の狩猟図

方台形墳である徳興里古墳（北朝鮮平安南道南浦市），5世紀末頃～6世紀初頭に築造された規模不明の円形墳である狩猟塚（別称：梅山里四神塚・北朝鮮平安南道龍岡郡）などがある⁽⁴⁰⁾。

舞踊塚と長川1号墳では、鹿と虎を馬上から弓射する冠状の被り物を被った人物による狩猟図が描かれる。長川1号墳では、前室と玄室による複室構造を呈する石室の前室左側壁で、走って逃げる猪（豚）の後方から、獲物を狙って馬上から弓射する人物と、猪（豚）の正面から槍を構えて獲物を狙う人物によって、猪（豚）が挟み撃ちとなる構図で描かれた狩猟図が見られる（5-図6）。この狩猟図の上位に、首輪を付けた走る犬及び前室北壁中央部付近で首輪を付けた座る犬が描かれているが、犬の向きや位置から、狩猟図の上位に描かれた野遊図に伴うものと判断できる⁽⁴¹⁾。安岳1号墳では、鹿を馬上から弓射する狩猟図、薬水里古墳では、馬上から弓射する頭巾状の被り物を被った人物を中心とした大規模な狩猟図が描かれる。徳興里古墳では、前室と玄室による複室構造を呈する石室の前室南側天井で、虎を馬上から弓射する頭巾状の被り物を被った人物による狩猟図、前室東壁天井で、鹿と猪（豚）と思われる獲物を、馬上から弓射する頭巾状の被り物を被った人物による狩猟図が描かれている。狩猟塚（梅山里四神塚）では、玄室西壁に2頭（匹）の獲物を馬上から弓射する小規模な狩猟図が描かれる。

高句麗壁画古墳の狩猟図では、大規模なものや小規模なものにかかわらず、鹿や虎といった大型獣を、馬上から弓射する描写が一般的といえる。馬上から弓射する弓に関しては、人物図から判断すると短弓（長さ約1m）である。高句麗壁画古墳の狩猟図で描かれた短弓に関しては、井辺八幡山古墳出土の挂甲武人像（人物埴輪）のもつ弓（人物埴輪から想定復原された弓の長さ約1m）などとの類似性が指摘されている⁽⁴²⁾。

猪（豚）の描写については、平壤周辺の永和13（357）年銘墓誌のある南北33m×東西30mの方台形墳である安岳3号墳（北朝鮮黄海南道安岳郡）の前室東側室の東壁で、厨房で調理する女性の手前の肉庫の中に大きなフックで吊された調理用の猪（豚）が描かれている（5-図7）。「京屋」と呼ばれる肉庫の中には、他の調理用の動物も吊されており、犬と想定されるものもある⁽⁴³⁾。また、厨



5-図7 安岳3号墳の厨房図・肉庫図

1: 厨房と肉庫 2: 吊された調理用の犬と猪(豚)

房と肉庫の間には2頭(匹)の犬が描かれる。犬の描写については、徳興里古墳の前室南側天井で描かれた天の川図(牽牛織女の図)で、織女の後方に犬が描かれる。また、4世紀末頃の一辺15mの方台形墳である角埴塚(中国吉林省集安市)の前室と玄室の間の通路左壁に、口を開けて歯を見せる首輪を付けた犬が描かれている(5-図8)⁽⁴⁴⁾。首輪の表現から、よく飼い馴らされた犬であったことを窺い知ることができる。

高句麗壁画古墳の狩猟図では、乗馬スタイルで弓を使用した狩り(所謂流鏑馬スタイル)が基本で、猟犬の存在が認められない。また、捕獲及び飼養された猪(豚)は調理用で、その肉が食されていたことが理解できる。

一方、角笛図は、舞踊塚の天人図及び平壤周辺(北朝鮮平安南道南浦市)の6世紀末頃～7世紀初頭に築造された一辺51mの方台形墳である江西大墓の飛天図がよく知られている。

舞踊塚では、玄室の天井・奥側(隅三角持ち送り第四段側面・北側)で、吹奏角笛天人図が描かれる。舞踊塚の埋葬施設は、二室構造の石室であるが、玄室の天井は、三段の平行持ち送りの上に五段の隅三角持ち送りを八角形になるように狭めながら架構させた八角形構造で、壁面に漆喰が塗られ、その上に壁画が描かれている。前室及び通路、玄室の壁面には生活風俗図が描かれるが、天井には朱



5-図8 角埴塚の首輪付犬図

雀、青龍、麒麟、仙人、星宿、日象、月象などの天上の世界が描かれている。吹奏角笛天人図は、長い黒冠帽を被り、袖と裾の裂けた衣服をまとった細身で足長の天人が、長い曲がった角笛を両手でもって軽やかに吹く姿で、面長の顔面に八の字髭と巻き上げ髪(観音垂髪)が描かれる(5-図9-1)。吹奏角笛天人図は、仏教の影響を受けて描かれた道教的天人の表現と理解され、手にもつ長い曲がった角笛は、モンゴル及び中央アジア地方からの系統と考え



1



2

5-図9 神仙人の吹く角笛図

1: 舞踊塚の天人図 2: 江西大墓の飛天図

られている⁽⁴⁵⁾。

江西大墓は、高句麗の封土墳としては最も規模が大きく、埋葬施設は、羨道と玄室のみで構成される単室構造である。漆喰は塗られずに、石室を構築する水磨きの施された花崗岩の上に直接壁画が描かれているのが特徴である。玄室の天井は、側壁の上に二段の平行持ち送りとその上に三段の隅三角持ち送りによって架構させた構造で、天井・北側（平行持ち送り第二段側面・東側）で、吹奏（双）角笛飛天図が描かれている。江西大墓の飛天が両手に持って吹く角笛は、長い曲がった角笛であるが、口先部が二つに分かれるといった双又の角笛である（5-図9-2）。

以上が、高句麗壁画古墳の神仙図として描かれた代表的な角笛図であるが、高句麗壁画古墳で描かれた生活風俗図及び狩猟図などの描写の一部として、角笛を吹く人物の姿を垣間見る見ることができる。塚田良道（塚田良道 1994）の指摘した舞楽図、軍楽図などである⁽⁴⁶⁾。

三室構造で側室や回廊を持った複雑な構造を呈する安岳3号墳の石室では、基本的に前室壁画は、上下二段の構成に分けられている。前室壁画で、剥落が著しい南壁西側の上段に、長く曲がった角笛を両手で握って吹く人物図がある。頭髮は何も被っていないのか、頭巾状のものを被っているのか不



2



3

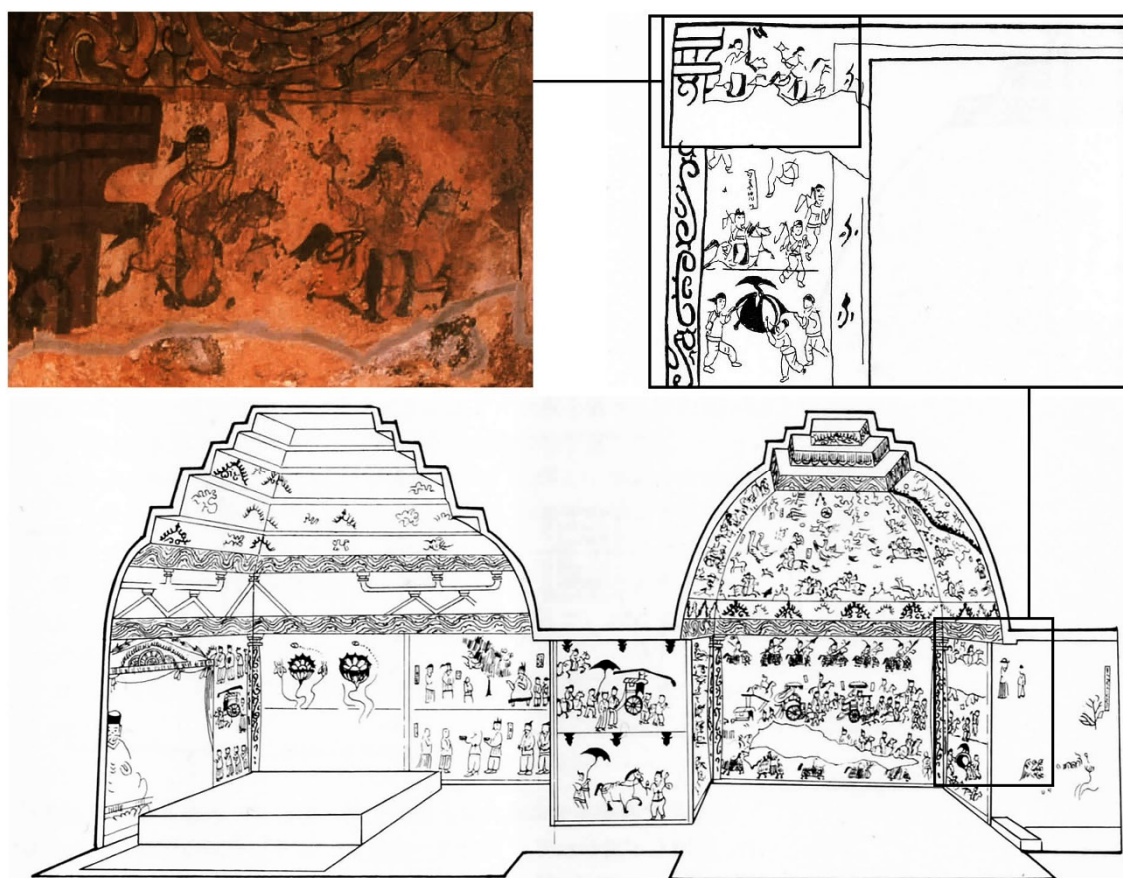
1: 角笛を吹く人物 2: 鼓吹楽隊 3: 行列の騎馬人物
5-図10 安岳3号墳の角笛図

鮮明でよくわからないが、軽装の上下衣服に、靴をはいた姿で描かれている（5-図10-1）。この角笛を吹く人物図は、角笛で重奏をする姿とも理解されている⁽⁴⁷⁾。また、安岳3号墳の北側回廊東壁では、先頭の騎馬人物に続き、旗幟をかかげる人物、^{かいこ}措鼓と^{とうこ}鞀鼓を打つ人物、角笛を吹く人物で構成された隊列が描かれていることが指摘されており、鼓吹楽隊図として理解されている（5-図10-2）⁽⁴⁸⁾。安岳3号墳では、奥室東側回廊東壁に描かれた行列図の隊

列後部で、小さな角笛を、左手で握って口元にあてがう騎馬人物の姿も見る事ができる（5－図10－3）。

平壤周辺の薬水里古墳や徳興里古墳、5世紀初頭に築造された規模不明の円形墳である竈神塚古墳（北朝鮮平安南道龍岡郡）、5世紀初頭～中頃に築造された南北22.5m×東西19.5mの方台形墳である大安里1号墳（北朝鮮平安南道龍岡郡）、5世紀初頭～中頃に築造された規模不明の円形墳である八清里古墳（北朝鮮平安南道大同郡）では、複数の馬上人物とともに、甲冑などの装着がない軽装の人物が馬上で、長くて曲がった角笛をもって吹く姿が描かれている⁽⁴⁹⁾。徳興里古墳では、二室構造の石室の前室南壁・東側上段で、頭巾を被った前方と後方の二人の馬上の人物が、前方では掉鼓をふり、後方では角笛を吹いて馬上行進する姿が描かれる（5－図11）。これらはいずれも鼓吹楽隊図として理解できるもので、高句麗では、角笛が軍楽器として一般的に使用されていたことが理解できる。

また、高句麗で使用されていた角笛は、大角笛・双大角笛・小角笛などに分けられ、その特性としては、立ったまま、歩きながら、騎馬しながらで、両手で持って吹くこと（小角笛を除く）、特に大角笛は音が大きくて、野外演奏に適することから、男性の吹いた管楽器として、弦楽器の^{げんきん}玄琴や^{げんかん}阪咸



5－図11 徳興里古墳の鼓吹楽隊・騎馬角笛図

とともに、高句麗の基本楽器であったことが指摘されている⁽⁵⁰⁾。

次に、狩猟図に伴う角笛の描写を確認することができる薬水里古墳の狩猟図について、詳しく見ていきたい(5-図12)。

薬水里古墳の石室は、前室と玄室による複室構造を呈し、漆喰を塗った上に壁画が描かれているが、玄室には柱と梁が描かれ、北壁の梁の上に墓主夫妻と玄武、東壁に青龍と日象、西壁に白虎と月象、南壁に朱雀が描かれる。薬水里古墳では、前室の西壁を中心に、前述のとおり、馬上から弓射する頭巾状の被り物を被った人物による狩猟図が描かれている。薬水里古墳の狩猟図は、前室の西半部から西壁の上部全体を使用した大規模なもので、獲物である虎と熊、鹿といった大型獣を、馬上から狙って弓射する頭巾状の被り物を被った数基の騎馬人物が描かれている。その向かって右側に、狩猟を見守る配置で、中央に大きく描かれた騎馬人物を中心に、弓射する騎馬人物と同じ頭巾状の被り物を被った一連の隊列が描かれている。その後方の位置に、三人の騎馬人物が列をなして描かれているが、その最も後方にいる騎馬人物は手に角笛を持ち、馬上から吹き鳴らしているように見える。薬水里古墳の狩猟図からは、狩猟の際にも、角笛が使用されていたことが理解でき、角笛が狩猟用としての側面(性格)を有していたことが理解される。このことは、岡崎晋明(岡崎晋明1992)による指摘の根



5-図12 薬水里古墳の狩猟角笛図

抛となっている⁽⁵¹⁾。

以上、高句麗壁画古墳での検討をまとめると、高句麗では、（１）狩りは、乗馬スタイルで弓を使用するのが基本で、猟犬の存在は認められない。（２）狩りの対象となる獲物は、虎や鹿、熊、猪（豚）などの大型獣である。（３）捕獲及び飼養された猪（豚）は、調理のための食用である。（４）角笛は、軍楽器であるが、狩猟用としての使用も認められる。

次に、ここまでの資料の比較検討に基づいて、その共通点と相違点を明らかにしたい。

第４節 比較分析による共通点と相違点

形象埴輪を検討対象とした猪甘（飼）に関する分析（猪狩猟を表す人物像及び角笛をもつ人物埴輪）からは、猪甘（飼）が行った猪狩猟では、道具として弓矢や角笛が使用され、猟犬を伴う狩猟スタイルであったことが想定できた。

一方、高句麗壁画古墳の狩猟図からは、対象となる獲物は猪（豚）も含まれているが、虎や鹿を中心とした大型獣で、乗馬で弓矢を使用するのが基本といえる。また、大規模な狩猟では、角笛が使用されていたことが理解できた。

双方の共通点としては、獲物として猪（豚）を捕獲し、その道具として弓矢が使用されていたこと、そして角笛の使用である。相違点としては、５・６世紀（古墳時代中期～後期）の日本では猟犬を伴うのが一般的であるのに対して、４～５世紀の高句麗では馬を使用した弓射・乗馬スタイルが基本⁽⁵²⁾で、猟犬を伴わないということになる。

高句麗の狩猟の基本である弓射・乗馬スタイルについては、『三国史記』巻第 13・高句麗本紀第 1・始祖東明聖王の建国神話の中で、「朱蒙知其駿馬、而減食令瘦、驚馬善養令肥。王以肥者自乗、瘦者給朱蒙。後獵于野、以朱蒙善射、与其矢少、而朱蒙殫獸甚多。」と記される。高句麗建国の祖である朱蒙は、駿馬やのろまな馬の特徴をよく知り、狩猟の際には、弓矢の名手だったので、少ない矢しか与えられなかったが、多くの獲物を捕らえたことが記されており、高句麗では馬と弓矢が一連のものとして重要視されていたことが理解できる。史料からも、高句麗では、弓射・乗馬スタイルが基本であったことを窺い知ることができる。

また、装飾古墳で描かれた狩猟図を見る限り、６～７世紀（古墳時代後期以降）の日本の狩猟においては、弓射・乗馬スタイルが認識でき、双方の相違点としては、猟犬の有無ということになる。

犬を伴った猪狩猟については、『播磨国風土記』託賀郡・都麻里条に、「伊夜丘者、品太天獺犬名麻奈志漏。与猪走上此岡。天皇、見之云、「射乎」。故曰伊夜丘。此犬、与猪相闘死。即作墓葬。故、此岡西有犬墓。」と記述されており、この記述は、猟犬に関する記述としてよく知られている⁽⁵³⁾。応神天皇が猪狩猟の際に、^{まなしろう}麻奈志漏という名前の猟犬を伴って狩りを行い、猪との格闘によって、麻奈志漏が死んでしまったので、墓を作って吊ったことが記されている。この記述からは、猪狩猟に、猟犬が用いられたことが一般的であったことを窺い知ることができる。また、『日本書紀』巻第 16・武烈

天皇8年3月条では、「及此時，穿池起苑，以盛禽獸。而好田獵，走狗試馬。」とも記述されている。狩り場を作って，鳥や獸（動物）を飼って，獵犬を走らせ馬を試し乗りしたことが記されており，5・6世紀（古墳時代中期～後期）の日本の狩猟では，犬を伴うことが，普通のことであったといえる。

中国大陆の北方系民族の鮮卑などでは，犬は狩猟の道具として認識されていた⁽⁵⁴⁾。また，現在の北朝鮮では，獵犬である豊山^{ぶんさん}犬が，重要天然資源（特別天然記念物）に指定されている。豊山犬は，虎・鹿・猪狩猟などに用いられた朝鮮原産の獵犬である。豊山犬の獵犬としての歴史が，いつ頃まで遡ることが出来るのかは定かではないが，獵犬を用いた狩猟が，朝鮮半島で定着化していたことは確かと言える⁽⁵⁵⁾。

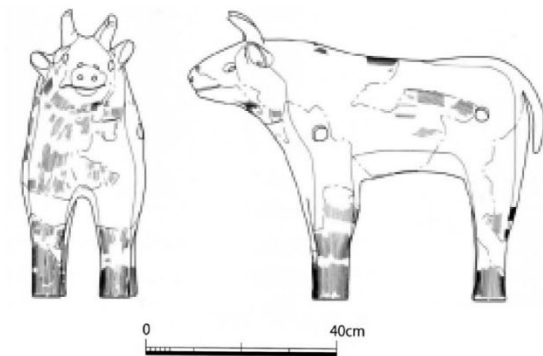
比較検討によって導かれた，獵犬の有無という相違点に関しては，狩猟方法の根本的な違いとして認識できるが，前述のとおり，高句麗で必ずしも狩猟の際に，獵犬の使用がなかったと言い切れず，双方の狩猟方法の大差とはいいがたいように思われる。

犬については，前述した安岳3号墳の厨厨図で，高句麗では犬の肉を，調理用として一般的に食していたことが理解できる。一方，『日本書紀』巻第29・天武天皇4(675)年4月条に「自今以後，制諸漁獵者，莫造檻牢，及施機槍等之類。…（略）…。且莫食牛・馬・犬・猿・鶏之肉。…（略）…。若犯者罪之。」との記述があり，狩猟や漁労を生業とするもの者に対する捕獲方法の禁止に加え，牛や馬・猿・鶏・猪（豚）の肉とともに犬の肉を食することが禁じられ，犯す者を処罰することが記されている⁽⁵⁶⁾。このことから，4～5世紀の高句麗と同様に，7世紀後半（飛鳥時代）の日本でも犬の肉が食されていたことを窺い知ることができ，犬の肉を食することも双方の共通点であったと理解できる⁽⁵⁷⁾。

次ぎに，角笛に関する比較検討の結果を述べていきたい。

高句麗壁画古墳で描かれた角笛のほとんどが，長くて湾曲する形状を呈しており，角笛を持つ人物埴輪では，両手でしっかりと持って，吹いている。ここで検討の対象とした高句麗壁画古墳で描かれた角笛のほとんどが，その形状から判断して，安岳3号墳の騎馬行列図（小角笛）を除いて，大角笛であったといえる。大角笛は，鼓吹楽隊（軍樂器・徳興里古墳など）での使用と，狩猟時（薬水里古墳）の使用において，明確な相違は認められず，同様の形状のものが使用されていたことが判断でき，その大きさと曲線の形状から，ほとんどが水牛の角を加工したものと考えられる。

一方，昼神車塚古墳の人物埴輪の持つ埴輪角笛の大きさや曲線の形状は，大角笛を表したものではなく，小角笛に近い形状のものと判断できる。推定復原された角笛をもつ人物埴輪は，角笛を左手だけの片手で持って吹いている（5-図4）。その形状から，水牛の角ではなく，黄牛の角を加工したものと考えられる。近畿地方の6世紀後半に築造された全長350mの大型前方後円墳である今城塚古墳（大阪府高槻市）の埴輪祭祀場4区出土の牛形埴輪（5-図13）の角を見る限り，僅かに曲がった短い角であることがわかる⁽⁵⁸⁾。離島であるがゆえに生き残った在来牛である見島牛（国指定天然記念物・山口県萩市）や口之島牛（鹿児島県十島村）の角も，僅かに曲がった短い角である（5-図14）。



5－図 13 今城塚古墳の牛形埴輪



5－図 14 見島牛（筆者撮影）



5－図 15 現代の小角笛
(長さ約 22 cm・スイス製・筆者撮影)



5－図 16 ニホンイノシシ（筆者撮影）

牛の角は、^{どうかく}洞角とも呼ばれ、前頭骨の角突起が芯となって、鞘状の角表皮（爪のようなもの）で被われ、年齢を重ねるごとに、^{かくりん}角輪（年輪）が形成されて、角は生涯成長を続ける⁽⁵⁹⁾。この角表皮の部分が、角笛として利用されている。日本の在来牛は体高 1.2m 前後で、牛としては小柄牛であるが、DNA 分析では、ホルスタイン種に近い北方系の牛が起源とされている⁽⁶⁰⁾。

昼神車塚古墳の人物埴輪で表現された猪甘（飼）が使用した角笛は、小角笛（5－図 15）と推定でき、倭国では大角笛の存在を見ることができない。

第 5 節 結論

以上、文献史料の記述と、考古資料にもとづき実施した比較分析の結果から、本章のまとめとして、猪甘（飼）の特性及び角笛の系譜に関する考察を行いたい。

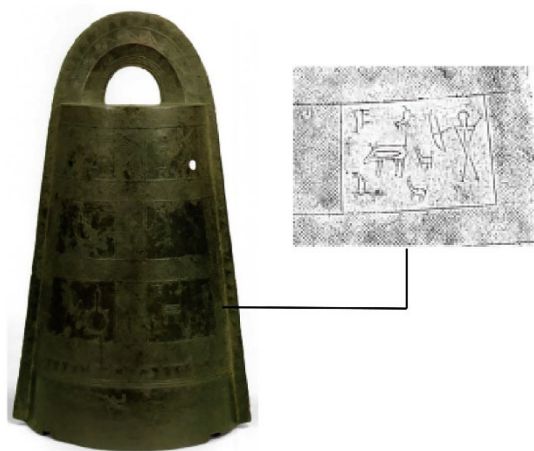
まずは、猪甘（飼）の特性について考えていきたい。5・6 世紀（古墳時代中期～後期）の猪甘（飼）による猪狩の方法は、道具として弓矢、勢子として獵犬を使用するのが一般的であったことが理解でき、4～5 世紀の高句麗で見られるような、基本的に馬を使用した狩猟スタイルではなかったことが指摘できる。また、猪甘（飼）が飼養した猪（豚）は、その肉が調理され、天皇や猪甘（飼）の属す

る首長層の宴に献じられたことが想像できる。『播磨国風土記』の記述からは、播磨国（現在の兵庫県南西部）の猪甘（飼）の出自が、九州地方に求められることが想定できるが、本章での分析及び比較検討の結果からは、猪甘（飼）が飼養した猪（豚）や、その飼養・飼育技術の系譜に関しては、わからなかった。

『三国志』巻第30・烏丸鮮卑東夷伝・挹婁条に、「其俗好養猪，食其肉，衣其皮。冬以猪膏塗身，厚数分，以禦風寒。」という記述がある。^{ゆうろう}挹婁は北東アジア（現在の中国東北部及びロシア沿岸地方）を居住地とした民族で、猪（豚）を盛んに飼い慣らして、その肉を食料、皮を衣服とし、冬は猪（豚）の膏^{あぶら}を身体に塗って、風や寒さを防いでいたことが記されており、猪（豚）の飼養が盛んであったことを窺い知ることができる。また、「作溷在中央，人圉其表居」とも記述され、挹婁は、村の中央に溷^{こん}という猪（豚）小屋と便所を兼ねた小屋を作っていたことも窺い知ることができる。この記述は、森浩一（森浩一1972）が、倭国で飼養された猪（豚）と、中国大陸の北方系民族との関連性を指摘した根拠のひとつ⁽⁶¹⁾にもなっている。

中国大陸の中で、家畜化された猪（豚）が、日本にもたらされたのは古墳時代以前で、弥生時代といわれている⁽⁶²⁾。野生猪と家畜豚は、そのすべてが、「イノシシ種」と呼ばれる共通種で、アジアを生息地とするものは、「アジアイノシシ系」と呼ばれ、「クチヒゲイノシシ」といった別名のとおり、口から頬にかけて淡色の帯があることが知られている。日本では、亜種としてニホンイノシシ（5-図16）やリュウキュウイノシシが知られるが、家畜化したという証拠はなく、在来豚と呼ばれるトカラ豚（鹿児島県十島村）や喜瀬豚（鹿児島県奄美市）なども、中国大陸で家畜化された猪（豚）が南方から入り、離島で維持されてきたものといわれている。猪（豚）の家畜化は、ヨーロッパや西アジア、中国などの各生息地で並行して行われたと考えられており、その年代を特定することが困難とされている⁽⁶³⁾。現状の科学分析の手法では、猪（豚）の系譜を証明することは難しいようである。

弥生時代の銅鐸に施された絵画資料に目を向けると、東京国立博物館所蔵の銅鐸（6区袈裟襷文銅



5-図17 銅鐸の狩猟図

鐸・伝香川県出土)に、六頭(匹)の獲物の中心にいる猪(豚)に向けて、弓矢を向ける人物の図(5-図17)がある。また、近畿地方の桜ヶ丘遺跡(兵庫県神戸市)出土の1号銅鐸(2区流水文銅鐸)などでは、二頭(匹)の鹿、二人で脱穀する人物に続き、弓を持つ人物、二頭(匹)の犬、走り去る二頭(匹)の鹿が一連で構成された図(A面)があり、背面(B面)に施された図の構成(弓を持つ人物、矢が刺さった鹿を押さえる人物、二頭(匹)の鹿など)も含めて、狩猟の場面を描

いたものとして知られている⁽⁶⁴⁾。これらの絵画資料からは、弥生時代の日本で、猪狩猟や猟犬を伴った狩猟が、一般的に行われていた状況を窺い知ることができる。

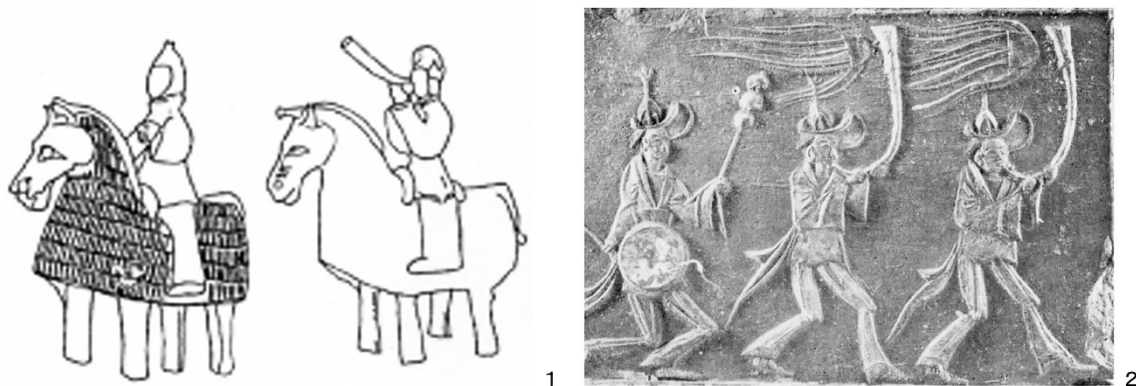
日本への家畜化された猪（豚）の渡来は、その飼養・飼育の方法をよく知り得た者や、飼養・飼育の知識や方法を知り得た集団とともに、一連となって渡来したことが考えられる。この猪（豚）の飼養・飼育の技術を得た者や集団が、古墳時代に成立した猪甘（飼）の源流（祖先）であった可能性も考えられよう。猪甘（飼）については、先に検討を行った鷹甘（飼）や馬甘（飼）・牛甘（飼）⁽⁶⁵⁾とは、その技術の渡来の時期も含めて、その系譜や要因、定着の仕方が大きく異なることが指摘できる。

次に角笛であるが、高句麗壁画古墳で描かれた角笛の検討からは、高句麗では大角笛が、主に鼓吹楽隊で軍楽器として使用されていたことが理解できる。4～5世紀を中心とした多くの壁画古墳で、角笛を伴う鼓吹楽隊図が描かれていることから、その定着がなされていたことは明らかである。

『三国志』巻第30・烏丸鮮卑東夷伝・高句麗条には、「漢時賜鼓吹技人」や「其民喜歌舞，國中邑落，暮夜男女群聚，相就歌戲」といった記述がある。高句麗では、漢の時代に、楽隊が下賜されたこと、民衆は歌舞を喜び、国中の集落では、夕暮れから夜になると男女が集まって、歌い遊ぶ、といった風俗があったことを窺い知ることができる。高句麗で、角笛などを使用した鼓吹楽隊による軍楽が、定着していた背景には、「其民喜歌舞」といった高句麗のもともとの風俗との関連性も考えられる。

また、中国大陸の考古資料では、4世紀中頃の後趙墓である可能性が高い、草廠坡1号墓（中国陝西省西安市）出土の騎馬楽俑で、角笛を両手でもって吹く騎馬人物俑が知られている（5－図18－1）⁽⁶⁶⁾。また、5世紀後半の南朝墓である鄧県彩色画像磚墓（中国河南省鄧州市）出土の鼓吹楽隊の画像磚で、先端に幡を付けた角笛を吹く人物の姿が、半肉彫りで描かれていることが知られている（5－図18－2）⁽⁶⁷⁾。4世紀中頃以降の中国大陸中央部においても、角笛が、鼓吹楽隊の軍楽器として使用されていたことが理解できる。

4～5世紀の朝鮮北部（高句麗）では、明らかに吹奏楽器として、角笛が定着していたことが理解でき、軍楽での使用を中心に、薬水里古墳の狩猟図が示すとおり、狩猟用としても使われていたこと



1：草廠坡1号墓の騎馬角笛俑 2：鄧県彩色画像磚墓の鼓吹楽隊図

5－図18 中国大陸の角笛を表した考古資料

は明らかである。昼神車塚古墳の角笛をもつ人物埴輪については、軍楽隊の一員としての姿を表したのではなく、猪甘(飼)の姿を表したものと理解できる。

6世紀後半(古墳時代後期)の日本で、猪甘(飼)が、猪狩猟に使用していた角笛の系譜については、古代の朝鮮に求めることができよう。このことは、高句麗壁画古墳の検討から、疑いようのないと考えられる。埴輪で表された角笛は、国内で製作されたものとするより、高句麗・百済などの朝鮮諸国からの渡来品であった可能性が高いものといえる。日本国内では、角笛の製作が定着した痕跡を認めることが出来ない。その理由としては、在来牛を見る限りでは角が短くて、40～70 cmの長さを有する水牛や黄牛の角と違って、素材として適したものでなかったことや、以下のような理由が考えられる。

天平宝字元(757)年に施行された養老律令の軍防令には、39 軍団置鼓条に「凡軍団、各置鼓二面・大角二口・少角四口、通用兵士、分番教習」といった取決めがあり、44 私家鼓鉦条には「大角、少角」の記述が見られることから、大角笛や小角笛が、古代日本の律令軍隊において、必要不可欠の道具であったことを窺い知ることができる。また、天平宝字3(759)年以後の成立とされる『万葉集』においても、高市皇子尊城上殯宮之時に柿本朝臣人麿が詠んだ歌中に、「鼓之音者…(略)…小角乃音母」という一節が見受けられる。8世紀後半の律令体制化の古代日本では、明らかに大角笛や小角笛の存在を窺い知ることができ、太鼓とともに、軍隊での必要不可欠な道具(軍楽器)であったことが理解できるが、それ以前の5・6世紀の倭王権を中心とした古墳時代社会では、軍隊での必要不可欠な道具(軍楽器)として定着していなかったことが、その理由として考えられるのではないだろうか。

また、12世紀(平安時代)以降の日本で、角笛の定着が発達し得なかった要因のひとつとして、日本産出の最大級の巻貝を利用した、法螺貝の使用があげられよう。

註

- (1) 西本豊弘・新美倫子編『事典 人と動物の考古学』吉川弘文館、2010.
- (2) a. 瀧川政次郎「猪甘部考(上)」『日本歴史』第272号、吉川弘文館、1971、pp. 77～99.
b. 瀧川政次郎「猪甘部考(下)」『日本歴史』第273号、吉川弘文館、1971、pp. 108～123.
- (3) 森浩一「第6章 主要な遺物の考察」『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部文化学科内考古学研究室、1972、pp. 299～343.
- (4) 西本豊弘「ブタと日本人」『人と動物の日本史1 動物の考古学』吉川弘文館、2008、pp. 215～225.
- (5) 若松良一「人物・動物埴輪」『古墳時代の研究9 古墳Ⅲ・埴輪』雄山閣、1998、pp. 108～150.
- (6) a. 亀井正道『人物・動物はにわ(日本の美術第346号)』至文堂、1995.
b. 紀伊風土記の丘管理事務所編・発行『はにわ—埴輪と古墳時代—』1991.
c. 若狭徹『もっと知りたいはにわの世界—古代社会からのメッセージ—』東京美術、2009.
- (7) 若松良一「狩猟を表現した埴輪について」『幸魂—増田逸朗氏追悼論文集—』北武蔵古代文化研究会、2004、

- pp. 113～173.
- (8) a. 昼神車塚古墳調査会編・発行『昼神車塚古墳発掘調査概要（現地説明会資料）』1978.
b. 富成哲也「大阪府昼神車塚古墳」『日本考古学年報（1976年版）』29, 日本考古学協会, 1978, pp. 64～67（図版17～18）.
c. 高槻市立今城塚古代歴史館編・発行『高槻市立今城塚古代歴史館常設展示図録』2012.
- (9) 佐伯茂樹『カラー図解 楽器の歴史』河出書房新社, 2008.
- (10) 黒沢隆朝『楽器の歴史』音楽之友社, 1956.
- (11) 岡崎晋明「角笛をもつ人物埴輪」『かしこうけん友史』第1号, 奈良県立橿原考古学研究所友史会, 1992, pp. 16～18.
- (12) 塚田良道「埴輪の軍楽隊」『同志社大学考古学シリーズVI 考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズ刊行会, 1994, pp. 79～100.（塚田良道『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣, 2007に再録）
- (13) 註3文献に同じ。
- (14) a. 千賀久『特別展はにわの動物園—関東の動物埴輪の世界—』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館, 1990.
b. 千賀久『はにわの動物園』保育社, 1994.
c. 註6c文献に同じ。
- (15) 若狭徹ほか『史跡保渡田古墳群 井出二子山古墳』高崎市教育委員会, 2009.
- (16) 若狭徹『保渡田Ⅶ遺跡』群馬町教育委員会, 1990.
- (17) 若狭徹・田辺芳昭ほか『保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会, 2000.
- (18) 橋本博文「埴輪祭式論—人物埴輪出現後の埴輪配列をめぐる—」『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会, 1980, pp. 337～368.
- (19) 註7文献, p. 171.
- (20) 千賀久『特別展はにわの動物園Ⅱ—近畿の動物埴輪の世界—』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館, 1991.
- (21) 註20文献, p. 29.
- (22) 註12再録文献, p. 168
- (23) 西藤清秀・林部均「橿原市四条遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1987年度』奈良県立橿原考古学研究所, 1990, pp. 289～327.
- (24) 註11文献, p. 18. 註20文献, p. 16.
- (25) 註11文献, p. 17.
- 角杯については、角杯を表した須恵器が、6世紀の北陸地方の石川県域や福井県域を中心に出土している（富山県埋蔵文化財センター編・発行『平成6年度特別企画展 古代の須恵器—新技術の伝来—』1994, p. 14（図版40・特異な形の須恵器分布）ことから、論を改めて検討していきたい。
- (26) 註12再録文献, p. 181.
- (27) 国立歴史民俗博物館編『はにわ—形と心—図録』朝日新聞社, 2003.

(28) 註8b 文献, p. 66.

(29) 註8b 文献, p. 65.

(30) 註27 文献, p. 40.

(31) 註24a・註30に同じ。

(32) 註7 文献, p. 170.

(33) 註24aに同じ。

(34) 註12 再録文献, p. 179.

塚田良道（塚田良道 1994・2007）は、角笛と太鼓を持つ人物埴輪について、武装軍団に關係する軍樂隊の一員である可能性を示し、角笛と太鼓を軍樂器として理解し、古墳時代に軍樂隊が成立していたことを述べるが、角笛が、狩猟や政治的儀式の場で使用されたことを考慮しておく必要も述べており、狩猟での使用を完全に否定しているわけではない。

(35) 大場磐雄「猪ーその考古学」『日本歴史』第272号, 吉川弘文館, 1971, pp. 100~105.

(36) a. 国立歴史民俗博物館編『装飾古墳の世界』朝日新聞社, 1993

b. 小田富士雄『国史跡 五郎山古墳一保存整備事業に伴う発掘調査一』筑紫野市教育委員会, 1998.

(37) a. 斎藤忠編『古墳の絵画（日本の美術第110号）』至文堂, 1975.

b. 榊晃弘『装飾古墳』泰流社, 1977.

c. 斎藤忠「装飾古墳図文の意義」『斎藤忠著作選集3 古墳文化と壁画』雄山閣, 1997, pp. 145~247.

d. 註36a 文献に同じ。

(38) 註36a 文献, p. 58・p. 228.

(39) 斎藤忠「兎沢古墳群9号墳の壁画の発見について」『笛吹段・兎沢古墳群』駿府博物館附属静岡埋蔵文化財調査研究所, 1984, pp. 66~68.

(40) a. 朝鮮画報社出版部編『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社, 1985.

b. 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院・朝鮮画報社編『徳興里高句麗壁画古墳』講談社, 1986.

c. 読売テレビ放送編『好太王碑と集安の壁画古墳』木耳社, 1988.

d. 早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005.

e. 共同通信社編・発行『世界遺産 高句麗壁画古墳展』, 2005.

f. 南秀雄（財団法人大阪市文化財協会文化財研究部）編・発行『図像構成からみた高句麗前期の壁画古墳の特性と被葬者の出自の研究（平成17年度~平成19年度科学研究費補助金基礎研究(C)研究成果報告書）』2007.

(41) a. 註40a, 図版205.

b. 耿鉄華『高句麗古墓壁画研究』吉林大学出版部, 2008.

c. 陳相偉・方起東「集安長川一号壁画墓」『吉林集安高句麗墓葬報告集（吉林省文物考古研究所編著）』科学出版社, 2009, pp. 65~85.

- (42) 註3文献, p. 311. 註14b文献, p. 141.
- (43) 門田誠一「高句麗壁画の食肉庫と傍題—漢人墓主の様相と文化移入—」『同志社大学考古学シリーズⅩⅦ 実証の考古学 松崎和人先生退職記念論文集』, 同志社大学考古学研究室, 2018, pp. 781~792.
- (44) 池内宏・梅原末治『通溝 卷下』日満文化協会, 1940.
- (45) 金基雄『朝鮮半島の壁画古墳』六興出版, 1980.
- (46) 註12文献に同じ。
- (47) 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院考古学研究所編(呂南喆・金洪圭訳)『高句麗の文化』同朋舎出版, 1982.
- (48) 註47文献, p. 220. 註12再録文献, p. 174.
- (49) 註12再録文献, p. 175.
- (50) 註47文献, p. 215
- (51) 註24aに同じ。
- (52) 高句麗では、鷹狩りでも乗馬スタイルが認識できる(本論第1章参照)。
- (53) a. 西本豊弘「狩獵」『古墳時代の研究4 生産と流通Ⅰ』雄山閣, 1991, pp. 121~128.
b. 真壁延子『日本の犬・歴史散歩』文芸社, 2002.
- (54) 西澤治彦「食事文化史からみた中国の南北」『武蔵大学人文学会雑誌』第36巻第4号, 武蔵大学人文学会, 2005, pp. 95~119.
- (55) デズモンド・モリス『デズモンド・モリスの犬種事典』誠文堂新光社, 2007.
- (56) 中西武尚ほか『日本犬聞録—イヌと人の歴史—』大分市歴史資料館, 2015.
- (57) 犬肉の食習慣は、古代中国でも戦国時代から漢代まで盛行していた。
a. 桂小蘭『古代中国の犬文化』大阪大学出版会, 2005.
b. 註54文献に同じ。
- (58) 今西康宏・渡井彩乃『大王墓にみる動物埴輪』高槻市立今城塚古代歴史館, 2015.
- (59) 註1文献, p. 39.
- (60) 馬の博物館・牛の博物館編『馬と牛』馬事文化財団・牛の博物館, 2006.
- (61) 註3文献, p. 319.
- (62) 註1文献, p. 74.
- (63) 田中智夫『アニマルサイエンス4 ブタの動物学』東京大学出版会, 2001.
- (64) 錦田充子『銅鐸の中の動物たち』荒神谷博物館, 2010.
- 桜ヶ丘遺跡出土の1号銅鐸(2区流水文銅鐸)は、同一鑄型で作られたものが4例ある。
- 桜ヶ丘遺跡出土の銅鐸が最も古く、次ぎに、推定製作順に記す。
- 辰馬No.405号銅鐸(辰馬考古資料館所蔵・出土地不明), 新庄銅鐸(国立歴史民俗博物館所蔵・滋賀県出土),
辰馬No.404号銅鐸(辰馬考古資料館所蔵・出土地不明), 泊銅鐸(東京国立博物館所蔵・鳥取県出土)
- (65) 本論第1~4章参照。

- (66) a. 楊泓 (網干善教監訳・来村多加史翻訳)『中国古兵器論叢』関西大学出版部, 1985, 図版拾貳.
b. 蘇哲「西安草廠坡 1 号墓の年代と鹵俑簿の組合せについて」『中国考古学』第 2 号, 日本中国考古学会, 2002, pp. 120~126.
- (67) 河南省文化局文物工作隊『鄧県彩色画像磚墓』北九州中国書店, 1981.

第6章 力士の特性 —扁平髷の系譜—

第1節 本章の目的

本章は、古墳時代における力士について、特有の髪型である扁平髷に注目して、渡来文化としての歴史的・文化的特性を明らかにすることを目的とする。

力士は、『日本書紀』巻第6 垂仁天皇7年7月条で、野見宿禰と力比べをした当麻蹶速を「天下之力士」と記していることから、世に名の響いた強力の者の呼称であったと理解される。

力士の研究は、相撲（角力）との関わりが深く、切り離して考えることが出来ない関係にあることから、相撲史の一角として取り扱われてきた。相撲史では、『日本書紀』の記述を根拠に、野見宿禰がその始祖として扱われてきた⁽¹⁾。一方、力士埴輪及び相撲小像の付いた装飾須恵器を分析対象とした考古資料の検討では、近畿地方の全長 88mの前方後円墳である井辺八幡山古墳（和歌山県和歌山市）の発掘調査を実施した森浩一（森浩一 1972）が、出土した力士埴輪の考察にあたって、日本の古代相撲の源流は、東アジアの北方文化、特に高句麗文化の関連のもとに発生したものとみなし、死者の鎮魂のための葬儀に関連する性格を有していたと指摘⁽²⁾する。この指摘は、古代の力士及び相撲を考察する上で、非常に重要な指標といえる。

以後の考古資料を対象とした研究は、青木豊（青木豊 1987）による力士埴輪の紹介⁽³⁾と、森貞次郎（森貞次郎 1988）による東アジア世界での伝播とその流れの明確化⁽⁴⁾が行われ、力士は、裸体裸足禪の姿が東アジアでの共通した特質であることが示された。力士埴輪に、中国大陆や朝鮮半島の影響が見られることについては、塚田良道（塚田良道 1988）の指摘⁽⁵⁾もある。

一方、力士埴輪については「冬の太陽の強さの復活、豊作の予祝を願う」との指摘⁽⁶⁾もあり、山内紀嗣（山内紀嗣 1996）は、力士埴輪及び格闘像（相撲小像）の付いた装飾付須恵器壺の分析から、相撲が古墳の墳丘上で執り行われていたことを想定し、その性格は豊穰をもたらす農耕儀礼であったとの見解⁽⁷⁾を示した。

力士埴輪特有の扁平髷については、鈴木徹（鈴木徹 1994）が、力士埴輪の性格分析に際して重要であることを指摘⁽⁸⁾しており、亀井正道（亀井正道 1995）は、扁平髷が力士埴輪の特徴のひとつであることを述べている⁽⁹⁾。駒宮史朗（駒宮史朗 2004）は、扁平髷が力士固有の髪型であって、力士は髪型にその特徴があることを述べるとともに、「懲悪・癡邪・鎮魂・慰霊」などの言葉で括られる職掌を有していたとの見解を提示⁽¹⁰⁾している。さらに、力士埴輪を中心とした特別展が開催された⁽¹¹⁾際に、若松良一（若松良一 2008）は、力士特有の髪型として通説化しつつあった扁平髷を、仮面（布製仮面）を付けた相撲人の姿であったとの異論を提示⁽¹²⁾している。

近年においても、力士埴輪を北方系（北東アジア）の文化要素とする指摘⁽¹³⁾がなされているが、一方で、扁平髷が革製の髪飾りである可能性が高いことの指摘や、相撲の起源を中国大陆や朝鮮半島に求めることに否定的な意見も述べられている⁽¹⁴⁾。

力士の性格については、長谷川明（長谷川明 1993・2002）による南方系の隼人説⁽¹⁵⁾や、井辺八幡山古墳出土の力士埴輪を対象とした富加見泰彦（富加見泰彦 2009）による海人説⁽¹⁶⁾などがある。井辺八幡山古墳出土の力士埴輪をめぐるのは、海人説を支持する見解⁽¹⁷⁾のほかに、古墳時代に固定的な職能集団としての力士の存在を指摘することは困難であるといった見解⁽¹⁸⁾も示されている。

力士についての考古資料を対象とした研究では、専ら力士埴輪がその対象として扱われてきた。力士の特徴のひとつとして通説化しつつあった扁平髷に関しては、特に具体的な検討は行われてこなかったが、仮面を付けた相撲人の姿⁽¹⁹⁾、あるいは革製の髪飾り⁽²⁰⁾との新見解が示され、その系譜をめぐる解釈も含めて再考の必要があるものといえる。

本章では、考古資料を中心とした比較分析の一助とするために、相撲史での始祖根拠となっている古代日本の文献史料を紹介したうえで、力士埴輪特有の扁平髷に注目して整理・分析を行い、古墳での樹立状況からその性格を検討し、高句麗壁画古墳に描かれた力士像の髪型との比較検討を行いたい。扁平髷の力士埴輪と高句麗壁画古墳の力士図との比較分析を通じて、扁平髷に関する新たな解釈を試み、力士埴輪の有する性格分析を基軸に、渡来文化としての系譜をめぐる問題の見極めを行っていきたい。

第2節 文献史料の紹介

〔史料1〕『日本書紀』巻第6・垂仁天皇7年7月

左右奏言、当麻邑有勇悍士。曰当麻蹶速。其為人也、強力以能毀角申鉤。恒語衆中曰、於四方求之、豈有比我力者乎。何遇強力者、而不期死生、頓得爭力爲。天皇聞之、詔群卿曰、朕聞、当麻蹶速者天下之力士也。若有比此人耶。一臣進言、臣聞、出雲国有勇士。曰野見宿禰。試召是人欲当于蹶速。即日、遣倭直祖長尾市、喚野見宿禰。是野見宿禰自出雲至、則当麻蹶速与野見宿禰令拵力。二人相对立、各举足相蹶。則蹶折当麻蹶速之脇骨、亦蹈折其腰而殺之。故奪当麻蹶速之地、悉賜野見宿禰。是以此邑有腰折田之縁也。野見宿禰乃留仕焉。

（左右奏して言さく、当麻邑に勇悍の士有り。当麻蹶速と曰ふ。其の為人、強力くして能く角を毀き鉤を申ぶ。恒に衆中に語りて曰く、四方に求めむに、豈我が力に比ぶ者有らむや。何とも強力者に遇ひて、死生を期はず、頓に争力すること得てむといふとまをす。天皇聞しめて、群卿に詔して曰はく、朕聞かく、当麻蹶速は天下の力士なりと。若し此に比ぶ人有らむやとのたまふ。一臣進みて言さく、臣聞るに、出雲国に勇士有り。野見宿禰と曰ふ。試に是の人を召して蹶速に当せむと欲ふとまをす。即日、倭直が祖長尾市を遣し、野見宿禰を喚す。是に野見宿禰、出雲より至りしかば、当麻蹶速と野見宿禰とに拵力せしむ。二人相对ひ立ち、各足を挙げ相蹶う。則ち当麻蹶速が脇骨を蹶え折り、亦其の腰を踏み折りに殺す。故、当麻蹶速が地を奪りて、悉に野見宿禰に賜ふ。是を以ちて、其の邑に腰折田有る縁なり。野見宿禰は乃ち留り仕へまつる。）

史料1の記述から、前述のとおり、強力として名前が知れわたるものを「力士」と呼んでいたことが理解できる。当麻蹶速と野見宿禰、強力の二人が向き合って立ち、実施した力比べを「搦力」といい、相撲が、角力とも書かれる由縁といえる。日本の相撲史では、この力比べの記述がよく引用され、力比べで勝った野見宿禰が、日本の相撲の始祖とされてきた⁽²¹⁾。

また、力比べに勝った野見宿禰は、帰らずにそのまま留まって朝廷に仕えたとある。このことは、力士が、朝廷の配下に属したものとなったことを意味し、部民として位置づけられる存在でありえたことが十分に考えられる。

〔史料2〕『日本書紀』巻第14・雄略天皇13年9月

木工猪名部真根以石為質，揮斧斲材。終日斲之，不誤傷刃。天皇遊詣其所，而怪問曰，恒不誤中石耶。真根答曰，竟不誤矣。乃喚集采女，使脱衣裙而著犢鼻，露所相撲。於是真根暫停仰視而斲。不覺手誤傷刃。

（木工猪名部真根、石を以ちて質として、斧を揮りて材を斲る。終日に斲れども、誤りて刃を傷はず。天皇、其の所に遊詣して、怪しび問ひて曰はく、恒に誤りて石に中てしやとのたまふ。真根答へて曰さく、竟に誤らじとまをす。乃ち采女を喚集へて、衣裙を脱きて犢鼻を著け、露所に相撲とらしむ。是に真根、暫停め仰ぎ視て斲る。不覺ずして、手誤ち刃を傷ふ。）

史料2は、采女を呼び集めて衣服を脱がせ、褌を着けさせて、相撲をとらせた記述である。木工猪名部真根を誘惑するために、女性を裸にした雄略天皇の悪意が見られるが、それを不自然ではなく行うために采女に相撲をとらせたのだから、相撲が裸で褌を着けて行うのが一般的であったと言えよう。

〔史料3〕『日本書紀』巻第24・皇極天皇元年7月条

饗百濟使人大佐平智積等於朝。（略）乃命健兒，相撲於翹岐前。智積等宴畢而退，拜翹岐門。

（百濟使人大佐平智積等に朝に饗へたまふ。（略）乃ち健兒に命せて、翹岐が前に相撲とらしむ。智積等、宴畢りて退で、翹岐が門を拜す。）

史料3では、百濟の使者である大佐平智積らを朝廷で饗応し、健兒に命じて翹岐の前で相撲をとらせたとある。続けて、智積らは宴会が終って退出してから、翹岐の門を拝礼したともあり、2カ月ほど前の元年5月条に、「翹岐従者一人死去。」「翹岐児死去。」といった翹岐の従者1人と翹岐の子が立て続けに亡くなったことが記されていることと関連づけて、厚遇する百濟の使者への相撲の披露は、相撲が葬送儀礼と結び付いた性格を有するものであったと解釈されてきた。森浩一（森浩一 1972）の考察⁽²²⁾の根拠となった記述である。

〔史料4〕『日本書紀』巻第29・天武天皇11（682）年7月

隼人多来貢方物。是日，大隅隼人与阿多隼人，相撲於朝廷。大隅隼人勝之。

（隼人、多に來て方物を貢る。是の日に、大隅隼人と阿多隼人と、朝廷に相撲る。大隅隼人勝つ。）

史料4では、隼人が大勢して来朝し、産物を献上したうえに、大隅隼人と阿多隼人が朝廷で相撲を

とって、大隅隼人が勝ったことが記される。相撲には、朝廷での披露という格式的な性格を有する一方、地方集団の催事などでも執り行われていたことが窺える。

『日本書紀』に見える力士・相撲関連の記述を見てきたが、史料1・2によれば、古くから力士は、朝廷の配下に属し、相撲は、裸に褌を着けて執り行われたことが理解できる。さらに、史料3からは、相撲の有する葬送儀礼的性格が瞥見でき、その呼称も健児へと変わっている。史料4では、朝廷のみならず、地方でも相撲が執り行われていたことがわかる。また、『日本書紀』では、髪型に関する記載は、特にみられない。

第3節 形象埴輪と壁画資料の検討

(1) 扁平髷の力士埴輪

力士埴輪と称される人物埴輪は、九州地方に存在する石人像を除くと、日本列島の中で31例ほどの存在が知られる⁽²³⁾。その中で、頭部が残存して、髪型が判明（推定）できるものは、23例（力士埴輪全体の約74%）である。髪型は、扁平髷又は一文字髷と呼ばれるものが約83%といった大多数を占め、力士埴輪の特色といわれてきた（6-表1，グラフ1）。古墳時代中期のものをⅠ期（5世紀）、後期のものをⅡ期（6世紀）とした編年（時間軸区分）に基づき、先ずはその内容を述べたうえで、分類整理を行いたい。

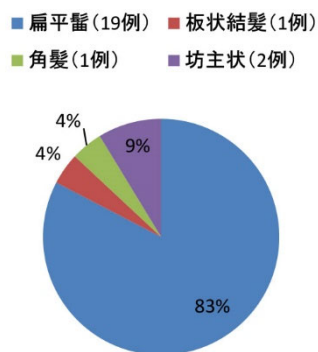
Ⅰ期（5世紀）

5世紀後半に位置付けられる資料としては、近畿地方では四条2号墳（奈良県橿原市）、関東地方では保渡田Ⅶ遺跡（群馬県高崎市）出土のものが知られる。

四条2号墳は全長42mの帆立貝式古墳で、扁平髷の右側の一部が残存する力士埴輪の頭部～上半身が出土している。立体的に表現された耳の上に、扁平髷が見られる。右腕を挙げる姿勢をとり、腕には輪と手首付近に結び紐付きの輪が付けられる。顔面に並行する縦方向の線刻が8条施されており、入れ墨の表現と理解されている。上半身は裸で、お腹が張り出すようなスタイルである。足玉付きの脚部が出土しており、全身像であったことが推定できる⁽²⁴⁾。

一方、保渡田Ⅶ遺跡は、保渡田古墳群を形成する3基の大型前方後円墳のひとつである全長213mの井出二子山古墳（群馬県高崎市）の北側に位置し、形象埴輪の集中配列区画あるいは帆立貝式古墳と考えられている。扁平髷の力士埴輪2体が出土しており、うち1体は右腕を挙げて左腕を下げる姿勢をとる。髷や顔面と首・腕に赤彩が施されている⁽²⁵⁾。

6-グラフ1 力士埴輪の髪型比較



6－表1 扁平髷の力士埴輪一覧

時期	No.	出土地	古墳・遺跡名（所在名）	埴形／規模	時期	形状／規模	頭髪／分類	髷の位置	髷施文	腕の形状	手	襷	足	特記	主要文献
I 期	1	奈良県橿原市	四条2号墳	帆立貝式古墳／全長42m	5c後	男子像／－	扁平髷／団扇型	耳上	－	右手挙げ、（左手下げ）	（開く）	－	－	入れ墨／腕に輪と結び紐付きの輪	鈴木裕明ほか2010
	2		四条1号墳	造り出し付き方墳／ 一辺28～29m・全長38m	5c末	男子像A／－	扁平髷／扇子型	耳上	－	－	－	－	－	－	西藤清秀・林部均1990
	3					男子像B／－	扁平髷／団扇型	耳上	○	－	－	－	－	－	－
	4	群馬県高崎市	保渡田Ⅶ遺跡	突出遺構6号溝／－	5c後	男子像／－	扁平髷／団扇型	耳前	－	右手挙げ、左手下げ	－	－	－	赤彩	若狭徹1990
	5					男子像／－	扁平髷／団扇型	－	－	－	－	－	－	赤彩	
	6	福島県泉崎村	原山1号墳	前方後円墳／－	5c末	男子全身立像／62×－cm	扁平髷／団扇型	耳上	－	右手挙げ、左手下げ	（開く）	○	－	赤彩	辻秀人ほか1982
II 期	7	茨城県行方市	三昧塚古墳	前方後円墳／全長85m	6c初	男子像／－	扁平髷／扇子型	耳上	－	－	－	－	－	赤彩	斎藤忠・大塚初重ほか1960
	8	大阪府高槻市	今城塚古墳	前方後円墳／全長350m	6c前	男子全身立像A／－	扁平髷／団扇型	耳上	－	左手挙げ、右手下げ	開く	○	裸足	両腕に鈴付飾り紐（手玉）／両脚に結び紐	鐘ヶ江一朗ほか2004、森田克行2011
	9					男子全身立像B／112×50cm	扁平髷／団扇型	耳上	－	左手挙げ、右手下げ	開く	○	裸足	両脚に結び紐	森田克行2011、荻野谷正宏ほか2011
	10		昼神車塚古墳	前方後円墳／全長56m	6c中	男子全身立像／－	扁平髷／団扇型	耳上	－	左手挙げ、右手下げ	－	－	裸足	右腕に鈴付飾り紐（手玉）／首に粘土玉を付けた紐（首飾り）をかける	富成哲也1978
	11	和歌山県和歌山市	大谷山22号墳	前方後円墳／全長80m	6c前	（男子像）／－	扁平髷／扇子型	耳上	－	－	－	－	－	－	末永雅雄・森浩一ほか1967
	12	和歌山県和歌山市	井辺八幡山古墳	前方後円墳／全長88m	6c前	男子像／－	扁平髷／団扇型	－	－	－	－	－	裸足	－	森浩一ほか1972
	13	福井県美浜町	帝釈寺4号墳	（前方後円墳）／後円部径20m	6c前	男子像／－	扁平髷／団扇型	耳上	－	－	－	－	－	－	中原義史・瓜生由起1998
	14	京都府福知山市	稲葉山10号墳	前方後円墳／全長38m	6c中	男子像／－	扁平髷／団扇型	耳上	－	－	－	－	－	－	石井清司1983
	15	福岡県北九州市	荒神森古墳	前方後円墳／67m	6c前	男子像／－	扁平髷／扇子型	耳上	○	－	－	－	－	髷に1条の線刻	関川妥2007
	16	熊本県山鹿市	中村双子塚古墳	前方後円墳／60～70m	6c前	男子像／－	扁平髷／団扇型	耳後	○	－	－	－	－	赤彩／髷に竹管状工具による円形施文	山口健剛2003、山鹿市立博物館2015
不明	17	不明（北関東）	不明（旧長瀬総合博物館蔵）	－	－	男子全身立像／68×－cm	扁平髷／団扇型	耳上	－	右手挙げ、左手下げ	（開く）	○	裸足	－	亀井正道1995
	18	大阪府堺市	軸松南高田遺跡	（埴輪製作址）	－	男子像／－	扁平髷／扇子型	耳上	－	－	－	－	－	－	堺市役所1929
	19	奈良県桜井市	能登遺跡	（埴輪窯跡）	－	男子像／－	扁平髷／扇子型	耳上	－	－	－	－	－	－	松本俊吉1937

5世紀末頃に比定される資料では、近畿地方の四条1号墳（奈良県橿原市）、東北地方の原山1号墳（福島県泉崎村）出土のものがある。

四条1号墳は一辺28～29mの造り出し付方墳（造り出しを含めた全長は38m）で、扁平髷の右側の一部が残存し、頭頂部から左側にかけて髷の剥離痕がよく残る力士埴輪の頭部と、手捏ね状に成形された扁平髷を結う力士埴輪の頭部の合計2体が出土している。台部（器台）に乗った素足表現の脚部（足玉付き）も出土しており、全身像であったことが推定できる⁽²⁶⁾。

原山1号墳は全長22mの前方後円墳で、後円部南端の周溝内で出土した盾持人物埴輪の東約1m付近から扁平髷の力士埴輪2体以上が出土している。うち1体はほぼ完全な形の全高62cmの双脚立像で、右腕を挙げて左腕を腰にあてた、土俵入りを連想させる姿勢をとる。褌を締め、髷や顔面と首・腕に赤彩が施されている⁽²⁷⁾。

類似する姿勢をとる扁平髷の力士埴輪は、出土地不明ではあるが、関東地方の北関東（埼玉県ないしは群馬県）から出土したものと考えられるものがある。旧長瀬総合博物館（埼玉県長瀬町）に所蔵されていたもの⁽²⁸⁾で、全高68cmの双脚立像で、右腕を挙げて左腕を腰にあてた、土俵入りを連想させる姿勢をとり、褌を締めている。

Ⅱ期（6世紀）

6世紀初頭に比定される資料では、関東地方の三昧塚古墳（茨城県行方市）出土のものがある。三昧塚古墳は、全長85mの前方後円墳で、扁平髷の力士埴輪の頭部が出土している。他に褌の部分が出土しており、双脚立像であったと考えられる。顔面と頭部、褌に赤彩が施される⁽²⁹⁾。

6世紀前半では、近畿地方の今城塚古墳（大阪府高槻市）、大谷山22号墳（和歌山県和歌山市）や井辺八幡山古墳（和歌山県和歌山市）、北陸地方の帝釈寺4号墳（福井県美浜町）、九州地方の荒神森古墳（福岡県北九州市）、中村双子塚古墳（熊本県山鹿市）出土のものが知られる。

今城塚古墳は、全長350mの大型前方後円墳で、真の継体天皇陵（大王墓）と考えられている。内堤の北側に200体以上の形象埴輪で構成される埴輪儀礼空間（埴輪祭祀場）が設けられ、その最も南側の区画に扁平髷の力士埴輪4体が配列される。左腕を挙げて手の平を開き、右腕を下げる姿勢をとり、褌を締める。ほぼ完形の全身像である2体によれば、台部（器台）に乗る両足は裸足で、両脚には結び紐が見られる。両方の腕に、鈴付き飾り紐（手玉）を着けたものもある⁽³⁰⁾。

一方、大谷山22号墳は、岩橋千塚古墳群を構成する山頂部に築かれた全長80mの前方後円墳で、逆三角形状を呈する顔面とその頭部に扁平髷がみられる力士埴輪の頭部が出土している。⁽³¹⁾

また、全長88mの前方後円墳である井辺八幡山古墳では、扁平髷や褌の一部が残存する。台部（器台）に乗る裸足の両脚や、ほぼ完形の双脚全身像である顔面に入れ墨と頭部に鉢巻き状の表現が施された力士埴輪の存在から、扁平髷の力士埴輪も双脚全身像であったといえよう⁽³²⁾。

帝釈寺4号墳は、全長40m前後の前方後円墳になることが指摘されており、扁平髷の力士埴輪の頭部が見つかった⁽³³⁾。

荒神森古墳は、墳長 67m の前方後円墳で、同様に扁平髷の力士埴輪の頭部のみが見つかっている。髷に 1 条の線刻が見られる⁽³⁴⁾。

中村双子塚古墳は、推定全長 60～70m の前方後円墳で、頭部のみが出土する。中村双子塚古墳から出土したものは、円形粘土板による耳の後方から扁平髷が表現され、その正面と背面に竹管状工具による円形施文が見られ、赤彩が施されている⁽³⁵⁾。

6 世紀中頃になると、近畿地方の昼神車塚古墳（大阪府高槻市）、稲葉山 10 号墳（京都府福知山市）から出土したものが知られる。

昼神車塚古墳は、全長 56m の前方後円墳で、前方部の形象埴輪列内に扁平髷の力士埴輪も配列される。扁平髷の力士埴輪は、左腕を挙げて、右腕を下げる姿勢をとり、右腕に鈴付き飾り紐（手玉）を着け、首に粘土玉を付けた紐をかけている⁽³⁶⁾。

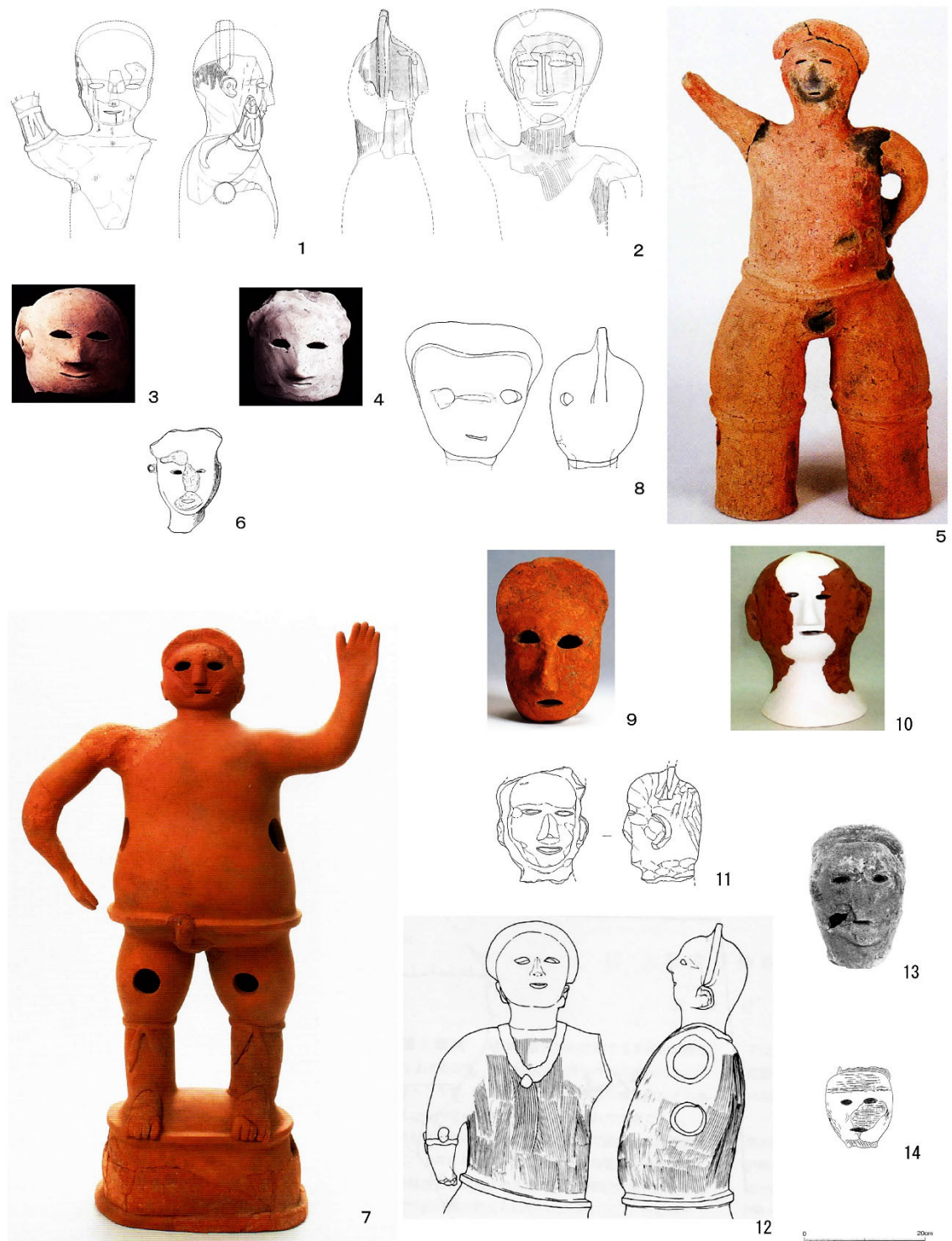
稲葉山 10 号墳は全長 38m の前方後円墳で、頭部のみが出土する⁽³⁷⁾。

時期不明ではあるが、近畿地方の舳松南高田遺跡（大阪府堺市・埴輪製作址）、能登遺跡（奈良県桜井市・埴輪窯跡）といった埴輪生産関連遺跡からも、扁平髷の力士埴輪の頭部の出土が知られている⁽³⁸⁾。

扁平髷の力士埴輪は、5 世紀後半を初現として、6 世紀中頃まで造立されていたことが理解でき、Ⅰ期の四条 1・2 号墳と保渡田Ⅶ遺跡、出土地不明の旧長瀬総合博物館所蔵、生産遺跡である舳松南高田遺跡や能登遺跡出土のものを除き、他は全て前方後円墳からの出土である。旧長瀬総合博物館所蔵のものも、前方後円墳から出土した可能性が高いといえよう。Ⅱ期の今城塚古墳は大王墓（別格）であるが、他の前方後円墳は大小の規模差はあるものの、各地域の首長墓であることに違いはない。他の共通点としては、双脚立像⁽³⁹⁾で、裸に褌のスタイルが基本といえる。

Ⅰ期～Ⅱ期初頭にかけての東日本地域から出土したものには、顔面などに赤彩が施される傾向が窺えるが、九州地方の中村双子塚古墳出土のものにも赤彩が見られる。顔面への入れ墨表現は、四条 2 号墳出土のものだけである。また、Ⅰ期のものは右腕を挙げて左腕を下げる姿勢をとるが、Ⅱ期のものは逆手で、左腕を挙げて右腕を下げる姿勢をとるといった傾向が指摘できる（6-図 1）。このような片方の手を挙げて片方の手を下げ、両足を開いた姿勢の人物は、近畿地方の 4 世紀末頃に築造された全長 140m の前方後円墳である黄金塚 2 号墳（京都府京都市）から出土した盾形埴輪の鱗部に描かれた線刻人物図⁽⁴⁰⁾のほか、装飾古墳に描かれた人物図でも窺うことができる。しかしながら、装飾古墳に描かれた人物図では、明確に力士と断定できるものはないように思われる⁽⁴¹⁾。九州地方に存在する石人像は、人物埴輪に比べて大形品であるが、6 世紀前半に築造された全長 170m 以上の大型前方後円墳である岩戸山古墳（福岡県八女市）出土の力士像の頭部に、左右の耳から頭頂部を結ぶように横一文字の髷が削り出されており、力士埴輪と同様に扁平髷が表現されている⁽⁴²⁾。

扁平髷は、頭頂部を中心に横方向に粘土を扇状に貼り付けて成形されたものであるが、扇子状に表現されるものと、耳付近から頭頂部にかけて団扇状に表現されるものに別けられる。便宜的に前者を



I 期 1：四条2号墳 2：保渡田Ⅶ遺跡 3・4：四条1号墳 5：原山1号墳
II 期 6：三味塚古墳 7：今城塚古墳 8：大谷山22号墳 9：帝釈寺4号墳 10：中村双子塚古墳
11：荒神森古墳 12：昼神車塚古墳 13：舩松南高田遺跡 14：能登遺跡

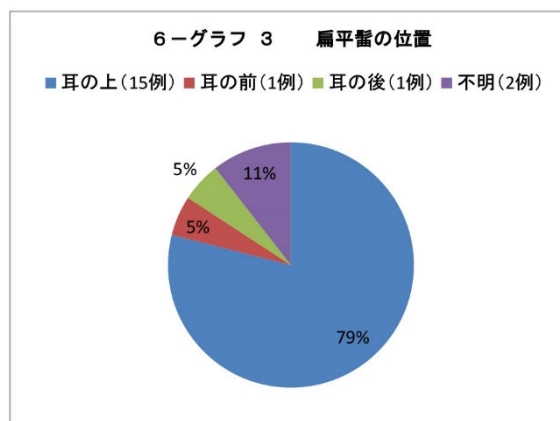
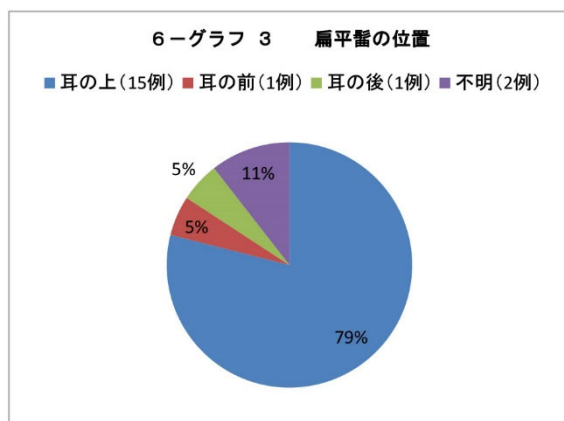
6-図1 力士埴輪（写真は縮尺不統一）



6-図2 扁平髻の形状分類



6-図3 扁平髻の位置分類



扇子型、後者を団扇型と呼びたい（6-図2）。圧倒的に団扇型の割合（68%）が多いことが指摘できる（6-表1，6-グラフ2）が，単なる成形技法の違いまたは工人の違いとも考えられ，時期や性格の違いを指摘することは難しいようである。また，扁平髻を耳の位置を基準にして，①耳の上，②耳の前，③耳の後から表現されるものに分類できる（6-図3）。①が79%を占め，圧倒的に多いことが指摘できる（6-表1，6-グラフ3）。髻に施文が見られるものは，僅かではあるが3例見られる。特に中村双子塚古墳から出土したものは，円形刺突で表現が明確である。

（2）力士埴輪の性格分析

次に，古墳での配列状況を検証し，力士埴輪の有する性格の検討を行いたい。

I 期（5 世紀）

5 世紀後半の四条 2 号墳は，藤原京の造営に伴って墳丘が削平されており，力士埴輪は，後円部東側の周溝（SD01）内から馬形などの動物埴輪とともに出土している。保渡田Ⅶ遺跡では，力士埴輪は 6 号溝から出土しており，数多く出土した形象埴輪群のうち人物埴輪を中心とした中心グループ A を構成する一群と考えられている⁽⁴³⁾。

5 世紀末頃の四条 1 号墳も四条 2 号墳と同じく藤原京の造営に伴って墳丘が削平されており，造り出し北西側の周溝内から他の人物埴輪や盾形などの器財埴輪，馬形などの動物埴輪とともに力士埴輪

が出土している。保渡田Ⅶ遺跡から北東に約350mに位置する全長188mの大型前方後円墳である保渡田八幡塚古墳（群馬県高崎市）では、円筒埴輪で囲繞された内堤A区Ⅶ群（北西側）で、力士及び武人埴輪による配列復元がなされている（6-図4）⁽⁴⁴⁾。一方、原山1号墳の力士埴輪は、後円部南東側の周溝内から、盾持人物埴輪に隣接（東約1mの位置）して出土している。

形象埴輪群の配列復元がなされた保渡田八幡塚古墳の内堤A区の配列構成の検討では、Ⅶ群は「守護・威儀の列」⁽⁴⁵⁾として考えられており、原山1号墳では守護・辟邪・邪霊などの役割を象徴する盾持人物埴輪に隣接して、力士埴輪が出土していることから、力士埴輪が盾持人物埴輪の有する役割と同様の役割を担うものであったことが想像されている⁽⁴⁶⁾。

Ⅱ期 6世紀

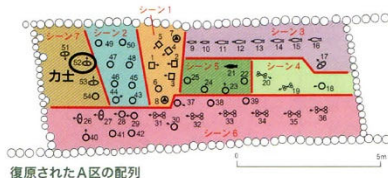
6世紀初頭の三昧塚古墳では、後円部南側の墳丘裾部から人物・動物埴輪が集中して出土しており、力士埴輪もこの一群に含まれている。

6世紀前半の今城塚古墳では、幅18mの内堤の北東側中央に長方形の張り出し（推定長65m×幅10m）が設けられて、200点を超える形象埴輪群が造立されている。この埴輪祭祀場と呼ばれる空間の4区（北西側）では、入母屋造りの高床の家と盾（器財埴輪）、武人と鷹匠（人物埴輪）、鶏（鳥形埴輪）、馬と牛（動物埴輪）のほかに水鳥（鳥形埴輪）が縦列され、人物埴輪と動物埴輪の間に力士埴輪が並列される（6-図4）。埴輪祭祀場の性格としては、王宮で行われた大王権継承儀礼である殯宮儀礼を表現したものとの見解があり、力士埴輪の配列された4区は、「殯庭」と推定されている⁽⁴⁷⁾。今城塚古墳とほぼ同時期の前方後円墳で、力士埴輪を含めた形象埴輪の配列実態の検証が行われている事例としては、大日山35号墳（和歌山県和歌山市）や大谷山22号墳、井辺八幡山古墳があげられる。大日山35号墳は、基壇を含む全長105mの前方後円墳である。東側の造り出し（円筒埴輪で囲繞）で、入母屋造りの高床の家と平屋の家（器財埴輪）が並び、その西側に人物埴輪、翼を広げた鷹とおぼしき鳥形埴輪、そして力士埴輪、水鳥（鳥形埴輪）、犬や猪などの動物埴輪が配列される。また、東側の北寄りには、須恵器大甕が配置されている（6-図4）。大谷山22号墳では、南側に位置する造り出し（円筒埴輪で囲繞）で、他の人物埴輪とともに力士埴輪が配列されており、北西側には馬形埴輪の配列が見られる（6-図4）⁽⁴⁸⁾。井辺八幡山古墳では、西側造り出しと東側造り出しの両方で力士埴輪が配列されている。円筒埴輪で囲繞された区画内に、西側造り出しでは弓などを持つ人物（武人）や巫女などの人物埴輪と力士埴輪が配列され、力士埴輪に近い位置に盾形埴輪が配置されている。東側造り出しでは、力士埴輪に近い位置に鷹匠埴輪と鹿・猪形などの動物埴輪群の配列がみられる（6-図5）⁽⁴⁹⁾。井辺八幡山古墳の力士埴輪による相撲の場面を含めた人物埴輪群については、小笠原好彦（小笠原好彦2014）が「亡き首長による祈年祭祀にともなった年中行事を追想して配置された」との見解を示しており⁽⁵⁰⁾、農耕儀礼などとの関連も注視される。

各々の詳細な形象埴輪群の造立の実態には相違点が見られるが、6世紀前半に築造された前方後円墳では、大抵的には今城塚古墳の形象埴輪群の構成に類似した構成を呈することが理解でき、個々の



復元されたA区の埴輪群像○



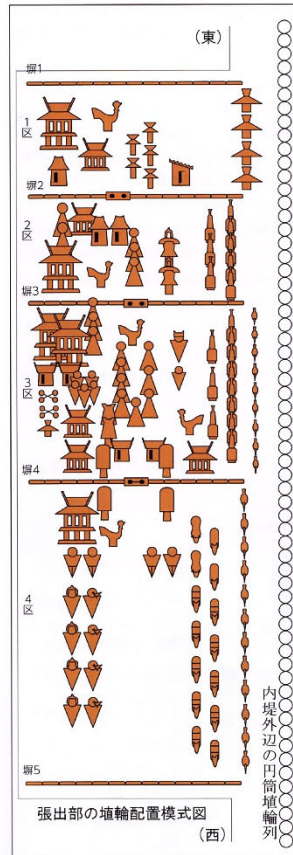
復元されたA区の配列

- I 人物の群による儀礼場面・・・有力者が行う権威的な儀礼
シーン1 座位群像 シーン2 立位群像
II 動物・人の群・・・有力者が行う権威的な行事
シーン3 鳥の列 (と鷹狩り?) シーン4 猪狩り シーン5 鶴飼い
III 人・動物・器財による威儀・財物表示の列・・・有力者が占有する財物
シーン6 財物の列 シーン7 守護・威儀の列

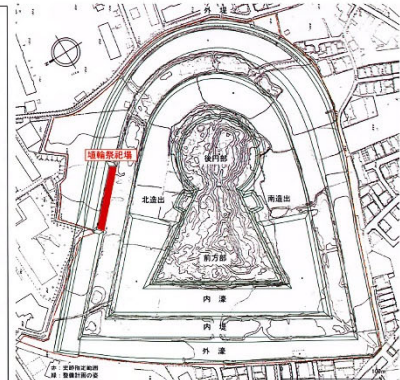
保渡田八幡塚古墳内堤A区とカキ埴輪の配列



大日山 35 号墳東側造り出しの復元配置された形象埴輪
写真中央がカキ埴輪



張出部の埴輪配置模式図 (西)



墳丘と埴輪祭壇の位置

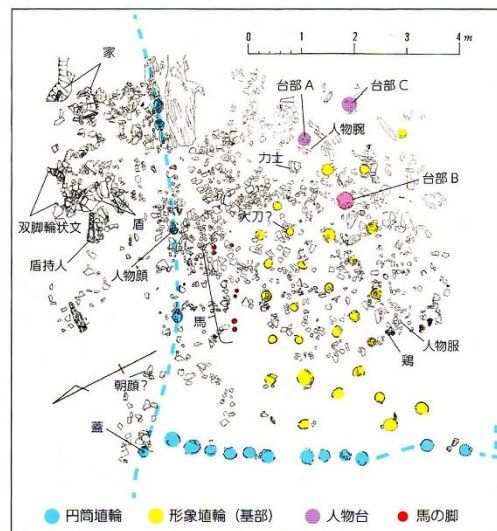


復元配列されたカキ埴輪

模式図凡例



今城塚古墳埴輪祭壇とカキ埴輪の配列

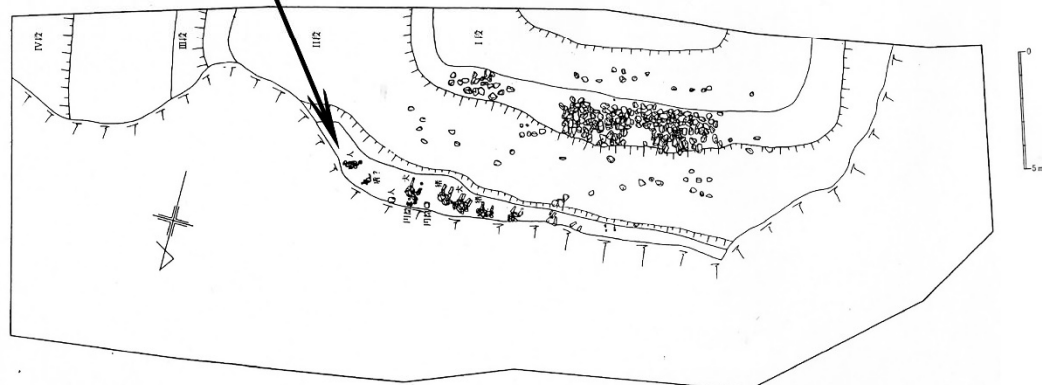
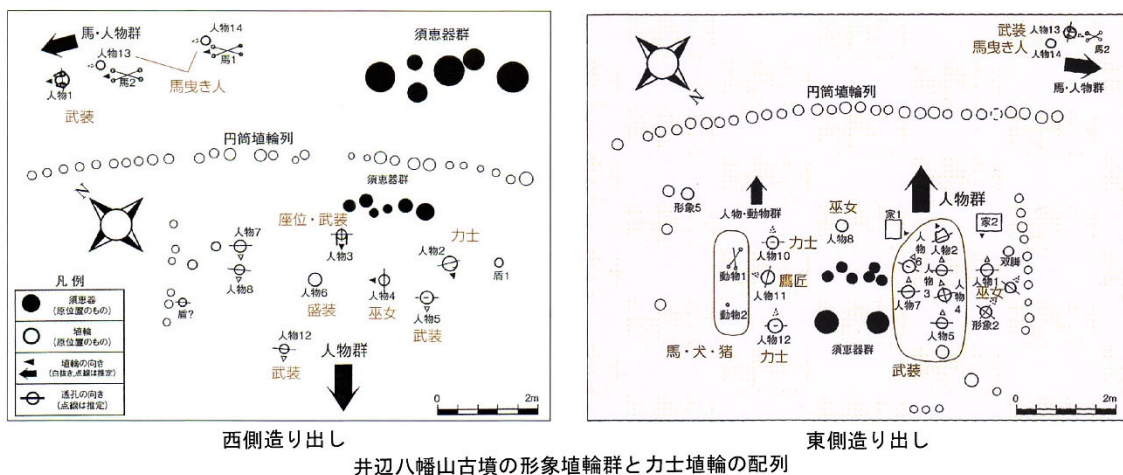


大谷山 22 号墳造り出しの形象埴輪配列

古墳における力士埴輪の役割に相違はないと判断できる。

荒神森古墳の力士埴輪は、後円部側に設置された「3トレンチ周堤帯」からの出土で、中村双子塚古墳の力士埴輪は、後円部周溝内からの出土である。

6世紀中頃の昼神車塚古墳では、後円部北東側の墳丘裾部に力士埴輪と盾形と考えられる埴輪が配列され、さらにその西側に犬・猪といった動物埴輪が列となって配置されている（6—図5）。稲葉山10号墳では、括れ部南側の前方部寄りの位置から巫女・弾琴・武人などの人物埴輪とともに力士埴輪



昼神車塚古墳の形象埴輪群と力士埴輪の配列

6—図5 力士埴輪の配列状況（2）〔Ⅱ期〕（昼神車塚古墳の写真は筆者撮影）

が出土している。

I 期から II 期前半にかけて、墳丘を舞台とした形象埴輪群による演出が盛大となり、個々の古墳での造立にあたっては、演出の詳細に相違が見られるが、大体的には I 期の保渡田八幡塚古墳や原山 1 号墳と II 期の今城塚古墳や大日山 35 号墳・井辺八幡山古墳などでの力士埴輪の有する性格の相違はないように判断できる。全ての時期を通じて、力士埴輪の有する性格の特質（守護・癰邪の役割）に大きな違いはないものと考えられ、前方後円墳などの首長墓を中心とした配列の実態からは、力士が首長の配下に属する部民であったことが理解できる。

また、古墳での配列状況の検証からは、豊穡をもたらす農耕儀礼としての性格を明確に見いだすことはできなかった。

（3）高句麗壁画古墳の力士図

高句麗壁画古墳で描かれた力士図について、その内容を述べたうえで、頭髪を中心とした検証を行いたい。

高句麗壁画古墳の力士図は、角抵図及び手搏図⁽⁵¹⁾のほかに、石室の天井を支える力士図（以下、天井を支える力士図と呼ぶ）がある⁽⁵²⁾。

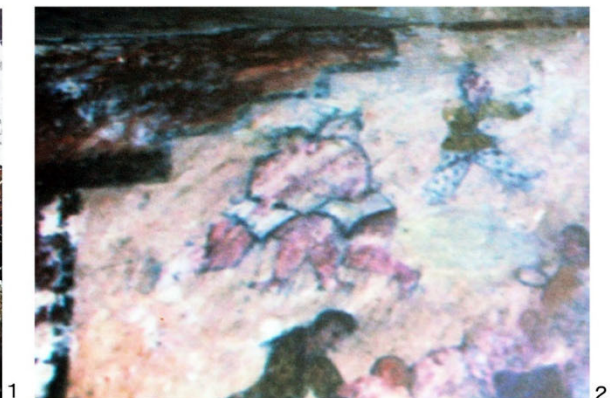
角抵図は、集安の 4 世紀末頃に築造された角抵塚（中国吉林省集安市）で描かれている⁽⁵³⁾。また、5 世紀中頃に築造された長川 1 号墳（中国吉林省集安市）でも見ることができる⁽⁵⁴⁾。一辺約 15m の方台形の墳丘を有する角抵塚（6－図 6）は、石室は前室と奥室（玄室）によって構成される二室墓で、奥室の右側壁に角抵図が描かれている。柱と斗栱、梁が描かれた側壁の中央に樹木が描かれ、その右側に裸身に褌をつけた二人の力士が角抵する姿と、さらにその右側に杖をもって見守る白髪で長い髭を生やした男の姿が描かれている。角抵は、神聖な行事とも理解され、葬送儀礼の一場面を示しているという考え方もある⁽⁵⁵⁾。角抵する二人の力士は、頭頂部で髪を結び上げて上部に突出させているような髪型である（6－図 7－1）。一方、規模不明の方台形墳である長川 1 号墳の石室も前室と奥

室（玄室）によって構成される二室墓である。長川 1 号墳では、前室北壁の上部隅に、裸身に褌をつけた二人の力士が組み合って角抵する姿を見ることができるが、髪型などの詳細は不明である（6－図 7－2）。

角抵図に類似する手搏図は、集安の角抵塚に隣接して築造された 4 世紀末頃～5 世紀初頭の舞踊塚（中国吉林省集安市）、平壤周辺の永和 13（357）年銘墓誌のある安岳 3 号墳（北朝鮮黄海南道安岳郡）で描かれ



6－図 6 角抵塚近景（筆者撮影）



6-図7 高句麗壁画古墳の角抵図 (1・2ともに禹山貴族墓展示図を筆者撮影)

1: 角抵塚奥室右壁 2: 長川1号墳前室北壁



6-図8 高句麗壁画古墳の手搏図

1: 舞踊塚奥室天井 2: 安岳3号墳前室東側室

ている。一辺約17mの方台形墳である舞踊塚では、二室墓である石室の奥室（玄室）天井の奥側に手搏図が描かれている⁽⁵⁶⁾。左右に大きな蓮の花が描かれた真ん中に、裸身に褌をつけた二人の力士が腰を低くした姿勢で向き合っている。二人の力士は、頭頂部から後頭部にかけての位置で髪を結い上げてひとまとめにしたような髪型である（6-図8-1）。一方、南北33m×東西30mの方台形墳である安岳3号墳では、複雑な構造を呈する石室の前室東側室の入り口南側上段に手搏図が描かれている⁽⁵⁷⁾。裸身に褌をつけた二人の力士が上下に腕を広げたような姿勢で向き合っている。前二例と比べて明確ではないが、二人の力士は、頭頂部付近で髪を結い上げてひとまとめにしたような髪型と想定される（6-図8-2）。

次に天井を支える力士図を見ていきたい。天井を支える力士図は、集安の5世紀初頭の三室塚（中国吉林省集安市）や5世紀中頃の長川1号墳、平壤周辺の5世紀末頃の大安里1号墳（北朝鮮平安南道龍岡郡）などで描かれている。直径約18m程度の円形墳と考えられる三室塚は、名称のとおり石室が三室あって、羨道と通路で鉤形状に繋がっている。第二室と第三室（玄室）の壁面に、腰を低く落として手足を開いた同じ姿勢で、重い天井の梁を渾身の力をこめて支える力士が描かれる⁽⁵⁸⁾。髭を生

やした風貌で、裸体ではなく衣服を着ており、結び紐の存在から冠帽の装着が指摘⁽⁵⁹⁾されているが、頭部の表現はよくわからない(6-図9-1・2)。天井を支える力士図は一種の守護神的役割を担うものとして理解されている⁽⁶⁰⁾。長川1号墳では、角抵図が描かれるとともに、石室内の壁画に菩薩像など仏教の影響が強く見られる。天井を支える力士図については、前室の天井隅で、手足を開いて腰を落とした姿勢で重い天井を支える力士が上下段に描かれている⁽⁶¹⁾。髭を生やした風貌で、上半身のみ裸である。頭髮は、明らかではないが、状態が良好な下段力士では左右の耳の上から横長に髪を結



1



2



3



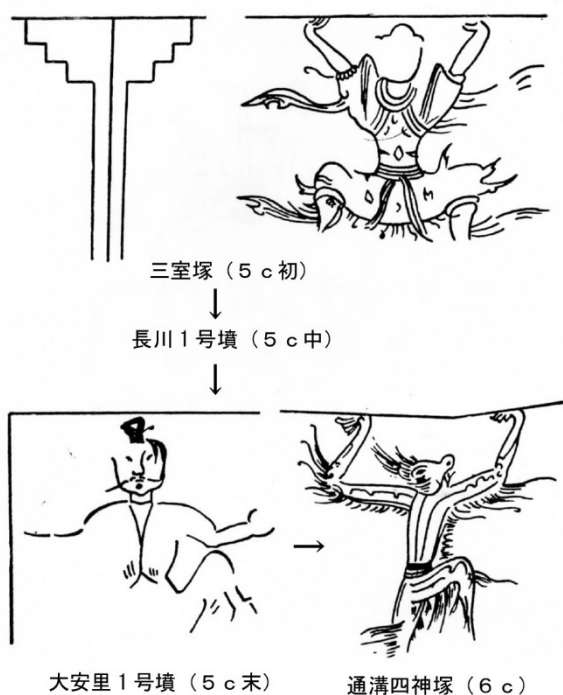
4



5

1：三室塚第二室北壁 2：三室塚第三室北壁 3：長川1号墳前室天井 4：大安里1号墳奥室
5：通溝四神塚玄室北西壁

6-図9 高句麗壁画古墳の石室天井を支える力士図



6-図10 天井を支える力士図の変遷

うように見え、上段の力士も同様であった可能性が考えられる(6-図9-3)。一辺約19.5～22.5mの方台形墳である大安里1号墳では、壁画が剥落して状態は悪いが、前室と奥室(玄室)によって構成される奥室の四壁の隅に、手足を開いて腰を落とした姿勢で重い天井を支える力士が描かれている⁽⁶²⁾。褌だけをまとった裸体で、頭髮は髪をまきあげて髻を結っている(6-図9-4)。

天井を支える力士図に関しては、5世紀初頭～末頃にかけて三室塚→長川1号墳→大安里1号墳といった築造編年が考えられ(6-図10)、その姿勢及び性格は同一ながらも三室塚では衣服・冠帽といった表現であったものが、長川1号墳と大安里1号墳では半裸で頭髮は結髪となったことが理解できる。天井を支える力士図は、

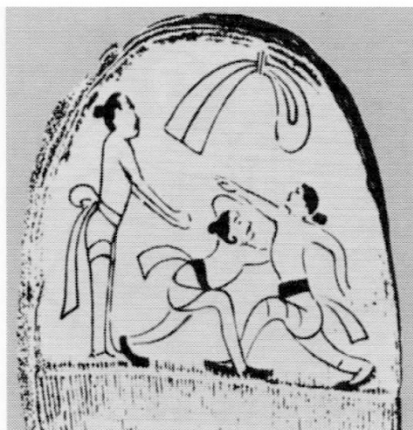
6世紀に入ると奇怪な人物・獣類などが描かれた集安の一辺約27mの方台形墳である通溝四神塚(中国吉林省集安市)において、怪異な容姿を呈する人物図への変容を見ることができる(6-図9-5, 6-図10)⁽⁶³⁾が、守護神(辟邪)としての性格に差異は見られない⁽⁶⁴⁾。

第4節 比較分析による共通点と相違点

4世紀後半～5世紀初頭の高句麗壁画古墳で描かれた角抵図及び手搏図は、従来の研究でも日本の相撲を考察する上で比較対象として扱われてきた。褌の形態に若干の差異は認められるが、いずれも褌のみを着けた半裸身で、頭髮は結び上げてひとまとめにしたようなものであることが共通点である。5世紀初頭の壁画古墳で描かれた天井を支える力士図では、衣服・冠帽表現であった力士が、5世紀中頃～末頃には、半裸身で頭髮は結髪として描かれるようになり、角抵図及び手搏図の表現に類似するように描かれている。5世紀中頃～末頃になると、褌に半裸身で結髪が、力士の特性として指摘できる。

また、長川1号墳及び大安里1号墳の天井を支える力士図で描かれた正面からの頭髮表現は、まさに力士埴輪の扁平髻と酷似するものとして指摘できる。

日本の力士埴輪のほとんどが、大小の差こそあれ円墳を除いた前方後円墳や帆立貝式古墳などの首長墓での儀礼などの場面を演出(配列)していることは、力士が首長の配下に属する部民であったかと考えられる。大王墓の埴輪祭祀場での配列実態が明らかになっている今城塚古墳からは、力士は、



1



2

1：鳳凰山秦墓の木製篋漆絵

2：打虎亭2号漢墓の壁画

6－図11 古代中国（秦・漢代）の力士図

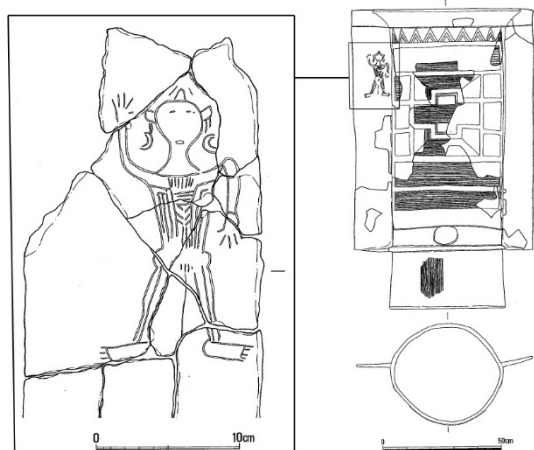
武人や鷹匠と同等程度の身分的位置付けがなされていたことが想像できる。さらに、保渡田八幡塚古墳や原山1号墳などでの力士埴輪の配列実態からは、守護・瘳邪の特質を有していたことが想定でき、高句麗壁画古墳の天井を支える力士図との共通点を窺うことができる。古墳の埴輪祭祀場での祭礼は、生前の被葬者の権力と財力の誇示ともいえ、高句麗壁画古墳の石室内で描かれた生活風俗図とも共通点があるといえる。

本章での力士埴輪と高句麗壁画古墳に描かれた力士図の比較検討の結果からは、力士埴輪の特性として指摘できる褌のみの半裸身の容姿に関しては、高句麗壁画古墳の角抵図と手搏図及び大安里1号墳の天井を支える力士図との共通点であることが理解できた。力士埴輪の頭髪で表現される扁平髻については、高句麗壁画古墳の角抵図及び手搏図では頭髪は結髻で、天井を支える力士図では三室塚を除いた長川1号墳と大安里1号墳が結髻で、正面から描かれた力士図の結髻は、力士埴輪の扁平髻を正面から見たのと酷似する頭髪として理解できた。したがって、5世紀中頃～末頃の高句麗の力士と5世紀後半～6世紀の古墳時代の日本の力士の共通点として、褌のみの半裸身の容姿で、頭髪は結髻であったことが理解できた。

さらに補足を加えると、奈良時代（7世紀後半～8世紀初頭）の建立である法隆寺（奈良県斑鳩町）の五重塔では、斗拱を支える力士像と邪鬼像が見られ⁽⁶⁵⁾、その力強い容姿は、まさに高句麗壁画古墳の三室塚や長川1号墳・大安里1号墳などの天井を支える力士図と共通する要素といえる。法隆寺中門には、和銅4（711）年に造立された金剛力士像があり、金剛力士は、神通力を持って外敵を打ち払うといった性格を有するものである。力士の有する守護・瘳邪の特質は、奈良時代以降も継承されていたといえる。

第5節 結論

高句麗壁画古墳以前の中國大陸における力士図については、秦代（紀元前3世紀末頃）の鳳凰山秦



6-図12 黄金塚2号墳の
鱗付盾形埴輪人物線刻図



野口1号墳（鳥取県倉吉市）

6-図13 装飾付須恵器壺の格闘像

墓（中国湖北省江陵県）出土の木製篋に描かれた漆絵（6-図11-1）や、後漢末頃（2世紀後半～3世紀初頭）の打虎亭2号漢墓（中国河南省密県）の壁画（6-図11-2）などが知られている⁽⁶⁶⁾。江陵鳳秦墓の漆絵と打虎亭2号漢墓の壁画はともに半裸体で禪状の容姿ではあるが、組合ってはいないので手搏図とも考えられるが、その髪型は髷のように束ねたものであることが理解できる。高句麗壁画古墳以前の力士図においても、容姿などの共通点が窺え、森貞次郎（森貞次郎1988）が指摘したように力士の系譜は、広く東アジア世界での伝播を考えざるを得ない⁽⁶⁷⁾。

文献史料からは相撲の渡来や力士の頭髪に関する記述は見られず、力士埴輪以外の力士に関連する考古資料では、前述した黄金塚2号墳の盾形埴輪の鱗部に描かれた線刻人物図の頭上に髷状の表現を見ることができる（6-図12）⁽⁶⁸⁾が、装飾付須恵器壺の格闘像（相撲小像）では髪型の表現は見られない（6-図13）⁽⁶⁹⁾が、比較検討を行った力士埴輪と

高句麗壁画古墳の角抵図と手搏図及び力士図では、禪に半裸身といった容姿の共通点のほかに、扁平髷といった頭髪の表現に渡来文化としての根拠が見いだせるといえよう。古墳時代の服飾分析に関しては、その大部分が朝鮮諸国の系譜下で成立したものとの指摘もあり⁽⁷⁰⁾、力士については衣服（禪）とともに扁平髷こそが、渡来芸能であることを反映していると考えられる。相撲の起源を絵画などの資料を中心に検討した羅時銘・新井節男の見解（羅時銘・新井節男1998）でも、古代中国の相撲が日本へと5世紀代に伝播したことが指摘されており⁽⁷¹⁾、日本の力士及び相撲の系譜を中国大陆や朝鮮半島に求めることに異議はないと考えられる。

四条2号墳での顔面に施された入れ墨の表現からも、力士の扁平髷の表現は、仮面（袋状の被り物）でないことは確かといえよう。仮面（袋状の被り物）説の根拠のひとつとして指摘されている中村双子塚古墳の力士埴輪の頭髪に見られる円形刺突による施文⁽⁷²⁾は、解釈次第ではあるが、髪留めなどの表現とも理解できるのではないだろうか。扁平髷に、革製品の可能性を見いだそうとする見解⁽⁷³⁾も否定せざるを得ないといえよう。

註

- (1) 亀田康範ほか編『すまひ・角力・相撲』石川県立歴史博物館, 1991.
- (2) 森浩一「第6章 主要な遺物の考察」『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部文化学科内考古学研究室, 1972, pp. 299～343.
- (3) 青木豊「力士埴輪」『国学院大学考古学資料館紀要』第3号, 国学院大学考古学資料館, 1987, pp. 237～238.
- (4) 森貞次郎「角抵源流考」『日本民族・文化の生成—永井昌文教授退官記念論文集1巻—』六興出版, 1988, pp. 617～632.
- (5) 塚田良道「力士埴輪の系譜について」『同志社大学考古学シリーズIV 考古学と技術』同志社大学考古学シリーズ刊行会, 1988, pp. 201～214.
- (6) 紀伊風土記の丘管理事務所編・発行『はにわ—埴輪と古墳時代—』1991.
- (7) 山内紀嗣「古墳時代の角力」『國分直一博士米寿記念論文集 ヒト・モノ・コトバの人類学』慶友社, 1996, pp. 592～602.
- (8) 鈴木徹「古墳時代の力士像と相撲考」『三河考古』第7号, 三河考古談話会, 1994, pp. 97～120.
- (9) 亀井正道『人物・動物はにわ 日本の美術 (第346号)』至文堂, 1995.
- (10) 駒宮史朗「力士埴輪考」『幸魂—増田逸朗氏追悼論文集—』北武蔵古代文化研究会, 2004, pp. 85～112.
- (11) 清水豊編『力士の考古学』かみつけの里博物館, 2008.
- (12) 若松良一「鎮魂の芸能者—相撲人—」『力士の考古学』かみつけの里博物館, 2008, pp. 43～51.
- (13) 川崎保「力士形埴輪と北東アジア角抵力士像との対比と考察」『同志社大学考古学シリーズX 考古学は何を語れるか』同志社大学考古学シリーズ刊行会, 2010, pp. 219～228.
- (14) a. 門田誠一『高句麗壁画古墳と東アジア』思文閣出版, 2011.
b. 新山保和「力士埴輪の一考察」『かながわ考古学論集—有志職員によるかながわ考古学財団20周年記念誌—』かながわ考古学論集刊行会, 2014, pp. 111～120.
- (15) a. 長谷川明『相撲の誕生 (新潮選書)』新潮社, 1993.
b. 長谷川明『相撲の誕生 (定本)』青弓社, 2002.
- (16) 富加見泰彦「井辺八幡山古墳出土力士埴輪の再検討」『郵政考古紀要』第47号, 大阪郵政考古学会, 2009, pp. 36～48.
- (17) 内田律雄「加茂岩倉銅鐸の海亀」『銅鐸の中の動物たち』荒神谷博物館, 2010, pp. 33～36.
- (18) 辻川哲朗「井辺八幡山古墳出土「力士埴輪」に関する一考察」『古代史の海』第61号, 「古代史の海」の会, 2010, pp. 15～30.
- (19) 註12文献, p. 50.
- (20) 註14b文献, p. 113.
- (21) 註1文献, p. 7.
- (22) 註2文献, p. 323.

- (23) 註11 文献, p. 33.
- (24) 鈴木裕明ほか『四条遺跡Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所, 2010.
- (25) 若狭徹『保渡田Ⅶ遺跡』群馬町教育委員会, 1990.
- (26) 西藤清秀・林部均「橿原市四条遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1987 年度』奈良県立橿原考古学研究所, 1990, pp. 289～327.
- (27) 辻秀人ほか『原山1号墳発掘調査概報』福島県教育委員会, 1982.
- (28) 註9 文献, p. 52.
- (29) 斎藤忠・大塚初重ほか『三昧塚古墳』茨城県教育委員会, 1960.
- (30) a. 三方町縄文博物館編・発行『よみがえるハニワ工場—高槻市の埋蔵文化財展—』2001.
b. 高槻市教育委員会編・発行『史跡・今城塚古墳—平成13年度・第5次規模確認調査—』2002.
c. 高槻市教育委員会編・発行『史跡・今城塚古墳—平成14年度・第6次規模確認調査—』2004.
d. 鐘ヶ江一朗ほか『発掘された埴輪群と今城塚古墳』高槻市教育委員会・高槻市立しろあ歴史館, 2004.
e. 森田克行『よみがえる大王墓 今城塚古墳』新泉社, 2011.
f. 荻野谷正宏ほか『大王の埴輪・紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』和歌山県立紀伊風土記の丘, 2011.
g. 高槻市教育委員会編・発行『今城塚古代歴史館常設展示図録（改訂版）』2012
- (31) a. 末永雅雄・森浩一ほか『岩橋千塚』関西大学文学部考古学研究室, 1967.
b. 和歌山県立紀伊風土記の丘編・発行『平成20年度特別展 岩橋千塚』2008.
c. 註30f 文献に同じ。
- (32) 森浩一ほか『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部文化学科内考古学研究室, 1972.
- (33) 中原義史・瓜生由起『ふくい発掘最前線』福井県立博物館, 1998.
- (34) 関川妥『荒神森古墳2—第2次・3次・4次調査—』北九州市教育委員会, 2007.
- (35) a. 山口健剛「6世紀前半の大量の埴輪—熊本県中村双子塚古墳—」『季刊考古学』第84号, 雄山閣, 2003, pp. 89～90.
b. 山鹿市立博物館編・発行『山鹿市立博物館収蔵品 図録』2015.
- (36) a. 昼神車塚古墳調査会編・発行『昼神車塚古墳発掘調査概要（現地説明会資料）』1978.
b. 富成哲也「大阪府昼神車塚古墳」『日本考古学年報（1976年版）』29, 日本考古学協会, 1978, pp. 64～67.
- (37) a. 福知山市史編さん委員会編『福知山市史 第1巻』福知山市役所, 1976.
b. 石井清司「稲葉山10号墳」『丹波の古墳Ⅰ 由良川流域の古墳』山城考古学研究会, 1983, pp. 81～87.
- (38) a. 堺市役所編・発行『堺市史 第1巻・本編第1』1929.
b. 松本俊吉「大和国桜井町鳥見山麓発見の埴輪出土遺跡及び窯址」『考古学雑誌』第27巻第4号, 日本考古学会, 1937, pp. 49～52.
- (39) 人物埴輪は、双脚全身像（立像と座像）と無脚半身像に分類できる。

- a. 水野正好「埴輪の世界」『日本原始美術大系 3 土偶・埴輪』講談社, 1977, pp. 172～187.
- 水野正好は、この分類（相違）について、社会構成（地位）の反映と指摘した。
- b. 塚田良道『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣, 2007.
- (40) a. 辰巳和弘「古代における反問の祝儀について—黄金塚 2 号墳出土の人物画をめぐる—」『文化学年報』第 48 号, 同志社大学文化学会, 1999, pp. 137～153.
- b. 辰巳和弘「他界はいずこ」『歴博フォーラム 王の墓と奉仕する人びと』山川出版社, 2004, pp. 198～223.
- 辰巳和弘 (1999・2004) は、「力士が踏む四股（力足）が地霊鎮撫・邪麗退散にあたる」（a 文献, p. 147.）として、古墳に力士埴輪を樹立する意味は「邪霊から他界を護ろうとする行為」（b 文献, p. 221.）であると述べるとともに、黄金塚 2 号墳出土の鱗付盾形埴輪の線刻人物図については、中部地方の山間部（三信遠地域）にある花祭りという予祝行事で「鬼の面を着けた舞手が定められた足の踏み方で邪霊を踏み締め^{へんばい}る「反問」という呪作を行う」力士にあたる（b 文献, p. 221.）という考えを示している。
- (41) a. 黄金塚 2 号墳出土の鱗付盾形埴輪の線刻人物図は、耳に三日月形（勾玉か）の装飾具を付け、手のひらを広げた右腕を挙げて、左手を下げた姿勢で、胴部には着衣（入れ墨か）が表現され、裸足の両足を開いて踏ん張る姿で、註 40a・b 文献で示された考え方以外にも、力士であるとの指摘がある（註 11 文献, p. 29.）。頭上に突起ないしは鬚状の表現が見られることから、力士を描いた可能性が十分に考えられる。参考文献として、伊達宗泰・西光慎治ほか『花大研究報告 10 黄金塚 2 号墳の研究』花園大学文学部考古学研究室, 1997.
- b. 九州地方の 6 世紀後半に築造された直径 35m の円墳である五郎山古墳（福岡県筑紫野市）の玄室奥壁上段に描かれた人物図は、手のひらを広げた右腕を挙げて、左手を腰にあて、両足を開いており、力士との指摘があるが（註 11 文献, p. 30. 註 40 文献, pp. 221～223.），黒で描かれた全体に対して下半身の輪郭だけが赤で描かれており、力士を描いたものかどうかは明確には解らないといえよう。参考文献として、小田富士雄ほか『国史跡 五郎山古墳—保存整備事業に伴う発掘調査—』筑紫野市教育委員会, 1998.
- c. 東北地方の 7 世紀前半に築造された清戸迫 76 号横穴墓（福島県双葉町）の玄室奥壁に描かれた人物図も力士との指摘があるが（註 11 文献, p. 30. 註 40 文献, pp. 222～223.），その姿勢は左手を挙げて右手を腰にあてて、冠帽又は兜に美豆良、膝の下を絞った袴と履をはく容姿からは、力士を描いたものとは考えがたい。参考文献として、斎藤忠『古墳文化と壁画 斎藤忠著作選集第 3 巻』雄山閣出版, 1997, pp. 145～260.
- (42) 今西康宏「人物の造形—力士—」『高槻市立今城塚古代歴史館開館 5 周年記念特別展 継体大王と筑紫君磐井』高槻市立今城塚古代歴史館, 2016, pp. 30～31.
- (43) 註 24 文献に同じ。
- (44) 若狭徹・田辺芳昭ほか『保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会, 2000.
- (45) 註 44 文献に同じ。
- (46) 註 11 文献, p. 31.

- (47) 註 30e 文献に同じ。
- (48) 註 30f 文献, pp. 9～10.
- (49) a. 国立歴史民俗博物館編『はにわ—形と心—図録』朝日新聞社, 2003.
b. 佐藤純一・清水邦彦・関真一・辻川哲朗・松田度「井辺八幡山古墳の再検討—造り出し埴輪群の配置復原を中心に—」『同志社大学歴史資料館館報』第10号, 同志社大学, 2007, pp. 13～34.
c. 註 30f 文献, pp. 11～12.
- (50) 小笠原好彦「日本の古墳に配列された形象埴輪と中国の明器と俑」『日本古代学』第6号, 明治大学日本古代学研究所, 2014, pp. 31～53.
- (51) 手搏図は、離れた相手を拳で打ち倒す拳法として理解されている。
参考文献として、朝鮮民主主義人民共和国社会科学院考古学研究所編（呂南喆・金洪圭訳）『高句麗の文化』同朋舎出版, 1982.
- (52) 本論では、早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005 に準拠して「角抵図」・「手搏図」・「力士図（天井を支える力士図）」に大別して取り扱った。
- (53) a. 朱榮憲（有光教一監修・永島暉臣慎訳）『高句麗の壁画古墳』学生社, 1972.
b. 池内宏・梅原末治『通溝 卷下』日満文化協会, 1940.
c. 朝鮮画報社出版部編『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社, 1985.
d. 読売テレビ放送編『好太王碑と集安の壁画古墳』木耳社, 1988.
e. 早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005.
- (54) a. 耿鉄華『高句麗古墓壁画研究』吉林大学出版部, 2008.
b. 陳相偉・方起東「集安長川一号壁画墓」『吉林集安高句麗墓葬報告集（吉林省文物考古研究所編著）』科学出版社, 2009, pp. 65～85.
- (55) 斎藤忠「高句麗古墳壁画にあらわれた葬送儀礼について」『東アジア葬・墓制の研究』第一書房, 1987, pp. 473～484.
- (56) a. 高句麗文化展実行委員会編・発行『高句麗文化展』1985.
b. 註 52b 文献～註 52e 文献に同じ。
- (57) 註 53c 文献・註 53e 文献・註 56a 文献に同じ。
- (58) 註 53b 文献に同じ。
- (59) 金基雄『朝鮮半島の壁画古墳』六興出版, 1980.
- (60) 註 59 文献 p. 135.
- (61) 註 53c 文献・註 53e 文献・註 54a 文献・註 54b 文献に同じ。
- (62) 註 53a 文献・註 53c 文献に同じ。
- (63) 註 53b 文献に同じ。
- (64) 註 53a 文献, p. 109.

- (65) 宮田充「日本の仏教彫刻における鬼神像に関する一考察—仏殿軒下の邪鬼像を中心にして—」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』第32集，龍谷大学，2010，pp. 91～108.
- (66) 註4文献・註5文献・註10文献・註15a文献・註15b文献に同じ。
- (67) 註4文献，p. 631.
- (68) 註11文献，p. 29.
- (69) 註11文献，pp. 26～28.
- (70) 金東旭「古代韓日両国の服飾文化」『〈比較〉古代日本と韓国文化（下）』学生社，1980，pp. 229～269.
- (71) 羅時銘・新井節男「中国と日本の相撲の伝播的關係についての検討—相撲は中国から日本に伝播した—」『スポーツ科学・健康科学研究』創刊号，関西学院大学，1998，pp. 67～78.
- (72) 註19に同じ。
- (73) 註20に同じ。

第7章 四神図の特性 —竹原古墳壁画の解釈と系譜—

第1節 本章の目的

本章は、竹原古墳壁画の渡来文化としての歴史的・文化的特性を明らかにし、その伝来と解釈を明確にすることを目的とする。

四神は、天地四方の方角を司る守護神で、青龍（東）、白虎（西）、朱雀（南）、玄武（北）の四つの神獣を指す⁽¹⁾。四神の起こりは、古代中国の周代（紀元前11世紀以降）といわれているが、漢代（前漢：紀元前206～8年、後漢：25～220年）になってから、鏡や墓室壁画などの装飾として頻繁に使用されるようになる⁽²⁾。四神は、東アジア圏で広く普及した龍蛇の信仰⁽³⁾に、陰陽五行の考え方が結び付いて誕生したといわれている⁽⁴⁾。

現在の中国東北部から朝鮮半島北中部にあった高句麗では、四神は壁画古墳のモチーフとして、5世紀前半に出現し、6世紀代には壁画の中心が四神図となる⁽⁵⁾。朝鮮半島南西部の百済においても、6世紀代になると、墓室壁画として四神図が描かれるようになる⁽⁶⁾。

日本では、7世紀末～8世紀初頭に築造された近畿地方の直径23mの円墳である高松塚古墳（奈良県明日香村）や直径13.8mの円墳であるキトラ古墳（奈良県明日香村）の石室（横口式石槨）内で描かれた四神図が有名であるが、6世紀後半に築造された九州地方の直径17.5mの円墳である竹原古墳（福岡県宮若市）の石室（全長6.7mの複室構造横穴式石室）内においても、四神図が描かれているとの指摘がなされてきた⁽⁷⁾。具体的には、玄室奥壁に描かれた怪獣は、「龍媒説話を表した龍馬」あるいは「青龍」又は「天馬」と解釈が分かれるものの⁽⁸⁾、前室奥壁の右壁に描かれた鳥は「朱雀」、左壁に描かれた上下に蛇や龍状のものを有する円形文様は「玄武」と解釈されている⁽⁹⁾。玄室奥壁の怪獣を「青龍」と解釈できれば、前室奥壁の壁画と合わせて、「白虎」を欠くものの、四神図としての構図が成立する。一方で、四神図と解釈することに否定的な見解も示されてきた⁽¹⁰⁾。さらに、「四神・龍媒・昇仙」などの大陸系思想が、複合的に導入されたものと見る見解もある⁽¹¹⁾。

四神は、8世紀以降の日本では、大宝元（701）年から元日朝賀などの宮廷儀式に際して、大極殿院の前庭に四神図などの「幡（旗）」が立てられたことも知られており⁽¹²⁾、近畿地方の薬師寺（奈良県奈良市）金堂の本尊台座でも、四神図（鑄造）を見ることができる⁽¹³⁾。

本章では、竹原古墳のいわゆる四神図についての考察を行うにあたって、考古資料を中心とした比較分析の一助とするために、四神の性格を考察するうえで特に重要である古代日本の文献史料を紹介したうえで、同時期及びその前後に築造された高句麗及び百済の四神図や日像図などを中心に、表現や描画についての比較検討を行い、そこから導き出された結果に基づき、竹原古墳壁画の解釈とその系譜についての考えを示したい。

第2節 文献史料の紹介

〔史料1〕『日本書紀』巻第25・孝徳天皇・文化5（649）年3月

乙巳朔辛酉，阿倍大臣薨。天皇幸朱雀門，挙哀而慟。皇祖母尊・皇太子等及諸公卿，悉随哀哭。

（乙巳の朔にして辛酉，阿倍大臣薨りぬ。天皇，朱雀門に幸し，挙哀たてまつりて慟ひたまふ。皇祖母尊・皇太子等と諸公卿，悉に随ひて哀哭たてまつる。）

史料1には、文化5（649）年3月乙巳朔辛酉（17日）、左大臣である阿倍内麻呂が薨じたので、孝徳天皇が難波宮（大阪府大阪市）の南面中央にあったと考えられる朱雀門にて、その死を嘆き悲しんで、挙哀の礼を行ったことが記されている。この史料で重要なことは、宮城の南門に、四神に従って朱雀の名称が与えられていたことと、朱雀門には死者の弔いに際して、特別な意味が込められていたことである。

〔史料2〕『日本書紀』巻第29・天武天皇・天武9（680）年7月

癸未，朱雀有南門。

（癸未，朱雀，南門に有り。）

史料2には、天武9（680）年7月癸未（10日）、朱雀が南門に現れたことが記されている。この南門は、天武天皇の御所である飛鳥浄御原宮（奈良県明日香村）の南門と想定される。朱雀は、南の方角を司る守護神なので、これが南門に居ることを喜んで記録に残したものと考えられる。史料1の記述と併せて、朱雀＝南の方位という観念は、年次のとおり7世紀中頃以降には定着していたといえよう⁽¹⁴⁾。

次に、『続日本紀』⁽¹⁵⁾の記述を紹介する。

〔史料3〕『続日本紀』巻第2・文武天皇・大宝元（701）年春正月

乙亥朔，天皇御大極殿受朝。其儀，於正門樹鳥形幢。左日像・青竜・朱雀幡，右月像・玄武・白虎幡。蕃夷使者，陳列左右。文物之儀，於是備矣。

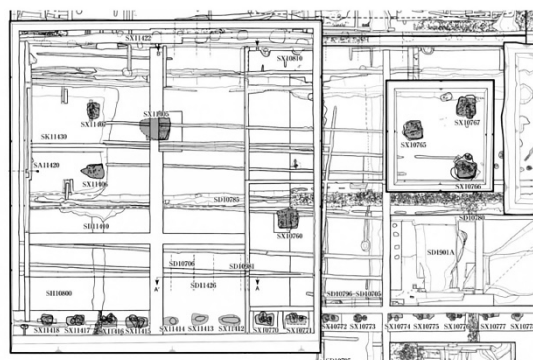
（乙亥の朔，天皇，大極殿に御しまして朝を受けたまふ。その儀，正門に鳥形の幢を樹つ。左は日像・青竜・朱雀の幡，右は月像・玄武・白虎の幡なり。蕃夷の使者，左右に陳列す。文物の儀，是に備れり。）

史料3は、大宝律令の完成を受けて初めて行われた元日朝賀の儀式の史料で、藤原宮（奈良県橿原市）の大極殿で行われた。この儀式では、南面の正門に三本足の鳥像を付けた幢が立てられ、天皇からみて左（東）側に日像幢及び東を意味する青龍図と南を意味する朱雀図が描かれた幡（旗）が掲げられ、右（西）側には月像幢及び北を意味する玄武図・西を意味する白虎図が描かれた幡（旗）が掲げられた。

この元日朝賀の儀式は、大宝律令の完成を受けて初めて行われたもので、律令国家の完成を祝する重要な儀式であったと考えられる。その儀式の場である大極殿院の南門前に、鳥像の幢と日像・月像及び四神を表した幡（旗）が掲げられたことがわざわざ記録されたのは、律令国家の儀式にとってこ

れらが重要な意味を持つと認識されていたからと
考えてよからう。また、蕃夷使者の参列と四神幡
(旗)の掲揚には、軍事的な性格が含まれていた
との指摘もある⁽¹⁶⁾。

この記述に見られる幢と幡(旗)については、
奈良文化財研究所による藤原宮大極殿院南門の南
側、朝堂院朝庭の北端部の発掘調査で、その設置
跡と推定される旗竿遺構(大型柱穴7箇所)⁽¹⁷⁾が
確認されている。旗竿遺構は、藤原宮中軸を挟ん



7-図1 藤原宮の旗竿遺構配置図

で平面三角形形状の配置をなした大型柱穴3箇所が、東西に対象となって位置しており、さらに宮中軸
線上に大型柱穴1箇所が単独で位置する(7-図1)。これらの大型柱穴7箇所は、規模及び構造が類
似することから一連の遺構と解釈されている。その位置関係や構造から、旗竿遺構であった可能性が
高く、大極殿院南門の南側という位置関係からも、史料3の記述の裏付けとなる可能性が非常に高い
遺構と考えられている⁽¹⁸⁾。

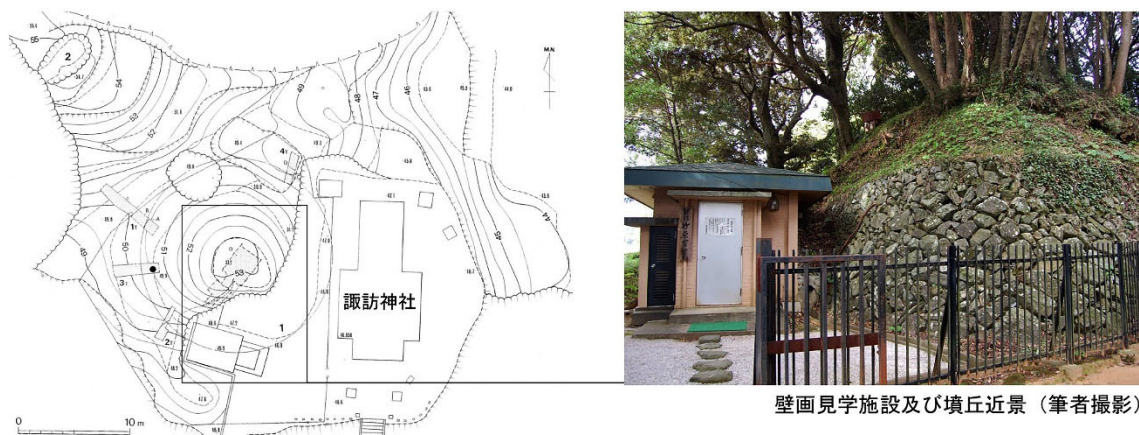
旗竿遺構については、長岡宮(京都府向日市)の大極殿院前庭⁽¹⁹⁾、平城宮(奈良県奈良市)の大極
殿院前庭⁽²⁰⁾、さらに、^{くに}恭仁宮(京都府木津川市)の朝堂院南辺⁽²¹⁾の発掘調査でも確認されている⁽²²⁾。
これにより、奈良時代の宮城では、大宝元年の元日朝賀の儀式の継承がなされていたことがわかる。

平安時代に入ると、『内裏儀式』や『内裏式』、『貞観儀式』や『延喜式』の記述によって、平安宮(京
都府京都市)での朝賀の儀式の内容を窺い知ることができる⁽²³⁾。これらによれば、平安時代前期にお
いても、大宝元年の元日朝賀の儀式同様に大極殿の南門に四神幡(旗)が立てられているが、青龍図
と朱雀図、白虎図と玄武図という組み合わせ設置の東西が入れ替わっており、時代による変化が認め
られる。このような朝賀の儀式は、平安時代中期まで継続して行われてきたようであるが、途絶えた
後は、朝賀の儀式と同じ儀礼構造である即位の儀式が継続して行われており⁽²⁴⁾、その形態や規模を変
えながら現在まで続いていることがわかっている⁽²⁵⁾。

以上の文献史料からは、次のことがいえよう。史料1・2からは、朱雀が南の方角を司る守護神と
して認識されており、それが四神の方位に一致することがわかる。また、史料1からは、朱雀もしく
は四神と死者の弔いとの何らかの関係性があったことが想起される。史料3は、日本の文献史料にお
いて四神すべてが確認できる一番古い事例であるとともに、ここから四神と方位との密接な関係を窺
うこともできる。また、史料3の儀式のその後をたどったところ、奈良時代以降、国家儀式で四神幡
(旗)が重要な役割を果たすようになっていたこともわかった。

第3節 竹原古墳の概要

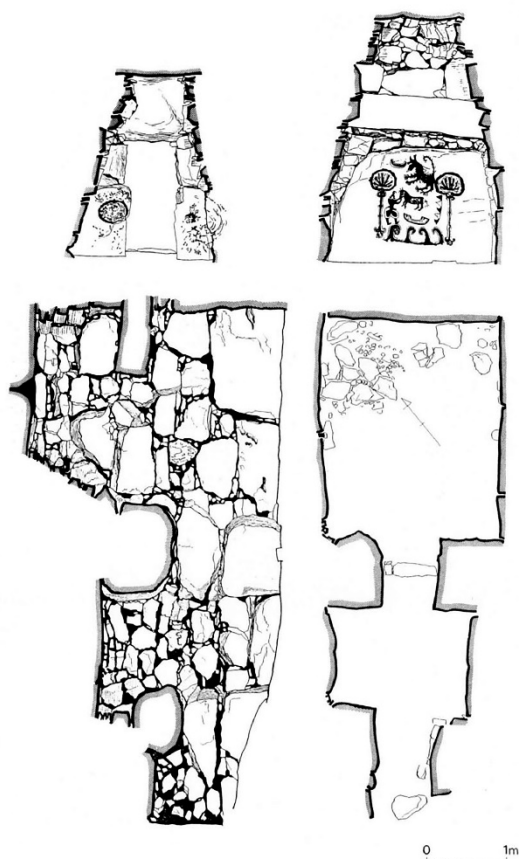
竹原古墳は、九州地方北部の福岡県宮若市に所在する直径約17.5mの二段築成の円墳である⁽²⁶⁾。



7-図2 竹原古墳の現況平面図及び墳丘近景

墳丘は、東側～南側にかけて大きく削平されて、諏訪神社の社殿が建立されている（7-図2）。外部施設として葺石や埴輪の存在は確認されていない。埋葬施設は、全長 6.7mの複室構造を呈する横穴

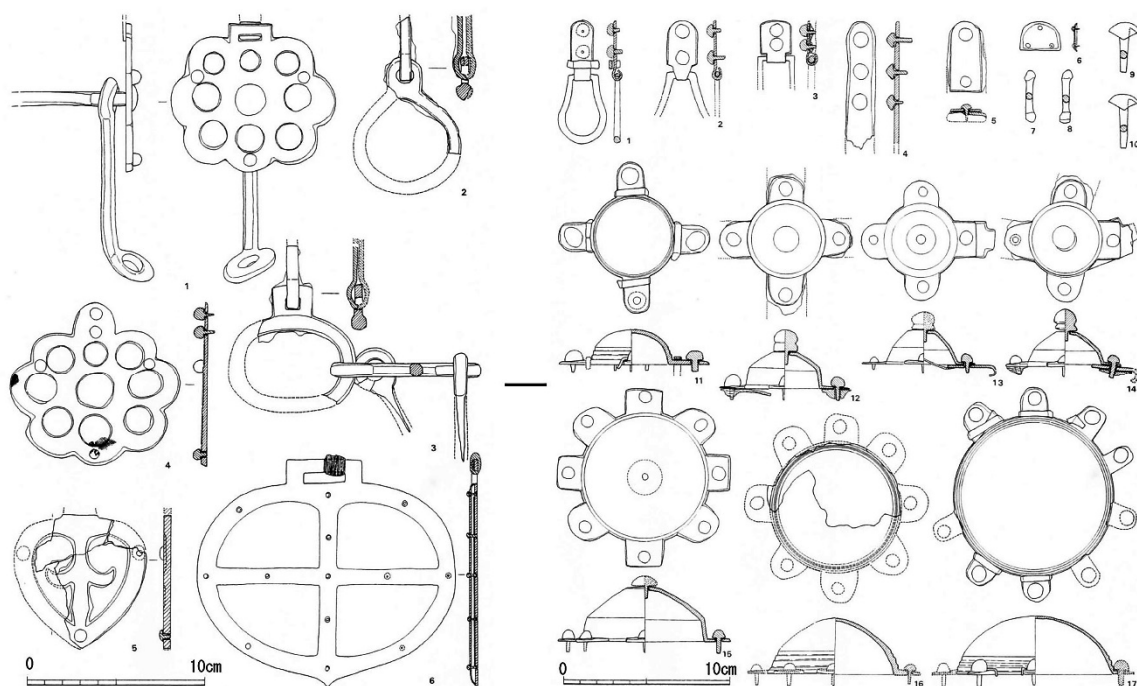
式石室で、前室長 1.3m×幅 1.7m、玄室長 2.7m×幅 2.2m、玄室の天井高は3mを測る。石室壁面の構築は所謂通目積みで、石材には西方の博多平野との境をなす犬鳴峠を中心とした山地で産出する花崗岩を主に、珪岩や頁岩が使用されているが、奥壁の石棚には、宗像郡境で産出する礫岩が使用されている（7-図3）。



7-図3 竹原古墳の横穴式石室

石室内出土遺物からは、装身具（勾玉などの玉類や耳環）、鉄鏃・大刀などの武器、馬具のほか、須恵器の副葬が認められる。特に馬具の種類は多く、鉄地銅張り金被せ七葉形鏡板付き轡 1点や鉄製素環鏡板付き轡 2点など、轡だけで3点が副葬されている。他に鉄地銅張り金被せ七葉形の杏葉など（七葉形3点、心葉形3点、楕円形3点）や、鉄地金銅張りの辻金具（2種類各3点）・雲珠（2種類3点）などが副葬されている（7-図4）。

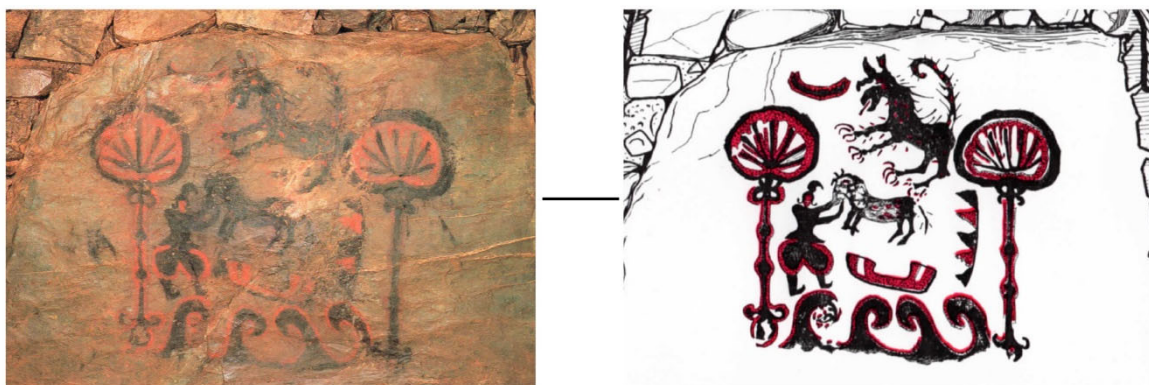
築造年代は、墳丘及び石室の構造、副葬品などから、6世紀後半と考えられている。



7-図4 竹原古墳で副葬された馬具類（左側が轡と杏葉・右側が辻金具と雲珠類）

竹原古墳は、九州地方の福岡県及び熊本県・大分県を中心に築造された装飾古墳のひとつで、玄室奥壁に施された壁画が有名である。玄室奥壁の壁画は、腰石として使用された緑泥片岩の一枚石の中央部に、黒色と赤色の二色の顔料を使用して、左右に配置された翳の間に、下段に左右に広がる波状文、その上に舟と馬を牽く人物、最上段に怪獣が描かれている。怪獣の左横に小舟、右下に旗らしきものも描かれる（7-図5）。また、前室奥壁となる右側の頁岩を使用した腰石に左向きの鳥、左側の花崗岩を使用した腰石に翳状の楕円形と曲線文の組み合わせによる図文が描かれている。

竹原古墳の図柄については、高句麗などの東アジアの古墳壁画に影響をうけた大陸的要素をもつとの指摘がなされてきた⁽²⁷⁾。特に、奥壁の怪獣は、黒色で描かれた全体像の髪や尾に棘状突起が表現さ



7-図5 竹原古墳玄室奥壁の壁画

れ、角・目・長い舌・四肢に鋭い鉤爪が赤色で表されている。また、胴体にも赤色で棘状の表現がなされており、その容貌からは、動物というよりも神獣を表したものであることは疑いようがない。

前室奥壁となる左右の腰石に描かれた図文及び玄室奥壁で描かれた怪獣の図文については、次節にて詳しく検討していきたい。

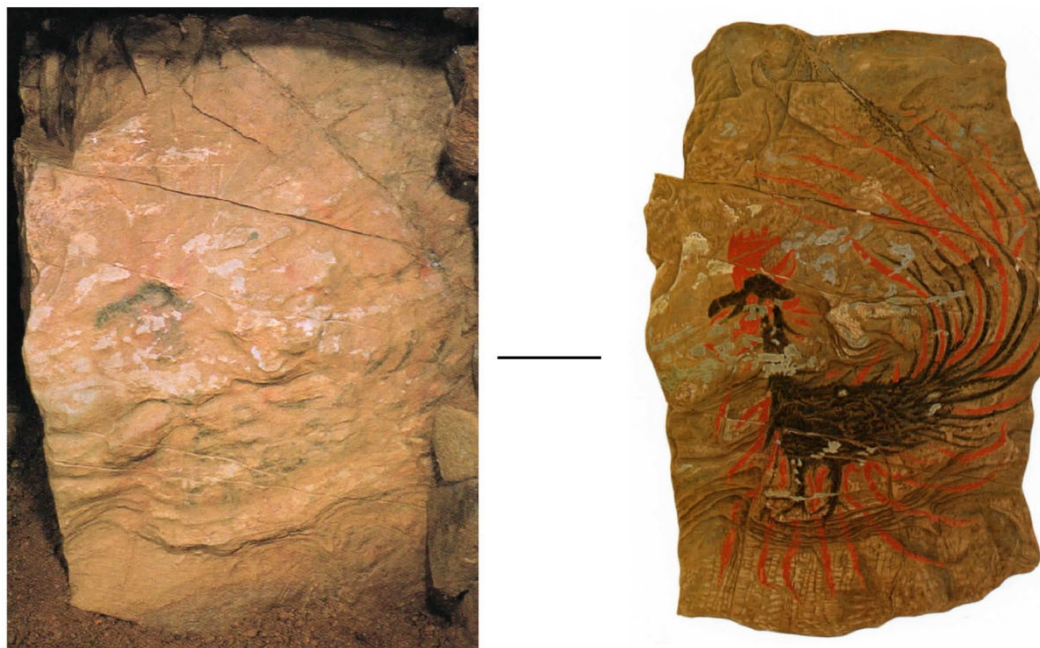
第4節 壁画資料の検討と比較分析による共通点と相違点

(1) 朱雀図及び三足鳥（日像）図

竹原古墳の朱雀と考えられる図は、前述のとおり前室奥壁の右側、頁岩を使用した腰石（高さ 89 cm）のほぼ全面を使用して描かれている。玄室奥壁の壁画に比べて、剥落が著しくて不鮮明であるが、日下八光氏による模写復元図⁽²⁸⁾によれば、玄室奥壁の怪獣と同様に全体像が黒色で描かれ、頭上の肉冠・顎下の肉垂・目・嘴から突き出た舌・頭上よりも高く立ち上がった長い尾羽・身体の周りに伸びる細くて長い羽毛が赤色で表されている。頭上の肉冠と顎下の肉垂の表現は、鶏の鶏冠や肉髯を連想させる。頭は、石室内部（左側）を向き、尾羽が右側壁（右側）となるように描かれている（7－図6）。基本となる容姿全体が黒色で表されていることから、朱雀ではなく鳥で、金鳥＝日像を表したものであるとの指摘もある⁽²⁹⁾。しかしながら、その容貌と時代的背景からすれば、四神の朱雀を表したものであると考える方が納得できる。

次に、高句麗・百済の墓室壁画として描かれた代表的な朱雀図を見ていきたい。

高句麗では、平壤周辺の4世紀末頃～5世紀初頭に築造された規模墳形不明である薬水里古墳（北



7－図6 竹原古墳前室奥壁右側の壁画と模写復元図








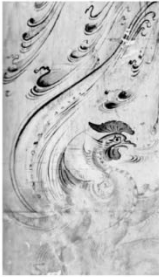



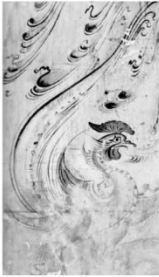

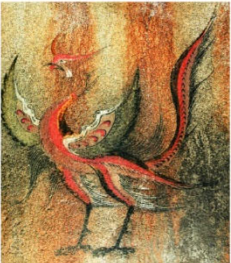

朝鮮平安南道南浦市)と5世紀末頃に築造された規模墳形不明である双楹塚(北朝鮮平安南道南浦市), 5世紀後半～6世紀前半に築造された規模墳形不明である星塚(北朝鮮平安南道南浦市), 5世紀末頃～6世紀初頭に築造された一辺35mの方台形墳である湖南里四神塚(北朝鮮平壤市), 6世紀前半に築造された東西22m×南北25mの方台形墳である徳花里1号墳(北朝鮮平安南道大同郡), 6世紀後半に築造された一辺25mの方台形墳である真坡里1号墳(北朝鮮平壤市), 6世紀末頃～7世紀初頭に築造された一辺51mの方台形墳である江西大墓(北朝鮮平安南道南浦市)と一辺45mの方台形墳である江西中墓(北朝鮮平安南道南浦市), そして集安の4世紀末頃～5世紀初頭に築造された一辺17mの方台形墳である舞踊塚(中国吉林省集安市), 5世紀初頭に築造された直径18mの円形墳である三室塚(中国吉林省集安市), 6世紀に築造された一辺51mの方台形墳である五盔墳5号墳(中国吉林省集安市・7-図7-1), 同じく6世紀に築造された一辺27mの方台形墳である通溝四神塚(中国吉林省集安市・7-図7-2)などの朱雀図が, 全体像とその特徴が把握でき, 比較検討に適している(7-図8)⁽³⁰⁾。

まずは, 5世紀代前後の朱雀図を見ていきたい。4世紀末～5世紀初頭の年代観が与えられる薬水里古墳(複室構造石室)では, 厚く塗られた漆喰の上に, 人物風俗図と四神図が描かれている。朱雀図は, 玄室南壁に描かれる。両翼を広げた姿勢をとり, 頭に羽毛が表され, 嘴に赤色の宝珠を咥えるが, 胴長の身体に対して頭と両翼・両脚・尾羽などのバランスがとても不自然で, その容姿は滑稽にさえ見える。同時期の舞踊塚(複室構造石室)でも, 漆喰が塗られた上に壁画が描かれている。玄室天井第四層持ち送りで描かれた朱雀図は, 両翼を広げた姿勢で, 嘴に赤色の宝珠を咥え, 頭上に肉冠・嘴の根元付近から肉垂, 三本に分かれた長い尾羽が表されている。5世紀初頭の三室塚は, その名のとおり三室構造石室をとるが, 第二室及び第三室の持ち送りに朱雀図が描かれている。いずれの朱雀図も, 両翼を広げた姿勢をとり, 頭上に肉冠・顎下に肉垂, そして長い尾羽が表現されている。5世紀末の双楹塚(複室構造石室)では, 玄室の北壁・中央上部で, 墨線によって朱雀が描かれている。



1: 五盔墳5号墳 2: 通溝四神塚

7-図7 四神図が描かれた高句麗壁画古墳近景(筆者撮影)

	高句麗		百濟
	(集安)	(平壤)	
4c			<p>1 : 舞踊塚 (4c 末～5c 初) 2 : 薬水里古墳 (4c 末～5c 初) 3 : 三室塚三室 (5c 初) 4 : 双楹塚 (5c 末) 5 : 湖南里四神塚 (5c 末～6c 初) 6 : 五盔塚5号墳 (6c) 7 : 通溝四神塚 (6c) 8 : 真坡里1号墳 (6c 後) 9 : 江西中墓 (6c 末～7c 初) 10 : 宋山里6号墳 (6c 前～後)</p>
5c			
6c			
			
			
			
7c			
			

7-図8 高句麗・百濟の朱雀図と変遷 (縮尺不統一)

剥落によって頭の表現が不明ではあるが、両翼を広げた姿勢をとる。また、塚名称の由来となっている二柱のある通路へと続く玄室南壁・上部で、左右で一对となる朱雀図が、墨線によって描かれている。いずれも両翼を広げた姿勢をとり、左側の朱雀図は不鮮明であるが、右側の朱雀図は鮮明で、嘴の根元付近から肉垂の表現が見られる。

5世紀後半～6世紀前半の星塚の朱雀図（玄室南壁）は、不鮮明で頭部の表現はよく解らないが、両翼を広げた姿勢をとり、尾羽がまるで孔雀のように表現されている。5世紀末～6世紀初頭の湖南里四神塚（単室構造石室）では、加工した板石の上に直接四神図が描かれている。朱雀図は、向き合った二羽の朱雀が一对となるもので、玄室南壁で描かれている。いずれも両翼を広げた姿勢をとるが、頭上に肉冠の表現がなく、細長く括れた頸、広げた両翼も貧弱であるため、まるで家鴨を描いたようにも見える。全体的に素朴な図柄であるため、朱雀特有の威厳が感じられない。6世紀前半の徳花里1号墳（単室構造石室）では、八角持ち送りの天井架構の全面及び石室の全面に漆喰が塗られ、その上に人物風俗図・四神図が描かれている。人物風俗図に比べて、四神図の比重が大きくなるのが特徴である。朱雀図は、湖南里四神塚と同様に、両翼を広げた姿勢をとり、向き合った二羽の朱雀が一对となるもので、玄室南壁で描かれている。剥落によって不明瞭であるが、線描きした後に、彩色が施されている。

竹原古墳と同時期の6世紀後半に比定される真坡里1号墳（単室構造石室）では、全面に漆喰が塗られ、漆喰の上に四神図が描かれている。朱雀図は、玄室南壁に向き合った二羽の朱雀が一对となって描かれている。いずれも両翼を広げた姿勢をとるが、左右の朱雀図の表現には違いが見られ、左側の朱雀図では、頭上に肉冠・顎下に肉垂、右側の朱雀図では、頭上に羽毛・顎下に肉垂、身体には斑点が表されている。しかしながら、双方の朱雀ともに、尾羽が上に向かって、曲線で流麗に描かれているのが特徴といえる。

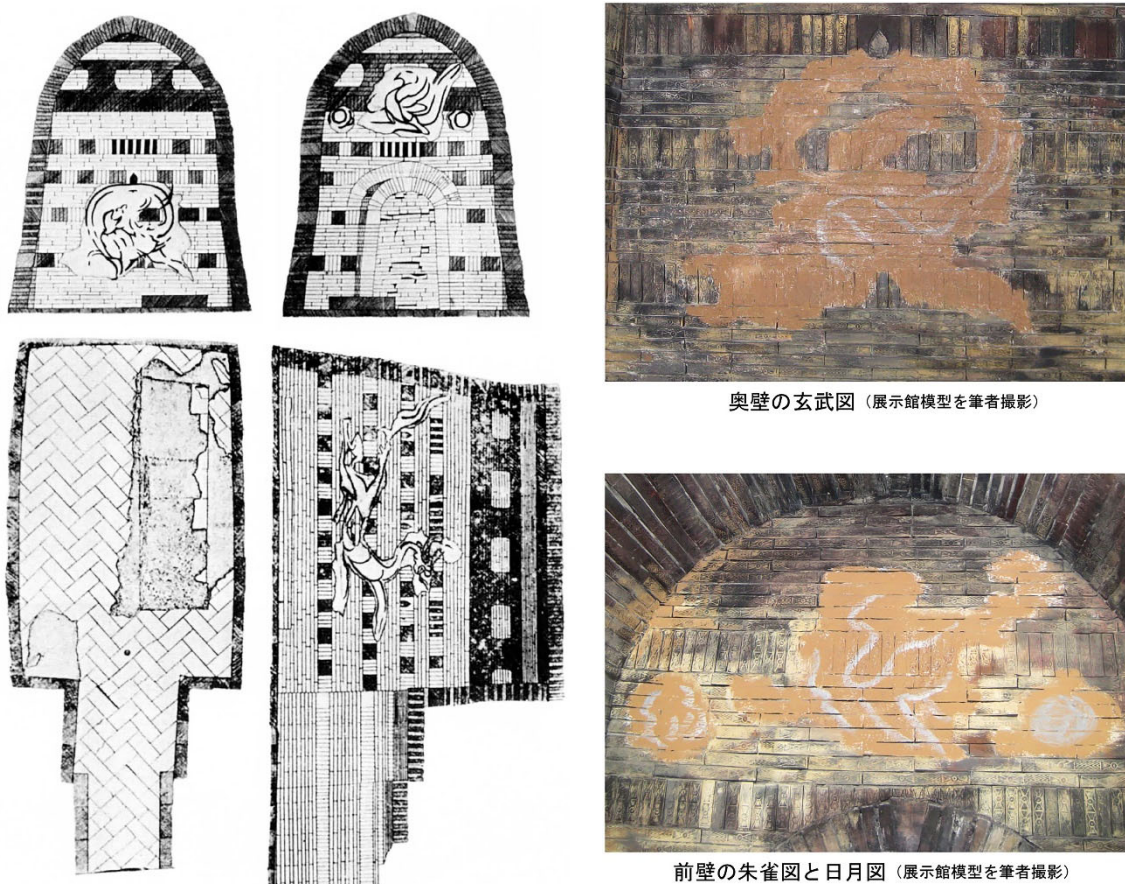
6世紀代の五盞墳5号墳（単室構造石室）の朱雀図は、玄室南壁に左右一对となって描かれている。両翼を広げて、胸を張った姿勢で、頭上には羽毛が表現され、全体的に赤色・白色・褐色・緑色の多色構成での彩色が施されている。五盞墳5号墳の壁画全体が、神仙思想を反映した独創的な画題で表されており、朱雀図を含めた四神図もその影響を受けて、独創的な表現がなされている。同じく6世紀の通溝四神塚（単室構造石室）の壁画も、独創的な表現で描かれている。玄室の南壁で描かれた朱雀図は、両翼を広げた姿勢をとるが、長く括れた頸と長くて鋭い嘴は、まるで鶴のようにも見える。

6世紀末～7世紀初頭になると、江西大墓及び江西中墓（双方ともに単室構造石室）にて、花崗岩を水磨きした滑らかな壁面に、四神図が描かれるようになる。江西大墓及び江西中墓の四神図は、高句麗墓室壁画の中で、最も芸術的完成度が高いものといわれている⁽³¹⁾。江西大墓及び江西中墓では、玄室南壁において、羨道を挟んで二羽の朱雀が向き合って一对となるように描かれている。いずれも両翼を広げた姿勢をとる。江西大墓の朱雀図は、剥落が目立つが、頭上の肉冠と顎下の肉垂が赤色で表現され、全体的に赤色・黒色・白色などの多色構成で彩色が施されている。また、力強く羽ばたく

翼と巻き上がる尾羽，全体的に曲線が強調されて華麗で，羽は炎が揺らめくかのように表現されている。江西中墓の朱雀図も，全体的に赤色・黒色・白色などの多色構成で，鮮やかな彩色が施されている。頭上に一条のぴんと立ち上がる羽毛，顎下には肉垂が表されている。口に赤色の宝珠を咥え，括れた長い頸，強く羽ばたく翼，上に向かって高くのびる尾羽によって，躍動感に充ちた図柄となっている。全体的に柔らかい流麗な線で描かれているのも特徴で，優雅な印象を与え，芸術的完成度が実に高いものといえる。

一方，百済では，6世紀前半～後半の築造と考えられる直径20m程度の円形墳である宋山里6号墳（韓国忠清南道公州市）で，四神図と日月図が描かれている（7－図9）。埴（煉瓦）積みの単室構造石室で，埴（煉瓦）そのものに装飾が施されており，壁面全体の装飾的要素が強い。朱雀図は，玄室南壁（玄室への入り口となる玄門部に相当する内壁）の上部に描かれ，その左右に日月図が描かれている。壁画自体が不鮮明であるが，朱雀は両翼を広げた姿勢で，尖った嘴と長い尾羽を持つことが理解できる。日月図は，円形が描かれた図であることは理解できるが，不鮮明でその詳細はよくわからない。

次に，竹原古墳の朱雀と考えられる図の検討資料として，高句麗壁画古墳の日像を表した三足鳥図



奥壁の玄武図（展示館模型を筆者撮影）

前壁の朱雀図と日月図（展示館模型を筆者撮影）

7－図9 百済・宋山里6号墳の埴積横穴式石室

を見ていきたい。三足鳥図は、集安では、4世紀末頃に築造された一辺15mの方台形墳である角抵塚（中国吉林省集安市）、4世紀末頃～5世紀初頭の舞踊塚、5世紀中頃に築造された規模墳形不明である長川1号墳（中国吉林省集安市）、6世紀に築造された周囲160mの方台形墳である五盔墳4号墳（中国吉林省集安市）、同じく6世紀代の五盔墳5号墳と通溝四神塚、平壤周辺では、5世紀に築造された規模不明の方台形墳である天王地神塚（北朝鮮平安南道順川郡）、5世紀末頃～6世紀初頭に築造された規模不明の円形墳である梅山里四神塚（別名：狩猟塚・北朝鮮平安南道龍岡郡）、5世紀末頃の双楹塚、6世紀前半の徳花里1号墳、同じく6世紀前半に築造された東西23m×南北26mの方台形墳である徳花里2号墳（北朝鮮平安南道大同郡）、6世紀に築造された規模不明の方台形墳である鎧馬塚（北朝鮮平壤市）、6世紀後半の真坡里1号墳、6世紀末頃～7世紀初頭の江西中墓などで描かれている。

4世紀末～5世紀初頭の角抵塚及び舞踊塚では、玄室天井の持ち送りに三足鳥図が描かれている。円形枠の内部に、頭部に後方に細長く伸びた蕨手状の肉冠（孔雀様の冠羽）・鋭く開いて伸びる嘴・上部に尖った三角形の二枚の両翼・丸くて厚みのある尾羽・胸下から伸びる羽毛・下部の三足が黒色一色で描かれている。また、5世紀末頃の双楹塚では、玄室頂石の東南隅で三足鳥図が描かれている。円形枠の内部に、頭部に後方に丸みをもって伸びた短い蕨手状の肉冠（孔雀様の冠羽）・鉤手状の嘴・尖った三本の尾羽と胸からの羽毛、下部の三足が黒色一色で描かれている。前述の角抵塚・舞踊塚に比べて、躍動感のある姿で描かれている（7－図10）。高句麗壁画古墳で描かれた三足鳥図では、朱雀図で見られる顎下の肉垂の表現は見られない。日像を表した三足鳥図が描かれた古墳では、日像と一対となる月像を表した蟾蜍図も描かれている（7－図11）。

日像を表した鳥図は、古代中国の前漢初期から描かれ始めたようであるが、前漢末ないし後漢の頃から三足鳥図として表現されたようである⁽³²⁾。高句麗壁画古墳の三足鳥図では、頭部に「孔雀様の冠羽」が付くことが特徴であるといわれている。冠羽は装飾で、金鳥を表したものであることが指摘されて

いる⁽³³⁾。日像を表した図は、ここに示した三足鳥図が、高句麗での基本スタイルといえる。日本では、7世紀中頃と考えられる法隆寺の玉虫厨子に描かれた須弥山世界図の中で、三足鳥を見ることができ

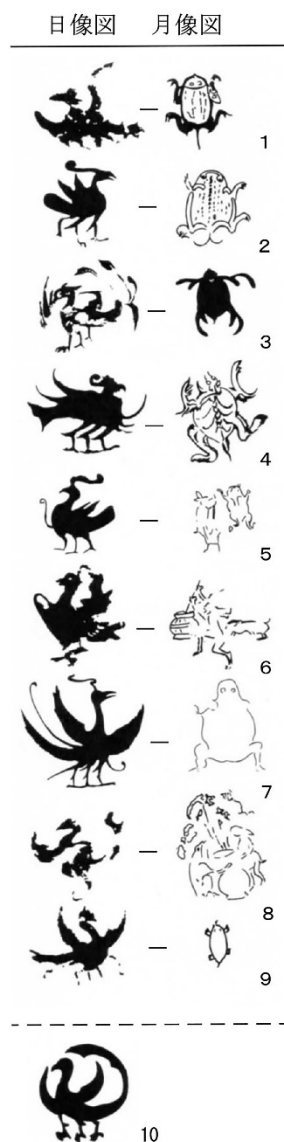


7－図10 高句麗壁画古墳の三足鳥図



1：角抵塚 2：双楹塚

る（7—図 11）。前述の史料3の記述が示すように、大宝元年の元日朝賀の儀式では、藤原宮大極殿の南門に鳥像を付けた幢が立てられていることから、日像＝金鳥の理解が、7世紀以降の日本へ正しく伝わっていたことがわかる。



高句麗壁画古墳

- 1：徳興里古墳 2：角低塚
3：梅山里四神塚 4：双楹塚
5：長川1号墳 6：鎧馬塚
7：五盔墳4号墳 8：真坡里1号墳
9：江西中墓
法隆寺（古代日本）
10：玉虫厨子須弥世界図

7—図 11 高句麗壁画古墳
の日像・月像図と
法隆寺（古代日本）
の日像図

また、『日本書紀』巻第25・孝徳天皇・白雉元（650）年2月条に「又遣大唐使者，持死三足鳥来。国人亦曰，休祥。」（又大唐に遣されし使者，死にたる三足の鳥を持ちて来れり。国人亦曰く，「休祥なり」と）という記述がある。ここから『日本書紀』の成立段階には、三足鳥が瑞祥として認識されていたことが理解できる。瑞祥としての三足鳥の認識については、『延喜式』治部省・祥瑞式に「三足鳥，日之精也」（三足の鳥，日の精なり）とあり，上瑞の一つとしていることから，平安時代に入ってもその性格に変化がなかったことが理解できよう。

竹原古墳の朱雀と考えられる図は，翼を広げて，尾羽が立ち上がる容姿，そして頭上の肉冠・顎下の肉垂が表現されている。同時期の高句麗壁画古墳で描かれた朱雀図との共通点から考えて，四神の朱雀を表したものと考えられる。高句麗壁画古墳で描かれた三足鳥図の円形枠の表現や三足鳥の表現とは共通点は見られず，同時期の中国の日像を表した三足鳥図でも，頭上の肉冠や顎下の肉垂は表現されていない⁽³⁴⁾。本体が黒色で描かれていること以外には，三足鳥図との共通点はないものといえる。黒色による本体の表現は，竹原古墳の玄室奥壁で描かれている怪獣との共通点でもあり，赤色によって容姿の付け加え表現がなされていることも同様である。これらの描画及び彩色の表現は，竹原古墳での壁画（神獣）の描き方の特徴といえる。

（2）玄武図

前節で，竹原古墳の前室奥壁の右側に描かれた図を朱雀と同定したことで，朱雀（南）と一対になる反対方位は玄武（北）であることから，前室奥壁の左側に描かれた図は，玄武の図の可能性が高くなる。この図は，前述のとおり前室奥壁の左側，荒い岩肌の花崗岩を使用した腰石（高さ90 cm）の上半分

を中心に描かれている。前室奥壁の右側で描かれた朱雀図と同様に、剥落が著しくて不鮮明である。日下八光による模写図⁽³⁵⁾によれば、黒色で描かれた楕円形の内部に、同じく黒色で手のひらを広げたような図文が描かれており、楕円部との間を赤色で充填している。その図文の容姿は、玄室奥壁で描かれた翳に類似する形状を示すが、その上部に黒色の曲線に、赤色の縁取りと棘状線が施された細長い波状曲線が描かれている。この波状曲線は、「蛇か竜のようなもの」であることの指摘がなされている。下部にも赤色による細い線が見える（7－図12）⁽³⁶⁾。前室奥壁の右側で描かれた朱雀図との対比から、玄武図と考えられてきた⁽³⁷⁾が、金鳥図に併せた日輪図という見方⁽³⁸⁾もある。

玄武は、四神を構成する他の三体の神獣（朱雀・青龍・白虎）とは違い、亀の胴体（甲羅）に、細くて長い蛇体が絡み合った、亀と蛇が一对となった姿で表される。竹原古墳壁画の忠実なる模写を実施した日下八光は、楕円形図文＝亀を真上から見た形、その上下に描かれた波状曲線＝蛇と考えたようであるが、楕円形図文の内部に亀甲ではなく、翳状の図文が描かれていたことで、その解釈に苦慮している⁽³⁹⁾。

次に、高句麗・百済で描かれた代表的な玄武図の特徴を見ていきたい（7－図13）。

まずは、高句麗の5世紀代前後の玄武図として、4世紀末頃～5世紀初頭の薬水里古墳、5世紀初頭の三室塚、5世紀末頃の双楹塚を見ていきたい。薬水里古墳では、玄室の北壁上部に幕をめぐらせた帳房内に墓主夫妻図と侍者・侍女図、その上に北斗七星図、墓主夫妻図の直ぐ右側に玄武図が描かれている。玄武図の亀は、頸が太くて足が長く描かれており、まるで陸亀のような姿である。薄い甲羅を持った亀の胴体に蛇体が絡みつくが、その上部で蛇体は交差して左右に分かれ、半円形を描いた蛇の顔と、亀の顔とが睨み合うように描かれている。三室塚の二室及び三室持ち送りに描かれた玄武











7－図12 竹原古墳前室奥壁左側の壁画と模写図

図は、二体の玄武で一对となる双玄武図で、亀は、亀甲文が描かれたずんぐりとした甲羅を持つ。亀の胴体（甲羅）に蛇体が絡みつくが、その上部で蛇体が交差して左右に分かれ、二体の蛇の頭部が絡み合って、亀の顔と睨み合う。亀の顔は、獣の顔のように表現されており、三室持ち送りに描かれた亀の顔は、まるで「毛の生えたオットセイ」⁽⁴⁰⁾ のようにも見える。また、足が細くて長いのも、容姿全体が滑稽に見える要素である。双楹塚では、玄室北壁の豪華な帳幕をしつらえた中に安坐する墓主夫妻図が描かれ、その左側に玄武図が描かれている。双楹塚の玄武図も、二体の玄武で一对となる双玄武図で、二体の蛇が絡み合って、蛇と亀の顔は睨み合っている。亀の姿は、全体的にずんぐりとしており、甲羅に亀甲文が表されているが、陸亀のように見える。

5世紀末頃～6世紀初頭の湖南里四神塚の玄室北壁で描かれた玄武図は、亀の胴体（甲羅）に蛇体が三重に絡みつき、亀の尾の上部方向に蛇の顔が位置する。亀の頸は長く、亀の顔と頭の表現はスッポンのようにも見える。6世紀初頭に築造された一辺20mの方台形墳である高山洞1号墳（北朝鮮平壤市）では、漆喰が塗られた玄室北壁の大部分を使用して、二体の玄武で一对となる双玄武図と「武」という文字が描かれている⁽⁴¹⁾。二つの蛇体は交差して絡み合い、右の蛇が左の亀、左の蛇が右の亀に向かって、亀と蛇の顔が睨み合う構図をとる。亀の足や頭の表現は、獣のようにも見える。双玄武図は、前述の三室塚や双楹塚でも描かれているが、高句麗壁画古墳で描かれた四神図の中では、数少ないものといえる。6世紀前半の徳花里1号墳では、玄室の北壁下半を大きく使用して玄武図が描かれている。亀の胴体（甲羅）に蛇体が三重に絡みつき、さらにその上部で蛇体は交差して左右に分かれるが、大きな半円を描いた蛇の顔が、亀の顔と睨み合う。亀の容姿は、まるで犬のように描かれている。

6世紀代の五盃墳4号墳や通溝四神塚でも、玄室北壁で玄武図が描かれている。五盃墳4号墳や通溝四神塚の壁画は、五盃墳5号墳も含めて、神仙思想の影響による独創的な表現がなされているのが特徴である。通溝四神塚の玄武図は、亀の胴体（甲羅）の上部で白色、茶色、赤色、緑色などの鮮やかな縞模様の彩色が施された蛇体が、複雑な鎖のように「8」字状に絡み合っている。亀の甲羅は茶色一色で彩色され、細くて長い頸を持った亀の顔は、蛇の顔と睨み合うように描かれている。五盃墳4号墳も、蛇体が複雑な鎖のように「8」字状に絡み合い、細くて長い頸を持った亀の顔と蛇の顔は睨み合って描かれており、通溝四神塚とほぼ同様の構図をとる。

さらに、6世紀末頃～7世紀初頭の江西大墓及び江西中墓を見ていきたい。双方ともに玄武図は、玄室北壁で描かれている。江西大墓の玄武図は、細長い楕円形状の流麗な弧線で表された蛇体が亀を取り囲み、亀と蛇の顔は睨み合う。亀の甲羅には、縦縞による甲羅文様が表されている。江西大墓の玄武図は、高句麗壁画古墳の中で、最も完成度が高い美しい造形といわれている⁽⁴²⁾。江西中墓の玄武図は、亀がまるで馬か犬のように足が長く描かれている。亀の胴体（甲羅）には二重に蛇体が絡みつき、蛇は亀の頭を円形状に囲むように流麗な弧線で描かれ、亀と蛇の顔は睨み合う。亀の甲羅には、赤色線枠と点で亀甲文が表されている。江西中墓の玄武図は、荒涼とした岩山の風景の上部に描かれ

	高句麗		百済
	(集安)	(平壤)	
4c			<p>1 : 薬水里古墳 (4c 末～5c 初) 2 : 三室塚二室 (5c 初) 3 : 三室塚三室 (5c 初) 4 : 湖南里四神塚 (5c 末～6c 初) 5 : 徳花里 1 号墳 (6c 前) 6 : 通溝四神塚 (6c) 7 : 江西大墓 (6c 末～7c 初) 8 : 江西中墓 (6c 末～7c 初) 9 : 宋山里 6 号墳 (6c 前～後)</p>
5c	 	 	
6c			
7c			

7-図 13 高句麗・百済の玄武図と変遷 (縮尺不統一)

ていることから、岩山の風景との調和によって、幻想的な空間の印象付けがなされている点も特徴である。

さらに、百済の宋山里6号墳の玄武図を見ておきたい。玄武図は、玄室北壁下半で描かれている。粘土上に描かれた壁画は、剥落が進み不鮮明であるが、蛇体が亀の胴体（甲羅）に複数回絡みつき、その上部で亀と蛇の顔が睨み合っている構図であることがわかる。

以上のように玄武図は、時期が降るにつれて、墓室壁画として四神図の占める役割が大きくなることによって、玄室北壁の大部分を占めるようになる。玄武図の中心となる亀は、薬水里古墳や双楹塚では陸亀、三室塚や高山洞1号墳では獣、徳花里1号墳では犬、江西中墓では馬か犬のように、陸にいる獣的な容姿で描かれているのに対して、湖南里四神塚や通溝四神塚、江西大墓のように、水辺にいる亀の容姿で描かれているものに分けられる。また、その大半が亀と蛇の顔が睨み合う構図ではあるが、湖南里四神塚のように亀の顔と蛇の顔が逆方向を向くものも存在する。亀の胴体（甲羅）に絡みつく蛇体の巻きつき方の度合いにも違いが指摘できるが、基本的に蛇は亀の上部空間に描かれている。亀の甲羅文様は、三室塚や双楹塚、江西中墓では亀甲文、江西大墓では縦縞による文様で表されている。さらに、三室塚や双楹塚、高山洞1号墳のように、玄武が単独で表されるのではなく、双玄武図として描かれている点は、特に注意すべき特徴といえる。

玄武図の描画に見られる特徴については、隋唐期（581～907年）を中心とした古代中国の玄武図も含めた亀と蛇の絡み方を中心に、網干善教は、第一類型（亀と蛇の顔が亀の前で睨み合う）・第二類型（亀と蛇の顔が亀の甲羅の上で睨み合う）・第三類型（極めて特殊な表現）に分類し、さらに第一類型をA（甲羅に一重に絡む）・B（甲羅に二重以上に絡む）の二式、第二類型をA（甲羅に絡む場合は一重で蛇身が「8」字状・複雑）・B（甲羅に絡む場合は一重で蛇身に絡み）・C（甲羅に絡む場合二重以上）の三式に分けたうえで、第一類型は隋唐期よりも遡る時期に、第二類型B式は隋唐期に盛行した表現であることを指摘する。ここで検討を試みた高句麗壁画古墳の玄武図は、第一類型A・B式及び第二類型A・B式に該当する⁽⁴³⁾。さらに、蛇体の形状を中心とした玄武図の詳細な分類も試みられている⁽⁴⁴⁾。

また、木造建築的架構法を用いて構築された特殊構造石室を有する5世紀の天王地神塚の玄室北壁では、「地神」の墨書とともに、蛇の体に二つの人顔を持ち、四足の亀と合体したような容姿で描かれた地神図が描かれている。楕円形を呈する蛇体には、白色や赤色、茶色などで鮮やかな縞模様の彩色が施されており、下部に四足や尾が表されていることから、楕円形の蛇体によって、亀の胴体の形状を表したようにも見える。蛇体で囲まれた楕円形の内部には、下方からひねりを加えて伸びる二つの蛇体の先端に、人顔が表されており、その意味的及び装飾的な効果が強調されているように見える（7―図14）。特殊な図像であるが、亀と蛇の顔を人顔に置き換えた変形の玄武図とも解釈されている⁽⁴⁵⁾。竹原古墳で描かれた玄武と考えられている図は、黒色で描いた楕円形の内部に、黒色で手のひらを広げたような図文が描かれており、その間を赤色で充填している。また、その上下に黒色の曲線に赤色

の縁取りで、細長い波状曲線が見られる。この楕円形の形状は、ここで検討を試みた高句麗・百済の玄武図との比較によれば、亀の胴体（甲羅）の表現というよりは、亀の上部で描かれている蛇体の形状によく似ていることが指摘できる。楕円形状を呈する蛇体の表現は、高句麗の五盃墳4号墳や通溝四神塚、百済の宋山里6号墳で見られる。さらにその典型は、高句麗の天王地神塚といえる。天王地神塚は、5世紀代の築造であるが、他は6世紀以降の築造である。



7-図14 高句麗・天王地神塚の地神図

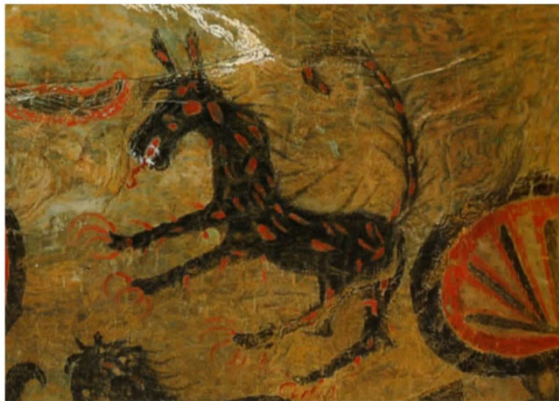
楕円形状を呈する蛇体の表現は、竹原古墳の築造年代よりも少し遡る、ないしはほぼ同時期に築造された玄武図に見られる特徴ともいえる。特に天王地神塚の地神図では、楕円形状の内部に描かれた二つの蛇体の先端に蛇の顔ではなく、人の顔を見ることができ、意味的及び装飾的な効果がより強調されている。竹原古墳でも楕円形状の内部に、装飾的な効果を有する放射状の図文を見ることができる。高句麗・百済で描かれた壁画古墳の図としては、天王地神塚の地神図が、竹原古墳で描かれた玄武と考えられている図に、最もよく似た形態を表した図であることを指摘したい。楕円形の内部に赤色が充填されていることについては、朱雀図や玄室奥壁で描かれている怪獣図や翳などの描画と同様に、竹原古墳の壁画技法の特徴として理解したい。また、上部に見られる細長い波状曲線は、赤色の縁取り線に棘状線の表現が施されていることから、蛇体や龍体を表した可能性が考えられるが、単なる装飾とも理解できる。下部に見られる赤色線は、極めて細く描かれており、装飾と考える方が妥当と思われる。いずれにせよ、上下部に描かれた線は、楕円形図文に伴うものと理解でき、呪術的なないしは装飾的な意味をもつものであることが考えられる。

以上の考察より、竹原古墳の玄武と考えられてきた図は、変容形ではあるが、四神の玄武的な性格を有するもの（神獣的な存在）ないしは玄武を描いた図であると考えられる。竹原古墳では、先に指摘した朱雀図が正確に表現されているのに対して、玄武図は曖昧な表現である。描画の段階で、玄武図そのものが伝えられていたのではなく、その容姿や特徴などの情報のみが伝えられていたことが考えられる。

（3）青龍図

竹原古墳の前室奥壁で描かれた図が、高句麗・百済の壁画古墳で描かれた四神の朱雀図及び玄武図との共通点を通じて、朱雀図及び玄武図（玄武的な性格を有する図）であるという考え方を示したが、次に玄室奥壁で描かれた怪獣についての検討を行いたい（7-図15）。

四神の朱雀及び玄武とくれば、玄室奥壁で描かれた怪獣は、青龍（東）を表したものと考えられる。



7-図15 竹原古墳玄室奥壁の怪獣模写図

前述のとおり、黒色で描かれた全体像の髪や尾に棘状突起が見られ、角・目・長い舌・四肢の鋭い鉤爪と胴体の棘状の表現が赤色でなされている。その容姿は馬に近いが、角及び鋭い鉤爪や棘の表現など、明らかに馬を表したのではないことが理解でき、神獣を表したと考えられる。

この怪獣について、斎藤忠は、蛇体ではなく獣体の体軀を示すことから「青龍と白虎とを合体させた巧みな日本的な表現」と理解する⁽⁴⁶⁾。

一方、白石太一郎は、石室の開口方向を西向き

と見ることで、前室奥壁の左右で描かれた玄武（北）と朱雀（南）の図と合わせた方位一致の解釈にもとづき、この怪獣が、青龍（東）の図であるとの見解を示している⁽⁴⁷⁾。また、方位一致の解釈によれば、白虎（西）の存在が予測でき、石室の入り口側（閉塞石など）に、白虎の図が描かれていた可能性も考えられる⁽⁴⁸⁾。

また、玄室奥壁で描かれた壁画全体の配置からは、左右の翳の間に、馬を牽く人物や舟とともに波状文などが描かれた図柄が一組の構成図として完成しているものと考えられる。その上部の空いた壁面の空間を埋めるように描かれた怪獣図は、玄室奥壁の中心となる図柄とは、別の意図をもって描かれたものと考えられよう。玄室奥壁の配置構成からも、青龍（東）との解釈が妥当と考えられる。










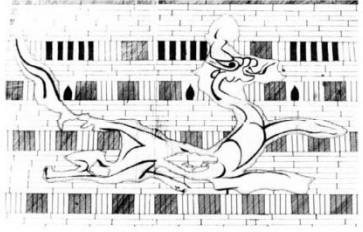

次に、高句麗・百済の代表的な青龍図の特徴を見ていきたい（7-図16）。

まずは、4世紀末頃～5世紀初頭に築造された高句麗壁画古墳として、舞踊塚と薬水里古墳の青龍図を見ていきたい。舞踊塚では、玄室天井の南東壁に、青龍図が描かれている。疾走の姿勢で描かれた一角の青龍で、口を開けて細い舌を出し、頸から胴体・尾にかけて格子目状の鱗、背上に棘状の毛及び前肢先は僅かに鉤爪状になっている。薬水里古墳では、描かれた壁面が、玄室東壁となる。湾曲する細長い一角を持つ青龍で、目の上に細長い眉毛、開いた口からは上方に向かって細長い舌が伸びている。細長い胴体には鱗、前肢や後肢・尾には棘状の細かい毛が見られる。

5世紀初頭の三室塚の第三室天井南壁では、大きく開けた口から細長い舌を前方に出し、前肢先に大きくて鋭い鉤爪を持った姿で描かれている。前肢と後肢には長い羽毛状の毛が表現されている。

引き続き、5世紀末頃の双楹塚と東西 19.5m×南北 22.5mの方台形墳である大安里1号墳（北朝鮮平安南道龍岡郡）の青龍図を見ていきたい。双楹塚の前室東壁で描かれた青龍図は、双角の青龍で、開いた口から細くて長い舌を上方に出している。胴体には縞状に鱗の表現が見られる。前肢部には細くて長い羽毛が見られる。

大安里1号墳の玄室東壁で描かれた青龍図は、疾走の姿勢で描かれた双角の青龍である。開いた口からは歯が見え、細長い頸から胴体部にかけて格子目状の鱗の表現が見える。前肢は細くて長く、そ

	高句麗		百済
	(集安)	(平壤)	
4c			
	1	2	
			
	3		
5c	4: 大安里1号墳 (5c末) 5: 梅山里四神塚 (5c末~6c初) 6: 湖南里四神塚 (5c末~6c初) 7: 德花里1号墳 (6c前)		
		4	
			
		5	6
			
	8	7	
6c			
	9	11	
7c	10: 江西大墓 (6c末~7c初) 11: 宋山里6号墳 (6c前~後)		
		10	

7-図 16 高句麗・百済の青龍図と変遷 (縮尺不統一)

の先は鉤爪となっていたことが予測される。前肢部や尾には、細い棘状の毛が表現されている。胴体部下半は、剥落がひどくてわからない。

5世紀末頃～6世紀初頭の梅山里四神塚の玄室東壁に描かれた青龍図は、細長い胴体に格子目状に鱗が表現されており、また前肢先には、鉤爪が見られる。一方、同時期の築造ではあるが、湖南里四神塚の玄室東壁では、細い頸をまわして、頭部が後方に振り返る姿勢の青龍図が描かれている。細長くて湾曲した一角をもつ青龍で、開いた口からは鋭い牙を持った歯が見え、長い胴体を有することがわかる。前肢部には羽毛が表現されている。

6世紀初頭の高山洞1号墳の玄室東壁で描かれた青龍図は、細長い胴体で、頸から胴体・尾まで格子目状に鱗が表現されている。前肢部には、炎のようにゆらめく羽毛、前肢と後肢には棘状の毛が表され、前肢先と後肢先は鉤爪となっている。頭部の表現は、剥落のため不明である。

6世紀前半の徳花里1号墳の玄室東壁で描かれた青龍図も、双角の青龍で、細長い胴体を呈する。頸や尾の鱗は縞状に表現されている。

次に、6世紀代の古墳として、神仙思想の反映による独創的な画題で壁画が描かれている五盃墳4号墳と通溝四神塚を見ていきたい。いずれも、玄室東壁に双角の青龍が描かれている。五盃墳4号墳では、目玉の上に三つの瘤を持った双角が見られ、開いた口からは赤色の舌を下方に伸ばしている。細長い胴体には、格子目状に鱗が表現されており、赤色・緑色・青色による鮮やかな彩色が施されている。細くて長い前肢と後肢の先は鉤爪で、前肢部には赤色によって炎のように見える羽毛が見られる。また、細長い頸背には、ゆらめく棘状の毛が表されている。通溝四神塚でも、目玉の上に三つの瘤を持った双角、開いた口から長い舌が下方に伸び、頸から胴体・尾にかけて格子目状に鱗が表現されている。前肢部には、炎のように長くゆらめく羽毛が見られる。6世紀後半の真坡里1号墳でも、玄室東壁で青龍図が描かれているが、細長い胴体であることはわかるが、漆喰上に描かれた壁画は剥落が激しくて、詳しい容姿は不明である。

6世紀末頃～7世紀初頭の江西大墓及び江西中墓では、玄室東壁に青龍図が描かれている。江西大墓では、目玉の上に二つの瘤が付いた双角を持つ青龍で、開いた口から上方に長く伸びた舌には赤色で彩色が施されている。長い胴体には格子目状に鱗が表現され、赤色・緑色・青色による彩色が施されている。前肢部には、赤色による縁取りで、ゆらめく炎のように表現された羽毛が見られる。江西中墓の青龍図は、江西大墓に比べると不鮮明であるが、目玉の上に双角を持つ青龍で、赤色で縁取りされた大きな口と髭、細くて長い後肢が特徴である。細長い胴体には、赤色を中心とした彩色が施されている。

高句麗壁画古墳で見られる青龍図は、湖南里四神塚を除き、前方を向いて疾駆する姿勢が基本といえる。容姿の表現としては、頭部に一角ないし双角の角を持つが、時期が降るにつれて、双角となる傾向が読み取れる。また、前脚部の羽毛も、時期が降るにつれて、ゆらめく炎のように表現されるようになる。さらに、開口で長い舌を出すのも特徴で、胴体は細長く蛇体状に表現されている。胴体に

は格子目状などによる鱗を表したものが多く見られるが、背部や脚部に棘状の毛が表されたものが見られ、特に前肢先が鉤爪として表現されているものが多く見られる。

さらに、百済の墓室壁画として描かれた青龍図を見ておきたい。6世紀前半～後半に築造された宋山里6号墳では、玄室東壁のほぼ全体を使って青龍図が描かれている。前方を向いて疾駆する姿勢で、開いた口からは前方に長い舌が伸びている。頭上に細長い曲線が描かれており、長い毛あるいは角を表したものと考えられる。宋山里6号墳の青龍図は、胴体が短くて前肢や後肢が細長く表現されているため、まるで馬や鹿などの動物に近似した体軀に見える。青龍図としての基本姿勢は同じであるが、高句麗壁画古墳の青龍図では、基本的に胴体は細長くて、蛇体状に表現されているため、体軀の表現に相違が窺える。

以上、高句麗・百済で墓室壁画として描かれた青龍図の大まかな特徴を見てきた。次に、竹原古墳の奥壁で描かれた怪獣図との共通点と相違点を整理して、怪獣図の性格を考えていきたいが、その前に、龍馬あるいは天馬・駿馬としての解釈説に従って、古代中国の墓室壁画及び高句麗壁画古墳で描かれた天馬図などを見ておきたい。

中国の五胡十六国時代（4世紀代）の甘肅酒泉丁家閘5号墓（地下式墓・中国甘肅省酒泉市）の前室天井の北壁に描かれた天馬図⁽⁴⁹⁾では、上方に龍の頭部が描かれ、その下面を使用して天馬が描かれている。前肢を前方に向けて跳躍するその姿形は、明らかに馬である。口は開いているが、四肢の先には蹄、尻にはしっかりとした尾、太くてしっかりとした頸の背には鬣、頭部に一角の角らしき表現が見られる（7－図17）。竹原古墳の怪獣図との共通点は、開いた口と四肢、そして角の表現のみである。高句麗壁画古墳では、平壤周辺の永樂18（408）年墓誌銘のある規模不明の方台形墳である徳興奮里古墳（北朝鮮平安南道南浦市）の複室構造石室の前室北側天井で描かれた天馬図⁽⁵⁰⁾、5世紀前半に築造された東西13m×南北17mの方台形墳である安岳1号墳（北朝鮮黄海南道安岳郡）の単室構造石室の玄室天井で描かれた飛馬図⁽⁵¹⁾を見ていきたい（7－図18）。徳興奮里古墳の天馬には、馬の背から尾にかけて大きな羽根状の表現が見られる。一方、安岳1号墳では、大きな羽根を持った四肢の獣体に、嘴状に描かれた頭部を持った飛馬（あるいは麒麟）や、長い耳を持った飛馬が、飛魚などともに描かれている。いずれも、獣体に大きな羽根を付けた表現で、竹原古墳の怪獣図との共通点は見られない。

少ない事例との比較ではあるが、天馬図・飛馬図と竹原古墳の怪獣図とでは、その表現に類似した共通点を見いだすことはできない。

一方、高句麗壁画古墳で描かれた青龍図と竹原古墳の怪獣図との共通点は、角及び口を開け



7－図17 甘肅酒泉丁家閘5号墓の天馬図



1：徳興里古墳の天馬図 2：安岳1号墳の飛馬図

7-図18 高句麗壁画古墳の天馬図・飛馬図

て長い舌を出していること、棘状の体毛と前肢・後肢先に見られる鉤爪の表現である。相違点は、青龍描画の基本となる向きと姿勢及び蛇体状に表された胴体の表現といえる。竹原古墳の怪獣図での体躯の表現は、百済の宋山里6号墳の青龍図に近似した特徴であることが指摘でき、基本となる姿勢の違いは見られるが、竹原古墳で描かれた怪獣図は、ほぼ同時期に高句麗や百済の墓室壁画で描かれた青龍図で見られる諸々の特徴を有していることが理解できる。怪獣図は、玄武図と同様に変容形ではあるが、四神の青龍的な性格を有するもの（神獣的な存在）ないしは青龍を描いた図であると考えられる。

竹原古墳では、朱雀図が正確に表現されているのに対して、玄武図と同じく青龍図は正確な表現ではなく、その特徴のみをとらえた変容形の表現である。描画の段階で、玄武図と同様に青龍図そのものが伝えられていたのではなく、その容姿や特徴などの情報のみが伝えられていたことが考えられる。

（4）描画方法と彩色顔料

竹原古墳の玄室奥壁の壁画は、緑泥片岩の一枚石の表面に、前室奥壁の壁画は、右側が頁岩、左側が花崗岩の表面に、黒色と赤色の二種類の彩色によって直接描かれている。

竹原古墳の奥壁の壁画は、「顔料の塗りが厚く、しかも全面を極めて薄い粘土の被膜が覆っていたため」に経年退化が進まず⁽⁵²⁾、保存状態が良かったことが述べられている。壁画表面の薄い粘土による被膜層の理由としては、長い期間の中で、微量の地下水が石の表面に残ったことで、生成されたことが考えられている。また、竹原古墳の壁画の描画及び彩色に使用された顔料については、黒色は炭素、赤色は弁柄（以下、ベンガラと記す）と同定されており（7-表1）、膠着剤の種類は不明である⁽⁵³⁾。

日本の装飾古墳の描画及び彩色に用いられた色は、「朱色・黄色・緑色・青色・白色・黒色の六色」とされる⁽⁵⁴⁾。朱色は、赤色を表しており、本章では赤色として表記している⁽⁵⁵⁾。装飾古墳の黒色彩色には、煤を油でといたものが、使用されたと考えられているが、竹原古墳の黒色顔料である炭素については、電子顕微鏡による観察によれば、^{みょうぼく}明墨と粒子の大きさや形が同様であるが、明墨は膠で

7－表 1 壁画に使用された主要な顔料

色	顔料名	鉱物名など	竹原古墳	高句麗壁画古墳
赤	水銀朱	辰砂		○
	ベンガラ	酸化第二鉄	○	○
緑	緑青・白緑	孔雀石		?
	緑土	海緑石		○
黒	炭素		○	
	油煙・松煙 カーボンブラック ボーンブラック			○
		磁鉄鉱		○
白	鉛白	塩基性炭酸鉛		○
黄	黄土	含水酸化鉄を含む土		○
	石黄	硫化鉱物		○

練り固めたもので、炭素粒が分散しているが、竹原古墳のものは、固く重なり合っていることが指摘されている⁽⁵⁶⁾。

一方、装飾古墳の赤色は、赤味の強い良い色で、酸化鉄であることがわかっている。竹原古墳の赤色彩色に使用されたベンガラは、電子顕微鏡観察によれば、上質のベンガラと粒子の性質や配置がよく似ており、上質のものが使用されていたことがわかっている⁽⁵⁷⁾。

次に、高句麗壁画古墳での描画方法と彩色顔料について、見ていきたい。高句麗壁画古墳では、6世紀中頃までは、湿地壁画法や乾地壁画法といった化粧地法が中心であるが、6世紀中頃以降、磨き上げた石室の壁面に直接描く粗壁地法によって、壁画が描かれている⁽⁵⁸⁾。高句麗壁画古墳で、韓国国立文化財研究所が実施した蛍光X線分析によれば、4～7世紀代にかけて築造された分析対象となった古墳のいずれから、鉛の成分が検出されている。化粧地法の壁画では、「漆喰の上に鉛白を塗り白い下地を作成した表面に彩色」していたことが指摘されている⁽⁵⁹⁾。

さらに、粗壁地法では、描いた絵の上に薄い石灰の被膜層が形成されることで、壁画の保存性が極めて良くなっている。壁画全体が、漆喰被膜層によって被われるため、彩色顔料の経年劣化が進行せずに、壁面そのものに損傷をあたえない限りは、壁画が良い状態で保存されている⁽⁶⁰⁾。これは、竹原古墳の奥壁壁画との共通要素として理解できよう。

高句麗壁画古墳の彩色顔料は、赤色には水銀朱やベンガラ、黒色には油煙や松煙のほか、カーボンブラックなどが使用されている（7－表1）。膠着剤には、海草を煮詰めた苔膠や動物性の膠を混ぜていたほか、徳興里古墳では植物性樹脂の使用の可能性も指摘されている⁽⁶¹⁾。

一方、百済の宋山里6号墳では、壁面が埴（煉瓦）積であるため、壁画の部分に粘土を塗り、胡粉

によって壁画が描かれている⁽⁶²⁾。

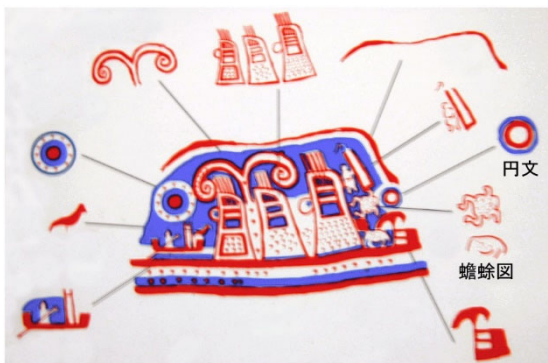
竹原古墳と6世紀中頃以降の粗壁地法によって壁画が描かれた高句麗壁画古墳とでは、その描画方法に共通要素があることが指摘でき、壁画彩色に使用された黒色と赤色の彩色顔料については、ほぼ同様のものが用いられていたことがわかる。

第5節 結論

以上の比較分析作業を通じて、竹原古墳の前室奥壁右側で描かれた図＝四神の朱雀、前室奥壁左側で描かれた図＝四神の玄武的な性格を有するもの（神獸的な存在）ないしは玄武、奥壁で描かれている怪獣図＝四神の青龍的な性格を有するもの（神獸的な存在）ないしは青龍であるとの見解を得た。さらに、竹原古墳と高句麗や百済の墓室壁画を比べると、その描画に明確な違いが見られるが、竹原古墳と6世紀中頃以降の高句麗壁画古墳の一部において、描画方法での共通要素が指摘でき、彩色に使用した顔料については、ほぼ同様であることがわかった。

九州地方の福岡県及び熊本県・大分県を中心に築造された装飾古墳では、幾何学的な装飾図文が中心となる。しかしながら、竹原古墳の奥壁で描かれた図文は、人物・動物・翳・舟など、そのモチーフが容易に理解できるもので構成されている。これらが、他の装飾古墳との大きな相違点で、大陸的な図柄といわれてきた由縁のひとつと考えられる。竹原古墳の四神図が、四神方位と一致することの解釈については、既に指摘されている⁽⁶³⁾とおりのことであろう。同じ九州地方北部の装飾古墳である6世紀後半に築造された墳形規模不明の珍敷塚古墳（福岡県うきは市）の奥壁で描かれた蟾蜍図と円文（7－図19）を併せて、月像と解釈する考え方を含めて、九州地方北部の筑後川流域で築造された装飾古墳の壁画を解釈するうえでは、中国大陆や朝鮮半島の影響を考えないと説明できないことも指摘されてきた⁽⁶⁴⁾。本論での比較分析の結果は、このような解釈を裏付けるものといえよう。

四神方位については、古代中国の経書で漢代に編纂されたとみられている『礼記』⁽⁶⁵⁾曲礼上第一に、「行、前朱鳥而後玄武，左青龍而右白虎，招搖在上，急繕其怒。」（行けば、^{しゅてう}朱鳥を前にして玄武を後にし、^{きふぜん}青龍を左にして白虎を右にし、^{せうえう}招搖上に在り、其の怒を急繕す。）という記載がある。現実の行軍の方向はともかくとして、君主は南面することを原則とすることから、先頭の軍は南方の幡（旗）を掲げることになる。したがって、この史料の意味は、行軍の先頭（南）に朱雀幡（旗）、後尾（北）に玄武幡（旗）、左翼（東）に青龍幡（旗）、右翼（西）に白虎幡（旗）、中軍（中央）に招搖星（北斗七星）幡（旗）を立て、軍の闘志を掻き立てたということになる。これにより古くから、四



7－図19 珍敷塚古墳の壁画図
（珍敷塚古墳展示室で筆者撮影）

神は方位と深い関係を持つことがわかるとともに、招搖星が並列されることから天文との関わりがあった可能性が窺える。さらに、紀元前1世紀頃の古代中国では、四神は、方位との関係による守護という役割があったことが考えられる。

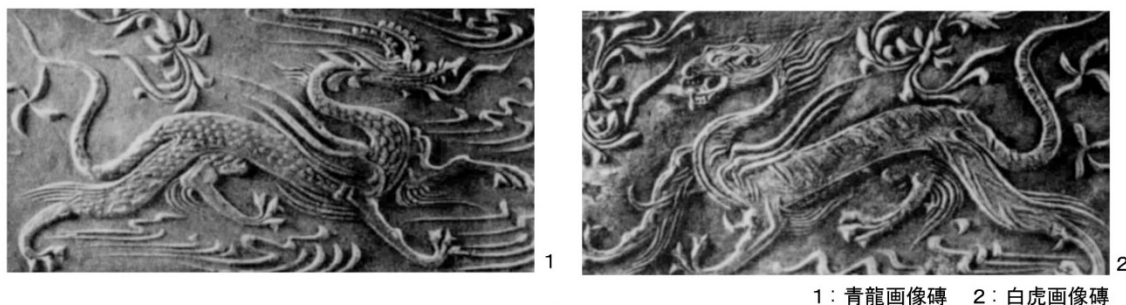
さらに、四神と天文との関わりについては、漢代に編纂された『淮南子』⁽⁶⁶⁾ 天文訓に、「何謂五星。東方木也。其帝太皞，其佐句芒，執規而治春。其神為歲星。其獸蒼龍，其音角，其日甲乙。南方火也。其帝炎帝，其佐朱明，執衡而治夏。其神為熒惑。其獸朱鳥，其音徵，其日丙丁。中央土也。其帝黃帝，其佐后土，執繩而制四方。其神為鎮星。其獸黃龍，其音宮，其日戊己。西方金也。其帝少昊，其佐蓐收，執矩而治秋。其神為太白。其獸白虎，其音商，其日庚辛。北方水也。其帝顓頊，其佐玄冥，執權而治冬。其神為辰星。其獸玄武，其音羽，其日壬癸。」（何をか五星と謂ふ。東方は木なり。其の帝は太皞，其の佐は句芒，規を執りて春を治む。其の神を歳星と為す。其の獸は蒼龍，其の音は角，其の日は甲乙。南方は火なり。其の帝は炎帝，其の佐は朱明，衡を執りて夏を治む。其の神を熒惑と為す。其の獸は朱鳥，其の音は徵，其の日は丙丁。中央は土なり。其の帝は黃帝，其の佐は后土，繩を執りて四方を制す。其の神を鎮星と為す。其の獸は黃龍，其の音は宮，其の日は戊己。西方は金なり。其の帝は少昊，其の佐は蓐收，矩を執りて秋を治む。其の神を太白と為す。其の獸は白虎，其の音は商，其の日は庚辛。北方は水なり。其の帝は顓頊，其の佐は玄冥，權を執りて冬を治む。其の神は辰星と為す。其の獸は玄武，其の音は羽，其の日は壬癸。）と記されている。五星とは、木星（太皞・句芒・歳星），火星（炎帝・朱明・熒惑），土星（黃帝・后土・鎮星），金星（少昊・蓐收・太白），水星（顓頊・玄冥・辰星）の五遊星を指し，陰陽五行の思想と結合したことで，方角・季節・五神（五獸）・五音・十干などが配置されたとされる。ここに，木星＝東＝蒼龍（青龍），火星＝南＝朱雀，土星＝中央＝黃龍，金星＝西＝白虎，水星＝北＝玄武という星と方位と五神の関係が明記されている。また，五神の中心である黃龍は，四方＝四神を制御する役割を備えていた。

以上の考察により，古代中国において，四神と方位は密接な関係を持ち，四神には守護という役割があったことがわかるとともに，天文とも関わりのある可能性が指摘できる。古代中国では，暦を正しく知るために，独自の赤道座標である二十八宿という方法を用いている。二十八宿を七宿ごとに東西南北の四方に分けて，四季に対応させるとともに，四神がそれぞれの方位にあてられている⁽⁶⁷⁾。漢代になると，陰陽五行の思想との結合によって，四神方位の中央には，四方を制御する役割を持った黃龍が配置されるようになり，天文との関わりが明瞭な五神へと変化していたことが理解できる。

また，高句麗壁画古墳においても，四神図と



7-図20 高句麗・五盔墳4号墳の五神黃龍図



7-図 21 河南鄧県学庄村彩色画像磚墓の画像磚四神図

1：青龍画像磚 2：白虎画像磚

天文図との間には深い関わりを見ることができ、6世紀以降になると、中国の五神の影響をうけて、四神の中央に黄龍が加えられることで、五神図となる⁽⁶⁸⁾。つまり、4・5世紀の高句麗壁画古墳の天井石の中央部に描かれた蓮華文や日像・月像に変わり、6世紀以降、五楹墳4号墳や江西大墓で見られるように、天井石の中央部には、黄龍が描かれるのである（7-図20）。

本章の検討結果からは、古代中国を起源とした四神が、高句麗から百済を経由して、6世紀後半には九州地方北部に伝わっていたことが確実である。四神の有する性質にも大きな相違はなかったことが考えられ、四神図が描かれた理由についても、高句麗や百済の四神図と同様に被葬者守護⁽⁶⁹⁾がその目的であったことが窺えよう。

しかしながら、竹原古墳の四神図の特徴を見ると、正確に図としての情報が招来されたのは、朱雀図のみといえる。玄武図や青龍図を見る限りでは、その特徴などの情報のみが伝わっていたことが考えられる。では、こうした朱雀の正確な図や玄武・青龍などの情報はどこから伝わったのか。竹原古墳の四神図は、高句麗壁画古墳で描かれた四神図との比較によれば、その描画の特徴から考えて、高句麗の四神図が直接的に伝えられたと考えるのは難しい。高句麗壁画古墳においても、集安と平壤の地域では、四神図の描画に相違があることも指摘されている⁽⁷⁰⁾が、双方の地域ともに竹原古墳の四神図とは相違が見られる。また、中国の南北朝時代（5・6世紀）の南朝装飾墓である河南鄧県学庄村彩色画像磚墓（中国河南省鄧州市）では、画像磚によって四神（7-図21）が表されていて⁽⁷¹⁾、高句麗や百済の四神図とは、その描画手法に大きな違いが見られる。百済の宋山里6号墳の四神図は、四つの壁面の大半を使用して壁画が描かれていることから、高句麗壁画古墳の四神図の影響によって成立したことは、疑いようがない。

竹原古墳の四神図の個々の特徴を見る限りでは、五神図としての受容がないことも含めて、百済（宋山里6号墳）を経由して、竹原古墳の壁画のモチーフのひとつとして、四神図が受け入れられた可能性が高い。このことは、朝鮮半島からの先進文化や文物を、百済から受け入れてきた古代日本の社会的背景とも合致する。特に6世紀中頃～後半の欽明天皇の時代は、百済では聖明王とその後を継いだ威徳王⁽⁷²⁾の時代である。『日本書紀』によれば、百済は、朝鮮半島中西部の領有権をめぐる高句麗との戦闘を背景に、古代日本との間に頻繁な往来を行って援軍を求め、古代日本からも援軍が送られて

いた時期でもある。

しかしながら、九州地方北部やその他の地域で築造された装飾古墳の壁画内容を見る限りでは、四神図は竹原古墳のみで確認できる希有な画題である。古代日本では、7世紀末頃～8世紀初頭の高松塚古墳やキトラ古墳の出現まで、四神図が描かれることがなかったといえる。

註

- (1) 四神の神獣のうち、青龍は「蒼龍」^{そうりゅう}、朱雀は「朱爵」^{しゅじやく}とも表記されるが、本論では、一般的な呼び名を優先して、青龍、朱雀と表記した。
- (2) a. 上田正昭「四神の思想」『週刊朝日百科日本の歴史』46, 朝日新聞社, 1987, p. 62.
b. 大形徹「四神考—前漢, 後漢期の資料を中心として—」『人文学論集』第15号(金子務教授・片倉穰教授停年退官記念号), 大阪府立大学人文学会, 1997, pp. 127～143.
c. 中川穂花「中国における四神図像—漢代から唐代にかけての壁画墓の図録—」『亞洲考古学』第2号, 亞洲考古学研究会, 2004, pp. 71～86.
d. 永島暉臣慎「高句麗壁画古墳の四神図墓の出現」『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, pp. 44～53.
- (3) 金子量重「蛇と龍—土着の思想と舶来の造形—」『アジアの龍蛇—造形と象徴—』雄山閣, 1992, pp. 13～26.
- (4) 徳植勉「アジアにおける龍蛇信仰と四神について—中国を中心として—」『アジア文化研究』第11号, 国際アジア文化学会, 2004, pp. 159～168.
- (5) a. 東潮「装飾古墳の源流—東アジアの装飾墓—」『装飾古墳の世界』朝日新聞社, 1993, pp. 126～127.
b. 東潮『高句麗考古学研究』吉川弘文館, 1997.
c. 東潮「北朝・隋唐と高句麗壁画—四神図像と畏獣図像を中心として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集, 国立歴史民俗博物館, 1999, pp. 261～325. (東潮『高句麗壁画と東アジア』学生社, 2011に再録)
d. 東潮「古代東アジアの鬼神と四神図像」『道教と東アジア文化』第13巻, 国際日本文化研究センター, 2000, pp. 121～132.
- (6) 軽部慈恩『百済遺跡の研究』吉川弘文館, 1971, p. 59.
- (7) a. 斎藤忠『壁画古墳の系譜』学生社, 1989, p. 118.
b. 白石太一郎「装飾古墳にみる他界観」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集, 国立歴史民俗博物館, 1999, pp. 73～95. (白石太一郎『古墳と古墳時代の文化』塙書房, 2011に再録)
- (8) 「龍媒説話を表した龍馬」と解釈する説は、金関丈夫によって提言され、森貞次郎・和田萃らによって肯定されてきた。
a. 金関丈夫「竹原古墳奥室の壁画」『MUSEUM』第215号, 東京国立博物館, 1969, pp. 11～16.
b. 森貞次郎・榊晃弘『装飾古墳』朝日新聞社, 1972, p. 47.

- c. 森貞次郎『九州の古代文化』六興出版, 1983, p. 415.
- d. 和田萃「四神図の系譜」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集, 国立歴史民俗博物館, 1999, pp. 1～28.
- 四神の「青龍」と解釈する説は, 斎藤忠・白石太一郎らによって提言・肯定されてきた。
- e. 註7a 文献, p. 118.
- f. 註7b 文献, pp. 86～88.
- g. 斎藤忠「私の見た高句麗古墳壁画」『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, pp. 29～43.
- 一方「天馬」と解釈する説は, 東潮・辰巳和弘によって提言されている。
- h. 東潮「装飾古墳の源流—東アジアの装飾墓—」『装飾古墳の世界』朝日新聞社, 1993, pp. 126～127.
- i. 辰巳和弘「新解, 竹原古墳壁画」『同志社大学考古学シリーズXII 実証の考古学 松藤和人先生退職記念論文集』同志社大学考古学研究室, 2018, pp. 355～378.
- 辰巳和弘(辰巳和弘 2018)は, 「馬の生命の張りを極限まで強調した駿馬(天馬)と理解」(p. 357)する。
- (9) a. 森貞次郎「福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳の壁画」『美術研究』第194号, 吉川弘文館, 1957, pp. 1～18.
- b. 森貞次郎『竹原古墳』中央公論美術出版, 1968, p. 23.
- c. 森貞次郎ほか『竹原古墳—竹原古墳保存修理事業報告—』若宮町教育委員会, 1982, pp. 18～19.
- d. 註8c 文献, pp. 419～420.
- (10) a. 註8d 文献, p. 10.
- b. 註8h 文献, p. 127.
- c. 註8i 文献, p. 362.
- 辰巳和弘(辰巳和弘 2018)は, 竹原古墳の壁画に「高句麗壁画古墳にみる朱雀図の影響が認められる点は疑いなかろう」(p. 358)という見解を示すが, 結論で「そもそも竹原古墳の壁画のモチーフに四神図は描かれなかったのではないか」(p. 362)という考え方を示す。
- (11) a. 小田富士雄「北部九州(福岡県)の装飾古墳研究二題」『福岡県の装飾古墳』, 熊本県立装飾古墳館, 1997, pp. 107～117.
- b. 小田富士雄「装飾古墳にみる大陸系画題」『古文化談叢』第40号, 九州古文化研究会, 1998, pp. 165～177.
- (12) ラーザール・マリアンナ「東アジアにおける四神旗・四神幢の比較研究」『龍谷大学大学院国際文化研究論集』第13巻, 龍谷大学, 2016, pp. 5～18.
- (13) a. 町田章『古代東アジアの装飾墓』同朋舎出版, 1987, p. 142.
- b. 註8d 文献, p. 11.
- (14) 『日本書紀』では, 卷第29・天武天皇・天武10(681)年7月条に「戊辰朔, 朱雀見之。」(戊辰の朔に, 朱雀見ゆ。)という記述もある。
- (15) 『続日本紀』の読み下し及びその解釈は, 青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸校注『新日本古典文学大系 続日本紀1』岩波書店, 1989を参考にした。

- (16) 新川登亀男『日本古代の儀礼と表現—アジアの中の政治文化—』吉川弘文館, 1999, p. 142.
- (17) 旗竿遺構は、儀式の時に飾った幢と幡（旗）の旗竿と支柱の跡である。註 18a・b 文献の記載を優先して、旗竿遺構と記したが、宝幢遺構とも呼ばれている。
- (18) a. 奈良文化財研究所都城発掘調査部編・発行『藤原宮朝堂院朝庭の調査—飛鳥藤原第 189 次調査現地説明会資料—』2016.
b. 大澤正吾・西山和宏・山本崇「藤原宮朝堂院の調査—第 189 次」『奈良文化財研究所紀要』2017, 奈良文化財研究所, 2017, pp. 84~102.
- (19) a. 吉川真司「長岡宮時代の朝廷儀礼—宝幢遺構からの考察—」『向日市埋蔵文化財センター年報 都城』第 10 号, 向日市埋蔵文化財センター, 1999, pp. 201~217.
b. 中島信親ほか「長岡宮「北苑」・宝幢遺構」向日市埋蔵文化財センター, 2005, p. 104.
- (20) a. 金子裕之ほか『平城宮発掘報告XIV 第二次大極殿院の調査』奈良国立文化財研究所, 1993, p. 136.
b. 金子裕之「平城宮の宝幢遺構」『奈良文化財研究所紀要』2002, 奈良文化財研究所, 2002, p. 26.
c. 金子裕之「平城宮の宝幢遺構をめぐって—宝幢遺構に関する吉川説への疑問—」『延喜式研究』第 18 号, 延喜式研究会, 2002, pp. 106~129.
- (21) 森正「平成 27 年度京都府内の埋蔵文化財調査」『京都府埋蔵文化財情報』第 130 号, 京都府埋蔵文化財調査研究センター, 2016, pp. 1~6.
- (22) 旗竿遺構は、新宮寺跡（奈良県斑鳩町）南門推定地の南側、新堂廃寺（大阪府富田林市）南門の南側でも確認されており、飛鳥時代（7 世紀）寺院の発掘調査でも確認されている。
- (23) 加茂正典『日本古代即位儀礼史の研究』思文閣出版, 1999.
- (24) 註 23 文献, p. 43~78.
- (25) 註 12 文献, p. 7.
- (26) 直径 18m の円墳と報告されてきたが、平成 29（2017）年の調査で直径 17.5m の二段築成の円墳と確定された。
a. 宮若市教育部社会教育課編・発行『竹原古墳発掘調査現地説明会資料』2017.
b. 宮若市教育委員会編・発行『国指定 60 周年記念シンポジウム 史跡竹原古墳—過去・現在・未来—』2018.
- (27) 註 7a 文献, p. 121. 註 7b 文献, pp. 88~89. 註 8a 文献, p. 14.
- (28) a. 佐賀県立博物館編・発行『装飾古墳の壁画—原始美術の神秘をさぐる—』1973, p. 15.
b. 国立歴史民俗博物館編『装飾古墳の世界』朝日新聞社, 1993, p. 47.
- (29) 註 8d 文献, pp. 9~10.
- (30) a. 池内宏・梅原末治『通溝 卷下』日満文化協会, 1940.
b. 金基雄『朝鮮半島の壁画古墳』六興出版, 1980.
c. 朝鮮画報社出版部編『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社, 1985.
d. 早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005.

- (31) 註 30c 文献, pp. 60～61.
- (32) 西川明彦「日像・月像の変遷」『正倉院年報』第 16 号, 宮内庁正倉院事務所, 1994, pp. 27～54.
- (33) 註 32 文献, p. 35.
- (34) 註 32 文献, 図 2.
- (35) 註 28b 文献, p. 47.
- (36) a. 日下八光『装飾古墳』朝日新聞社, 1967, p. 71.
b. 註 35 に同じ。
- (37) 註 7 a 文献, pp. 117～118. 註 7 b 文献, pp. 86～88. 註 8 g 文献, p. 42.
- (38) 註 29 に同じ。
- (39) 註 33a 文献, pp. 22～26・p. 71.
- (40) 金元龍編『韓国美術全集 4 壁画』同和出版公社, 1974, pp. 135～150.
- (41) 共同通信社編・発行『高句麗壁画古墳報道写真展』2012, p. 23.
- (42) 註 30c 文献, pp. 60～61.
- (43) 網干善教『壁画古墳の研究』学生社, 2006, pp. 120～151.
- (44) 飛鳥資料館編・発行『キトラ古墳壁画四神玄武』, 2007, pp. 16～17.
- (45) 註 40 に同じ。
- (46) 註 7 a 文献, p. 118.
- (47) 註 7 b 文献, pp. 88～89.
- (48) 白石太一郎（白石太一郎 1999・2011）は白虎図がないことについて, 高松塚古墳の朱雀図と同じように, 既に失われたものであることを述べている（註 7 b 文献, p. 88）。
- (49) 中国墓室壁画全集編集委員会編『中国墓室壁画全集 1 漢魏晋南北朝』河北教育出版社, 2011, p. 102.
- (50) a. 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院・朝鮮画報社編『徳興里高句麗壁画古墳』講談社, 1986, p. 55.
b. 耿鉄華『高句麗古墓壁画研究』吉林大学出版社, 2008, p. 334.
- (51) 註 30c 文献, 図版 37. 註 30d 文献, p. 234.
- (52) 註 9a 文献, p. 99.
- (53) 註 9c 文献, p. 19.
- (54) 註 36a 文献, p. 22.
- (55) 朱色は, 橙色に黒色加わったもので, 褐色あるいは茶色に近い色で, 赤色は黄色を含まないものといわれている（註 36a 文献, p. 22）が, 本章では装飾古墳の壁画を見たとき, 赤味の強い色に見える印象を優先して, 赤色と記した。
- (56) 註 36a 文献, p. 24.
- (57) 註 36a 文献, p. 23.
- (58) 全虎兌「古墳壁画と高句麗文化」『高句麗の文化と思想』明石書店, 2013, pp. 307～324.

- (59) 青木繁夫「壁画の描写技法」『高句麗壁画古墳報道写真展』共同通信社, 2012, pp. 10～15.
高句麗壁画古墳で、ユネスコ採取の試料（2004・2005）について、イタリアが実施した分析では、鉛について一切触れられていないことから、今後の検証の必要性も指摘されている（p. 11）。
- (60) 粗壁地法は、接着剤をほとんど混ぜない無機質の非水溶性顔料を木筆や竹筆につけて、石面に押しつけるように描くことで、壁の凹凸面の粒子に顔料が浸透し、彩色層とキャンバスが一体化する（註 58 文献, p. 315）。
- (61) 苔膠や膠は接着剤の一種で、透明性・水和性が高く、粘性性が低いため、高い湿度にも耐えられる（註 58 文献, p. 315）。
- (62) 註 6 文献, p. 59.
- (63) 註 47 に同じ。
- (64) 註 47 に同じ。
- (65) 『礼記』の読み下し及びその解釈は、竹内照夫『新釈漢文大系 27 礼記（上）』明治書院, 1971 を参考にした。
- (66) 『淮南子』の読み下し及びその解釈は、楠山春樹『新釈漢文大系 54 淮南子（上）』明治書院, 1979 を参考にした。
- (67) a. 戴内清「中国・朝鮮・日本・印度の星座」『新天文学講座』第 I 巻星座, 恒星社厚生閣, 1957, pp. 123～156.
b. ジョセフ・ニーダム『中国の科学と文明』第 5 巻天の科学, 思索社, 1976, p. 75.
c. 大崎正次『中国の星座の歴史』雄山閣, 1987, pp. 2～24.
- (68) 金一権「高句麗の天文自然観と天思想」『高句麗の文化と思想』明石書店, 2013, pp. 187～218.
金一権（金一権 2013）は、高句麗壁画古墳での黄龍図の登場を「五方位天文大系」と呼び（p. 195）, 「黄龍は天文五神思想において四方の中心である中央（土）を意味し、帝王や天帝を象徴する神獣」（p. 210）と理解する。
- (69) 小野山節「百済宋山里 6 号墳の四神壁画と被葬者の恐れ—比較考古学による墓室装飾の新しい解釈—」『高麗美術館研究紀要』第 5 号（有光教一先生白寿記念論叢）, 高麗美術館研究所, 2006, pp. 145～154.
- (70) 註 58 文献, p. 320～321.
- (71) 註 13a 文献, p. 192.
- (72) 『日本書紀』巻第 19・欽明天皇 18 年 3 月条に「庚子朔, 百済王子余昌嗣立。是為威徳王。」（庚子の朔^{かうし つきたち}に, 百済の王子余昌^{せしむよしやう}, 嗣^つぎて立つ。是^{これ}を威徳王^{みとくわう}とす。）と記されている。聖明王の死後直ぐに即位せずに、欽明天皇 18 年 3 月に即位したとされる。

終章 研究成果の総括

第1節 歴史的・文化的特性と渡来初期の実態

ここまで鷹甘（飼）、馬甘（飼）、牛甘（飼）、猪甘（飼）といった渡来系動物（家畜）を扱う部民、力士、四神図を分析対象にして、その歴史的・文化的特性の抽出と渡来初期の実態の明確化という作業を行い、古墳時代中期から後期（5・6世紀）の日本へと、朝鮮から伝わった渡来文化受容の具体相について論述してきた。ここでは、これらの分析結果を整理して論述のまとめを行い、それを踏まえて渡来文化の歴史的意義について述べることで、本論の研究成果の総括としたい。

まず、第1章から第5章にかけて、渡来系動物（家畜）を扱う部民個々を対象に、文献と形象埴輪・壁画資料による比較分析を行った。以下、各章ごとに分析対象とした部民の有する歴史的・文化的特性と渡来初期の実態を中心に、研究成果の結論をまとめて記したい。

第1章では、鷹甘（飼）について、鷹鈴と鷹狩りの組織化の問題を中心に、渡来文化としての歴史的・文化的特性と渡来初期の実態について追究した。

鷹甘（飼）の歴史的・文化的特性として、倭国で鷹甘（飼）が飼育・訓練した鷹の特徴である尾羽に鷹鈴を付けることに注目し、それが古代の朝鮮から伝わった渡来文化としての根拠であることと、鷹鈴の鑄造技術も、朝鮮をルーツとしたものであると考えられることを指摘した。

渡来初期の実態については、高句麗や百済で盛んであった鷹狩りが、倭国では鷹飼部として組織化がなされ、首長の象徴として6世紀代に急速に拡がり、列島的な規模での拡充および定着化がなされたことを指摘した。

さらに、鷹形埴輪の出土状況からは、鷹形埴輪が単独で配置されたものではなく、人物埴輪などと一緒に配置された儀礼空間を構成した一部であることがわかった。このことや、鷹匠埴輪の墳丘配列の検討から考えて、鷹匠埴輪が従前の研究で指摘・支持されてきた被葬者（支配者層）の姿を現したという見解ではなく、その支配下におかれた武人や力士と同等級の職能技術者として、被葬者（支配者層）に従属して近侍・奉仕した部民である鷹甘（飼）の正装した姿を表したという新たな見解を示した⁽²⁾。併せて、鷹狩りの技術が渡来した当初は、倭国では馬と一体となった騎馬スタイルという形態が成立していなかったことも指摘した⁽³⁾。

第2章では、馬甘（飼）について、その身分的扱いと軍馬生産体制の成立に関する問題を中心に、渡来文化としての歴史的・文化的特性と渡来初期の実態について追究した。

馬甘（飼）の歴史的・文化的特性として、馬甘（飼）が専ら男性の職業で、顔面への入れ墨が施されたことや、馬の飼育道具である鎌が必需品で、飼育・調教した馬を牽く姿が、その特色を最もよく表していることを指摘した。また、馬甘（飼）人物埴輪が、古墳に配列された位置や順番のほかに、他の人物埴輪と比べて簡素に表現されていることから、馬甘（飼）は被葬者（首長）に従属して近侍・奉仕した部民としては、決して高い身分の存在でなかったと指摘した。このことは、倭国社会における馬

甘（飼）の身分体系をよく表しているといえよう。

渡来初期の実態としては、従来から言われてきた5世紀後半の倭国での馬匹生産の急速な受容を改めて確認した。これは朝鮮諸国の国際情勢と密接に連動したものであったと考えられており、それを妥当と判断した。つまり朝鮮半島での高句麗の領土拡大（南下）による武力制圧の危機にさらされた百済・加耶が、関係が親密で支援が期待できる倭国の武力強化のために馬匹生産技術などの支援を行った結果、倭国では迅速に軍馬生産体制の確立がなされていったと考えられるのである。また、倭国での初期の牧（放牧地）の運営を含めた馬匹生産は、古代の朝鮮に出自が求められる渡来人の馬甘（飼）集団が、倭国の各地に移住させられてその飼養・飼育に従事するという形で行われたと見られ、倭王権が主導して馬飼部の組織化がなされていったと考えた。そして6世紀以降になると、第1章の鷹甘（飼）と同様に、列島的な規模での拡充がなされたのである。

なお、馬甘（飼）人物埴輪の研究は、他の人物埴輪や馬形埴輪（飾り馬）などに比べて、簡素で特徴が少ないこともあってか、従来、人物埴輪研究の中では脇役として扱われてきた⁽⁴⁾。装飾古墳や高句麗壁画古墳における馬を牽く人物図の描写分析においても、その研究対象として取り上げられる機会が少なかつたといえる⁽⁵⁾。本論が、馬甘（飼）人物埴輪を比較分析の対象資料の中心として検討を進めたことは重要で、馬甘（飼）の必需道具である鎌について、「農夫の鎌から馬甘（飼）の鎌へ」といった実証的視点からの考察と検証を行ったことは画期的だったといえよう。

第3章では、牛甘（飼）について、菓としての牛乳生産とその性格に関する問題を中心に、渡来文化としての歴史的・文化的特性と渡来初期の実態について追究した。

牛甘（飼）の歴史的・文化的特性として、牛が馬と一緒に、それもその飼育や管理の技術とともに、5世紀後半以前に、朝鮮半島から渡来した可能性が高いことを指摘した。ただし、第2章で述べたように軍馬としての需要と供給に応じた馬匹生産に比べて、牛の飼養・飼育は極めて少なかつたと見られる。その理由としては、牛の利用がごく限られた支配者層の供給に応じた菓としての牛乳・乳製品の生産に限定されていたため、数多くの牛を生産する必要がなかつたからと考えた。

渡来初期の実態としては、牛は馬甘（飼）によって馬と一緒に飼育されていた可能性が高く、馬甘（飼）と牛甘（飼）は明確に分化された存在ではなかつたと考えた。このことが、倭国社会において部民である牛甘（飼）が、専門集団の牛飼部として発達しなかつた理由と考えられ、むしろ、牛甘（飼）の特性であつたと指摘した。

第4章では、牛の渡来と関わりが深いと考えられる牽牛織女説話について、その伝来年代に関する問題を中心に検討し、第3章で検討した牛甘（飼）の特性について補足した。つまり、牽牛織女説話を記す文献と形象埴輪・壁画資料、説話資料を加えた比較分析を行い、牽牛織女説話は、7世紀以降の遣唐使によって中国からもたらされたと考えるより、5世紀後半以前の倭国への牛馬の渡来や、その飼育・飼養の技術を習得した牛甘（飼）あるいは馬甘（飼）とともに、朝鮮半島から一連の文化複合として渡来した可能性が高いという結論を得たのである。このことは、朝鮮半島からの織機の渡来や、高句麗壁

画古墳のひとつである徳興里古墳の牽牛織女図と日本の天人女房説話（犬飼七夕説話）における犬という共通要素からも、指摘することができる。

第5章では、猪甘（飼）について、角笛の伝来を含めた問題を中心に、渡来文化としての歴史的・文化的特性と渡来初期の実態について追究した。

猪甘（飼）の歴史的・文化的特性として、猪（豚）の捕獲方法は、高句麗では騎馬スタイルで弓矢を使用するのが基本であるが、倭国の猪甘（飼）の場合は、弓矢と猟犬を使用するのみであったと指摘した。また、高句麗では大角笛が、軍楽器ないしは狩猟用としても使われていたが、昼神車塚古墳出土の角笛埴輪の角笛については、軍楽器ではなくて猪甘（飼）の角笛であったことを指摘した⁽⁶⁾が、その系譜は、高句麗・百済などの朝鮮諸国に求められると考えた。

渡来初期の実態としては、猪甘（飼）が、鷹甘（飼）や馬甘（飼）ないしは牛甘（飼）とは、渡来の時期や系譜、その要因、定着の仕方が大きく異なることを指摘した。古墳時代に部民として成立した猪飼部は、猪甘（飼）の源流（祖先）となった渡来人集団の末裔ではないかと考えられる。

なお、猪甘（飼）の特性の抽出は、その系譜を含めて、非常に難しい問題である。森浩一（森浩一 1972）は、既に昭和 47（1972）年に、猪甘（飼）については、東アジア全体の中で考究すべき課題であると述べているが⁽⁷⁾、日本への家畜化された猪（豚）の渡来とその定着過程の究明は、国内での縄文時代以降の猪（豚）との関わりも含めて、今後の大きな課題といえる。特に中国・朝鮮・日本とその周辺地域といった広域的な資料分析が必要であろう。稲作の伝来は米食、猪（豚）の家畜化は肉食といった、人間の生きる糧となった食料確保に関する重要事項で、現在の食生活に通じる食文化の根底となる問題でもある。稲作については、プラント・オパール分析といった科学分析方法の確立によって、日本では縄文時代晩期（約 2,000 年前）まで遡ることがわかっているが、猪（豚）を家畜とした飼養・飼育に関する歴史学上の究明は、稲作の伝来と定着過程にも匹敵する課題といえよう。

以上が渡来系動物（家畜）を扱う部民である鷹甘（飼）、馬甘（飼）、牛甘（飼）、猪甘（飼）を分析した結論である。

次に力士、四神図を対象とした比較分析について、その歴史的・文化的特性と渡来初期の実態の明確化を中心に、各章ごとに研究成果の結論をまとめて記したい。

第6章では、力士について、力士埴輪にみられる特有の髪型である扁平髷の系譜に関する問題を中心に、渡来文化としての歴史的・文化的特性と渡来初期の実態について追究した。

力士の歴史的・文化的特性として、力士は、元々は強力の者の呼称と考えられ、褌に半裸身といった容姿とともに扁平髷という頭髪の実態に特徴があり、ここに渡来文化としての根拠も見いだせることを指摘した。その系譜については、広く東アジア世界での伝播を考えざるを得ないという結論にも達した。

渡来初期の実態としては、力士は、倭王権ないしはその支配下におかれた豪族ないしは首長層に従属した部民で、個々の力士埴輪の性格の特色（守護・瘡邪の役割）に相違がみられないことから、当

初から、守護・瘴邪の観念を備えていたものと判断できることを指摘した。

さらに、比較分析の結果、力士埴輪の扁平髻について、仮面（袋状の被り物）ないしは革製品の可能性を見いだそうとする見解⁽⁸⁾に対し、否定せざるを得ないという結論を得た。

第7章では、四神図の特性として、竹原古墳壁画の解釈と系譜に関する問題を中心に、渡来文化としての歴史的・文化的特性について追究した。

四神図の歴史的・文化的特性については、竹原古墳壁画に対する文献と壁画資料による比較分析を通じて検討を行い、古墳前室奥壁右側に描かれた図＝四神の朱雀、前室奥壁左側に描かれた図＝四神の玄武的な性格を有するもの（神獸的な存在）ないしは玄武、奥壁に描かれている怪獣図＝四神の青龍的な性格を有するもの（神獸的な存在）ないしは青龍であるとの見解が得られた。これにより古代中国を起源とした四神が、朝鮮半島を経由して、6世紀後半には九州地方北部に伝わっていたことは確実である。竹原古墳の四神の性格や描画の理由については、高句麗や百済の四神図と同様で被葬者守護が目的と考えられるが、朱雀図が正確な図として招来されているにもかかわらず、玄武図や青龍図はその情報のみが伝わったと考えざるをえない側面があることも指摘した。竹原古墳に四神図である朱雀図や玄武・青龍の情報が招来されていることは確かだが、四神の中央に黄龍を加えた五神図としての受容がないことや、集安・平壤周辺の地域の高句麗壁画古墳がともに、竹原古墳の四神図とは描画の特徴に相違が見られることから、高句麗から百済（宋山里6号墳）を経由して、四神図が伝わった可能性が高いことを指摘した。宋山里6号墳の四神図は、四方向の壁面のほぼ全面を使用して描かれていることから、6世紀代の高句麗壁画古墳の四神図の影響を受けて成立したことは確かではあるが、高句麗壁画古墳の四神図が、竹原古墳の四神図の成立に直接的に影響をあたえたとは、比較分析による描画の特徴の違いからは考え難い。また、中国の河南鄧県学庄村彩色画像磚墓の四神図を見ると、中国の四神図が直接的に伝えられたことも考え難く、それらも上記のような伝播経路を想定する際の根拠のひとつとして指摘した。

そもそも高句麗壁画古墳の四神図が注目されるようになったのは、昭和47（1972）年の高松塚古墳での四神図の発見によってであり、この時に高句麗壁画古墳の四神図との関係が注目されただけでなく、比較対象であった高句麗壁画古墳自体も注目されるようになった⁽⁹⁾。それ以降の研究の蓄積の結果、四神図は、高句麗壁画古墳では4世紀末頃から壁画の脇役として出現し、6世紀には壁画の主役となったことが明らかとなった。古代日本で四神図が初めて出現するのは、本論での分析結果のとおり、6世紀後半に九州地方北部で築造された竹原古墳の壁画である。四神図と方位は、切り離すことのできない密接な関係をもつものであるが、そのような関係情報を含めて、竹原古墳壁画の分析によって、四神図が高句麗壁画古墳で壁画の主役となってから、さほど時間的な隔たりなく、倭国へと伝わっていたことが確認できたことはとても意義深い。

また、竹原古墳の特色としては、四神図のほかに、豊富な馬具の副葬があげられる。轡だけで3点が副葬されている。そのなかで、鉄製素環鏡板付き轡2点は、実用的な馬具と考えられる。一方、鉄地銅張り金被せ七葉形鏡板付き轡や鉄地銅張り金被せ七葉形の杏葉、鉄地金銅張りの辻金具・雲珠は、その

組み合わせによって用いられた飾り馬具と考えられる。その被葬者像としては、優良な馬を保有していた人物像が想像でき、被葬者の性格を考えるうえで、とても興味深い。竹原古墳の被葬者は、優良な馬を保有していた九州地方北部の首長層と考えられるが、朝鮮半島から先進的な四神図の受容を成し得ていることから、特に百済と深い結び付きを持っていた可能性が高いといえる。

以上が、力士・四神図を分析した結論である。

第2節 研究のまとめ

分析対象とした渡来系動物を扱う部民の結論として、猪（豚）を扱う猪甘（飼）を除くと、鷹を扱う鷹甘（飼）・馬を扱う馬甘（飼）・牛を扱う牛甘（飼）の技術の渡来は、時期的には遡っても4世紀末頃が限度と考えられる。いずれも渡来の中心は5世紀で、6世紀に入ると倭王権が主導ないしは倭王権に従属する地域首長層が中心となって、列島規模で定着・発達し、鷹飼部・馬飼部などの組織化がなされたといえる。部民である力士によって執り行われた相撲も、同時期に渡来して、列島規模で定着をしたといえよう。

このことを裏付けるのが、『日本書紀』巻14 雄略天皇7年は歳条の、「集聚百済所貢今來才伎於大嶋中、託称候風、淹留数月。」（百済の貢^{たてまつ}れる^{いまき}今來の才伎^{てひと}を大嶋^{おほしま}の中に集聚^{うち}へ、候^{つど}風^{かぜ}ふと称^いふに託^つけて、淹留^{とどま}れること月^{つき}を数^{かず}ふ。）、「乃与海部直赤尾将百済所献^{すなは}手末才伎^{あまのあたひあかを}、在大嶋。」（乃^{とも}ち海部^{たてまつ}直^{たなすゑ}赤尾^{てひと}と与^あに、百済の献^{たてまつ}れる手末^{たなすゑ}の才伎^{てひと}を^あつて、大嶋^{おほしま}に在^{さぶら}ふ。）という記述や、その後文に「由是天皇詔大伴大連室屋、命東漢直掬、以新漢陶部高貴・鞍部堅貴・画部因斯羅我・錦部定安那錦・詠語卯安那等、遷居于上桃原・下桃原・真神原三所。」（是^{これ}に由^よりて、天皇大伴大連室屋に^{おほとものおほむらじむろや}詔^{みこと}して、東漢直掬に^{やまとのあやのあたひつか}命^{おほ}せて、^{いまきのあやのすゑつくりべかうくみ}新漢陶部高貴^{くらつくりべけんくみ}・^{あかきべいんし}鞍部堅貴^ら・^{にしこりべぢやうあんなこむ}画部因斯羅我^を・^{さばうあんなら}錦部定安那錦^も・^{かみつともはら}詠語卯安那等^{しもつともはら}を以^{まかみのはら}ちて、上桃原^{みところ}・下桃原^{うつ}・真神原^{はべ}の三所に遷^{たなすゑのてひと}し居^{たなすゑのてひと}らしむ。）である。ここからは、この時期（5世紀）に百済から倭国へと移入した新来の渡来人とその技術（「今來才伎」と呼び、主に手工芸などの手先を使う職人技術を持った渡来人とその技術（「手末才伎」と呼んでいたことがわかる。「今來才伎」は後文によれば、具体的には須恵器（陶器）生産・鞍製作・画家・錦織（錦の織物）・通訳などを指した呼び名であった。

さらに、本論は考古学と文献史学の双方の検討から古墳時代社会における部民の組織化の過程を、渡来文化を媒介に限定された対象の特性を重視したアプローチではあったが、詳細に検討することができたことは意義深いといえよう。専ら文献史学の成果から検討が行われてきた部民制⁽¹⁰⁾であったが、考古学での検討に基づいて最初にその問題を提起したのは、水野正好（水野正好 1971）である。水野正好（水野正好 1971）は、大型前方後円墳の周堤上に位置した一定の区画内に造立された人物埴輪群の検討を通じて、これらを支配者層（豪族）の政治機構・構造の集約と考えて、支配者層（豪族）に近侍した職業集団としての部民であることを述べた⁽¹¹⁾。さらに、橋本博文（橋本博文 1980）は小型の帆立貝式古墳の埴輪部に造立された人物埴輪群の検討から、それらが職業集団の部民であることを述べ、規模の大小はあるものの、古墳時代社会に部民制が成立していたことを考古学研究の分野から提言した⁽¹²⁾。

両者の研究成果は、考古学による部民制研究の提起として意義深いものといえよう。

近年では、水野正好（水野正好 1971）の提言の主体となった保渡田八幡塚古墳（群馬県高崎市）の再発掘調査が実施され⁽¹³⁾、周堤上の区画内に造立された人物埴輪群は、首長（支配者層）の「居館とその周辺で行われた儀礼やアソビが転写」されたものという考えが述べられている⁽¹⁴⁾が、首長（支配者層）を表した人物埴輪を除いた人物埴輪群が部民の姿を表したものであることに相違はない。考古学研究によって、部民の問題を詳細に検討した研究は少ない。人物埴輪を対象資料の中心とした研究では、若狭徹（若狭徹 2007）が述べているように「古墳時代社会の構成要素のひとつとして位置づける当たり前の視点を忘れてはならない」⁽¹⁵⁾ということが重要であろう。本論の研究成果の意義は、この点にもあるといえよう。

本論で検討の中心的資料として扱った人物・動物埴輪については、『日本書紀』巻6 垂仁天皇 32 年 7 月条の「甲戌朔己卯，皇后日葉酢媛命 一云，日葉酢根命也。屍。臨葬有日為。天皇詔群卿曰，從死之道，前知不可。今此行之葬，奈之為何。於是野見宿禰進曰，夫君王陵墓埋立生人是不良也。豈得伝後葉乎。願今將議便事而奏之。則遣使者喚上出雲国之土部耆佰人，自領土部等，取埴以造作人・馬及種種物形，献于天皇曰，自今以後，以是土物更易生人，樹於陵墓，為後葉之法則。天皇於是大喜之，詔野見宿禰曰，汝之便議寔洽朕心。則其土物，始立于日葉酢媛命之墓。仍号是土物謂埴輪。亦名立物也。仍下令曰，自今以後，陵墓必樹是土物。無傷人焉。天皇厚賞野見宿禰之功，亦賜鍛地，即任土部職。因改本姓謂土部臣。是土部連等主天皇喪葬之縁也。所謂野見宿禰是土部連等之始祖也。」（甲戌の朔にして己卯に，皇后日葉酢媛命 一に云はく，日葉酢根命 なりといふ。屍 ります。臨葬りまつらむとして日ごろ有り。天皇，群卿に詔して曰はく，「死に従ふ道，前に不可と知れり。今し此の行の葬に奈之為何む」とのたまふ。是に野見宿禰，進みて曰さく，「夫れ君王の陵墓に生人を埋め立つるは，是良からず。豈後葉に伝ふること得むや。願はくは，今し便事を議りて奏さむ」とまをす。則ち使者を遣して，出雲国の土部耆佰人を喚し上げ，自ら土部等を領ひ，埴を取りて，人・馬と種々の物の形とに造作り，天皇に献りて曰さく，「今より以後，是の土物を以ちて生人に更易へ，陵墓に樹て，後葉の法則とせむ」とまをす。天皇，是に大に喜びたまひて，野見宿禰に詔して曰はく，「汝が便なる議，寔に朕が心に洽へり」とのたまふ。則ち其の土物を，始めて日葉酢媛命の墓に立つ。仍りて是の土物を号けて埴輪と謂ふ。亦は立物と名ふ。仍りて令を下して曰はく，「今より以後，陵墓に必ず是の土物を樹てよ。人をな傷りそ」とのたまふ。天皇，厚く野見宿禰の功を賞めたまひ，亦鍛地を賜ひ，即ち土部職に任けたまふ。因りて本姓を改めて土部臣と謂ふ。是，土部連等，天皇の喪葬を主る縁なり。所謂野見宿禰は，是土部連等が始祖なり。」という殉死・殉殺が埴輪の起源であったとする記述がよく知られている。しかしながら，人物・動物埴輪の出現以前の 4 世紀代築造の古墳において，埋葬施設以外に遺骸を葬った痕跡が確認されていないため，殉死・殉殺が埴輪の起源であったとするこの記述の信憑性には否定的な意見が定説化している。

しかしながら、『日本書紀』の完成した養老 4（720）年には，古墳に造立されていた人物・動物埴輪

に対して殉死・殉殺が起源という認識があったことは確かである。言い換えれば、殉死・殉殺という性格から考えて、人物埴輪が古墳の被葬者である首長（支配者層）に近侍した部民を表したものであるという認識があったといえよう。松井章（松井章 2007）は、古墳における馬の殉殺事例から、人間の殉死・殉殺を否定せず、むしろ肯定的な見解を述べている⁽¹⁶⁾。古墳に造立された人物埴輪・動物埴輪群についての研究も視点を変えて、文献史学と考古学の相互の研究成果を地道に積み上げていくことで、さらに一步先の古墳時代の社会構造がより具体的に復元できるようになるといえよう。

日本の古墳時代の研究では、古墳に副葬された甲冑や馬具・装身具などといった出土遺物の分析においても、中国大陆や朝鮮半島との関わりを切り離して考えることはできない⁽¹⁷⁾。西日本を中心に渡来人の痕跡を考古学的手法で追究した亀田修一（亀田修一 2018）⁽¹⁸⁾が、倭国では「3、4世紀代にも渡来の波はあるが、多くの地域では5世紀に大きな波がやって来た」⁽¹⁹⁾と述べるように、倭王権の主導のもと、5世紀に朝鮮半島から倭国へと移入した技術者やその集団が数多く存在し、倭国社会では渡来人を媒介に渡来文化が広く定着するための足固めがなされたと推定される。しかしながら、倭王権としての専らの関心は渡来人そのものではなく、渡来人の有する技能・文化の移入・定着であったことは述べるまでもない⁽²⁰⁾。

5世紀以降、倭国へと移入した渡来人とその文化が、本論で分析対象とした渡来家畜である牛馬の飼養・飼育、鷹狩りの技術、力士による相撲、四神図伝来といったこと以外でも、古代日本の技術や文化に大きな影響を与えてその発達を促したことは確かである。そして6世紀中頃以降になると、古代日本社会の宗教・学問・芸術などの各分野に、多大なる影響を与えて思想・文化の発展を促した仏教の伝来とその定着・普及という大きな渡来の波があったことは、周知のとおりである。

田中史生（田中史生 2017）が指摘するように、今日の渡来人や渡来文化の研究は、「今日的課題からあらためて相対し、問い直すことが必要」な段階にきている⁽²¹⁾。本研究は、倭王権が渡来文化をどのように取り入れながら、部民の組織化を図っていったのかということを追究したものである。その分析結果からすれば、倭王権は、高句麗・百済・新羅といった朝鮮三国の間での軍事・政治関係を見据えながら、倭王権にとって都合のよい形で専らその技術と文化を受容し、部民の組織化に利用したといってもいいのかもしれない。ただし、限られた分析対象の詳細を明らかにすることに終始したため、ここまでは論じられたが、歴史文化としての総体的な全体像までは達することができなかった。田中史生（田中史生 2017）が考古学に期待した「今以上の緊張感を与える歴史像」の提起⁽²²⁾を志したものの、その到達点には程遠く、多くの課題を残すことになったことは反省したい。

第3節 渡来文化研究の意義と展望

最後に、渡来文化研究の意義と、研究の展望について、述べておきたい。

田中史生（田中史生 2017）は、人・物・文化の移動を歴史学的に研究することについて、「無数で多様・多面的にある素材から分析対象として取り上げた移動が何を明らかにするための、どのような問題

意識、視点に基づく対象なのかが問われ、歴史的意義や有効性も、現代的課題との対話のなかで問い直していかなければならない」⁽²³⁾とも述べる。

この田中史生の主張を念頭に本研究のあり方をまとめると、鷹甘（飼）、馬甘（飼）、牛甘（飼）、猪甘（飼）といった渡来系動物（家畜）を扱う部民、力士、四神図を分析対象として取り上げたのは、序章で述べたように、渡来文化受容とそれに伴う技術・文化の新展開が倭国の諸制度の整備とどのような関係にあるかが、日本古代国家の形成・展開を考えるうえで重要な検討課題の一つだという問題意識があり、それを考えるうえで適切な対象と考えたからである。そうして得られた研究成果を基に渡来文化の歴史的な役割・意義を改めて考えると次のように評価できるように思う。

一般的にみて5世紀は国際的な外交を重視した倭五王の時代、6世紀は武烈天皇の崩御によって、系列を異にする継体天皇が即位した時代である。6世紀に入ると、筑紫国造磐井が反乱をおこすという一大事があったこともよく知られており、倭王権の内部に動揺がみられることが従来から指摘されてきた。こうした動揺に対処するため、6世紀の倭王権は自らの主導のもとに内在的な政治力の強化を目指して、5世紀に朝鮮諸国の政治情勢と連動して朝鮮半島から倭国に移住した渡来人によってもたらされた技術・文化を利用して部民の組織化をすすめたものと考えられる。このことが、古代日本国家形成の萌芽期ともいえる5・6世紀に渡来文化が果たした歴史的な役割ないしは意義といえるのではないだろうか。

このほか、個別具体的に明らかにしてきた成果のなかには、現代日本の伝統文化につながっているものも少なからず存在した。たとえば、鷹狩りや力士、四神などがそれにあたる。だが、そうしたものが単純な日本古来のものではなく、もともと渡来によってもたらされたという事実を具体的に明らかにしたことは、伝統とは何か、また伝統とされる行事の解釈が妥当かどうか、という問題を考えるうえで重要な材料を提供したということである。渡来文化研究の現代的な意味として、こうしたことも挙げることができるであろう。

最後に、渡来文化研究の展望として、次の二つをあげておきたい。

一つ目は、古墳時代における動物を扱う部民の総体的な分析についてである。関東地方の5世紀後半～末頃に築造された保渡田古墳群を構成する墳長96mの前方後円墳である保渡田八幡塚古墳（群馬県高崎市）から、高く上げた首に鈴の付いた首紐がまかれ、嘴で小魚を銜えた鵜を表した鳥形埴輪が出土している⁽²⁴⁾。この埴輪の存在によって、古墳時代に鵜飼が行われていた可能性が想像できる。また、鳥に関連した人物埴輪で、馬甘（飼）人物埴輪と同様に、右腕を上げた姿勢をとるもので、関東地方の岩鼻古墳群（埼玉県東松山市）から出土した水鳥を冠した人物埴輪がよく知られている。6世紀後半のものと推測されるが、頭部に水鳥をかたどった帽子状のものを被って、美豆良を結った男子半身立像で、左腕を脇に添えて餌壺を抱え、右腕を上げて手招きしたような姿勢をとっている⁽²⁵⁾。この埴輪は、水鳥などを中心とした鳥の飼養・飼育をなし得た鳥甘（飼）の姿を表したと推測できる。このような動物埴輪や人物埴輪の存在を考えると、今後行うべき研究の方向性としては、本論で実施した渡来系を問わずに、動物全体を扱う部民についての歴史的・文化的特性をとりまとめ、総体的な視点から、歴史学的意

義を考察する必要があると考えられる。

二つ目は、坂靖ら（坂靖ほか 2016）が近畿地方の奈良盆地（奈良県北西部）をモデルに実施した⁽²⁶⁾ように、倭王権やその傘下の地方首長層までを含めた有力豪族が、朝鮮半島にその技術的な系譜が求められる渡来系集団および日本各地に出自を持つ技術者集団を、部民としてどのようにその支配領域のなかに組み込み、その勢力を拡大させて安定を図っていったのか、という問題についてである。これを解明するには、古墳時代の政治的及び社会構造的な側面を重要視した渡来文化の研究を進めるべきであろう。

既に述べたように、本研究の成果は到達点ではなく、多くの課題を残すことになった。残された課題については、以上の研究展望のもと、今後も継続して考古資料の分析を中心に、日本海を交流路とした渡来文化の究明に努めていきたい。

註

- (1) a. 平凡社編・発行「小特集 日本の伝統鷹狩り」『太陽』No.72, 1969, pp. 127～140.
b. 平凡社編・発行「鷲と鷹」『季刊アニマ』2, 1975.
c. 大塚紀子「放鷹，諏訪流，羽合一考」『戦国のまなびや—朝倉文化・文武を極める—』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館，2013, p. 51.
- (2) a. 塚田良道「鷹匠と馬飼」『同志社大学考古学シリーズV 考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会，1992, pp. 301～312.（塚田良道『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣，2007 に再録）
b. 榎村寛之『狩りと王権』斎宮歴史博物館，1995.
c. 賀来孝代「鶉飼・鷹狩を表す埴輪」『古代』第117号，早稲田大学考古学会，2004, pp. 83～105.
d. 若狭徹『もっと知りたいはにわの世界—古代社会からのメッセージ—』東京美術，2009.
以上の文献などで支持されてきた「鷹匠埴輪は支配者層の姿」という見解を否定した。
- (3) 註2b 文献では、渡来当初の鷹狩りで騎馬スタイルが未成立であったことについて、日本の騎馬は「習慣自体は大陸から伝えられた」が「騎馬の習慣の無い人」が「日本的なものにアレンジした」（p. 29）という見解が述べられているが、渡来当初の騎馬と鷹狩りの問題を単純に同一視して考えることはできないと思う。
- (4) a. 稲村繁ほか『人物埴輪の世界』同成社，2002.
b. 塚田良道『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣，2007.
a 文献では「馬曳きと農夫」の区別が手の動きのみであること，b 文献では人物埴輪第1～5形式中の第4形式として「馬甘（飼）人物埴輪」が区分されている。
- (5) a. 斎藤忠「古墳文化と壁画」『斎藤忠著作選集』第3巻，雄山閣出版，1997, pp. 145～260.
b. 白石太郎「日本の古墳壁画と高句麗古墳壁画」『第3回高句麗国際学術大会発表論集』高句麗研究会・学習院大学東洋文化研究所・在日本朝鮮歴史考古学協会，1997, pp. 49～67.
c. 大阪府立近つ飛鳥博物館編・発行『残されたキャンバス 装飾古墳と壁画古墳』2000.

- (6) 塚田良道「埴輪の軍楽隊」『同志社大学考古学シリーズVI 考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズ刊行会, 1994, pp. 79～100. (塚田良道『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣, 2007 に再録)
角笛を吹く人物埴輪について「武装軍団に關係する軍楽隊の一員」との見解が示されている(再録文献, p. 179.)。
- (7) 森浩一「第6章 主要な遺物の考察」『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部文化学科内考古学研究室, 1972, pp. 299～343.
- (8) a. 若松良一「鎮魂の芸能者—相撲人—」『力士の考古学』かみつけの里博物館, 2008, pp. 43～51.
b. 新山保和「力士埴輪の一考察」『かながわ考古学論集—有志職員によるかながわ考古学財団20周年記念誌—』かながわ考古学論集刊行会, 2014, pp. 111～120.
a 文献で仮面(袋状の被り物), b 文献で革製品の可能性が指摘されている。
- (9) 有光教一「高句麗壁画古墳の四神図」『壁画古墳 高松塚』奈良県教育委員会・奈良県明日香村, 1972, pp. 140～150.
- (10) 武光誠『研究史 部民制』吉川弘文館, 1981.
- (11) 水野正好「埴輪芸能論」『古代の日本第2巻 風土と生活』角川書店, 1971, pp. 255～278.
- (12) 橋本博文「埴輪祭式論」『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会, 1980, pp. 337～368.
- (13) 若狭徹・田辺芳昭ほか『保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会, 2000.
- (14) 若狭徹『古墳時代の水利社会研究』学生社, 2007.
- (15) 註14文献, p. 293.
- (16) 松井章『東アジアにおける家畜の起源と伝播に関する動物考古学的研究—特に豚, 馬, 牛について—』平成15年度～18年度科学研究費補助金・基礎研究(A)(課題番号15202023)研究成果報告書, 奈良文化財研究所, 2007.
- (17) a. 福岡県教育委員会編『九州における古墳文化と朝鮮半島』学生社, 1989.
b. 岩崎卓也・中山清隆ほか「特集 古墳時代の日本と中国・朝鮮」『季刊考古学』第33号, 1990, pp. 14～88.
- (18) 亀田修一「古墳時代の渡来人—西日本—」『専修大学古代東ユーラシア研究センター年報』第4号, 専修大学古代東ユーラシア研究センター, 2018, pp. 43～62.
- (19) 註18文献, p. 59.
- (20) 田中史生「ヒト・モノ・文化の移動をどう捉えるか—移動史の主体と空間」『日本古代交流史入門』勉誠出版, 2017, pp. 3～18.
- (21) 註20文献, p. 13.
- (22) 註20文献, p. 15.
- (23) 註20文献, pp. 16～17.
- (24) a. 註13文献に同じ。
b. 若狭徹「古墳時代における鵜飼の造形—その歴史的意味—」『動物考古学』第19号, 日本動物考古学会,

2002, pp. 15～24.

c. 註 2 c 文献に同じ。

d. 註 2 d 文献に同じ。

(25) a. 永峯光一・水野正好編『日本原始美術大系 3 土偶・埴輪』講談社, 1977, p. 95 (図版 176) .

b. 亀井正道「人物・動物はにわ」『日本の美術』第 346 号, 至文堂, 1995.

(26) 坂靖ほか『古墳時代の渡来系集団の出自と役割に関する考古学的研究』平成 24 年度～27 年度科学研究費助成事業・基礎研究 (C) (課題番号 24520880) 研究成果報告書, 奈良県立橿原考古学研究所, 2016.

挿図・表の出典一覧

挿図

序章

- 序一図1 国立歴史民俗博物館編・発行『平成22年度人間文化研究機構連携展示 アジアの国境を超えて』2010, p.9. (一部加筆)

1章

- 1一図2 1:辻秀人ほか『原山1号墳発掘調査概報』福島県教育委員会, 1982, 第4図版.
2:榎村寛之『狩りと王権』斎宮歴史博物館, 1995, p.12 (図版18).
3:大塚美恵子「鷹の埴輪について—伝大室出土の鷹形埴輪に関連して—」『群馬考古学手帳』vol.6, 群馬土器観会, 1996, p.90 (第2図).
4:荻野谷正宏ほか『大王の埴輪・紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』和歌山県立紀伊風土記の丘, 2011, p.41 (図版92・図版93).
5:川道亨ほか『五目牛新田遺跡・五目牛南組Ⅱ遺跡・五目牛清水田Ⅱ遺跡・柳田Ⅱ遺跡』伊勢崎市教育委員会, 2005, PL.96.
- 1一図3 辻秀人ほか『原山1号墳発掘調査概報』福島県教育委員会, 1982, 第3図版～第7図版. (一部加筆)
- 1一図4 荻野谷正宏ほか『大王の埴輪・紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』和歌山県立紀伊風土記の丘, 2011, p.8 (図7).
- 1一図5 1:高槻市教育委員会編・発行『今城塚古代歴史館常設展示図録(改訂版)』, 2012, p.30.
2:佐藤春樹ほか『太田市指定重要文化財鷹匠埴輪修復報告書』太田市教育委員会, 1999, pp.13～14 (図2).
3:榎村寛之『狩りと王権』斎宮歴史博物館, 1995, p.5 (図版15).
4:永峯光一・水野正好編『日本原始美術大系3 土偶・埴輪』講談社, 1977, p.94 (図版175).
- 1一図6 荻野谷正宏ほか『大王の埴輪・紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』和歌山県立紀伊風土記の丘, 2011, p.4 (図2)・p.5 (図3).
- 1一図7 木暮仁一「オクマン山古墳」『群馬県史資料編3 原始古代3・古墳』群馬県, 1981, p.942 (図503).
佐藤春樹ほか『太田市指定重要文化財鷹匠埴輪修復報告書』太田市教育委員会, 1999. pp.13～14 (図2).
- 1一図8 1:佐藤春樹ほか『太田市指定重要文化財鷹匠埴輪修復報告書』太田市教育委員会, 1999. pp.13～14 (図2)・p.19 (図5).
2:泉武ほか『星塚・小路遺跡の調査』天理市教育委員会, 1990, p.110 (図61).
3:森浩一ほか『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部文化学科内考古学研究室, 1972, p.354 (第215

図)。

- 4:大阪府立近つ飛鳥博物館編・発行『古代の群像―俑と埴輪―』1996. p. 3 (図版4)。
- 5:Yoshiko Kakudo “*The Art of Japan*” Asian Art Museum, San Francisco, 1991, p. 45.
- 1－図9 荻野谷正宏ほか『大王の埴輪・紀氏の埴輪―今城塚と岩橋千塚―』和歌山県立紀伊風土記の丘, 2011, p. 12 (図12)。
- 1－図10 加藤秀幸「鷹狩り文化史」『季刊アニマ』2, 平凡社, 1975, p. 91.
- 1－図12 池内宏・梅原末治『通溝 卷下』日満文化協会, 1940, 第8図・図版第51.
- 1－図14 1:読売テレビ放送編『好太王碑と集安の壁画古墳』木耳社, 1988, p. 108.
- 2:早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, p. 284 (図版265)。
- 3:朝鮮民主主義人民共和国社会科学院・朝鮮画報社『徳興里高句麗壁画古墳』講談社, 1986, pp. 30～31 (図版36)。
- 4:早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, pp. 240～241 (図版228)。
- 1－図15 方起東「吉林集安麻線溝一号壁画墓」『吉林集安高句麗墓葬報告集 (吉林省文物考古研究所編著)』科学出版社, 2009, p. 32 (図5)。
- 1－図16 大田区立郷土博物館編・発行『特別展 鷹狩り―歴史と美術―』, 1988, p. 24 (図版102)。

2章

- 2－図1 山上弘・小林義孝ほか『葦屋北遺跡発掘調査概要・I』大阪府教育委員会, 2004, 巻頭図版。
- 2－図2 樫田誠『矢田野エジリ古墳発掘調査報告書』小松市教育委員会, 1992, 巻頭図版。
- 石塚久則ほか『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会, 1980, p. 283 (第184図)・p. 284 (第185図)・p. 300 (第202図)。
- 藤田三郎ほか『笹鉾山古墳群』田原本町教育委員会, 2005, p. 9 (写真13・写真14)・p. 10 (写真15・写真16)。
- 金子直行ほか『新屋敷遺跡C区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 1996, p. 200 (第165図)・p. 214 (第176図)。
- 深澤敦仁ほか『多田山古墳群』群馬県埋蔵文化財調査事業団, 2004, p. 106 (図90)・p. 122 (図104)・p. 126 (図108)・p. 151 (図129)・p. 168 (図143)。
- 三浦京子ほか『世良田諏訪下遺跡』尾島町教育委員会, 1998, p. 164 (第140図)・p. 171 (第146図)・p. 172 (第147図)・p. 182 (第154図)。
- 大澤伸啓「馬飼の人物埴輪について」『栃木県考古学会誌』第13集, 栃木県考古学会, 1991, p. 176 (第2図)・p. 177 (第3図)。
- 2－図3 徳江秀夫ほか『綿貫観音山古墳I』群馬県埋蔵文化財調査事業団, 1998, p. 318 (第261図)・p. 319 (第262図)・p. 445 (第344図)。

- 宮塚義人ほか『小泉大塚越遺跡』玉村町教育委員会, 1993, p. 35 (第 23 図) ・ p. 61 (第 42 図) .
- 田村誠ほか『庚申塚遺跡・愛染遺跡・安保氏館跡・諏訪ノ木古墳』神川町教育委員会, 1994, p. 96 (第 28 図) ・ p. 97 (第 29 図) ・ p. 126 (第 45 図) .
- 入澤雪江『中原Ⅱ遺跡』吉井町教育委員会, 2004, p. 77 (第 56 図) ・ p. 78 (第 57 図) ・ pp. 149～150 (第 117 図) .
- 中島洋一ほか『酒巻古墳群』行田市教育委員会, 1988, p. 59 (図 29) ・ p. 60 (図 30) ・ p. 61 (図 31) ・ p. 96 (図 49) ・ 付図 2 ・ 付図 4 .
- 2-図 4 木村友則ほか『甲塚古墳発掘調査報告書』下野市教育委員会, 2014, p. 216 (図 2) .
- 2-図 5 榎田誠『矢田野エジリ古墳発掘調査報告書』小松市教育委員会, 1992, 写真図版 18.
- 2-図 6 藤田三郎ほか『笹鉾山古墳群』田原本町教育委員会, 2005, p. 9 (写真 13) .
- 2-図 7 石塚久則ほか『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会, 1980, p. 284 (第 185 図) .
- 榎田誠『矢田野エジリ古墳発掘調査報告書』小松市教育委員会, 1992, p. 46 (第 34 図) .
- 深澤敦仁ほか『多田山古墳群』群馬県埋蔵文化財調査事業団, 2004, p. 122 (図 104) .
- 金子直行ほか『新屋敷遺跡C区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 1996, p. 214 (第 176 図) .
- 三浦京子ほか『世良田諏訪下遺跡』尾島町教育委員会, 1998, p. 171 (第 146 図) .
- 徳江秀夫ほか『綿貫観音山古墳Ⅰ』群馬県埋蔵文化財調査事業団, 1998, p. 318 (第 261 図) .
- 宮塚義人ほか『小泉大塚越遺跡』玉村町教育委員会, 1993, p. 61 (第 42 図) .
- 田村誠ほか『庚申塚遺跡・愛染遺跡・安保氏館跡・諏訪ノ木古墳』神川町教育委員会, 1994, p. 96 (第 28 図) ・ p. 97 (第 29 図) .
- 大澤伸啓「馬飼の人物埴輪について」『栃木県考古学会誌』第 13 集, 栃木県考古学会, 1991, p. 176 (第 2 図) .
- 入澤雪江『中原Ⅱ遺跡』吉井町教育委員会, 2004, p. 77 (第 56 図) ・ p. 78 (第 57 図) .
- 中島洋一ほか『酒巻古墳群』行田市教育委員会, 1988, p. 59 (図 29) ・ p. 61 (図 31) .
- 2-図 8 梁木誠・今平利幸『下桑西島古墳群』宇都宮市教育委員会, 1992, pp. 29～30 (第 19 図) ・ p. 31 (第 20 図) ・ p. 46 (第 31 図) .
- 2-図 9 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編・発行『大和考古資料目録 第 15 集』1988, p. 1 (No.3659) .
- 2-図 10 安村俊史『高井田横穴群』柏原市立歴史資料館, 2012, p. 7.
- 2-図 11 柳沢一男『描かれた黄泉の世界 王塚古墳』新泉社, 2004, p. 45 (図 41) .
- 2-図 12 森貞次郎『竹原古墳』中央公論美術出版, 1968, p. 15 (挿図 7) .
- 森貞次郎ほか『竹原古墳』若宮町教育委員会, 1982, 巻頭図版 1 .
- 2-図 13 斎藤忠『斎藤忠著作選集 3 古墳文化と壁画』雄山閣, 1997, 巻頭図版.
- 2-図 14 斎藤忠「私の見た高句麗古墳壁画」『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, p. 39 (図 17) .
- 2-図 15 早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, p. 102 ・ p. 128 (図版 86) ・ p. 129 (図版 88) .

p. 131 (図版 90) ・ p. 137 ・ p. 141 (図版 101) .

2-図 16 千賀久『古墳時代の馬との出会い』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館, 2003, p. 30.

3章

3-図 1 1:鈴木裕明ほか『四条遺跡Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所, 2010, p. 144 (図 94) .

2:高橋克壽ほか『奈良山発掘調査報告Ⅰ—石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査—』奈良文化財研究所, 2005, p. 140 (Fig. 78) .

3:吉村幾温「6 D-27 号墳」『寺口忍海古墳群』新庄町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所, 1988, pp. 50 (図 30) .

4・5:今西康宏・渡井彩乃『大王墓にみる動物埴輪』高槻市立今城塚古代歴史館, 2015, pp. 7~8.

6:田原本町教育委員会編・発行『田原本の遺跡 5 田原本の埴輪』, 2007, p. 10 (図版 39) .

7:笠原勝彦『市営住宅梶第一団地建替に伴う埋蔵文化財発掘調査 梶遺跡』守口市教育委員会, 1991, p. 40 (第 25 図) .

3-図 2 8~10:高橋克壽ほか『奈良山発掘調査報告Ⅰ—石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査—』奈良文化財研究所, 2005, p. 76 (Fig. 44) ・ p. 77 (Fig. 45) .

11:千葉県立房総風土記の丘編・発行『企画展 房総のはにわ』1982, p. 16.

3-図 4 萩野谷正宏ほか『大王の埴輪・紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』和歌山県立紀伊風土記の丘, 2011, p. 4 (図 2) .

今西康宏・渡井彩乃『大王墓にみる動物埴輪』高槻市立今城塚古代歴史館, 2015, p. 1. (一部加筆)

3-図 5 村尾政人ほか『郡家遺跡第 75 次発掘調査報告書』郡家遺跡調査団, 2004, 巻頭図版 2 (図版 3) .
桃崎祐輔「幣旗邸古墳 1 号墳出土の家牛 (*Bos taurus*) 歯・家犬 (*Canis familiaris* LINNAEUS) 骨」
『幣旗邸古墳 1 号墳』中津市教育委員会, 1995, p. 22 (図 11) . (一部加筆)

3-図 6 国立歴史民俗博物館編『装飾古墳の世界』朝日新聞社, 1993, p. 30 (図版 33) .

3-図 7 斎藤忠「兎沢古墳群 9 号墳の壁画の発見について」『笛吹段・兎沢古墳群』駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所, 1984, p. 67 (第 40 図) .

3-図 8 1:早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, p. 85 (図版 18) .

2:朝鮮画報社出版部編『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社, 1985, 図版 46.

3:朝鮮民主主義人民共和国社会科学院・朝鮮画報社編『徳興里高句麗壁画古墳』講談社, 1986, p48 (図版 62) ・ p. 62 (図 20) .

3-図 9 1:早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, p. 275 (図版 258) .

2・3:朝鮮民主主義人民共和国社会科学院・朝鮮画報社編『徳興里高句麗壁画古墳』講談社, 1986, p. 35 (図版 42) ・ p. 38 (図版 49) .

4:金基雄『朝鮮半島の壁画古墳』六興出版, 1980, 巻頭図版 31.

- 3-図10 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院・朝鮮画報社編『徳興里高句麗壁画古墳』講談社, 1986, p.14 (図版11)・p.52 (図4)。(一部加筆)
- 3-図11 中国墓室壁画全集編集委員会編『中国墓室壁画全集1 漢魏晋南北朝』河北教育出版社, 2011, p.91 (図版102)・p.92 (図版105)。
- 3-図13 北條朝彦「丑」『十二支になった動物たちの考古学』新泉社, 2015, p.33 (図9)。
- 3-図14 北條朝彦「丑」『十二支になった動物たちの考古学』新泉社, 2015, p.24 (図2)。
原明芳『奈良時代からつづく信濃の村 吉田川西遺跡』新泉社, 2010, p.35 (図25)。

4章

- 4-図1 大阪府文化財センター・日本民家集落博物館編・発行『はたおりの歴史展—古代の織物生産を考える—』2006, p.1.
- 4-図2 木村友則ほか『甲塚古墳発掘調査報告書』下野市教育委員会, 2014, 図版34・図版40.
- 4-図3 木村友則ほか『甲塚古墳発掘調査報告書』下野市教育委員会, 2014, 巻頭図版4.
- 4-図4 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院・朝鮮画報社編『徳興里高句麗壁画古墳』講談社, 1986, p.28 (図版32)・p.57 (図12)。
- 4-図5 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院・朝鮮画報社編『徳興里高句麗壁画古墳』講談社, 1986, p.29 (図版34)。
- 4-図6 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院・朝鮮画報社編『徳興里高句麗壁画古墳』講談社, 1986, p.35 (図版42)・p.38 (図版49)。

5章

- 5-図1 若狭徹『保渡田Ⅶ遺跡』群馬町教育委員会, 1990, p.41 (第29図)。
若狭徹・田辺芳昭ほか『保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会, 2000, p.101 (図4-4)・p.347 (図211)。
- 5-図2 若狭徹『保渡田Ⅶ遺跡』群馬町教育委員会, 1990, p.41 (第29図)・p.59 (第42図)・p.61 (第43図)。
- 5-図3 千賀久『特別展はにわの動物園Ⅱ—近畿の動物埴輪の世界—』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館, 1991, p.29.
- 5-図4 高槻市立今城塚古代歴史館編・発行『高槻市立今城塚古代歴史館常設展示図録』2012, p.33.
富成哲也「大阪府昼神車塚古墳」『日本考古学年報(1976年版)』29, 日本考古学協会, 1978, pp.65 (図2)・p.66 (図3)。(一部加筆)
千賀久『特別展はにわの動物園Ⅱ—近畿の動物埴輪の世界—』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館, 1991, p.64.

- 5-図5 1:小田富士雄『国史跡 五郎山古墳—保存整備事業に伴う発掘調査—』筑紫野市教育委員会, 1998, p. 60 (第27図) .
2:国立歴史民俗博物館編『装飾古墳の世界』朝日新聞社, 1993, p. 56 (図版44) .
- 5-図6 1:朝鮮画報社出版部編『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社, 1985, 図版205.
2:読売テレビ放送編『好太王碑と集安の壁画古墳』木耳社, 1988, pp. 102~103 折り込み図.
- 5-図7 1:共同通信社編・発行『世界遺産 高句麗壁画古墳展』2005, p. 16 (図版3) .
2:早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, pp. 80~81 (図版13) .
- 5-図8 池内宏・梅原末治『通溝 卷下』日満文化協会, 1940, 図版第37(2) .
- 5-図9 1:早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, p. 274 (図版256) .
2:朝鮮画報社出版部編『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社, 1985, 図版199.
- 5-図10 塚田良道『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣, 2007, p. 174 (第72図) .
※原図は, 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院考古学研究所編(呂南喆・金洪圭訳)『高句麗の文化』同朋舎出版, 1982, p. 220 (図105) .
早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, p. 71 (図版3) ・p. 87 (図版22) .
- 5-図11 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院・朝鮮画報社編『徳興里高句麗壁画古墳』講談社, 1986, p. 21 (図版24) ・p. 52 (図5) ・p. 57 (図11) . (一部加筆)
- 5-図12 朝鮮画報社出版部編『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社, 1985, 図版39.
金基雄『朝鮮半島の壁画古墳』六興出版, 1980, p. 102.
- 5-図13 今西康宏・渡井彩乃『大王墓にみる動物埴輪』高槻市立今城塚古代歴史館, 2015, p. 8.
- 5-図17 錦田充子『銅鐸の中の動物たち』荒神谷博物館, 2010, p. 19 (図版63・図版64) . (一部加筆)
- 5-図18 1:蘇哲「西安草廠坡1号墓の年代と鹵俑簿の組合せについて」『中国考古学』第2号, 日本中国考古学会, 2002, p. 121 (図2) .
2:河南省文化局文物工作隊『鄧県彩色画像磚墓』北九州中国書店, 1981, p. 14 (図10) .

6章

- 6-図1 1:鈴木裕明ほか『四条遺跡Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所, 2010, p. 104 (図66-85) .
2:若狭徹『保渡田Ⅶ遺跡』群馬町教育委員会, 1990, p. 47 (第33図-人物13) .
3~5・10:清水豊編『力士の考古学』かみつけの里博物館, 2008, p. 6・p. 16・p. 22.
6:斎藤忠・大塚初重ほか『三昧塚古墳』茨城県教育委員会, 1960, p. 74 (第32図-3) .
7:荻野谷正宏ほか『大王の埴輪・紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』和歌山県立紀伊風土記の丘, 2011, p. 31 (60) .
8:末永雅雄・森浩一ほか『岩橋千塚』関西大学文学部考古学研究室, 1967, p. 182 (第59図-1) .
9:中原義史・瓜生由起『ふくい発掘最前線』福井県立博物館, 1998, p. 46 (70) .

- 11: 関川妥『荒神森古墳 2—第2次・3次・4次調査—』北九州市教育委員会, 2007, p. 49 (第311図-11)。
- 12: 富成哲也「大阪府昼神車塚古墳」『日本考古学年報 (1976年版)』29, 日本考古学協会, 1978, p. 66 (図3-1)。
- 13: 堺市役所編・発行『堺市史 第1巻・本編第1』1929, 第27図版。
- 14: 松本俊吉「大和国桜井町鳥見山麓発見の埴輪出土遺跡及び窯址」『考古学雑誌』第27巻第4号, 日本考古学会, 1937, p. 51 (第4図)。
- 6-図2 清水豊編『力士の考古学』かみつけの里博物館, 2008, p. 16.
- 6-図3 清水豊編『力士の考古学』かみつけの里博物館, 2008, p. 10・p. 22.
鈴木裕明ほか『四条遺跡Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所, 2010, PL. 107 (図版66-85)。
- 6-図4 清水豊編『力士の考古学』かみつけの里博物館, 2008, p. 31.
荻野谷正宏ほか『大王の埴輪・紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』和歌山県立紀伊風土記の丘, 2011, p. 4 (図2)・p. 5 (図3)・p. 10 (図9)。
- 6-図5 荻野谷正宏ほか『大王の埴輪・紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』和歌山県立紀伊風土記の丘, 2011, p. 12 (図11・図12)。
昼神車塚古墳調査会編・発行『昼神車塚古墳発掘調査概要 (現地説明会資料)』1978, p. 4. (一部加筆)
国立歴史民俗博物館編『はにわ—形と心—図録』朝日新聞社, 2003, p. 40 (図版111)。
- 6-図8 1: 池内宏・梅原末治『通溝 巻下』日満文化協会, 1940, 図版第25.
2: 早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, p. 86 (図版20)。
- 6-図9 1・2・5: 池内宏・梅原末治『通溝 巻下』日満文化協会, 1940, 図版第55 (2)・図版64 (2)・図版76 (2)。
3: 早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, p. 286 (図版268)。
4: 朝鮮画報社出版部編『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社, 1985, 図版99.
- 6-図10 朱栄憲 (有光教一監修・永島暉臣慎訳)『高句麗の壁画古墳』学生社, 1972, 図57. (一部加筆)
- 6-図11 長谷川明『相撲の誕生 (新潮選書)』新潮社, 1993, p. 137・p. 138.
- 6-図12 伊達宗泰・西光慎治ほか『花大研究報告 10 黄金塚2号墳の研究』花園大学文学部考古学研究室, 1997, p. 88 (Fig. 52)・p. 92 (Fig. 55)。
- 6-図13 清水豊編『力士の考古学』かみつけの里博物館, 2008, p. 28.

7章

- 7-図1 大澤正吾・西山和宏・山本崇「藤原宮朝堂院の調査—第189次」『奈良文化財研究所紀要』2017, 奈良文化財研究所, 2017, p. 93 (図102)。

- 7-図2 森貞次郎ほか『竹原古墳—竹原古墳保存修理事業報告—』若宮町教育委員会, 1982, pp. 4~5 (Fig. 3). (一部加筆)
- 7-図3 森貞次郎「福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳の壁画」『美術研究』第194号, 吉川弘文館, 1957, p. 1 (I. 見取図・II. 見取図)・p. 97 (挿図4).
- 7-図4 森貞次郎ほか『竹原古墳—竹原古墳保存修理事業報告—』若宮町教育委員会, 1982, p. 13 (Fig. 8)・pp. 14~15 (Fig. 9).
- 7-図5 森貞次郎「福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳の壁画」『美術研究』第194号, 吉川弘文館, 1957, p. 1 (I. 見取図).
- 森貞次郎ほか『竹原古墳—竹原古墳保存修理事業報告—』若宮町教育委員会, 1982, 巻頭図版1.
- 7-図6 森貞次郎ほか『竹原古墳—竹原古墳保存修理事業報告—』若宮町教育委員会, 1982, 巻頭図版3.
- 国立歴史民俗博物館編『装飾古墳の世界』朝日新聞社, 1993, p. 47 (図版25).
- 7-図8 1・3・7:池内宏・梅原末治『通溝 卷下』日満文化協会, 1940, 図版第31(2)・図版第67(2)・図版第72.
- 2:朝鮮画報社出版部編『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社, 1985, 図版50.
- 4・8:金元龍編『韓国美術全集4 壁画』同和出版公社, 1974, p. 52 (図版40)・p. 109 (図版97).
- 5・6・9:早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, p. 175 (図版145・図版146)・p. 295 (図版278)・p. 218 (図版203)・p. 219 (図版204).
- 10:軽部慈恩『百済遺跡の研究』吉川弘文館, 1971, 図版30.
- 7-図9 軽部慈恩『百済遺跡の研究』吉川弘文館, 1971, 図版24.
- 7-図10 1:池内宏・梅原末治『通溝 卷下』日満文化協会, 1940, 図版第46.
- 2:早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, p. 167 (図版136).
- 7-図11 西川明彦「日像・月像の変遷」『正倉院年報』第16号, 宮内庁正倉院事務所, 1994, pp. 51 (図2). (一部加筆)
- 7-図12 森貞次郎ほか『竹原古墳—竹原古墳保存修理事業報告—』若宮町教育委員会, 1982, 巻頭図版2.
- 国立歴史民俗博物館編『装飾古墳の世界』朝日新聞社, 1993, p. 47 (図版26).
- 7-図13 1・4・7・8:早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, p. 242 (図版229)・p. 272 (図版142)・p. 299 (模写図4)・p. 224 (図版209).
- 2・3・6:池内宏・梅原末治『通溝 卷下』日満文化協会, 1940, 図版第58(1)・図版第67(1)・図版第75.
- 5:朝鮮画報社出版部編『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社, 1985, 図版142.
- 9:軽部慈恩『百済遺跡の研究』吉川弘文館, 1971, 図版30.
- 7-図14 金元龍編『韓国美術全集4 壁画』同和出版公社, 1974, p. 23 (図版11).
- 7-図15 国立歴史民俗博物館編『装飾古墳の世界』朝日新聞社, 1993, p. 46 (図版23).

- 7-図 16 1・3・9:池内宏・梅原末治『通溝 巻下』日満文化協会, 1940, 図版第 30(3)・図版第 68(2)・
図版第 74.
2・5・6・8・10:早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, p. 243(図版 231)・p. 308
(模写図 24)・p. 173(図版 143)・p. 290(図版 270)・p. 298(模写図 1)。
4・7:朝鮮画報社出版部編『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社, 1985, 図版 100・図版 140。
11:軽部慈恩『百済遺跡の研究』吉川弘文館, 1971, 図版 30。
7-図 17 中国墓室壁画全集編集委員会編『中国墓室壁画全集 1 漢魏晋南北朝』河北教育出版社, 2011, p. 102
(図版 122)。
7-図 18 1:耿鉄華『高句麗古墓壁画研究』吉林大学出版社, 2008, p. 334(図版 24)。
2:早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, p. 236(図版 225)。
7-図 20 早乙女雅博編『高句麗壁画古墳』共同通信社, 2005, p. 294(図版 277)。
7-図 21 町田章『古代東アジアの装飾墓』同朋舎出版, 1987, p. 192(図 100-3・4)。

挿表

1 章

- 1-表 1 1:辻秀人ほか『原山 1 号墳発掘調査概報』福島県教育委員会, 1982。
2:榎村寛之『狩りと王権』斎宮歴史博物館, 1995。
3:大塚美恵子「鷹の埴輪について—伝大室出土の鷹形埴輪に関連して—」『群馬考古学手帳』vol. 6,
群馬土器観会, 1996, pp. 89~106。
4・5:荻野谷正宏ほか『大王の埴輪・紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』和歌山県立紀伊風土記の丘,
2011。
6:川道亨ほか『五目牛新田遺跡・五目牛南組Ⅱ遺跡・五目牛清水田Ⅱ遺跡・柳田Ⅱ遺跡』伊勢崎市教
育委員会, 2005。
1-表 2 1:森田克行『よみがえる大王墓 今城塚古墳』新泉社, 2011。
2:佐藤春樹ほか『太田市指定重要文化財鷹匠埴輪修復報告書』太田市教育委員会, 1999。
3:末永雅雄「鷹匠埴輪」『大和文華』第 37 号, 大和文華館, 1962, pp. 49~54。
4:永峯光一・水野正好編『日本原始美術大系 3 土偶・埴輪』講談社, 1977。
1-表 3 1:森田克行『よみがえる大王墓 今城塚古墳』新泉社, 2011。
2:森浩一ほか『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部文化学科内考古学研究室, 1972。
3:泉武ほか『星塚・小路遺跡の調査』天理市教育委員会, 1990。
4:大阪府立近つ飛鳥博物館編・発行『古代の群像—俑と埴輪—』, 1996。
5:佐藤春樹ほか『太田市指定重要文化財鷹匠埴輪修復報告書』太田市教育委員会, 1999。
6:末永雅雄「鷹匠埴輪」『大和文華』第 37 号, 大和文華館, 1962, pp. 49~54。

- 7: 賀来孝代「鶉飼・鷹狩を表す埴輪」『古代』第117号, 早稲田大学考古学会, 2004, pp. 83~105.
- 8・9: 相川龍雄「埴輪を凝視めて(二) —鳥埴輪に対する考察—」『上毛及上毛人』第166号, 上毛郷土史研究会, 1931, pp. 1~7.
- 群馬県編・発行『群馬県古墳概観』, 1936.
- 10: 永峯光一・水野正好編『日本原始美術大系3 土偶・埴輪』講談社, 1977.
- 11: Yoshiko Kakudo “*The Art of Japan*” Asian Art Museum, San Francisco, 1991.

2章

- 2-表1 I: 榎田誠『矢田野エジリ古墳発掘調査報告書』小松市教育委員会, 1992.
- 石塚久則ほか『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会, 1980.
- 藤田三郎ほか『笹鉾山古墳群』田原本町教育委員会, 2005.
- 金子直行ほか『新屋敷遺跡C区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 1996.
- 深澤敦仁ほか『多田山古墳群』群馬県埋蔵文化財調査事業団, 2004.
- 三浦京子ほか『世良田諏訪下遺跡』尾島町教育委員会, 1998.
- 井博幸ほか『杉崎コロニー古墳群』日本窯業史研究所, 1980.
- 梁木誠・今平利幸『下桑西島古墳群』宇都宮市教育委員会, 1992.
- II: 徳江秀夫ほか『綿貫観音山古墳I』群馬県埋蔵文化財調査事業団, 1998.
- 宮塚義人ほか『小泉大塚越遺跡』玉村町教育委員会, 1993.
- 亀井正道『日本の美術3 人物・動物埴輪』至文堂, 1995.
- 東京国立博物館編・発行『東京国立博物館図版目録 古墳遺物篇(関東III)』1986.
- 木村友則ほか『甲塚古墳発掘調査報告書』下野市教育委員会, 2014.
- 田村誠ほか『庚申塚遺跡・愛染遺跡・安保氏館跡・諏訪ノ木古墳』神川町教育委員会, 1994.
- 大澤伸啓「馬飼の人物埴輪について」『栃木県考古学会誌』第13集, 栃木県考古学会, 1991, pp. 175~198.
- 入澤雪江『中原II遺跡』吉井町教育委員会, 2004.
- III: 中島洋一ほか『酒巻古墳群』行田市教育委員会, 1988.

3章

- 3-表1 1・11~13: 高橋克壽ほか『奈良山発掘調査報告I —石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査—』奈良文化財研究所, 2005.
- 2: 鈴木裕明ほか『四条遺跡II』奈良県立橿原考古学研究所, 2010.
- 3: 吉村幾温「6 D-27号墳」『寺口忍海古墳群』新庄町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所, 1988, pp. 34~52.

- 4・5:萩野谷正宏ほか『大王の埴輪・紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』和歌山県立紀伊風土記の丘, 2011.
 - 6～8:今西康宏・渡井彩乃『大王墓にみる動物埴輪』高槻市立今城塚古代歴史館, 2015.
 - 9:笠原勝彦『市営住宅梶第一団地建替に伴う埋蔵文化財発掘調査 梶遺跡』守口市教育委員会, 1991.
 - 10:千賀久『特別展はにわの動物園Ⅱ—近畿の動物埴輪の世界—』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館, 1991.
 - 14:亀井正道『人物・動物はにわ（日本の美術第346号）』至文堂, 1995.
 - 15:千葉県立房総風土記の丘編・発行『企画展 房総のはにわ』1982.
- 3-表3
- 1:松井章「南郷大東遺跡出土の動物遺存体」『南郷遺跡群Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所, 2003, pp. 303～308.
 - 2:西中川駿「宇土城三ノ丸跡出土の動物骨について」『宇土城三ノ丸跡』宇土市教育委員会, 1982, pp. 71～79.
 - 3:桃崎祐輔「幣旗邸古墳1号墳出土の家牛（*Bos taurus*）歯・家犬（*Canis familiaris* LINNAEUS）骨」『幣旗邸古墳1号墳』中津市教育委員会, 1995, pp. 20～23.
 - 4:藤田正勝・宮路淳子・松井章「瓜破遺跡（UR00-8次）発掘調査出土の動物遺存体」『瓜破遺跡発掘調査報告Ⅱ』大阪市文化財協会, 2002, pp. 128～133.
 - 5:丸山真史「瓜破遺跡（UR11-1次調査）出土のウシについて」『瓜破・住道矢田・矢田遺跡発掘調査報告』大阪市博物館協会大阪文化財研究所, 2013, pp. 533～535.
 - 6・7:畑暢子・井上智博ほか『池島・福万寺遺跡2（福万寺Ⅰ期地区）—遺構・遺物編—』大阪府文化財センター, 2002.
 - 8:村尾政人ほか『郡家遺跡第75次発掘調査報告書』郡家遺跡調査団, 2004.
 - 9:柴田清吾『日本古代家畜史の研究』学術書出版会, 1969.
桃崎祐輔「古墳に伴う牛馬供犠の検討—日本列島・朝鮮半島・中国東北地方の事例を比較して—」『古文化談叢』第31集, 九州古文化研究会, 1993, pp. 1～141.
 - 10:久保和士「動物遺体の調査結果と検討」『大阪市平野区長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅱ』（財）大阪市文化財協会, 1999, pp. 107～120.
 - 11・12:井上貴央「長瀬高浜遺跡より出土した人骨と動物遺体について」『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅵ（本文編）』鳥取県教育文化財団, 1983, pp. 285～312.
 - 13:金子浩昌「上ノ台遺跡出土の獣類遺体」『千葉・上ノ台遺跡（付篇）』千葉市教育委員会, 1981, pp. 13～18.
 - 14:釧持輝久「蓼原遺跡出土の自然遺物について」『蓼原—神明地区埋蔵文化財調査報告（1）—』横須賀市教育委員会, 1987, pp. 176～184.

- 15・16:金子浩昌「上ノ台遺跡出土の獣類遺体」『千葉・上ノ台遺跡（付篇）』千葉市教育委員会, 1981, pp. 13～18.
- 17・18:大江正直ほか「上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体」『上野国分僧寺・尼寺中間地域4—本文編2—』群馬県教育委員会, 1990, pp. 707～935.
- 19:宮崎重雄「長野県佐久市長峯古墳群出土の馬歯・馬骨」『長峯古墳群』佐久市教育委員会, 1988.

5章

- 5—表1 1:若狭徹『保渡田Ⅶ遺跡』群馬町教育委員会, 1990.
- 2:若狭徹ほか『史跡保渡田古墳群 井出二子山古墳』高崎市教育委員会, 2009.
- 3:若狭徹・田辺芳昭ほか『保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会, 2000.
- 4:富成哲也「大阪府昼神車塚古墳」『日本考古学年報（1976年版）』29, 日本考古学協会, 1978, pp. 64～67（図版17～18）.

6章

- 6—表1 1:鈴木裕明ほか『四条遺跡Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所, 2010.
- 2・3:西藤清秀・林部均「橿原市四条遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1987年度』奈良県立橿原考古学研究所, 1990, pp. 289～327.
- 4・5:若狭徹『保渡田Ⅶ遺跡』群馬町教育委員会, 1990.
- 6:辻秀人ほか『原山1号墳発掘調査概報』福島県教育委員会, 1982.
- 7:斎藤忠・大塚初重ほか『三昧塚古墳』茨城県教育委員会, 1960.
- 8:鐘ヶ江一郎ほか『発掘された埴輪群と今城塚古墳』, 高槻市教育委員会・高槻市立しろあと歴史館, 2004.
- 森田克行『よみがえる大王墓 今城塚古墳』新泉社, 2011.
- 9:荻野谷正宏ほか『大王の埴輪・紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』和歌山県立紀伊風土記の丘, 2011.
- 森田克行『よみがえる大王墓 今城塚古墳』新泉社, 2011.
- 10:富成哲也「大阪府昼神車塚古墳」『日本考古学年報（1976年版）』29, 日本考古学協会, 1978, pp. 64～67（図版17～18）.
- 11:末永雅雄・森浩一ほか『岩橋千塚』関西大学文学部考古学研究室, 1967.
- 12:森浩一ほか『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部文化学科内考古学研究室, 1972.
- 13:中原義史・瓜生由起『ふくい発掘最前線』福井県立博物館, 1998.
- 14:石井清司「稲葉山10号墳」『丹波の古墳Ⅰ 由良川流域の古墳』山城考古学研究会, 1983, pp. 81～87.
- 15:関川妥『荒神森古墳2—第2次・3次・4次調査—』北九州市教育委員会, 2007.

- 16: 山口健剛「6世紀前半の大量の埴輪—熊本県中村双子塚古墳—」『季刊考古学』第84号, 雄山閣, 2003, pp. 89～90.
- 山鹿市立博物館編・発行『山鹿市立博物館収蔵品 図録』2015.
- 17: 亀井正道『人物・動物はにわ (日本の美術第346号)』至文堂, 1995.
- 18: 堺市役所編・発行『堺市史 第1巻・本編第1』1929.
- 19: 松本俊吉「大和国桜井町鳥見山麓発見の埴輪出土遺跡及び窯址」『考古学雑誌』第27巻第4号, 日本考古学会, 1937, pp. 49～52.

7章

- 7—表1 森貞次郎ほか『竹原古墳—竹原古墳保存修理事業報告—』若宮町教育委員会, 1982, p. 19.
- 青木繁夫「壁画の描写技法」『高句麗壁画古墳報道写真展』共同通信社, 2012, p. 13 (表1) .

